

果てがある道の途中

猫毛布

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

少女のような少年は空を見上げる。

飛び立つ鳥、流れる雲、無限に広がる青い世界。

その日も少年はただただ空を見つめるだけだった。

目次

第24話	第23話	第22話	第21話	第20話	第19話	第18話	第17話	第16話	第15話	第14話	第13話	第12話	第11話	第10話	第9話	第8話	第7話	第6話	第5話	第4話	第3話	第2話	第1話
268	260	248	239	233	220	209	192	186	170	164	153	143	130	120	109	96	83	67	52	35	20	11	1

49.	いつか見た彼を追って	504
48.	同類であった存在	498
47.	悪戯妖精の皮を被った天使	490
46.	『加藤夏樹』	482
45.	それは誰かの名前。	477
44.	人は其れを運命と名付ける	469
43.	人形の妖精	461
	第42話※閑話	450
	第41話	445
	第40話	434
	第39話	426
	第38話	413
	第37話	399
	第36話	385
	第35話	374
	第34話	360
	第33話	350
	第32話	340
	第31話	328
	第30話	321
	第29話	312
	第28話	301
	第27話	293
	第26話	284
	第25話	275

第1話

——いい事、夏樹^{ナツキ}。アナタは私の夢なの。

母の声が聞こえた。何度も聞いた言葉と声。

夏樹は同時にソレが現実ではないことを知る。夢から逃げ出す様にして、瞼を緩りと上げた。

生い茂る木々。流れる風。僅かに若草の香りが鼻を擦り、現実的な刺激を与えてくれる。

視線を左上に持ち上げて、夏樹——^{n u t s} ナツツは自身のHPが減少していない事とこの現実が非現実である事を改めて認識する。

縮こまった身体——幼いと言える体躯を伸ばし、凝り固まってもいない筋肉達をほぐしていく。

布団代わりになっていた擦り切れそうな外套を身に付けて、手に持っていた曲剣を腰に装着する。

欠伸を一つしながら、ナツツは立ち上がり、外套に付けられているフードを目深に被り萌黄色の髪を覆い隠す。

「ふああ……。一旦街に戻らなあ。POTも無くなってきてるし、何よりマントの耐久値も剣の耐久値もヤバイし、投げナイフ無いし……うわ、帰れるんかいな……」

メニューを開き、ナツツは所持している回復POTと武器の耐久値を見てげんなりとする。頭の中で街への道のりと恐らく出現^{P.O.P}しているモンスター達、その強さを考えて思考を回転させて……やめる。

「ま、死んだら死んだでエエか」

ナツツは溜め息と一緒にそう吐き出した。死ねば死ぬだけ。ココはゲームの中の世界——ソードアート・オンライン、アインクラッド。

仮想現実の世界であり、同時にココでの死は現実世界の死に直結する世界。

非現実でありながら非幻想。

幻想でありながら現実。

コレは、ゲームであつても遊びではない。

◆◆
アインクラッドの世界に置いて、少年と言える年齢のプレイヤーはあまり存在していない。

ある意味女性よりも奇特定の存在。或いは巻き込まれてしまった奇異な存在。そんな奇特で奇異な存在の一人は《ツールバーナ》の入り口で安心したように息を吐き出していた。

「いやあ、生きて辿り付けるなんて思ってたわ」

誰に言うでもなく、ナッツはそう嘯いた。そして付け加える様に「持ってた剣の耐久値が無くなった時はどうしようかと思っただわ」と更に言葉を続けた。当然、誰かに言っている訳ではない。

自身の不出来と不運と悪運を噛み締めながらケラケラと笑ってみせた。

「さつとと、とりあえず同じ剣買って——」

「ナッツじゃないカ」

「なんやアルゴさんかいな」

目の前ではなくて、街の路地からナッツに話しかけたのは同じくフードを目深に被った、語尾に鼻音が被さる様な発音の小柄な——と言ってもナッツよりも少しばかり背の高いプレイヤーだった。

何度か見知った顔であるプレイヤーにナッツは顔を綻ばせ、軽く手を上げる。そんなナッツに対してアルゴは大きく溜め息を吐き出した。

「まさか生きてるとは思わなかったヨ」

「なんや、薄情やなあ」

「NPC販売の無強化武器数本と数える程度の回復POT。数日も街に戻ってない。死んだと思うのが普通ダヨ」

「ちゃんと帰れる計算やったんやで？」

「どうだか、とはアルゴは言わなかった。この自分よりも年若いだろう少年がそこまで計算をしているとは思えない。頭が悪い、という訳

ではない。ドコか螺子が外れている印象が強いナッツだからこそだ。
あからさまに「どうだ力」と言いたげなアルゴにケラケラと笑いな
がらナッツはメニュー画面を開き、アルゴに受け渡しを予定してい
たモノを送りつける。

「……ホントにいいの力」

「始まりの街でお世話になってるし、恩返しって事も含めてやな」

「……じゃありがたいがたく貰っておくヨ」

「今度からは金取るで」

冗談めかしてそう言ったナッツにアルゴは苦笑してメニューを操
作する。自身のマップデータに追加された迷宮区の詳細、ボス部屋と
呼ばれる所までの道のり。

恩返し。あの始まりの日にがむしゃらに、けれどドコか螺子の外れ
た様な少年を見つけて、簡単にレクチャーしただけ。人間としての善
意に従ったある種の条件反射だったのかもしれない。

データの重みを感じながらアルゴはナッツに悟らせないように息
を吐き出した。

「そういや、《会議》って今日で合ってるっけ？」

「……明日の午後四時からだヨ」

「さよか。うーん……準備だけしとこかな」

「いい加減に武装を強化すべきだネ」

「どうせ壊れるまで使うからなあ」

鍛えれば強くなるということはナッツも承知の上であったが、クエ
スト入手となると複数本用意する事も煩わしく、ナッツの日常を考え
ればNPCが常に売っている武器である方が都合がよく、何より複数
本を確定で仕入れる事も可能であった。

「ココまででてきた敵は慣れるまで戦ってるから問題ないよ。ボス
は初見になるけど、どうせソロの予定やし、取り巻き駆除が仕事やろ。
取り巻きが初見じゃなけりやある程度イケるイケる」

「いつか死ぬヨ」

「そりやそうやろ。何言うとるん」

アルゴは噛み合っていない言葉を感じて溜め息を吐き出し、軽く手を

上げて踵を返した。どうにも納得のいかないナッツは口をへの字にして頬を指で搔いた。

しばらく呆れられた事を考えたがすぐにその思考を放棄した。どうせ分かりもしないのだ。

「さて、明日になるまでテキトーに過ごそかな」

ぐい、と背伸びをしたナッツは明日の《会議》の為かやや賑わっている街の中へと姿を消していった。



「ひい、ふう、みい……四十四。僕を合わせて四十五か」

視線だけで人数を数えていたナッツがぼんやりとそう呟いた。欠伸を混ぜて、なるべく人の目に付かない様に壇上から離れた場所、その隅にナッツは座っていた。

コレが多いのか少ないのか、その判断はナッツがする事は出来ないが、大凡のプレイヤー達がその人数を見て眉を顰めている事から恐らく少ないのだろうと適当に当たりを付けた。

「はーい！ それじゃあ五分遅れたけどそろそろ始めさせてもらいます！」

目深に被ったフードの奥にある瞳がその男を捉えた。金属鎧、盾、直剣。その髪を見てナッツは眉を寄せた。髪の色は青色だった。記憶と記録を少し漁り、髪染めアイテムが店売りしていたかを思い出す。思い出した結果は無しである。

ということは何かしらのイベントか。いや、現状覚えているイベントでは手に入らない事はアルゴが証明しているから、モンスターのレアドロップか、もしくは元々そうだった色だったのか。

目を細めて今しがた《騎士^{ナイト}》として自己紹介をしたディアベルを見つめて、思考を放棄する。あれがモンスターのレアドロップによるものとするならば自身は相当に運が悪い事になる。

「うーん……ドロップ率の偏りまではわからんで……。というかアレか、コレが俗に言う物欲センサー言うヤツか……」

げんなりと自身の運の悪さを悲観したナッツは髪染めアイテムをアルゴに工面してもらおうべきかを考える。考えた結果、結局外套で隠しているから無駄という判断になり思考が完結した。もう運良く手に入れば、また考えよう。

朗々と続く演説を聴きながらナッツは笑みを深めていく。会議、と名付けられているけれど、士気向上の意図の方が大きいのだろう。

一ヶ月。生きるか死ぬかの世界に閉ざされたプレイヤー達。そこから脱出する為の第一歩の為に今ココに集まっている。そう考えれば四十五人というのは中々に人が集まっていると言ってもいいかも知れない。ナッツは考えを新たに、ぼんやりとディアベルの演説に意識を向ける。

「ちよお待ってんか、ナイトはん」

大凡ディアベルの演説が一段落した時に響いた低い濁声^{ダミゴエ}。同じ関西弁を耳にしてナッツはその男へと視線を向けた。

二つに割れた人垣の間にその男は居た。大型の片手剣、オレンジ色のサポテン頭。片手剣へと視線を送りながらナッツは溜め息を吐き出した。

「髪染めアイテムってもしかして普通にドロップすんの？」

いや、そんな訳はない。そうならば自分は持つていて然るべきだ。と思考を振り払い、物欲センサーを恨む。

非常に悩ましい事実を目の当たりにしながらもナッツは濁声の主張に耳を傾ける。

「こいつだけは言わせてもらわんと、仲間ごっこはでけへんな」

「こいつって何かな？ 何にしる意見は大歓迎さ。でも発言するならいちおう名乗ってもらおうか」

余裕を持ったディアベルの声が響きサポテン頭を手招きする。サポテン頭は壇上へとよじ登り、ディアベルではなく囲んでいるプレイヤー見渡してから声を出す。

「わいは、キバオウってもんや。こん中に五人か十人、ワビいいれなアカンやつがおる筈や」

「詫び？ 誰にだい？」

「はっ、決まっとするやろ！ 今まで死んだ二千人に、や！」

ナッツはポカンとしてしまった。同時に沸々と笑いが込み上げてきて、堪えるように口を抑えて肩を震わせる。もしもコレがディアベルが仕組んだ演目だったならば、盛大に笑ってやろう。とも考えられる程に、ナッツの目にはキバオウが滑稽に映り込んだ。

一ヶ月で二千人が死んだ。ソレは何故か？ この中にいる五人か十人程が狩場を独り占めして、始まりの日にビギナー達を見捨てたから。

キバオウの憎々しげな主張が止み、NPCによるBGMだけが響く。その中でナッツが肩を震わせて口を手で抑えている。

「——キバオウさん。君の言う《奴ら》ってというのは、元ベータテストター達の事、かな？」

「——決まっとするやろ」

「ぶはっ」

ナッツはついに耐え切れずに吹き出して笑ってしまった。集まる視線を物ともせずナッツはヒーヒーと息も絶え絶えに笑う。

そんなナッツに対してキバオウは当然の様に激昂した。当然だ。自身の主張を丸々こんなガキに笑われているのだ。

「何わろてんねん！ このガキイ！」

「こんなん笑うしかないやろ！ ひっ、ふひっ！」

「なんやとっ！」

激昂しているキバオウの叫びなど物ともせずにナッツは足を進める。ヒラリと壇上へと飛び登り、物怖じせずにキバオウを見上げ、少しだけ考えてフードを外す。

萌黄色の髪がさらりと流れ、黒色の瞳が真っ直ぐにキバオウを貫く。ドコか少女にも思える中性的な少年はニヒリと口を歪ませている。

「ナッツ言います、以後よろしゅう」

「何がよろしゅう、や！ 急に笑いおって」

「なんや、ディアベルさんが名乗れ言うとったから名乗っただけやねんけど、まあエエわ。ソレで、二千人死んだんがベータテストターの責

「任やって?」

「そうやろ! ビギナーを始まりの街に放置して——」

「そんなら、ココに居る人らはみーんなベータテスターなん?」

「それはちやうやろ」

「ならビギナーも普通にココに居るんやろ? かく言う僕もビギナーやし」

ケラケラと笑いながらキバオウを見上げるナッツ。その表情に苦虫を噛み潰した様に顔を歪め、苛立つキバオウ。

「それでも二千人死んだ事に代わりはないやろ!」

「どうか、その死んだ二千人は無謀に特攻したか、自殺したか、ドツチかやろ?」

ベータテスター関係ないやん。アホらし」

「ベータテスターが全部独り占めしてたからやろ! 少なくとも死んだヤツらの中には他のMMOじゃトップ張ってたベテランやぞ!」

居ったらココには十倍の……いやもう二層や三層に行ってる——」

「じゃあ死んだヤツの中にはベータテスターって居らんのか?」

「そら狩場とかわかってるんやったら居らんやろ!」

「……じゃあベータテスターって何人居ったんや? 確か千人は居った筈やろ。その全員が現状プレイしてるかはわからんけど、ココには

そのプレイしてるベータテスターが居るはずちやうの?」

「それは——……。でもやで、狩場を独占したんは真実や!」

「それやったら独占されてる筈の狩場でレベリングとかしたやろう、

ココにおけるプレイヤーが全員ベータテスターや無かったら話繋がらん言うてるやろ。イガグリ頭」

「イガッ」

「ビギナーでもココに居る。ある程度ゲーム慣れしてるヤツがココに居る。そりゃあベータテスターもココに居るやろ。ソレが事実やろ」

「……なんやねん。お前は悔しくないんか! 二千人やぞ」

「ニュースで人が死んで、他人やのに悲しむんか。なんや職^{ジョブ}は聖人か何か?」

「バカにしてんのか!」

「あ、やっと気付いた？」

「なんやとこのガキい！」

「……そんなガキでも必死で生きてる世界で死んだ大人の事なんぞ知るかボケ」

そう言い放った瞬間にキバオウが静止する。この意味のない漫才もようやく終わる、と溜め息を吐き出したナッツはディアベルへと視線を向けて、申し訳なさそうな顔をする。

「なんや、土気下げたみたいでエライすんません」

「いや……」

「全員一緒によーいドンで始まって、ベータテスターさん達が先に狩場に行ったんはわかってます。同時に現状でソレがドレだけ危険かわかってます。」

ソレをこうやってバカ言うヤツが居る事も事実やと思います。それでもこうやってベータテスターさんに感謝してる子も居るって知って下さい。名乗り出る必要はないです、ただ誇ってください」

ナッツは頭を下げて感謝を伝える。どうしようもない世界で先陣を切ったプレイヤー達に頭を下げる。

疎らに聞こえる拍手が全体に成り、大きく響いた辺りで顔を上げる。ナッツは眉尻を下げて申し訳なさそうな表情を作り上げてキバオウへと向き直り、頭を下げる。

「スンマセン、キバオウさん。色々気イ悪い事言いました」

「……別に、もうエエわ」

「スンマセン。決してそのステキな頭の事をイガグリ言うつもりは無かったんです……！ サボテンなんですすよね！」

「そうそう、このトゲトゲ具合はなあ——ってちゃうわボケ！」

ナッツはしっかりとキバオウのツツコミを受けて、笑いの起こる広場に改めて頭を下げてから壇上から降りる。キバオウも眉間を寄せていたが、澁々と壇上を降りた。

少し息を吐き出して、改めてフードをかぶり直したナッツは目を細める。

七人——いや、ディアベルさん含めて八人ぐらいか。ちよい少ない

かもなあ。

自分の演説で反応していたプレイヤーの数を思い出しながら小さく溜め息を吐き出す。尤も、八人という数も結構当てずっぽうであり、確定しているのは名前を上げたディアベルともう一人。フードをしているプレイヤーの横に居る黒髪の剣士。

別に関わり合いになる訳ではないけれど、ボス攻略に置いてベータテスターという存在は大きい。その大きい存在の士気を著しく下げようとしたキバオウに恨みの視線を送りつつナッツは佇まいを直した。

ディアベルが死んだ二千人の事、そして自分達がこの先どうすべきかをちやんと纏めて全員の意識の向きが正され、その日の会議は終了した。

「いやー、イイ弁舌だったネ」

「なんやアルゴさん聞いたったんかいな……なんや恥ずかしいなあ」

「仮にでも商売相手だからナー」

「商魂逞しいこって」

ナッツはこの世界での恩人であるアルゴに照れたように言葉を返し、溜め息を吐き出した。アルゴは上機嫌にナッツに近寄りフードの奥でニマニマと笑っている。

「それで、アレはドコまでが本音なんだ？」

「一割ぐらいやな」

「……………」

「いや、嘘やって。九厘ぐらいは本音やねんで？」

「更に減ってるんだガ？」

「そもそも二千人死亡だ所で興味も無かったし、ああせな士気落ちるやろうし。つか、詫び入れろって、死んだアホ共にどうやって詫び入れさすつもりやねん、あのイガグリ頭。自分が得したいだけやったらそう言うたらエエやん。ホンマ、アホらし」

「……………ナッツがソレをあの場合で言わなくてよかつたヨ」

「言わんよ。ボス攻略が遅れるし、何より僕が二番目にこの世界を楽しんでると思ってるねんから」

「二番目？」

「一番は茅場さんやろ。自分の作った世界を眺めてるか、そこに居るか知らんけど……………確認した限りは神様気取ってないみたいやけど」

「どういう事ダ？」

「内緒。こつから先は有料やで」

「……………恩人なのニ？」

「次は金取るって言うたやん」

「……………幾らダ？」

「一億万コルかな」

「ふっかけ過ぎだナー」

「まあ確証もってる訳ちゃうし、そもそもGMコール無いんが原因なんやけどな」

「通話出来ないからプレイヤーだなんて言わないよナ？」

「ありや、バレた？」

「……………ハア」

呆れたように溜め息を吐き出したアルゴをケラケラと笑いながら見つめる。ナッツは満天の星空を見上げながら、目を細める。

この星空を茅場晶彦も見ているのだろうか。もしも会ったならば、ナッツはきつと――

——この地獄に招かれた事を感謝するだろう。

第2話

ナッツは溜め息を吐き出した。フードに隠れた瞳を細めて空を見上げる。

ナッツ自身はこういつたゲーム、つまるところMMORPGというジャンルをする事は初めてだ。よって、ボス攻略の予定もソロが集い、各々が役割を果たすという手前勝手な想像をしていた。

「れいど」の形ってなんやねん……というか、パーティ組まなアカンのか……」

決してコミュニケーション能力が欠如している訳ではない。それこそナッツ自身は相手に合わせる事、相手の顔色を見る事に関しては優れていると言つてもいい。けれどソレは前提条件がなければの話。

ナッツは子供だ。そう、子供なのだ。総じて子供という立ち位置は甘える事においては優れている立ち位置であるけれど、同じ立場になる——戦闘で背中を預けるとなれば話が変わってくる。更に言えば、あの舌戦も問題だった。

ナッツは改めて大きめの溜め息を吐き出した。こんな事になるのならもう少しやんわりとベータテスター達の肩を持てば良かった。それでもあの瞬間だけはあのイガグリ頭の発言を覆し、流すためにあするしかなかった。

いや、多少自分の好みの部分もあるけれど。

ともあれ、そんな一癖も二癖もあるナッツをパーティに入れるプレイヤーなどいない。それこそ背中を預けるに至らないと思つているのだから。

辺りを見渡せば既に幾つかのパーティは完成している。六人の集まり多い事からナッツは最大人数が六人である事を判断した。ボツチ予備軍にはそれ程関係の無い事であるけれど。

情けない笑いを溢しながら、ナッツは未だに立ち尽くしている一人の剣士へと視線が向いた。自身と同じく「パーティ」という言葉に呆気としてしまつていたのか、立ち尽くしている彼の近くへと足を進める。

「どーも、こんにちハー」

「お、おう。えつとナッツだっけ？」

「そそ、こんなナリやからパーティ組めんてなー。もしよかったらパーティに入れてくれへん？」

「……ああ、よかったら組もう」

「やрийい。でも二人は寂しいし、そのフードさんもどない？」

「………アンタもあぶれたのか」

「アブレてないわよ。周りがみんなお仲間同士みたいだったから遠慮したの」

「それをアブレてるって言うんやと思うんやけど」

剣士の呟きに反応した外套を被った——声的に少女はそのフードの奥からナッツを睨む。睨まれたナッツは「おーこわ」と冗談めかして言葉を漏らして肩を竦めた。

「あー、その。よかったら俺達と組まないか？ システム的にもレイドはハパーティまでだから、そうしないと入れなくなる」

「ふん……そっちから申請するなら受けてあげないでもないわ」

「あ、僕にもよろしゅうに。パーティ申請とかやり方わからんよって」
「今までどうしてたんだよ」

「ソロでコツコツ戦闘を重ねて来た感じやね」

ナッツの言葉にフードの少女は驚いたように顔を少し上げてナッツの顔を見た。

「……見た目によらず凄いのね」

「ソレをアンタが言うのか……」

「ま、僕は子供なりに必死って事で。ん、おおっ！ コレをタップしたらエエの？」

「ああ」

突然目の前に出てきたウィンドウで申請を許可すれば左上にあるナッツの名前の下に二つの名前が追加される。そんなナッツの視線に気付いたのか、剣士——Kirittoキリトは自己紹介をせずに済むことに若干の安堵の息を吐き出した。

「ほな、まあよろしゅうに」

フードの奥でニヒリと笑ったナッツはそれこそ歳相応の少女——
いいや、少年であるように見えた。

騎士《ディアベル》は舌だけではなく、実務の面でも優れている。
ナッツはその実感を隣に居るキリトから読み取った。キリトが何か
を言った訳でもなく、ただディアベルを見ながら「ほう」と小さく呟
いた事から読み取った事である。

初心者であるナッツにとってディアベルの采配の良し悪しはわか
らないが、恐らく経験者であるキリトが納得しているのならば良いの
であろう。

そんなディアベルがあぶれ組である三人に近づき、ナッツを見てか
ら一つ頷いた。そして爽やかに口を開く。

「君たちは取り巻きコボルトの潰し残りがないように、E隊のサポー
トをお願いできるかな？」

「あー、ディアベルさん。申し訳無いんやけど」
「うん？」

「僕やのうて、コッチの剣士さんに言うて。あの時にも言うたけど僕
はビギナーやから、よーわからんよって」

「ああ、てつきりこの二人を言い負かしてパーティに入れてもらった
と思っただよ」

「嫌やわあ、ディアベルさん。マスコット入れれる程余裕なんてない
んやで」

「ハッハッハッ、それもそうか。すまない。それで先ほどの件だが」
「了解。重要な役目だな。任せておいてくれ」

「ああ、頼んだよ」

キラツと白い歯を見せながらナイト・ディアベルは噴水の方へと
戻っていった。

ナッツは笑顔でキリトは引きつった笑み、そしてその隣に居たフー
ドの少女は剣呑な響きを帯びた声を出す。

「ドコが重要な役目よ。一回もボスに攻撃できずに終わっちゃうじや
ない」

「……仕方ないだろ。三人しか居ないんだから。スイッチでPOT
ローテするのも時間が全然足りない」

「すいっち？ なんやボタンでもあるの？」

「……ナッツは本当にビギナーなんだな」

「隣に居る人もそうみたいやで」

少しばかり隠れた目線でキリトに合図してみれば何かを考えている様に顔を俯かせている少女。ケラケラと笑っているナッツに気付いたのかハッと顔を上げて何かを口にしようとした少女をキリトが封殺する。

「……詳しい事は後で説明する。この場で立ち話じゃとても終わらないから」

そんなキリトの言葉に対して反論を吐き出すように口を開いた少女は口を閉ざし、僅かに頷くに至った。

ケラケラと笑っているナッツを睨みつけるのも忘れない。

「はえー、案外広いんやなあ」

「ホント……私の部屋と三十コル差なんてツ！」

「なんや宿屋^{I N N}はコレよりも狭いんか……」

「ええ」

キリトが間借りしている農家の二階。扉を開けてナッツは思わず感嘆の声を上げてしまった。同じく感嘆の声を上げて視線を部屋へと巡らせている少女——アスナ^{A S U N A}をチラリと見て、その後ろにいる現在の借り主へと視線を向ける。

ソコには既に背中中の片手剣と手足の防具を武装解除したキリトがソファへと身を埋めていた。ナッツの視線に気付いたのかキリトはコホンとわざとらしく咳払いをして、辿々しく言葉を繋いでいく。

「えー、その、見れば分かるけど、風呂場はそこだから……ご、ご自由

にどうぞ」

「あ……う、うん」

「なんや僕がお邪魔虫みたいな雰囲気やなあ」

「は、はあ!？」

「冗談やって。お姉さんははよ念願のお風呂に入ってきてきーや」

ケラケラと笑いながらナッツが言つてやれば鼻を鳴らしてから浴室へと消えていったアスナ。そこまで風呂に執着があったならば——と考えてからナッツはその考えを放棄して、腰に下げているナイフをストレージに入れる。

フードを外し、外套の内側に入っていた髪を外へと垂れ流す。キリトは目を見開きナッツを見た。

「君は——」

「改めまして、ナッツ言います。性別は男やから間違わんようにな」

「えー、あー」

「ええよ。自分でも美少女みたいやと思ってるから」

「……………」

「ツツコミどころやで」

わざわざ自分の事を美少女だと言つた事に対して、「自分で言うのかよ」程度の言葉を待っていたナッツは呆れたように溜め息を吐き出して頭を振つてみせた。

キリトからすれば、その『美少女』という称号はツツコミを必要としない——つまり事実であるようにも思えた。

肩に掛かる程度の萌黄色の髪。大きな黒い瞳。人懐っこい笑み。壇上に立った時は中性的だと思つたが、こうしてじっくりと見ればやや少女寄りの顔つきである事が分かる。まだ声変わりをしていない声もまた少女に思わせてしまう要因だろう。

ジロジロと見られている感覚を感じながら、ナッツは困つたように笑みを浮かべながら視線だけを左上へと移動させる。

「えー、お兄さんがアスナAsunaでエエんかな?」

「明らかに女性名だろ」

「ほら、元々のアバターが女やった可能性もあるし?」

恍けたようにその言葉にして「いやー、名前わからんなー」とわざとらしく口にしてしているナッツを見て、ようやくキリトは意図を掴んで、諦めたように息を吐き出した。

「……キリトだ。よろしく、ナッツ」

「よろしゆうに、キリトさん」

ニツと笑ったナッツとキリトがお互いの名前を確認して握手をする。敬称を付けられた事に少しばかりむず痒く感じてしまったキリトは眉を寄せる。

「“さん”はいらないぞ」

「じゃあ、キリトで。僕の事はナッツ”様”とお呼び」

「なんでだよッ!」

「おお、さつきはなかったエエツツコミやなあ」

足りなかつた何かを補充出来たように満足気に胸を抑えたナッツ。当然システムの何かを得た訳ではない。

何かを言おうとしたキリトであったが浴室から響いた「ああああああ……」というなんとも脱力した声によりその意思が消えてしまった。対するナッツもである。

「それにしても、よかつたん?」

「?……何がだ?」

「僕をパーティに入れて。自分で言うのもアレやけど、『子守ご苦労様』とか皮肉られる程度に正気やないで」

「……そんな事言つてなかつたと思うけど」

「たぶん進行中にもあのイガグリ頭にも言われるんちゃう?」

「イガグリ?」

「おっと、サボテンやったな」

恍けるようにケラケラ笑いながら自分の言葉を修正した。人を食った様な物言いであるけれど、キリトはナッツに少しばかりの好感を覚えていた。見た目という点でもそうであるし、あの壇上での演説もソレに繋がる。

「……………」

「どうした?」

ケラケラと笑っていたナッツがキリトを見つめて、チラリと浴室の扉を確認してから声を潜めて喋る。

「キリトがテスターって事は言わんから安心しいや」
「なっ!？」

思わずソファから立ち上がって反応してしまった。手が震え、足が震え、行き場の無い力がキリトの頭を支配してしまう。

対してナッツは呆れたように息を吐き出して両手を上げた。

「そうやって反応するんも、問題やよって」

「ッ、カマをかけたのかよ」

「まあそういう事やね。テキトーにそしらぬ顔して『なんの事かな?』とか言うとつたらコツチも何も言わんよ」

助言の部分だけはやや低いキリトの声に合わせて合わせるように言ったナッツは警戒しているキリトに向けて困ったような笑みを浮かべた。

「一々反応してるキリトを見ると、言うとかかなー、思って」

「そんなに分かりやすいか?」

「例えば、そんな感じに右手の親指と人差し指を擦り合わせてるとか

……こういう嘘に釣られて右手を見てまうからかな」

指摘された事に対して僅かに右手を揺らして視線を下げたキリトをケラケラと笑いながら更に指摘するナッツ。ドコかバツの悪そうにキリトはナッツを睨む。

「別に悪意は無いんやで。ただパーティーから切り離されたく無いだけやから」

「……俺が警戒して離脱させるとか考えなかったのか?」

「そんな時はキリトの悪評をバラ撒いてお終い。というか、そんな事せんやろうから忠告しとるんやって」

「忠告ドウモ」

「どーいたしました」

ケラケラと笑ったナッツに疲れたように息を吐き出したキリトはソファに深く腰掛けた。テスターだとバレた事はキリトにとって誤算だった。新しく配られた《アルゴの攻略本》によって鼠のアルゴ自

身がベータテスターであることを露呈させ、場が騒然となった事も考えれば——、と考えるからキリトは溜め息を吐き出した。

目の前にいる少女——あ、いや、少年はベータテスター肯定派である。そう壇上で演説もしていた。加えて、こうして忠告をしているという事は無闇矢鱈に口にもしないと言う事だろう。

半ば諦めにも似た思考結果を纏めたキリトを見計らってか、部屋にノックが響いた。

小刻みにコン、コココン。と。独特のリズムで刻まれたソレに反応したのは部屋の借り主であるキリトとリズムに覚えのあるナッツであった。

顔を見合わせて、ナッツが扉を開く。

「ん才？ ナッツじゃないカ」

「なんや、アルゴさん。どないかしたん？」

「キー坊はいるカ？」

「そら、まあ」

「珍しいな。アンタが部屋にまで来るなんて」

ナッツの後ろから出てきたキリトは件のアルゴを視界に収めて少し訝しげに口を開いた。

それもその筈、今現在、この部屋——浴室にはアスナという女性が湯船に浸かっているのだ。そんな事がこのアルゴにバレてしまえばキリトの備考欄には『キリトは初対面の女性をその日の内に部屋に連れ込むような類いの男』という文字が刻まれ、この世界にいる内は常に弄られる事になるであろう。ソレだけは回避しなくてはならない。

内心冷や汗を流しているキリトをいち早く察したのはナッツである。人の機微に敏感である彼は状況の判断と合理性、そして恩を誰に売るべきかを心得ている。

「なんや込み入った話みたいやし、ちようどお風呂も入りたかったから僕は退散しよか？」

「あ、ああ！ そうしてくれ！」

キリトの背中をアルゴから見えないように突き、意図を汲ませる。疑問として言ったのはアルゴに疑問を抱かせずに、促させる為だ。尤

もキリトの反応で台無しになりそうであるけれど。

ともあれ、借り主から言われたのでナッツは極々自然な動作で風呂場の扉を開き、その中へと身を滑りこませた。

扉の開いた音と何かが入ってきた気配にビクリと浴槽の中にいたアスナが動いた。

「あー、お姉さん。僕やからそれ程警戒せんといてな」

意識して少し高めの声を出したナッツはへにやりと笑みを浮かべて、何かを意識する訳でもなくアスナの顔を見た。

警戒と疑問を浮かべながらも、アスナは自分の中で答えを出せたのか溜め息を吐き出した。

「アナタ……女の子だったのね」

「まあ、別にござ一緒する訳でもないから安心して。ちよつと間が保たんくて」

「そう」

性別に関して肯定も否定もせずに、テキトウな言い訳を捏ち上げるナッツ。そしてその言い訳に納得をしたアスナは浴槽の縁に腕と顎を乗せてナッツを見る。

こうして見れば確かに少女だ。

やはりアスナは自分で出した結論に納得して、はたと気づく。

「私はアスナ。よろしくね」

「改めてやけど、僕はナッツ言います。よろしゅうに」

浴槽に浸かって緩んでいるのか、警戒心の無い笑みを浮かべたアスナに同じく警戒心の欠片すら見つけられないへにやりとした笑みをナッツは浮かべた。

第3話

——ほう。

と呟いたのは誰の言葉だったか。

誰でもなく、誰しものが吐き出してしまった感嘆の声。或いは納得、もしくは怪訝。どの意味合いにも取れるソレは彼を見ている全員の口から吐き出された。

コボルドの斧を回避するでもなく曲剣で受け流す。まるで慣れた動作の様にソレを繰り返しながら通常攻撃のみでコボルドを制圧していくその姿に。

力を見せる為、と言うには出来過ぎた結果だ。少年と言える年齢のナッツを受け入れるには十二分の結果。既に一部のメンバーの頭には「単なるマスコットではない」と刻み込まれているだろう。

外套の中へと武器を仕舞い込み、ナッツは感じている視線をそのままに分かりやすく息を吐き出した。決してコボルド如きに緊張した訳でも、見られている事に緊張した訳でもない。ナッツにしては当然の結果であったけれど、出来過ぎてしまった。

「ん、コレで認められたって事でエエんかな？」

そう嘯いたナッツに対して、誰も何も答える事は出来なかった。

にへら、とフードの奥で笑い、誰も何も言わずに受け入れた事を察したナッツは細剣使い——アスナの元へとテクテクと歩き「いやあ、時間が掛かってもたわー」とテキトーな言葉を吐き出した。

はしやぐわけでもなく、アスナと適当な言葉を交わしながら歩いているナッツを見ながらキリトは目を細めた。

——オレっちが言うのも変だけド、ナッツの事頼んだヨ。

先日、去り際にそう言い残した鼠の事を思い浮かべて、キリトは内心で溜め息を吐き出した。頼む必要が無いじゃないか、という訳では無い。確かにアレは危険だ。

ナッツの戦闘はそれこそ安全だった。経験者であるキリトがソレは保証する。

『子供が無傷で戦闘を終わらせた』という現実——非現実の事実に

誰しもが目を奪われていたがソコはそれ程問題ではない。

恐らくナッツはその安全を得る為に何度も戦闘を繰り返し返した筈だ。だからこそコボルドの攻撃を慣れたように受け流し反撃出来る。安全を得る為に、安全の為に、安全、安全。

ソレは歪だった。

安全の為に何度もコボルドと戦うという事実は恐ろしく矛盾している。安全を第一に考えるのなら街に引きこもっているのが正しいし、防衛能力を上げるのならば武器を新調するのが正しい。

けれどナッツはそうではなく《何度も戦闘をする》という結果に行き着いた。そして安全を結果的に得た。

「どないしたん？」

「あ、いや……」

「？」

数歩後ろに居たキリトに顔を向けて疑問を口にしたナッツに対してキリトは思わず口ごもる。ハツキリと「お前狂ってるよ」なんて言える筈もない。そんな事はコミュ障のキリトだってわかっていた。何を言ったものかとコテンと首を傾げたナッツから視線を外しながら考えて、ようやく

「ナッツはスゴいな」

と当たり障りの無い言葉が吐き出された。

吐き出された言葉に対してナッツはにへら、とだらしない笑みを浮かべる。

「せやろせやろ。防御に関しては任してえな。見ての通り攻撃はお粗末やから、ソコはお二人に任すよって。えー、ほら、えっと、スケッチやったっけ？」

「スイッチでしょ」

「おお！ そうそう！ スイッチな」

昨晩教えられた言葉を間違えたナッツをアスナが訂正をする。自分の間違いを素直に訂正し、ニコニコと笑みを浮かべる。

「ま、変則的なタンクやと思ってもらえりやエエで」

「頼りになるんだかならないんだか」

「やーん、ソコは『頼りになるな、流石ナッツだ』とか言うてえさあ」
恐らくキリトが言う部分では少し低い声で喋り、フードの奥では真面目でキリツとした顔をしていただろうナッツに思わず肩を揺らして笑いを堪えるアスナ。

キリトがジト目でそんなアスナを見ていれば咳払いを一つして、踵を返して攻略部隊の集団へと足並みを合わせた。

二人は足並みを合わせたアスナの背中を見て、口元だけで笑い、少しだけ急ぎ足で集団へと紛れ込んだ。

変わらずも大きな扉。

2日ぶり、二度目のボス部屋の扉に対してナッツはそういう印象を受けた。当然、ココで不必要な事を言う程ナッツは馬鹿ではない。小さく息を吐き出してフードを目深に被って緊張の面持ちを貼り付けた。

迷宮区の情報に渡したアルゴがその情報の出処を言わなかったのには理由があるのだろう。そう推察したナッツは何も言わずに扉を睨めつける。数秒ほど睨んでから、興味を失った様に視界を下げてフードに隠した視線を周囲に這わせた。緊張と興奮の混ざった表情をしている人たち。扉の奥にいらっしゃるボスに緊張しているプレイヤー達。僅かにボスを警戒するのではなく、別のプレイヤーを警戒しているのは……恐らく経験者^{テスター}だろう。ディアベルを含んだパーティリーダー達の取り決めでラスト^Lアタック^Aのアイテムがそのままドロップした人のモノになる、という裁定^{ルール}に成ったからだろう。

ナッツは改めてそんな余裕のあるプレイヤーを見てから、キリトへと視線を向ける。コチラは単純に緊張と不安、そして僅かな興奮を混ぜた表情で扉を見つめ、視線を向けているナッツに気付いた。

「どうかしたか?」

「なんでもあらへんよ」

キリトから視線を外して経験者だから、という予想を外す。少なからず経験者であっても緊張や不安はあるらしい。それも踏まえて既に勝つ前提であり、仲間を警戒しているのは彼だからなのだろう。もしくはキリトがテスト時代に何かを仕出かしたか……。と考えてからナッツは思考を切り替える。

《ルインコボルド・センチネル》。頭と胴体に金属鎧。武器はポールドアックス長柄斧。喉元の一点に隙がある。頭の中で情報を反芻しながらナッツは息を吐き出した。ふと自分の口が笑んでいる事を認識して口元を隠す。どうにも自分も興奮しているらしい。

そんな事を認識しながらナッツは目の前の扉で銀の長剣を高々と上げているディアアベルへと視線を向ける。

ディアアベルは全員が注目し、頷いた事を確認してから扉へと振り向き、扉の中央に左手を当てる。

「——行くぞッ！」

短く意思を固める様に叫んだ騎士ナイト様に呼応するように、全員が開いた扉へと一歩足を進めた。

その部屋は暗闇だった。

開いた扉から差し込む光だけの、暗闇の空間。ドクリとナッツの鼓動が速まる。

左右から同時に何かが灯る音が響き、粗雑な松明が燃え上がった。ぼっ、ぼっ、と奥に走る松明の炎は数を増やし、部屋を怪しく灯す。

乱雑に並んだ白骨。壁のひび割れ。部屋の最奥には粗雑で巨大な玉座が設けられ、何かがソコに坐していた。巨大な玉座に負ける事のない巨体がユラリと揺れる度に最奥部の炎が震える。

誰もが緊張の面持ちでその王を睨めつけた。

騎士が掲げていた銀色の剣が振り下ろされ、総勢四十五人の反逆者達が鬨の声を上げつつ一気に雪崩れ込む。

戦いの幕が開けた。

はぐれ組だと言っても三人にも仕事はある。

コボルドの王には右手に握った骨斧や腰に差したタルワール湾刀以外の武器、そして左手に持った革を巻いた盾以外の盾を従えている。

《センチネル護衛兵》。王が従えるソレらはディアベル率いる攻略隊には邪魔でしかない。

故に、キバオウ率いるパーティが取りこぼしてしまったセンチネルを倒す事が《はぐれ組》の役割になっている。

「わっ、おっ」

センチネルが振り回す長柄斧を驚きの声を上げながら受け弾いているナッツは真っ直ぐにセンチネルへと視線を向けている。

何度も繰り返し、防御と受け流しと反撃を戦闘の基本としてるナッツは相手を観察してしまふ。

——言う程悠長に構えられんか。

決してセンチネルが強いという訳ではない。それこそ、この部屋にいる三匹のセンチネルをナッツ一人で時間を掛けて相手をすれば受け流しと反撃を完璧にする事も出来るだろう。けれど、今はその時間が無い。

振り降ろされる長柄斧を曲剣で受け流し、地面に刺さりそうになるソレを単発斜め斬りスキル《スラント》で上空へとかち上げる。

「スイッチー！」

後ろへと飛び退けば、入れ替わる様に細剣が伸びてセンチネルの喉元へと突き刺さった。僅かに残った体力バーが赤く点滅し、その点滅を消すように直剣がセンチネルを斬り裂く。

ポリゴン化していくセンチネルを見つめながらナッツは名残惜しそうに溜め息を吐き出した。

「GJ」

キリトが小さくそう呟いた。何の略称かはナッツは理解出来なかったので首を傾げたが、アスナは「そっちも」と返した。結局ナッツは何も言わずに誤魔化すように笑みを浮かべるだけにした。

何度も言うようだが、時間はそれ程ない。

「二本目ー」という最前列にいるディアベルの声が響き、同時に護衛兵が更に現れる。

ナッツに小さく息を吐き出して口元に笑みを携える。さつきよりも、次はもつと上手く出来る。回復POTを飲み干し、キリトに言われて強化した店売りの曲剣を握る。

「ナッツ」

「わあっとるって。体勢を崩す、無理はしない、危なくなったらスイツチする」

一体目の戦いが危なかったのかキリトが注意を促すように声を掛ければナッツは呆れたようにキリトとアスナから言われていた事を繰り返して言う。子供扱いである事に不満はそれ程ない。なんせナッツ自身は自分が子供である事を大いに理解しているのだから。

横振り。袈裟斬り。振り下ろし。足捌き。攻撃反応。防御の仕方。予備動作。唸り声。

頭の中でループする動作とソレを一致させて、ナッツは興味を失せた様にセンチネルの攻撃を受け流す。まだ完璧に覚える事は出来ないけれど、ココが到達点だろう。後ろに飛び退きながらアスナと入れ替わり、ポリゴンと化していくセンチネルを見送り、ボスである《イルファング・ザ・コボルドロード》へと視線を向ける。

三本目の体力バーもそろそろ尽きる。予定通りならば腰に差した湾刀を抜く頃だろう。

動いていたことでズレていたフードを目深に直して、敵が居なくなった事で手持ち無沙汰になってしまったアスナが近くに歩み寄る。「どうかしたの?」

「いや、例えば神様やったとして。自分が作った世界、その第一階層を余裕で突破された時の気持ちを考えてたんよ」

「?」

「……ヤナ感じ。事前情報出回ってて、後手で何かを仕込む事はないやろうけど」

ナッツは頭を振って纏まらない考えを放棄する。あくまで予想、予測。尤も、ナッツは茅場晶彦の性格をそれほど知りはない。それこそ《傍観者》ではない事も予測の域を出ないが……恐らくソレは確定だと判断している。

だからこそ、茅場晶彦はこの状況で何か手を加える事はない。ソレはフェアではない。絶望を求めている訳でもないだろう茅場晶彦は最低限のラインは守るだろう。

けれど、決定打はない。それこそナッツの情報不足が原因だが。

結果の出ない思考を捨てたナッツはキリトへと視線を向ける。そこにはイガグリ頭に背中を預けていたキリトが居た。

——面倒な事が起きてるんやろなあ。

小さく溜め息を吐き出したナッツはキリトの表情とキバオ……イガグリ頭の表情を見ながら察する。そしてキリトの視線を追って、訝しむ。

「ディアベル……？」

「え？」

「あ、いや、なんでもないで」

どうしてキバオウとキリトの会話でキリトはディアベルを驚きの表情で見る必要がある？ 同じβテスターならば見知っている筈では？ いや、見知ってはいない可能性もあつた。けれど、キバオウの憤りの表情を見ればキリトがテスターである事は知られている？

ガシヤンガシヤンとナッツの中で予想が組み立てられ、扉の前でディアベルがキリトへ視線を向けていた事を思い出す。

よもや、ドチラかが異性のアバターで想い人だった、とか？

ソレはない。という事もわかっていたけれどナッツは冗談としてそう結論を出した。別にキリトとディアベルに何かしらの遺恨があつた所でナッツには関係はない。

今は戦闘中である。意識を集中させるべきだろう。

そう結果を出した所でキリトがナッツ達の方へと歩み寄る。

「……何を話してたの？」

「いや………」

「大方、変なやつかみ受けたんやろ。僕居るのにイガグリヘツドのパーティより処理速度早いからな」

「え、あ、ああ」

にしし、と笑ったナッツが迫っていたセンチネルの斧を受け流す。まだ四体目だと言うのに迷いもない行動であった。

幾らか受け流して、斧を弾いて「スイツチ」と叫んで、後ろへと飛び退く。この戦闘だけでも何度もした行為である。飛び出してきたアスナを尻目にナッツはキリトの視線を追う。

戦場を見渡しているキリトの目が見開かれた。ほぼ同時にコボルドの王が湾刀を抜く。

キリトの口が開き、喉が動き、何かを飲み込んで叫ぶんだ。

「だ、だめだ下がれ！ 全力で後ろに跳べ——ツ！」

最前線に向け放った言葉であったが、ソレは無残にもイルフアングが発動させたソードスキルの効果音により最前線には届かなかった。

コボルド王の巨体が宙へと跳び上がり、ギリリと鳴らさんばかりに身が捻られる。着地すると同時に込められた力が深紅の輝きへと変換され、竜巻の如く解き放たれた。

ナッツは思わず眉を寄せた。囲んでいたプレイヤー達の体力バーが黄色に染まった事もそうであるが、頭の上に黄色い光が覚束ないように回転している。”スタン”と呼ばれる状態異常である事をナッツは知っていた。ソロで行動するにあたり必要最低限の事をアルゴに教わったナッツにとってソレは現状最も危険な状態異常である事を判断する事が出来た。

拙い。コレは、アカンやろ。

コボルド王の目の前にいるディアベルを確認してしまい、ナッツは内心で焦燥する。ココでディアベルが死んでしまえばどうなるか。少なからずいい事など起きないだろう。土気の落下。攻略の遅延。

頭の中で展開していた最悪の未来を消すようにナッツの隣から声が聞こえた。

「追撃が……」

「チイツ」

聞こえたキリトの声にナッツはようやく現実を見据えて、苛立たしく舌打ちをした。現状、スタンを受けて動けないプレイヤー以外でマトモに動いているプレイヤーは自分を含めて居ない。

だからこそ、隣でキリトの言った「追撃」を防ぐ事は不可能に近いだろう。けれど、それでも――。

「死ぬまでは生きなな」

ナッツは意識を切り替えてメニューを開く。取り出したのは店売りの投げナイフ。そのナイフを構えて、身を捻り上げる。ナイフ自体に淡い光が灯り、ソードスキルの発動を予期している。

地を這っていた野太刀がディアベルを宙へと浮かせ、獣人の王が厭らしく嗤う。まるで絶望を叩きつける様に野太刀に更にスキルエフェクトが灯る。

ディアベルはその直剣を構え、迫り来るスキルに対抗するべくスキルを発動させようとした。しかし、空中という場所ではスキルの発動判定は得ることも出来ず、力なく剣は宙を裂いた。同時にディアベルの躰がズレる。

「はっ」

腹部に突き刺さったソレをディアベルは視界に入れて、迫り来るコボルド王の腕により躰を弾き飛ばされた。

何度か地面をバウンドして、ディアベルが転がり止まる。腹部に刺さったソレを改めて確認すれば店で売られている投げナイフが刺さっている。

「リーダーやからって、功を焦りすぎやろ」

「なっ!？」

ディアベルの目の前には少女のような少年がいた。投げた動作でフードが外れてしまったのか、萌黄色の髪を揺らして溜め息が吐き出される。

そのカーソルはオレンジ色に染まっていた。

「どーせ回復するのに時間掛かるやろうし、そこで大人しゅう見とき」

そう言いながらナッツはディアベルの前に持っていた回復POTを全て置いて一歩前へと進んだ。

コボルド王の前に立ったナッツは大きく息を吸い込んで、細く吐き出した。口には笑みが浮かべられている。

求めていたモノ。求めて止まないモノ。ナッツにとってコボルド王はそれに近いモノだった。

強敵、という意味ではない。絶望、という意味ではない。危機、という意味ではない。

ただ明確なモノ。人として訪れなければいけない現象。そしてナッツにとつては求めて止まないモノ。

「死んだら、死ぬだけやな」

求めているからこそ、ナッツはソレを受け入れられる。

けれど、ナッツはソレを好んで望むことはしない。

だからナッツは剣を握り直して、目の前にいる強敵へと向くことが出来る。

「さあ、殺してみい。死人をどう殺すかなんぞ知らんけどな」

ボソリと呟いた言葉で口角が持ち上がり、ナッツが踏み込んだ。振り下ろされた野太刀を曲剣で受け止めて勢いを逃がす様に横へと流す。

地面へと突き刺さった野太刀を見る事もせずにナッツはイルファングへと視線を向け続ける。地面に向けて曲剣を突き刺し、柄を手で抑え込んで逆立ちの様に躰を浮かせる。

地を這う様に野太刀が曲剣を叩き折り、柄の上で逆立ちをしていたナッツはクルリと躰を回転させて地面へと手を突く。

「それは一回見てるで」

折れた曲剣の代わりとなる店売りの曲剣をメニューから呼び出し、スキルによって硬直しているコボルト王へと攻撃を仕掛ける。

決して多くないダメージであるけれど、それでもナッツはダメージを与える事が出来た。僅かに仰け反ったコボルド王が左腰へと右手を降ろして溜めを作る。

「スイッチッー」

殆ど条件反射でナッツの躰は動いた。何度も繰り返してきた行動に準じたと言った方がいいかも知れない。

ナッツと切り替わるようにキリトがコボルト王へと斬り込んでスキルを封じる。更にキリトが叫んで、アスナと切り替わる。

「なんや、遅かったなあ」

「ナッツ！ お前、何をしたかわかってんのか!？」

「ディアベルさんに対してなんか、一人でイルファングと戦った事かわからんけど、まー、説教は後にしてんか」

決して視線を合わせない二人は真っ直ぐにイルファングへと向き直っている。

ナッツは瞼を降ろして、息を吐き出す。

他のスキルが来た場合はわからないけれど、予備動作は覚えた。次は弾ける。

瞼を上げて、「よし」と呟く。

「ほな、三人だけやよって、慎重に行こか」

「ナッツがソレを言うのかよ」

「まあなんや、死んでも死ぬだけやって。気楽に行こや」

ニヒリと笑ったナッツはアスナから受け取った回復POTを飲み込んで、変に張っていた気を僅かに抜く。

後ろはまだ動ける感じはしない。このまま止めの一撃までいけば御の字。けれど、ソレは理想過ぎるだろう。

ディアベルを一瞥したナッツはしつかりと視線が合った事を確認して、「スイッチ」と叫んでアスナと入れ替わった。

ディアベルは背筋を凍らせた。あのナッツの視線に恐怖を感じた。先ほど殺される瞬間にも感じたソレを、単なる少年の視線によってフレインされた。

殺される、という恐怖ではない。底が見えない恐怖みたいな、まるであの時手招きしていたモノがその場にあるような。

未だにHPゲージは赤く染まっているけれど、それでもディアベルは立ち上がった。逃げ出したい気持ちを噛み締めながら、真っ直ぐに顔を向けた。

「あんな子供が戦ってるのに、俺達は何もしなくていいのか?」

そうたった一言呟いた。それだけでよかった。

責任感と使命感は伝播して、自身を無理矢理にでも鼓舞する事が出来る。更に言えば、リーダーはまだ死んでいない。戦える。戦える！戦えるのだ！

「まだ誰も死んじやいない！ 戦いは終わってない！」

だから、まだ戦える。

黒人の斧使いが立ち上がり、ナッツに迫っていた野太刀を受け止める。

「んお？」

「いい根性してるな、嬢ちゃん！」

「ハッ！ 惚れるんやったら後にしてや！」

斧使いの言葉に対してナッツは軽口で返し、後ろへと跳び退く。ディアベルへと視線を向けて、首を振られた。

「キリト、指示は任せるで」

「——了解」

短いやり取り。キリトもディアベルの状況を確認していたのか、すぐに了承を口にした。

そこから数十分。ようやくコボルド王は力を失い倒れた。綱渡りの戦い。繰り返される攻撃と防御。

極度の緊張の中、最前線に常に立っていたナッツがゆっくりと息を吐き出した。力を抜いて、折れた曲剣を捨てる。

いつの間にか耐久力が無くなってしまった外套も消え、細い体躯が露わになっているがナッツはそれを気にするでもなく止めを決めたキリトへと歩み寄る。

「お疲れさん、キリト」

「お疲れ様」

アスナと共にそう言えばようやくキリトは剣を下げて、肩から力を抜き、そして振り返り力なく笑ってみせた。

「——見事な指揮だった。そしてそれ以上に見事な剣技だった。コングラッチュレーション、この勝利はアンタのもんだ」

「なんや、ヤケに発音エエなあ」

「まあな」

巨漢で浅黒い斧使い——エギルがナッツの言葉に対して笑いながらキリトに向けて拳を差し出す。

その拳を見て少しだけ視線を漂わせてから、遠慮しがちに拳を突き合わせたキリトはやはりドコか照れたようである。

「——んでやつ！」

そんな勝利の余韻に浸っていれば、後方の中からそんな声が上がった。濁声の主はキリトへと憎しみの視線を向けて言葉を荒げる。

「なんでそんなに素直に喜べるんや！　ワイらはソイツにL Aを奪われたんやぞ!？」

もつと言えばなんでソイツは誰も知らんボスの技を知ってたんや!?!　ソレを言うとならもつと簡単に攻略出来たんちゃうんか!?!

結局、独り占めしようとしとったんやろ!？」

キリトが一步下がる。歯を食いしばり、視線を下に向ける。

そんなキリトの横で溜め息が聞こえた。カツカツと踵を鳴らしながらキバオウへと歩き、拳を握った手は容易くキバオウの頬へと突き刺さった。

錐揉み回転をして吹き飛んだキバオウは地面に頭を擦り付けられ、少ししてから止まった。

「おい、誰かソレに回復POT飲ましい」

底冷えするような低い——と言っても少女のような声がボス部屋に響いた。淡々と指示を出したナッツは舌打ちをして倒れたキバオウを見下す。

頬を抑えてキバオウはナッツを睨む。

「何するんじやワレエ!？」

「そらあコツチのセリフやボケ。あの状態でキリト以外に動けた人間が居ったんか？　居らんやろ、止めの一撃は結果論や」

「ソレも最初から狙とったんやろ！」

「ハア？　最初から狙とったんやったら、もつとエエパーティ組んで仕込みからやるやろ。アホちゃう？　ああ、ゴメンなあ、アホやか

「わからないのかー」

「つぎけんなやこのガキ！」

「おお、殴ってもエエけどオレンジなるで」

ナッツを殴ろうとした拳が寸で停止する。その拳を邪魔扱いするように左手で払いのけ、右拳は更にキバオウの腹へと突き刺さった。「ふぐつ」

「まあ僕はもうオレンジやからどーでもエエねんけど」

「——ん、やねん。オマエ……」

「なんやわざわざあの時に自己紹介までしたのに忘れたんか、僕はナッツってビギナーや」

「ちやうわ。あの時なんでディアベルさんを助けれたんや」

ザワリと周囲がどよめく。まるでシステムのバグの様に、裏ワザか、チートか。何にしろ、ナッツを訝しむ視線は集まってしまふ。

そんな視線に大した興味もなく、ナッツはただ冷たい視線を辺りへと向けて溜め息を吐き出す。

「単なるシステムの一端や」

そう短く切り出した。

「敵のソードスキル中に対象をズラして、不発させただけや。何もオカシイ事はないやろ」

「は？」

「……あの時のシングルシュートでディアベルさんを押し出した、つて言えばエエの？ ほら、単発斬撃スキルは回避出来るやろ。ソレと一緒にや」

その為に味方を攻撃するなど、誰が思いつく。少なくともあの時はディアベルのHPは危険域に入っていた。ソレを何の躊躇もなく投げナイフを投げたのだ。

「まあシステムの穴やろうけど、ほら、GMである茅場さんに連絡しよお思っても連絡取れんしな」

「お前茅場と繋がってるんか!？」

「なんでそんな話なってるん……アホやからしやーないか」

「茅場と繋がってなそんなシステム知らんやろ！」

「……アホらし。システムの熟知は普通するやろ。孫氏曰く『彼を知り己を知らば百戦殆うからず』言うし。何回も実験はしてるよ。結果が僕の戦い方や。」

それに茅場さんと繋がってるんやったらL Aは僕が取ってもオカシくないんちゃう？」

自身の戦い方は相手の攻撃を知り、反撃をする事は既に証明している。だからこそ、その事前準備として何度も繰り返している、そしてその中で今回のシステムを見つけた。それだけの話なのだ。

キバオウはモゴモゴと何かを言おうとして、弱みを見つけた様にナッツを指差す。

「オレンジなんかの言う事なんざ——」

「はあ、キバオウさんも悪い人やで。僕がオレンジにならんかったらディアベルさんは死んでたって言うのに。」

ああ、ゴメンなあ、キバオウさん。ディアベルさんが死んで一番喜ぶんは君やもんなあ。リーダーの座に近くなるしい？ ああ、それは悪い事をしたわあ、ゴメンなあ、ゴメンなあ」

顔を隠して泣いているフリをするナッツ。その口元はキヒヒと嗤いが浮かべられている。キバオウは必死に取り繕い、ナッツの言葉を否定する。

ナッツは一通り満足したのか、ケロリと笑顔を見せる。

「大丈夫やって、流石にオレンジなんかの戯れ言を信じる人は居らんやろ。キバオウさんが言うた通り、ね」

キバオウを地獄へと突き落とした。

第4話

——夏樹。起きなさい、夏樹。

母の声が聞こえた気がした。それとも扉が開いた音だろうか。

ナッツはじんわりと意識を覚醒させていき、瞼を持ち上げる。この五ヶ月で見慣れてしまったHPバーと時計を見つめて欠伸を嚙む。

零れ落ちそうだった投げナイフを改めて握り直して、丸めた膝を抱いていた腕を僅かに緩めて、索敵スキルを発動させて安全を確認する。

「くあ……あふ」

安全が確認出来たのか、ようやく情けない欠伸を一つ溢し、持っていたナイフをストレージへと戻した。

思っていた以上に新しい外套の寝心地がよかったな。とぼんやりと頭に浮かべて寝惚け眼でメニューを開く。いつもの様に回復POTと装備の耐久値を確認してからメニューを閉じて、立ち上がる。

後腰に斜め向きで差した船刀カッターを手だけで確認してから外套を纏い直した。

日頃に意識付けしているソレを終わらせてナッツはようやくチカチカと点滅しているメッセージへと指を這わせる。

一つはアルゴによる依頼。極々簡単なモノであり、ナッツはコレが返信をさせるモノである事と顔を見せろ、というアルゴからのお達しである事を理解している。宙に視線を向けながら、頭の中で指を折っていく。ピツタリ両手の指で数えれた数字にナッツは情けなく声を出して頬を掻いた。

了承の旨を送り、別のメッセージへとスクロールする。

次のメッセージはアスナからである。内容は血盟騎士団への勧誘。コチラに対してはナッツは見ても見ぬふりを貫いた。決してアスナとの仲が悪いという訳ではなく、ギルドという群れに対してそれ程の価値をナッツは感じていないのだ。いいや、攻略ギルドという群衆に対しては価値があるとは思っている。それこそ無くてはならない、という認識も持っている。

それでもナッツは攻略ギルドに入る事に価値を感じていない。束縛、義務。そんな事を考えればソロでいる方がマシだ。

メニューを消して、深呼吸を一つ。

ナッツは未だに地獄の中で笑っていた。



「それで？ 呼びだされた訳やけど、どないかしたん？」

「あのナ……。カーソルも戻ったんだから、いい加減街で休息を取るようにし口」

「外居おるの方が次の行動取りやすいやん」

「……ハア」

NPCが営業している人気のない小さなカフェでフードを被った存在が二人、机を間に座っている。

存在の片方であるナッツはケラケラと笑って取引トレードメニューを叩く。対して不満を表すように口をへの字にして溜め息を吐き出したのは鼠と呼ばれているアルゴである。頼んでいた依頼内容……。尤も、ナッツなら簡単に取得出来るであろうアイテムを確認して、アルゴもウィンドウをタップする。

「というか、僕が街に戻ってないとかなんで知られてるんさ……」

「ナッツは目立つからナ」

「ふーん……。僕の情報を売らんってナンボ掛かるん？」

「？ 何かあったのか？」

「アスナさんから血盟騎K士団B入れー入れー、また危ない事してるでしよー、とか五月蠅いんやって」

「アー……」

「しかも、僕が街に入っていないとか知ってるし。僕が目立つう言うても限度があるやろ」

「へー、まあオレっちは知らないナー」

「……僕の情報を売ってる奴の名前を買うで」

「教えられないナー」

「さいでつか……」

クツクツと意地の悪い笑いを浮かべたアルゴにナッツは口を尖らせて不満を表す。水滴も付いていないグラスに口を付けてナッツは息を吐き出して話を切り替える。

「それで、まあ、僕の情報の販売に関してはええわ。言うてもそれほど高くないやろうし」

アルゴはその言葉に対してから笑いをする。最前線を張る少女（少年）の情報が高くない訳がない。血盟騎士団に入ったアスナの情報も高いが次点でナッツも高い事など言える訳がない。

から笑いをしているアルゴをナッツはジトリと睨んだ。

「なんや、エライ高いんか」

「高くないヨ」

「さいで。まあ情報の値段を聞くのにコル取られるやからエエや」

「チツ」

「おーこわ」

ニヒリと笑ったナッツと変わらず意地の悪そうな笑みを浮かべるアルゴ。ただでさえフードの二人組というだけで視線を集めるといふのに、笑い合えば余計に注目されるだろう。尤も、ココは人気もないカフェなので視線などないのだけれど。

「それで？」

「おお、そうそう。僕の情報が正確過ぎひん？ コレでもアルゴさんが集めてるにしても位置情報が正確過ぎて怖いんやけど」

「アー、それナ」

「なんや原因知つとるんかい……」

「千コル」

「金取るんか……」

「商売だからナ」

自分の情報だというのに、と愚痴を言いながら千コルを渡したナツ

ツ。アルゴはニシシと笑いながら口を開く。

「モブと戦ってる時に何度かプレイヤーに見られてるだろ？ オレっちが最終確認した場所からそういったナッツの目撃情報を買って、正確な位置を知ってる訳だ」

「……色々言いたいことあるけど、僕の場所変わってたらどないするんさ。ソレ」

「同じモブ、旨味ウマミのない敵モブと何回も戦うナッツが移動してるとは思えないけどナ」

「……………あー、つまり、なんや、自業自得言うことかい」

大きく溜め息を吐き出して自分の行いを振り返って嫌気が差す。何度も戦う事はナッツの戦闘では必須の事だから止める事など出来ない。例えソレが経験値的に旨味の無い敵だったとしても、ナッツはソレを止める事など出来なかった。

特異な戦い方をしているフードの少女(少年)、というなんとも分かりやすい情報はスグにアルゴの耳に入ることになる。なった結果がアスナからの勧誘攻撃である。

「それでも僕なんて事わからんやろ、普通」

「あの子、ナッツ。攻略組に名前を連ねてて、そんなフードを被ってて、わかりやすい格好をしてる奴は他にはいないだろ」

「いや、自分の格好見イさ、アルゴさん」

「オレっちは攻略組じゃネエからナ」

それでも有名な事は変わらないだろう。とナッツはジト目で睨んだ。口をへの字にして不公平さに不満を表していれば、アルゴが言い聞かせるように言葉を吐き出す。

「それに、そんなフードがこんな低階層で同じモブ相手に何度も戦ってるならナッツの名前じゃなくても噂にはなるだろ」

「むう…………」

「マ、諦めろ」

クツクツと笑うアルゴにナッツはムスツとした顔を向けて不満を漏らす。

どうにか血盟騎士団の勧誘を上手く断る事は出来ないだろうか。

次にアスナと面と向かう時があつたならば、たぶん無理矢理にでも入れられそう……。

そんな未来を思い浮かべてナッツは深く溜め息を吐き出した。

「まあエエ。最悪ヒースクリフさんに言うて逃げよ」

「そんなに血盟騎士団に入るのは嫌か？ ナッツなら幹部ぐらいになれるだろ」

「……それはどないかわからんけど、まあ、ちよつと思ふこともあつてなあ……」

「ふーん……何コルだ？」

「コル積まれても言わんよ。別にどーでもエエことやし」
「そうか」

ケラケラと笑つて話を流そうとしたナッツを追及するでもなく、アルゴはあつさりど話を流した。追及した所でナッツは言わないだろうし、ナッツとの関係に罅が入るのも避けたかった。貴重な情報源を手放す訳にもいかず、それに嫌われたくもない。

笑つていたナッツが何かを思い出したように小さく「お、そうや」と呟いた。

「そーいや、キリトはどないなん？」

「別にどうもなつてないガ？」

「……何コル？」

「四千」

「たつか!? 僕の情報より高いんか、キリト……」

「他人だからだヨ」

「人見て商売しとるんか……」

「人を見なきや商売は出来ないゾ」

まあエエけど。と呟きながら提示されていた金額を払う。アルゴとしてはご満悦なようで、ニシシと口を上げながら笑つて、情報を話す。

「ナッツの知りたいた事はキリトが最近夜にしかレベリングしてない事だろ？」

「そうそう。深夜帯でレベリングとか馬鹿みたいな事してるん僕ぐら

いやつたのに、氣イ付いたら狩場を荒らされとるんやで……。話聞いたら昼にレベリングしてない言うし」

「なんだ、ソコまでは知ってるんだナ」

「そこまでしか知らんねんって。最前線でアタッカー出来る人間減るんはマズいやろ、流石に」

「……………なあ、ナツツ。もしも、もしもの話なんだケド。最前線にキリトが戻らない理由があったらどうするんだ？」

「そら理由を排除すべきやろ」

「……………そうカ」

「まあ金は払ってんし、情報ちよーだい」



隠密スキルにおいて、現在のナツツ以上のプレイヤーはいない。それこそ、野宿をしながら自然と上昇してしまったポイントと張り合うのもオカシイ事なのだけれど。だからこそ、ナツツは日中の森の中で一つの存在へと視線を向ける。黒い髪、黒い装束、盾を持たない片手剣使い——キリトへと。

ソロ専門——というよりはコミュニケーション能力的に問題のあるキリトである筈なのに、パーティを組んでいた。その時点でナツツとしては「他人？」という疑念が沸いたけれど、アルゴの情報もあり、一先ずは納得する。

月夜の黒猫団。ソレがギルドの名前。キリトを省けばメイスと盾を持った男、短剣を装備している軽装の男、長槍使いが二人、棍使いが一人。戦闘を見続けて分かる事はキリトが殆ど攻撃らしい攻撃もせずに防御に徹しているという事。よく見るソードスキルも使って

ないこと。

「なんや、アレ」

ナッツからすればソレはとても歪だった。戦闘面ではなく、人間関係という話で。上位プレイヤーがレベリングを手伝う事はある。それこそナッツは下層でモブ狩りをする時間もあるので、相応にソレを体験した事もあった。けれど、あの関係はソレとは別種だ。

自分の為でもなく、相手のレベルだけしか上がらない。キリトがそういうった——所謂聖人ロールだったなら理解する事も出来た。けれどナッツの知るキリトはそんな性格ではない。お人好しであるけれど、その罪と責任を全て背負える程人間は出来ていない。今ですら一階層ボスでキバオウから言われたチートだのを気にしている、そんな存在だ。

「……………もうちょつと観察してみるか」

だからこそキリトの意図が知りたかった。未来予知の能力なんて持ち合わせていないナッツであるが、最低の予想だけは一人前に出来た。

綻んで、キリトがああのギルドに責められるだけならばまだいい。それは最悪であつても最低の結果ではない。全体を見ても、大した問題ではない。最前線のアタッカーが暫し休業する程度だ。キリトならば、その程度大丈夫だとナッツは信じている。

最低な状態は——、全て無くなってしまふ事に他ならない。

かといって、事情も知らずにナッツが動く事はそれこそ無意味な事だろう。

だから——ナッツは溜め息を吐き出して、現在居る階層の情報収集へと意識を向ける。面倒な敵、ダンジョンデータ、トラップ、安全なレベル帯。ゆったりと瞼を上げてからナッツは一団の動きを観察し続ける。

「動かんにしろ、殺すにしろ、情報もないから何とも言えんなあ……」

「なんやアレ、ホンマ、なんやねん」

珍しくもなくナッツは舌打ちをしてフードの上から頭を乱暴に搔いた。レベリングも重要であるが、プレイヤースキルの上昇も重要だと思っているナッツからすれば件の月夜の黒猫団は苛立たしいモノだった。

キリトが深夜帯にも最前線に出向かなくなつて三週間程経過して、情報収集をしながらも最前線へと出向いていたナッツはむしろくしゃした気持ちを空へと吐き出していた。

長槍使いから盾剣士へと転向をしようとしていた少女が長槍使いに戻つた事、それによりキリトの負担が増えた事、ソレは別に問題ではない。戦闘を見続けていれば長槍使いの少女が戦闘自体に怯えている事はよくわかつた。だから、恐らく長槍使いへと戻したキリトの判断は正しい。

「ああ、もう。クソ。クソ、クソ!!」

だからこそ苛立たしい。別に長槍使いの少女が技術的に劣っているとか、キリトへの負担が増えたとか、そんな事はどうでもいい。並びのイイ歯を軋ませて、木の根を勢いをつけて何度も踏んでナッツは苛立ちを散らしていく。レベルだけの話をすれば、それこそ安全だ。けれどナッツから言えばソレは苛立ちの要因にしかかつていない。

キリトがいるから、というぬるま湯に浸かつてギルドの緊張感は薄らいでいる。安全なレベル帯だから、という言葉で警戒すらない。技術を磨く事もしない。情報もそこそこにししか集めない。

ナッツはもう一度舌打ちをする。

「アカン、やめよ。苛つくだけ不毛やし……ギルドホーム買うらしいし。ちよつとは我が身を見直すやろ……」

落ち着けば、余裕が出来る。だからこそ自分を見直す事もだろう。キリトも自分を見直す事が出来る筈だ。

最善ならば、キリトが月夜の黒猫団を攻略ギルドにまで押し上げて、最前線を経験し続けて技術を磨く事だろう。けれど、きつとそうはいかない。ある種の確信めいたモノがナッツの中にはあった。

キリトに負んぶに抱つこのギルドにそこまでの期待はしていない。確かにレベルだけでもココまで育ったギルド、という事を考えればそれなりの評価をしてもいいかも知れない。

「間に合わんかったら……まあ、しゃーないか」

この幻想に溢れた世界で唯一の現実を叩きつけるしかない。理想を抱くのも、夢想を掲げるのも、勝手にすればいい。ナッツにソレは関係の無い事だ。

けれど、ナッツ自身に関係あるのなら別だ。今回は最前線でも名前がスグに上がるキリトがいるからこそ、尚更だ。

「さっさと摘み取るべきか……それに準ずる何か起きなアカンか」

起こらんやろなあ。と呟いたナッツはキリトの戦闘方法を緻密に思い出す。何度も隣で戦った事のあるキリトと相對する仮想を思い浮かべた。

プレイヤースキルもレベルもキリトの方が上だろう。そもそも戦闘方法からしてキリトの方が優位に立っている。だからこそナッツは自分は負けるだろう、と確信している。状況も含めて言えば、きつと自分は激昂しているだろうキリトに殺されるか、消沈しているキリトに恨まれ続けるか、何にしろ、自分は殺されてしまうだろう。

薄い可能性として、ギルドメンバーにそれほど執着もなかったキリトがアツサリと自分を許す、という事もあるが……きつとソレは無いだろう。それこそ希望的観測だ。

「まあ、死んだら死んだでエエやろ」

吐き出した溜め息と言葉は悲観的なソレであったけれど、ナッツの顔はどうしてか笑みに彩られていた。



「おい、アホ」

「ハイ」

「わかつとんのか、ボケ。自分で何しとったか」

月夜の黒猫団、リーダーである“ケイタ”を除いた四人が正座をし

ながら、目の前の異常な状態を見た。

萌黄色の髪をした美少女が自身達を導いてくれたキリトにキレていた。それはもう怒り心頭だった。少女にしては少し低い声で凄んでいる少女のカーソルはオレンジ色に染まっており、殴られたキリトは少女の説教を粛々と聞いている。

時間は少しだけ巻き戻る。

ようやくと月夜の黒猫団のギルドホームが購入される、という情報を手に入れたナッツは「無理やったら摘み取りかあ……メンドクサ」とボヤきながら既に日課となった監視を続けていた。

宿屋の中で聞き耳を立てるといふ事もしてないナッツは街の一角でぼんやりと時が過ぎるのを待っていた。街を出るにしても、通らなくてはいけない場所であり、ココに居ればある程度の動向も分かる場所。フードを被ったナッツは街を出入りするプレイヤーを見送りながらキリトとの戦いを夢想する。何度も繰り返し、繰り返し、繰り返し、負けてしまう。

「ハア……ん？」

そんなナッツの視界にキリトを含めた月夜の黒猫団が通った。果たしてどういった用件かはわからないけれど、街を出て行く、というのであれば着いて行くのが監視者の役目であろう。

少しばかり距離を開けて追跡していたナッツの顔が歪んでいく。舌打ちと溜め息を併発させながら、一団を追った。

最前線である階層から三つ下。その迷宮区に到着した瞬間にナッツは深い深い溜め息を吐き出した。夢想していたキリトとの戦いはどうやら無くなったらしい。実に残念な事だった。

ダンジョンデータを思い起こし、トラップのランクを一つ上昇させる。安全なレベル帯と情報で得ていた黒猫団の平均レベルを確認すれば、それほど問題はない。けれど、ソレが問題だった。

平均レベルが情報で明け透けになってしまう程、彼らは情報に関して疎い。トラップに関しても、きつと知らないだろう。

キリトが上手くトラップを回避する様に言えばいいのだが、そんな

事をナッツは信じていない。むしろ絶対に押し負けるだろう、そう確信していた。

「ええっと、このトラップは何やったけ。結晶不可とアラートと、ダメージトラップ系もあつたなあ……」

体験した事を思い起こしながらナッツは深く溜め息を吐き出した。

一団が入った部屋を眺めて、ナッツは目を細める。これ以上近付けばキリトの索敵スキルに入ってしまうだろう。隠蔽スキルと索敵スキルの境界に立ちながら、ナッツは腰裏に差している舶刀の柄に触れた。

「——無理やな」

力を込めて踏み出した一歩と同時にアラートがけたたましく鳴り響いた。

自分の入ってきた入り口に振り返り、投げナイフを幾つか投げたナッツは動転している一団と残りの入り口を数える。

——残り二つ。最大ウェーブは四。結晶は……使えない。

頭の中で理解した情報に舌打ちをして、ナッツは黒猫団の内一番入り口に近かった男の方へ走り、迫る攻撃を受け流した。

「誰ッ!？」

「ナッツ!？」

「結晶は使えんで！ 足手まとい共は一箇所に纏まっとけ！ キリトッ！ コツチはどうにかしたるから、さっさと処理！」

「お、おうー！」

幅広の舶刀で相手の攻撃を流し、距離を設ける様に蹴り飛ばしてコンソールを弄る。

「あ、あの」

「うっさいわボケ、ちよい黙っとれ死人共」

黒猫団の言葉など意に介さず、幾つかの回復POTを受け渡し、ナッツは黒猫団から少し離れる。

「コツチやで調査済み！」

叫んだナッツの言葉に含まれたスキル《威嚇^{ハウル}》。モンスターに設定されたヘイト値を上昇させ、自分を狙われやすくするモノ。その効果

はスグに表れる。

黒猫団を狙う数は少なくなり、同時にナッツへと攻撃しようとする敵が増えていた。明らかに過剰戦力であった。それでもナッツは手慣れた様に相手の攻撃を流し続けて反撃をカウンター決めていく。

「す、すげえ……」

「お、俺達も——」

「いらんへイト溜めんな！ 自分の周りだけでエエ、最悪守り続けたら僕かキリトが行く！」

敵に埋もれてなお、ナッツは黒猫団への視線を切る事はしていない。同時にそれは片手間で処理出来ていると同義であった。

ナッツによる《威嚇》にと各個撃破能力、キリトによる殲滅戦により、ナッツの予定よりも早く事態を切り抜ける事は出来た。

周りにモンスターが居なくなった事を確認したナッツは自分の船刀へと視線を落として、鞘へと直した。

戦闘中に外れたフードをそのままに萌黄色の髪を揺らしてキリトへと向いた。

「こっから出るで。これ以上の損は取りたくないし」

「あ、ああ」

ニツコリと美少女のような顔が笑顔になる。キリトは冷や汗をかきながらソレを了承した。怒っていらつしやる。その事はキリトにはよく理解出来た。

「ちよ、ちよつと待ってくれ、ください？」

「……」

ナッツはチラリと黒猫団へと視線を向ける、笑顔のまま。美少女のような笑顔に思わず息を飲んだメイス使いは口を開く。

「え、えつと、そう、ちよつとだけ金を稼ぐだけでいいんだ。その……キリトと知り合いみたいだし、君が居れば——ヒッ」

一息に抜かれた船刀がメイス使いの頬に触れるか触れないかで停止した。ナッツのカーソルがオレンジ色に染まっていないという事は触れてはいないだろう。

「迷宮区で説教させんなや、ボケ。というか、お前ら僕が来な死んで

るって事理解出来てるん？」

「そ、それは——」

「キリトが居るし——」

「ハア……キリト、殴るんは後にしたる。とりあえずコレらを連れて撤収するで」

「う、うっす……」

殴られる事が確定してしまったキリトはドコかぎこちない動きで入ってきた入り口へと戻っていく。ソレを追うように黒猫団が後を追ひ、最後尾にナッツが歩く。後々になつてナッツは「豪華な布陣やなあ」と染み染み言うのだが、ソレは未来の話である。

話は戻り、一発殴られたキリトは正座をしてナッツの言葉を肅々と受けている。

「あんな、悪いとは言わんけど。変に自信つかせんな。レベリング重視の攻略もエエけど、情報を疎かにしすぎやろ」

「……………」

「なんや、僕が間違つた事言うてるんか？」

「いや、その正論デス」

「じゃあ返事ぐらいしろやボケ！」

「ハイ！」

「というか、なんやねん。キリトがおつてあの体たらくは。あのエリアでトラップ警戒とか調べたらスグ分かるやろ、というか知つとつたやろ」

「はい、申開きもありません……」

「じゃあなんでトラップ引いたんや。なんやわざとか。わざとなんやな？」

「いや、ワザトじゃないです」

「じゃあなんやねん。ああ、そうか、僕が追跡してる事知つてて敢えて鳴らしたんやな。いやー、引つかかってしまったワー。おい、コツチ見ろや」

視線を逸らしたキリトを見下したナッツは舌打ちを一つだけして、

更に口を開こうとする。

「あ、あの……あのアラートを鳴らしたのは、オレです」

「……………」

「だから、その……キリトはそれほど悪くないって言うか」

その口は開く前に閉ざされて、同じく正座をしている黒猫団へと視線は向けられた。冷たく、まるでモノを見るかの様に感情の籠もらない瞳。

先程の一件もあり、黒猫団は思わず背筋を正してしまふ。

姿勢を正した黒猫団達から視線を外して改めてキリトへと向き直す。

「……エエか、キリト。ジブン気イ付いてないから言うけど、ジブンの自己満足とか罪悪感とか虚栄心とかそういうのが原因で起こった事故——事件未満や。わかつとる?」

「……………ああ」

「ならエエわ。別に悪いって言いたい訳やない、それこそ全体的に見れば、キリトのやつてることは普通やし、イイ方の部類やろ。ソレがなあなあで続いた結果がコレや。続けても構まへんけど、次は僕は助けへんで」

「……………わかったよ。助かったありがとう」

「ん。借りとして持つとくわ。んで、次にお前らやボケども」

溜め息を吐き出して、ナッツは黒猫団の前に立った。

「先言うとく。僕はキリトを助けに來ただけでお前らなんてどーでもええ」

「なっ……………」

「お前らがドコで死のうが、僕には関係ないし。今回はキリトが近くに居ったから助けた。それだけや」

「……………」

「それを踏まえた上で説教したる。仕方ないから、こんなガキでも分かる事を説教したる。なんで情報集めせエへんの? この階層からトラップレベル上がるなんて常識やで」

「いや、常識でも無い——」

「キリト、なんか言うた？」

「何も言っていないデス」

「さよか。それで、なんで情報集めんの？」

「その……安全なレベルまで」

「安全なレベルまでいってたら情報集めへんの？　アホちやう、ああいや、アホやったな。」

そもそもその安全なレベルって言うのはダメージ計算含みで安全なパーティでの推奨レベルでしかない。順当に上がってて、プレイヤースキルも含めてのレベルや。キリトが居ってどうにか出来るレベルの話やないって知ってる？」

「……んだよ、さつきから！　言いたい事言いやがって！」

「ちよ、テツオ！」

「そりやあ説教やからな。僕は言いたくないんやで、君らの事なんてどーでもエエし」

「じゃあ放つとけよ！　俺達なんてどうでもイイんだろ!？」

「せやな。じゃあやつば殺すわ」

船刀を一息に引き抜いたナッツは躊躇も何もなく、メイス使いの腕を切り落とした。ポリゴン片を散らしながら落ちた腕と驚きに後ずさった男は怯えた表情でナッツを見る。

「んだよ、なんだよ！」

「死んでもどうでもエエから殺す。何か間違ってる？」

「ナッツ！」

「キリトは黙つとき」

ツカツカとブーツで草を踏みしめながらナッツは逃げようと藻掻く男の右膝から下を切り落とした。痛みに呻く男など意に介さず、ナッツは頭の中で男のヒットポイントを計算していく。

「狂ってる、狂ってるぞお前！」

「さよか。どうでもイイ奴に言われてもどうでもいいだけやし。こうやって隣のヤツから死んでいくんや、最前線は」

「ッ……」

「来るな、とも言わん。ただ理解はしとき。どれだけ準備して、情報集

めても、死ぬ時は死ぬんや。ちゃんと下層連中が死なん様に情報も流してる筈や。それでも慢心して死ぬヤツなんざ知ったことか。勝手に死ぬ。というか殺す」

「ナッツ、ナッツ。もう十分だろ」

「うっさいわ。そもそもキリトがちゃんと情報開示してたら済んでた話やろ」

「うっ……」

「まあコミュ障のキリトさんにそこまで求めとらんよ」

「それはソレで辛いんだけど」

「言い返しも出来へんのに、口出すなや」

再び正座へと戻ったキリトを見下し、ナッツは船刀を腰へと戻して、外套を着直す。

テツオと呼ばれたメイス使いの腹を踏みつけて、ナッツはニッコリと笑みを作る。

「死ぬんやったら勝手に死ぬ。死んでも死ぬだけやし、怖くないで。ただ消えて無くなるだけや」

口調こそ穏やかなモノであったけれど、内容はソレとは真逆のモノだった。

表情を消し去り、フードを改めて被ったナッツはキリトを一瞥してから転移結晶で姿を消した。



「それで、キリトは黒猫団を抜けたのか」

「らしいで。まあ黒猫団も最前線手前で燻ってるし、情報集めるようにはなってるみたいやし、どうにでもなるんちゃう?」

「ふーん」

「何いさ」

「何かと言つて、黒猫団を気にしてるんだナ」

「それなりやって。死ぬと不利益になりそうにはなったかなあ」

「そうカ」

クツクツと意地悪く笑うアルゴに不貞腐れたナッツ。アルゴとしても素直に褒める事も出来ないナッツに笑うしかないのだ。

「それで、今日はどんな情報があるん？」

「そうだなー……」

蘇生アイテムってあると思うカ？」

第5話

——ドコに居るの？ 出てきなさい。

母が自分を探している気がした。いいや、それとも別の誰か。

ナッツはぼんやりと意識を持ち上げて、細めた視界で空を見上げた。

一秒、

二秒、

三秒。

視界の端に映る時計を眺めながら、ナッツは息を潜める。手から落ちそうになる投げナイフを握り直し、索敵スキルを発動させた。

ようやく息を吐き出して、ナッツは投げナイフを慣れたように戻した。

いい加減に外套は変えどきかもしれない。そんな事を頭に浮かべて、腰に差した舶刀の柄を撫でる。撫でてから、目を細めて鞘ごと引き抜いた。

店売りの消耗品ではなく、ありふれたモンスタードロップ品であるソレは随分と長い間ナッツを支えていた。壊れる寸前で戦闘が終わる、街に戻って修理される。たったソレだけの行為を何度も経験した舶刀。ココまでくればナッツもドコか意地になつていた事は否定しない。この舶刀が壊れるまで使った。そう、壊れるまで使ってしまったのだ。

「……ハア」

愛着が無かった、と言えば嘘になる。けれども消耗品である武器を失った事に対してはそれほどの感情を持ち得ない。

ドコか矛盾した感情を心の中で混ぜ合わせたナッツは舶刀を鞘から引き抜く。飾り気も、拘りもない、僅かに反った剣。耐久値を見ればあと一振りでもすればポリゴン片へと散ってしまうであろう曲剣。決して、名残惜しかったから別の武器へと変更した訳ではない。ただ、戦闘が終わっただけ。偶然、運命的に、奇跡的に、それだけの話。

ナッツの戦闘の都合上、《丈夫さ》に極振りされた風変わりな——奇

特な曲剣。十数日と続くMob狩りも付き合ってくれた剣。

ナッツは静かに、ゆつくりと鞘へと戻して立ち上がる。後ろ腰へと鞘を差し込み、裾の掠れたフードをしっかりと被った。

「鍛冶屋探さななア……」

久しく取り出した店売りの曲剣を握りしめてナッツは息を吐き出した。

一年の大半を一緒に過ごしたヘンテコな武器をナッツはどうしても捨てる事が出来なかった。

ただソレだけの事なのだ。



「うえっ……」

久しく街に戻ったナッツは目の前にいた人物に顰めつ面を見せた。目深に被ったフードによつて顔の大部分は隠れていたが、それでも歪んだ口元は隠れていない。

「げっ、ってそんなに私に会うのが嫌だったの？ ナッツ」

「嫌やった訳やないんやで、アスナさん。でもなあ、ほら、アスナさん僕見たら血盟騎士団入れ、言うやん？ 入りたくないやん？ 仕方ないんやって」

街に居るというのに警戒を強め、目の前のアスナに対して一歩だけ後ろに下がったナッツは頭の中でストレージの中身を思い出す。大量に詰められたドロップ品の中に武器は無く、店売りの武器はこの街への途中で使い潰れた。回復POTも片手で数える事も出来る。

逃げる事は出来ない。そう逃げれないのだ。その結論を早々に出したナッツは笑顔を作り上げた。

「ほ、ほら、言うてもソロでも安全な立ち回りしてるし？」

「へえ……。十日も街に戻ってなくてよく言うわね」

「うっ……。でもほら、えーっと、キリトの方が危険なレベリングしてるんやし」

「彼はちゃんと街には戻ってるわよ」

「ぐっ……」

ナッツはジト目でコチラを睨んでいるアスナから視線を逸し、自分を擁護する何かを探す。或いはこの会話から脱する為の何かを――。

「そ、そうや、アスナさん。なんか工工鍛冶屋さん知らん？」

「鍛冶屋？」

「そうそう！ 強化してなんとか使ってたコイツがちよい危なくてなあ」

「……あの剣でよく今まで戦ってたわね」

「ハハハ……」

ナッツは外套の上から後ろ腰を触り、柄を撫でる。アスナは呆れながら溜め息を吐き出し、以前のボス攻略から変わって無いであろうナッツの武器を思い出す。攻撃力としては申し分があるどころか問題しかない曲剣。ナッツの攻撃方法からして恐らく《正確さ》と《鋭さ》そして少しばかりの《丈夫さ》に振られているであろう強化を予想して、それでも攻略やレベリングには適さない事を理解する。

ナッツはなんとなくアスナの思考を感じ取りながら、勘違いを指摘する事はなかった。きつと全ての強化を《丈夫さ》に振っていると知られればアスナからの説教は間違いない。理由を問われれば、”街に戻る必要がない”という単純明快な理由を言ってしまうナッツにとってありがたい勘違いであった。

「それで、誰か知らん？ アスナさんの知り合いやったら安心して頼めるし」

「そうかしら。キリト君はどうなの？」

「アレはレアドロップにモノを言わせて、コミュ力をどっかに売りつけた男やで……鍛冶屋の知り合いなんか居るわけないやろ」

「そんな真顔で言われてるキリト君が不憫ね」

何処ぞの野武士と狩りをしている黒い剣士の事はさておき。

ナッツの性別を勘違いしているアスナからすれば、ナッツの『安心』という言葉に納得出来る。そもそも女性プレイヤーの少ないこの世界でアスナ自身も色々と言われてきた。根も葉もない噂から、意味な

なんて無い言葉まで。そうして考えればナッツが極力人と関わっていない事にも納得してしま——、いや納得は出来ないが理解は出来た。

ナッツとしては「こう言うたらアスナさんやし、エエ鍛冶屋紹介してくれるやろ」などと計算しての発言なのだが、そんな事をアスナが知る由もない。血盟騎士団からの伝手ならばソレでもナッツは構わなかった。今は何より長く使う事の出来る武器が欲しかった。流石に店売りのモノだけでは嵩張るのだ。

「そうね。わかったわ、ちよつと待ってね。時間取れるか聞いてみる」

「当然お金とか、素材とかはちゃんとするからよろしゅうに」

「……少しぐらい出すわよ?」

「あー……あんまり言いたないねんけど、あんまり街に戻ってないからお金は有り余ってるんよ」

「……………ナッツ?」

「ほら、怒るから言いたなかってん」

「……因みにどれぐらい?」

「えーつと、ここらの階層の家買って、それでも余ってるぐらい?」

「貯め過ぎよ!」

そんな事を言われてもなあ、と困ったようにはやりと眉尻を下げたナッツ。当然彼もお金を使いたくなかった訳ではない。ただ使う事が無かっただけなのだ。

ナッツ自身が言った通りに街に戻っていない。それこそ街に戻る時は消耗品である武器や回復POTが無くなった時、アルゴによる呼び出しぐらいなのだ。野宿続きである為に宿代は無し。尽きる事もなくモブ狩りを繰り返し溜まるコルとドロップ品。そのドロップ品を知人へと卸して、回復POTを安価で手に入れる。アルゴからの依頼代。更には店売りの剣も腰に差した舶刀により数が少なくなってしまった。そうした遣り繰りがナッツの現在の金額の原因であった。

その全てを明言しようモノならアスナによるありがたいお言葉を頂くことを理解していたナッツは適当に誤魔化す事を心の中に誓う。

フードの奥ではやりと顔を緩めているナッツを見ながらアスナは少し考える様な仕草をして、少しばかり自分の欲望に従う。

「ねえナッツ。少し提案なんだけど」

「……先に言うけど、コレで血盟騎士団入れ、言うんやったら流石に逃げ出すで?」

「言わないわよ!」

フードの奥に見えたナッツのジト目をアスナは大きく否定した。アスナとて理由は分からずともナッツが血盟騎士団——ギルドに入る事を避けているのは理解していた。それでも勧誘を続けているのはただ単に心配、という気持ちがある為である。

コホン、とナッツから視線を逸らしながら一つ。

「その、ほら。私はナッツに鍛冶屋を紹介するでしょう?」

「せやな」

「それで……仲介料を貰って然るべきだと思うのよ」

「……物凄い正論言うてるけど、ジブン、さっき『少しぐらい出すわよ』とか言うてなかったっけ?」

「それはソレ」

「さいでつか……。まあアスナさんが僕の事を子供やなくて一プレイヤーとして見てるって事の証明にもなりそうやし構わんで」

「アスナさんの性格からして僕みたいな子供からお金を巻き上げる訳もないから、きつと僕の事を単なるプレイヤーとして見てくれてるんやろ? いやあ、嬉しいわあ」

「うぐつ」

思わず呻いてしまったアスナをナッツはニツコリと笑いながら見つめた。その表情は嬉しさに満ちたモノであったが、もしココにアルゴかキリトが居たならば「あー、この表情は認められた事を喜んでるんじゃないやなくてアスナを苛めて楽しんでる表情だから」と看破した事だろう。残念な事に両者ともこの場には居らず、アスナの良心がジワジワと傷ついていく。ナッツは更に笑みを深める。

「いやあ、やっと認められたわ。コレで僕の事を血盟騎士団に勧誘する事もないやろ。僕は子供やなくて普通のプレイヤーなんやし」

「ナッツ、謝るから。謝るからもうやめて……」

「嫌やわあ、アスナさん。何を謝るんさ。僕は嬉しいんやで、今なら幾らでも仲介料を払えるぐらいに、いやあ嬉しいわあ」

「……………」

「ちよ、冗談やって、そこまで落ち込まんといてえさ。僕が悪かったって、な？」

「…………《エンチャントッド・タルト》」

「えっと、確か、この階層で売ってるケーキやな！ 幸運ボーナス付くらしいアレやな！ よっしゃ！ 僕が奢ったるで！」

「ほんとに!？」

「…………なんや年上の女の人ってこんな怖いんやなあ、勉強させてもらいましたわ…………」

「ほら、ナッツ行くわよ！ ずっと食べたくて手が出なかつたんだあ」
「さいでつか…………」

落ち込んだ様子を反転させて、満面の笑みを浮かべたアスナと逆転したように疲れたように息を吐き出したナッツ。年上の女の人は怖い、そう心に刻みつけて既に歩き出しているアスナを追った。

「んう〜！」

喜色を満足感へと変換しながら声を上げたアスナをナッツはぼんやりと頬杖を着きながら眺めていた。アスナに言われたのか常に目深に被っていたフードも外して萌黄色の髪と美少女の様な顔も露わにしている。

幸い、というべきか、ある意味当然の事なのだが、入り組んだ路地にひっそりと構えているレストランに客はそれほど入っていない。幾ら幸運ボーナスが付くと言っても時間に見れば短いと言える時間であるし、更に言えば攻略の為にレベリングをしてそれなりにコルを所持しているだろうアスナですらこの店に入るのを躊躇う程度に件のタルトは高いのだ。

「本当にいらないの？」

「まあ別に幸運ボーナス付けた所で、狩りに行くわけやないし…………」

「私だけ食べてるのも悪い気がするんだけど……」

「気にせんでエエよ」

困ったように笑うナッツは視線をアスナから机に置かれてタルトへと落とした。

タルト生地の皿に盛られたフルーツ達。それを輝かせる様に無色透明の蜜が掛けられ、そこそ魔法をかけられたタルトだった。因みに既に半分程ドコかへと消えている。

「それに、別にモノ食んでも死ぬわけやないし」

「それはちよつと極論過ぎじゃない？」

「水があればそれだけで人間生きていけるもんやって」

随分な極論にアスナは思わず眉を寄せた。ナッツはそんなアスナに首を傾げている。果たして自分は間違った事を言ったのだろうか、と思考して否定する。ナッツの言ったことは事実である。

アスナは暫し考え込むように口元に手を当てて瞼を閉じる。自分の中にふと湧き出したトンデモナイ疑問を否定して、ナッツを見た。至って普通の美少女であった。

「……ちなみに、一番最近は何を食べたの？」

「うーん……。キリトと狩りをしてる途中にドロップしたジャーキー？ バフの確認せなアカンかったし。毒は無し、筋力値にボーナス掛かったけど、上がりは微妙で時間は長かったかな。あ、因みにキリトと一緒に確認したけどステータスを参照した割合や無くて固定値っぽいから低階層やと有用やと思うで。まあ低階層の人らに配ってソコソコな安定レベルまで持ち上げて変に調子乗られても………つてどないしたん、です？」

つらつらとドロップ品であるジャーキーの効果の説明をしていたナッツを見ながらアスナは怒りを隠すように笑みを顔に貼り付ける。ヒクリと口角が動いてナッツが言葉を止めた。

アスナは笑みを浮かべながら恐る恐るナッツへと疑問をブツケてみる。

「……………もしもバフが確認済みだったら？」

「？ 別に食んでエエやろ。死なんし」

「……他には何も食べてないの?」

「レベリングで回復POTは飲んでたけど?」

「はあ……。」

すう——……ナアアアアアアツツ!!」

雷がナッツへと落ちた。

怒りを露わにしたアスナの叫びにビクリと背筋を動かして、縮こまったナッツは何を怒られているのか分からずに疑問を浮かべながらアスナを恐怖混じりで見た。

「アナタね! その筋力値にバフが掛かるジャーキーを食べたのは二週間も前でしょ! キリト君から話は聞いているのよ!」

「いや、だから食べんでも死なんつて——」

「食べなさい! じゃないと無理矢理にでも血盟騎士団に入れるわよ!!」

「それで血盟騎士団出されても——」

「わかったわね?」

「え、あ、ハイ……」

笑顔で凄んできたアスナに思わず肯定を示してしまったナッツは知人へと卸す筈だったジャーキーを一片噛った。HPバーの下に僅かながらのバフがアイコンとして表示された。

「はあ……いい? ナッツ」

「悪い言うても言うやん」

「何か?」

「ナンデモナイデース」

「定期的に食事をするのはコツチに居てもする事。集中力の低下などに繋がり、ソレは事故に繋がります」

「ふーん」

「ナッツが繰り返してるモブ狩りにも弊害が出る可能性があります。なので、ちゃんと食事をしましょう」

「はーい、アスナおねえちゃん」

アスナの話を手から左へと流してテキトーな受け答えをしているナッツは懲りていない。懲りるわけなどない。なんせ彼は悪い事を

していないのだから。

ナッツの「お姉ちゃん」発言に少しだけ胸を熱くしながらアスナは更に付け加える。

「食べたかどうか、ちゃんと私に報告すること」

「ええ……」

「いいわね？ 何を食べたのかもちゃんと報告するのよ？」

「なんやバフ効果とか知りたいんやったらアルゴさんにでも」

「報告する事、いいわね？」

「アツ、ハイ……」

また恐ろしく美しい笑顔を前にしてナッツは息を飲み込みながら返事をした。

その返事に満足したのかアスナは何かに気付いたようでコンソールを動かして、満足そうに頷いた。

「それじゃあ、リズの——鍛冶屋の所に行きましょうか」

「え？ タルトは……って無いし」

「結構前から無かったわよ？」

「いや、あれ？ ……まあえっか」

これ以上の追及は止めておこう。それこそ魔法に掛かったと思っ
ていけばいいだろう。

ナッツは考えるのを諦めて、溜め息を吐き出した。噛み締めた
ジャーキーの味が口の中に広がった。



「ようこそ、リズベット武具店へ」

不格好に笑顔を浮かべた少女を見て、フードを被っていたナッツは隣に居たアスナを少し見上げた。アスナは顔を綻ばせてナッツへと顔を向けて、まるで意見を求めているようである。

ふむ、と一つ溢してからナッツは改めて少女——リズベットへと視線を向けた。

「なんや……笑い方が下手やなあ」

「がはっ」

急所に当たった。心に深く突き刺さった容赦のない一撃だった。リズベツトは後にそう語るだろう。きつとその横では「初対面やし、気いは使つかうてんで？」とナッツが呟くのだろう。

それは置いといて
閑話休題。

乾いた笑みを浮かべていたアスナに睨みを効かせたりズベツトはどうにか持ち直して、外套で身体を、フードで顔も隠した存在へと視線を向ける。

ハツキリと言えれば怪しい風貌だった。ついでに偏見でもあるが、擦り切れた外套のお陰でそれほどお金を持っているとも思えなかった。客には平等であるけれど、諸事情により多額のコルを必要としているリズベツトとしては相手をしたくない客に間違いはない。それこそ他ならぬお得意様であり、友人でもあるアスナからの頼みであるから、仕方なく、仕方なく相手をするのである。

そもそも第一声で「笑い方が下手」と言ってくる相手にいい顔をする理由をリズベツトは持ち合わせていなかった。

「それで。アナタが私を探してたんだって？」

「探してたんは鍛冶屋であって、笑顔が下手な人じゃないんやけどなあ」

「ねえアスナ、断ってもいい？」

「ナッツ。ほら、私の顔を立てると思って」

「そもそも、相手に頼むつてのにフードを被ってるのも気に食わないわね」

「……………」

びくり、とナッツの身体が動いた。その反応をどう捉えたのか、リズベツトは意地悪く笑みを浮かべて、アスナはドコか遠い目をしている。売り言葉に買い言葉、アスナは突如勃発した二人の争いを止める術を持ち合わせていない。

何かを諦めた様に、ナッツはフードを外した。流れる萌黄色の髪。黒色のパツチリと開いた瞳。整った顔立ち。隣にいるアスナと遜色

のない美少女がソコに居た。

思わず息を飲み込んだリズベットにナッツは微笑みを浮かべる。年齢相応である無邪気な笑みではなく、ドコか重ねられた年齢を感じさせる微笑み。

「初めまして、ナッツと言います。少し試すような真似をして申し訳ありません」

フードを被っていた時に喋っていた声であるが、それは関西弁ではなく、標準語に準じた発音であった。

微笑み、謝罪、明らかに自分よりも年下であろう少女がソレをして憤る程リズベットは子供ではない。自身への罪悪感、そして予想されるナッツがこの世界で受けてきた被害。他人を警戒しても仕方ないだろう。

リズベットはいつの間にか差し出されていたナッツの手に気付き、手を伸ばす。綺麗な手だ、と思いつながら伸ばした手は虚空を握った。

「ま、まあ、あたしも悪かつ——」

「コレが笑顔って言うもんやで」

ヒョイと手を退けたナッツは変わらぬ関西弁で言つてのけた。滑稽にも手を伸ばしたリズベットを鼻で笑うおまけ付きである。

不格好な笑顔を浮かべて何かを握ろうとしていたリズベットはそのままナッツへと顔を向けた。まるで錆びついたブリキの様な音が鳴りそうな動きであったが、どうにか動かした。

ナッツは先程の微笑みなどではなく、意地悪く歯を見せながら笑っている。

「改めて、ナッツ言います。よろしゅうに」

「はあ……リズベットよ。あんまりよろしくしたくはないけど」

「ちよつとリズ」

「まあこんな格好やし、さっきのアレあるし当然やな。で、武器のインゴット化と新しい武器を作つてほしいんやけど」

「じゃあ武器を出してちょうだい」

「なんや、コッチは客やで。もうちよい愛想良くしてもエエんちゃう？」

「スイマセンネ！ 笑顔も下手なもんで！」

苛立ちを隠そうともせず、リズベツトはナッツが後ろ腰から鞘ごと取り出した剣を右手で掴む。鍛冶屋兼戦槌^{メイスナー}使いとして筋力パラメータを上げたリズベツトに少しばかり重さを感じさせる程度の曲剣。

鞘から引き抜けば反った刃が光を照り返し、そこそこの業物である事がわかる。この美少女が持っている——つまり少し下の階層である事を考えれば、と言う話である。当然、現在居る階層を始めとする先の階層を考えれば不足すぎる剣だった。

指先でホップアップメニューを叩き、曲剣の情報を表示させて、リズベツトは眉間をこれでもかと顰めた。

「ナニコレ」

「何って、普通の曲剣やけど？」

「普通の曲剣って言うのは強化を全部《丈夫さ》に振ってないわよ！」

「いやあ、長い事外に籠もるからつい耐久値頼ってしまうんやって」

「……ナッツ？」

「ちよ、ちよつと待ってアスナさん。ほら、えっと、僕の戦い方からしてしゃーないんやって」

「どんな戦い方してれば《丈夫さ》に全部振るのよ」

「……武器防御モドキ？」

首をコテンと傾げたナッツに溜め息を吐き出したアスナとリズベツト。剣を見て、なんとなく目の前の美少女が奇特な存在であることを理解したりズベツトは曲剣を鞘へと収める。

鞘に収めて、はたと気付く。外に籠もる？

もう一度美少女を見る。外套から覗き見える装備、この曲剣。掠れた外套。いやいや、こんな子供が最前線に居る訳が無い。

「あー、アスナ？ もしかしてナッツって」

「こんな武器で最前線を張ってるプレイヤーよ」

「はあ!？」

「いややわあ、そんな尊敬の眼差しで見られると照れるで」「呆れてんのよ！」

「まあ僕はダメージディーラーちゃうし。武器防御からの反撃と攻撃
捌く変則タンクやから最前線張れてるんよ」

「ああ、だから《丈夫さ》にね……」

「こそ」

「——つて納得できるかアア!!」

鋭いツツコミがナッツへと向けられた。実に当然の決着である。



「ハハハハッ、なるほどな。それでナッツはオレの店に来たって訳
か」

「笑い事ちゃうで、エギルさん」

ぶすう、と唇を尖らせたナッツは目の前に居た浅黒い巨漢——エギ
ルに不満を漏らした。

噛んでいたジャーキーを飲み込んで、律儀にアスナへとメッセー
ジを送りつけたナッツはカウンターに体重を預けてぐったりとしてい
る。

「素材集めする、言うてたのになんで僕は留守番やねん。僕の剣やで
？」

「そりゃあナッツが何日も迷宮区で籠もる計画だったからだろ？」

「さすがの僕も店売りの武器だけで何日も籠もるんは無理やって。武
器が無くなる」

「武器があつたらやるつもりだったら一緒だな」

「しかもアルゴさんまであっちの味方やし」

「因みにオレもだ」

「敵だらげやん……」

裏切り者お、と力なく唸ったナッツに笑うエギル。あの血盟騎士団
のアスナに「ナッツを見張っててください」と言われた訳ではなく、こ
うして愚痴りに来たナッツの話を聞いて、エギルは極々一般的な判断
を下した。

目の前の少女が無茶をする事をエギルは知っていたし、咎める事も

した。けれどエギルの静止など聞く訳もなく、ナッツは生活を変える事もなかった。コレを始まりとして、少しは無茶をやめてくれれば——とエギルは考えたが、ドコか諦めもあるのだ。

「ああ、そうそう。今回のドロップ品な」

「おう。毎度どうも」

慣れた様に溜め込んだドロップ品をトレード画面に入れていくナッツ。ジャーキーを一度入れて、戻して、全てのドロップ品を入れた。

チラリと映り込んだジャーキーに苦笑しながらエギルは回復POTなどのナッツが消耗するモノを同じく入れる。

「しかし、イイのかナッツ？ 毎回言うが、オレが一方的に得してるぞ」

「毎回言うてるけど。僕は安価で回復POT買ってるし、武器も買える。コレを一個の店でやってもらってるし、何よりドロップ品分のお金も貰ってるし」

「まあお前がイイならいいだが」

「それも毎回聞いとるよ」

実際にアツサリとしたやり取りをしながらナッツは武器を装備して、立ち上がり——座って唸る。「うなあ……」と悶えるナッツにエギルは苦笑した。常のやり取りが終わればナッツは早々に消えるのだが、今日はそうはいかない。

ココから出ていけばエギルはアツサリとアルゴへと報告をして、アルゴはアスナへと報告して、ナッツは説教を受けるのだ。ナッツに逃げ場などない。

「ま、今日は諦める事だな」

「ちよつとだけ、すぐ近くで狩りするだけやから」

「ダメだろ」

「ぶう……」

頬を膨らませて不満を漏らしたナッツは椅子をワザとらしくカタンカタン鳴らす。現実世界からの経験を含めて慣れているエギルは笑ってソレを流すだけである。

不貞腐れながら口が寂しくなったのか、ストレージから取り出したジャーキーを嚙り、ナッツは溜め息を吐き出した。

「なんだ、乾物が気に入ったのか？」

「あー……まあ、そんな所やな」

「なら今度から一緒に仕入れといてやるよ」

「それはありがたいこつて……」

「まあナッツはお得意様第一号だからな」

アスナとのやり取りをエギルに説明すべきか少し迷ったナッツは言う事をやめた。エギルに説明すれば恐らくこの屈強な悪役レスラーの様な顔で説教されるに違いないのだから。

新たに自分のストレージを圧迫するであろうソレを考えて、ナッツは断ろうとも考えたが、エギルの断らせない一言によつて封殺された。

” お得意様第一号 ” という称号はエギルが商売紛いの事を始めた最初の大口取引がナッツ開始だったことが起因する。ドロップ品を貯めに貯め込んだナッツがフリリと現れて、安価過ぎる取引をしたのが始まりである。どうしてか商人側が取引金額を上げる、という不思議な取引であつたけれど、それが始まりである。

コルをそれほど必要としない——それこそ自分で稼いだ分で遣り繰り出来ていたナッツは金額を上げられた所で興味もなく、エギルはその人情から金額を上げるしかなかった。結局、偶然やってきたキリトが事情を聞いて回復POTなどの消耗品を受け渡す、という流れが完成し、ソレは今も続いている。

「それで、どんな武器になる予定なんだ？」

「知らんよ。アスナさんも監修してるからソコソコに耐久値はあるやろうけど……箆もれる日数減るんは嫌やなあ」

「目的が変わってないか？」

変な所を心配しているナッツを見てエギルは呆れながら溜め息を吐き出した。

第6話

——夏樹。アナタは私の夢なの。

母と呼ぶべき女の声が聞こえた。その声に込められていた感情を夏樹は——ナッツは知り得ない。

詰まった呼吸をそのままにナッツは瞼をゆつくりと上げた。瞳だけを動かしHPバーと時間を確認し、未だにココが仮想空間である事を再三理解する。

投げナイフを震える手で握り直し、索敵スキルを発動させてから、ナイフをストレージへと戻し、ようやく呼吸を再開する。

何度か深く呼吸を繰り返して、自分を呼ぶ声を塗りつぶしていく。ソレに執着すれば、きつとナッツは終わってしまう。

座ったまま膝を抱き寄せて、身を縮こまらせる。その状態で思考も何もせずに、ただ虚ろな瞳を何処かへと向けた。

空気をゆつくりと吸い込み、少しだけ身体の中で留めて、細く吐き出していく。

吸い込み、留めて、吐き出す。

何度か呼吸を意図して繰り返し、ナッツは空を見上げた。虚ろな瞳に暁色の空が映り込み、ナッツは保存するようにゆつくりと瞼を閉じた。

身を抱きしめていた腕の震えはいつの間にか止まっていた。大きく、わざとらしく溜め息を吐き出したナッツは新しくなった褪せた茶褐色の外套を撫でる。

「新調したから寝心地がよかつたんやな」

そう誰かに言い聞かせるように嘯いたナッツは後ろ腰に差した使い心地のいい曲剣の柄を撫でて、少しだけ顔を緩める。

フレイヤーマイド
リズベツト作となつたナッツの曲剣——《フォレストキール》。武骨なまでに精錬された反つた刃。刃とは対象に意匠の凝つた鍰。柄には深緑の飾り布が舞う。

最初にソレを見たナッツは眉間を寄せた。まるで自分の望んでいた武器では無かつたからだ。それでもあの奇特な曲剣の名残を受け

継いだソレを捨てるつもりも無く、受け取り、簡単にリズベットとアスナに礼を言ってから日常へと戻った。

戻ってから、敵と戦うにつれてナッツの顔は驚きと笑みに染まった。

振りの速さ、鋭さ——そんなモノはナッツにとってオマケに過ぎない。受け流しによる耐久値の損減が驚くほどに減った。思わず近くに居た敵Mob達を《威嚇^{ハウル}》で呼び出して一斉に相手をする程嬉しかった。

性能に満足すれば、無駄だと思っていた鏢にも飾り布も魅力的に感じる。店売りの武器を使い潰す事を止める事はないが、ソレが余計に《フォレストキール》の魅力を底なしにした。

「耐久値は余裕やし、あと四日は籠もれるかなあ」

ニヤケ顔をフードで隠しながらナッツは立ち上がる。ストレージから取り出したジャーキーを噛みながら、外套の乱れを直して、感覚を確かめるように一歩踏み出した。

足の震えは、既に止まっていた。



50層主街区《アルゲート》。そこに店を構える巨漢、エギルはチラリと自身の店の隅っこを見た。

ソコには褪せた茶褐色の塊があった。

何かを言うでもなく、ただ黙々とジャーキーを噛りながら目と指を動かしている茶褐色の塊は視線を感じたのかフードを被った頭を少しだけあげた。

「なんや？」

「あー、いや、なんでもねえ」

フードの奥から覗く黒い瞳は疑問を浮かべながら小首を傾げて、また指と目を動かす作業へと没頭し始める。エギルは茶褐色の塊——ナッツを珍しいモノを見るように暫し眺めた後、普段の買い取り業へと意識を戻した。

買取業を始めて数時間程。意識の中にあつたエギルは妙な感覚に陥つた。茶褐色の塊という珍しいモノが店の隅であろうとソコに在るのだ。けれど、そこに誰も視線が向かない。まるでソコには何も無いように。

時折モソリと動くナッツを尻目にエギルは業務へと没頭する。

在る。けれど居ない。誰もその存在を知りはしない。エギルは頭の端っこでナッツがどうして野宿をし続ける事が出来るのかを理解した。

アレは異常だ。単なる隠蔽スキルで出来るソレではない。もしくは看破スキルが低い自分と客だからこそ、ナッツの存在を気取ることが出来ないのか。或いは新しくなっているあの褪せた茶褐色の外套がそうさせているのか。

どちらにせよ、この幽霊じみた存在の前に水(のような液体)が入つたグラスを置いておく。数秒ほどしてソレに気付いたのか、茶褐色の塊はナッツへと成り、ヒラヒラと手を振って感謝を伝えた。

「うーっす、来たぞ」

「客じゃないやつに《いらっしやいませ》は言わん」

エギルのムクレ声と良く聞く声でナッツはようやつと意識をメッセージ達から店へと移した。店主であるエギルが客に頭を下げて閉店を促し、黒い剣士は肩を竦めて、白い細剣使いは申し訳なさそうに状況を見ていた。

ナッツは眉間を寄せてから小さく息を吐き出し、メッセージのやり取りを一時中断する。

「ナッツ、お前はとうすんだ?」

「ん、話だけは聞くつもりやで」

「ナッツ!」

「お前、居たのか……」

「キリトの看破スキルも僕の隠蔽スキルから見れば形無しやね」

フードを外し、ニシシと歯を見せて笑うナッツに「隠蔽スキルまで使ってたのかよ」とキリトは呆れながらボヤキ、エギルはどこか納得したように頷く。

「それで、ナッツはどうしてエギルさんのお店に？」

「そりゃあ雑貨店やねんから、買取と販売頼みに決まってるやん。他にこんな辛気臭い所来るかいな」

「おい、ナッツ。数時間も居たクセによく言うな」

「なんや、今スグ借金取り立ててもエエンやで」

「辛気臭い場所だがゆっくりしていつてくれ」

「……エギル、お前……」

「言うな。言うんじゃないキリト」

ニツコリと笑ったナッツに対して青い顔をしながらエギルは手の平を返した。そんなエギルをトンデモナイものを見るようにジト目になったキリトの視線から逃げるようにエギルは顔を逸した。

「エギルさんも借金をしてたのね……」

「も、つて事はアスナもなのか……」

「私じゃないわよ！ 知り合いの鍛冶屋がね……」

「商人連中はナッツに頭が上がんねえんだよ」

「なんや二人とも、僕が悪徳業者みたいに言いはって」

口をへの字にして不満を漏らしたナッツはキリトに助けを求めるように視線を飛ばす。キリトはソレを敢えて無視してジト目を返した。

どこか遠い目をしているアスナとエギルを前にしてナッツが「悪徳業者ではない」などとキリトは言えなかった。知っているナッツの性格を踏まえても「悪徳業者」である方が説得力もあった。

そんなキリトの意思を感じたのか、ナッツは大きく溜め息を吐き出して不貞腐れたように唇を尖らせた。

「別にお金要るう言うから貸しただけやのに、なんでこないに言われなアカンねん」

「借りてるオレが言うのもなんだが、金額がオカシイんだよ」

「なんでや。要るう言うから貸してんのに」

「……因みにどの位なんだ？」

「んう？ ……前言うてた持ち金あるやん」

「ああ、狩りの途中の……まさか半分以上渡してるのか」

「今の財布はすっからかんやな」

「はあ!? バツカだろお前!!」

「失礼なやつちやなあ……コレでも攻略に尽力してるんやから文句は言わんといてえさ」

キリトの怒りをさも不本意そうに受け取ったナッツはぶうぶうと唸った。職人用、商人用の店舗を四軒程纏め買い出来そうだった金額が今は無いと言われればキリトの言葉も尤もである。

ナッツからしてみれば使いもしないコルを一括で消費出来、雑貨店や職人達に恩を売ることが出来る。もつと言えばナッツはコルに関してそれほど価値を見出してはいない。ある種の貯蓄癖のあるナッツからすれば渡りに船であったことは間違いはない。

加えて言えば、あの商人や職人達の何とも言えない、子供からコルを受け取る、という罪悪感と屈辱感、そして店を持てるという達成感が入り混じった表情は堪らなくステキだった。ナッツはそう記憶している。

故にナッツは本当にそれほど気にしてはいない。脅し文句として『借金』という言葉を使うだけであって、実際取り立てるつもりもない。そもそも割引などの便宜を図ってもらっている時点でナッツとしては満足なのだ。

「まあ僕の話はエエンやって。そっちの話聞かせてえさ」

「……………ナッツ、この話は——」

「——57層の《マーテン》で起こった事件について、やる？」

「……………なんで知ってるんだよ」

「アルゴさんも知らん僕だけの情報網が最近出来たから。キリト達から見た状況も聞きたいし、聞かせてな」

「はあ……………」

店舗の二階。事件のあらましを聞いたエギルは目を鋭く細めて、唸りながら口を開いた。

「圏内でHPはゼロになった、だとお？」

「デュエルやないんよね？」

「あの状況で勝利者宣言窓を誰も見つけられないとは思えないし、今はそう考えるべきだと思う」

「ふーん……………」

キリトの言葉を飲み込みながらナッツは考えるように口元に手を置く。

現状、圏内で殺人を犯すとなるとデュエルによる《完全決着モード》ぐらいしかない。催眠PKに関しててもデュエルによる殺人だ。相手が受諾しなければ殺人を犯せない。ソレが圏内のルールでもある。催眠PKに関しては言及しないが。

あれだけフェアである茅場晶彦がそういった類いの武器、或いはスキルを用意するとは思えない。そんなモノはバグに等しい。

だからこそ、ナッツはニタリと笑みを深め、隠すように口元を自然に隠した。

「まあ実際に見てないとなんも言えんわ」

——実に面白い。

言葉ではアツサリと思考を捨てたが内心では様々な可能性を考えている。もしも、もしもルールが破られていたならばナッツは思い直しをしなくてはいけない。

この世界で唯一ルールを破る権利を持っているとするならば、茅場晶彦に他ならず。ここまで生きてきた中で言える事は茅場晶彦は神様に成りたい人間ではない。だからこそ、ルールを破る事は無い。

故に、ルールを破る事が出来るのなら——ソレはこのゲーム現実にバグが生じているということに他ならない。

「そこで、コイツだ」

「店売りのロープやな」

「鑑定も無しに言うのか」

「店売りに関しては全部覚えとるよ。コレが店売りを模した類似品ならわからんけど……」

「いや、NPCシヨップで売ってる汎用品だ」

「ほら見いさ。伊達と酔狂で店売りで戦ってな——」

「——ナッツ？」

「ちやうねんアスナさん。今はコイツもあるし前よりは頻度は減ってるんで？ 店売りは耐久値に難があってやなあ」

底冷えするような声にナッツはエギルの巨軀に隠れた。ニコリと笑っている筈なのに恐ろしいアスナはその怒りを隠す訳もなく、ナッツに「あとで説教」と言い渡し話を進めようとキリトへと視線を移した。

キリトはハツとしながら次の証拠である槍を取り出した。ドンヨリとした空気を纏いながらナッツもエギルの影からソレを見た。

長さ一メートル半。グリップ三十センチ。柄えに逆棘。穂先十五センチ。抜けにくく、貫通継続ダメージを与える黒い槍。

「……貫通継続ダメージなあ」

「ああ」

「この槍を抜くまでもなく……なあ」

ナッツは少しばかりの疑問を口の中に留めて、飲み込んだ。死ぬだけだと言うのに、何を恐れて槍を抜けなかったのか、ナッツにはわからない。

ただ生きるのを止めるだけ。それだけの話だ。意思が無くなり、動く事さえ億劫になり、考える事もない肉塊になる。

「……………」

「ナッツ？ 大丈夫？」

「あー、いや、ハハハ。スンマセン。ちよつと日頃の疲れが——」

「ナッツ……………」

「あ、いや、ちよい待ってアスナさん。無茶はしとらんよって、ホンマやで？ ちやあんとご飯のメッセージも送ってるやん」

「乾物ばかりはご飯とは言いません！」

「ヒツ…………キリトお……………」

「それでエギル。どうだ？」

「ん、おお」

「無視すんなや！」

「ナアツツう？」

「おおう!? ぼ、僕は別口で調査するよって、なんか分かりそうやったら知らせて！」

「あ、こちら!! 待ちなさい!!」

逃げるように扉から飛び出したナツツは後ろから聞こえるアスナの声を無視してフードを被る。

目的の人物へとメッセージを送り、ナツツは息を吐き出し、いつものように空を見上げる。光を失ったような黒い瞳に青い空が映り込み、ソレを閉じ込めるようにナツツは瞼を閉じた。

「死ぬだけ……そう死んでるだけ……。死ぬのは怖くない……。死ぬ事を受け入れる。僕は居ない。居ないから死なない。居ないから死んでいる。僕は死んでいる。僕は生きていない……。僕は死人だ。」

だから——僕は僕やなく、ナツツや」



「なんや、呼ばれたんは《神聖剣》さんもかいな」

「私もかの《落下星》が呼ばれてるのは驚きだよ」

「コツチはヒースクリフさんが冗談言えたんも驚きやわ」

暗赤色のローブ、ホワイトブロンドの長髪を束ねて流した長身のプレイヤーと褪せた茶褐色の外套、フードまで目深に被った低身長プレイヤーが《アルゲート》の転移門に現れた。

互いに視線を合わす事もなく交わされる会話。決して二人の仲が悪いわけではない。ただ単純な冗談の言い合いである。尤も、二つ名とも呼べる《落下星》を嫌っているのはナツツだけであるが。

《神聖剣》ヒースクリフ。血盟騎士団団長であり、ユニークスキル

《神聖剣》を得たトッププレイヤー。そんな存在が《アルゲート》の転移門から現れて辺りは少しばかり騒がしくなる。

そんな騒がしさを鬱陶しく思うナッツはフードを目深に被り隠れようとするが、残念な事にヒースクリフという注目の的がある事での行為は無駄に終わる。

《落下星》。そう称されたナッツは口をへの字に曲げながらヒースクリフに対して咎めるように視線を送り嫌そうに息を吐き出した。

《落下星》、そもそもは《流星》という二つ名が実しやかに囁かれていた。カウンターを決める剣閃は流星の軌跡の如く、小さな存在は落ちてきた星——希望。いつの間にか消えている姿も相まっていつしかナッツは《流星》と呼ばれるようになっていた。心底その二つ名を嫌そうにしていたナッツはアルゴに頼み込んで噂と情報の消し込みを試みたが、結果はナッツの名前に掛かった《落下星》へと変質しただけである。

「ヒースクリフさんが居ると注目されるから嫌やわあ」

「私一人ではこれほど注目を集めないよ」

「常時プレイヤーに威嚇^{ハウル}使ってるような人が何言うてるんさ」

「残念ながらプレイヤーに威嚇スキルは適応されない」

「じゃあカリスマススキルやな。羨ましいこって」

「君程ではないよ、ナッツ君」

「……情報が早いなあ」

ヒースクリフからの視線を逃れるようにナッツはフードの先を掴んで顔を隠す。その様子を息を吐き出すように笑ったヒースクリフは人の波の向こうに目的の存在を発見する。

気楽に片手を上げて《黒の剣士》がヒースクリフへと挨拶を交わし、その隣ではやや引き攣った表情で滑るように歩いてきたヒースクリフを見ている《閃光》。見る人が見れば「一体どこを攻略するんだ？」という疑問が出て来るであろう場面。

残念な事に集まる餌はキリトの昼飯奢る宣言だったりするのだが……まあ知らなければ問題も無いだろう。

「突然のお呼び立て、申し訳ありません団長！ このバ……いえ、この

者がどうしてもと言ってきかないものですから……」

「何、ちょうど昼食にしようと思っていた所だ」

「バカ、言われてんでえ」

「うるせえよ、無鉄砲」

「ああん!? やるんか考え無し!」

「ああ、ヤツてやるよ! 一撃決着だ……」

「なんでアナタ達って人は……」

「ふむ、《黒の剣士》と《落下星》のデュエルか……」

額に手を当てて呆れ返るアスナの隣には今から起こりそうなその戦闘を予想して興味深そうに頷くヒースクリフ。互いに幾らか距離を開けて、相手を見るキリトとナッツ。

血盟騎士団のナンバー1、2。ソロとして有名なキリトとナッツ。その四人が揃っている時点で周囲は四人を囲むように円形を作り、事の成り行きを見て、今から起こるであろう戦闘に心を攪られる。

「おい、ナッツ。逃げるなら今の内だぜ」

「ハッ、言うてる。いい加減にキリトの攻撃ぐらい捌けるんやで」

ナッツは目の前に現れたホップアップを勢い良く叩き、右手で後ろ腰に差した曲剣を引き抜く。逆手で握られたソレを器用に回転させて順手へと持ち直した。カウントダウンが進む中、キリトはその剣を見て目を見開く。

「なっ!? 新しい剣かよ!」

「ふふん! ええやろお、エエやろお!」

「どこでドロップしたんだよ! 最近俺とMob狩りしてないと思つたらそういう事かよ!」

「残念でしたあ! コレはモンスタードロップやなくてプレイヤーメイドですよ!」

「マジかよ……お前だけは裏切らないと思つてたのに!」

「冗談言いいき! 僕はキリトみたいにコミュ障やないんですう!」

「っバツ!? 俺はコミュ障じゃねえし!」

「人の目エ見て言うんやで!」

カウントがゼロに成り二人同時に動き出す。

黒の直剣《エリユシデータ》が振り下ろされ、武骨な曲剣《フォレストキール》がソレを受け止める。僅か金属音が響き、ソレは何かを擦り合わせるような音へと変化する。振り下ろされきった《エリユシデータ》の軌跡を撫でるように曲剣が振り上げられた。

身を後ろに反らせてその一閃を避けたキリトはすぐさま剣を横に振った。不格好な体勢の攻撃であったが、攻撃ではなく防御なのだから問題もない。突き伸ばされた曲剣が弾かれてナッツは眉を寄せてキリトから数歩離れる。

体勢を立て直したキリトは息を吐き出して剣を握り直す。ナッツも外套の前を少し開けて動きやすく調整する。

二人とも言葉すら交わさず、相手だけを視界に入れる。いや、視界には相手だけしか居ない。周囲の歓声、感嘆。視線。そんなものは不必要だと言わんばかりに相手へと意識を集中させる。

剣戟の音。足の動き。視線。体捌き。ソードスキルの予備動作。どれも見落とす事など出来ない。

仮にも相手は何度も戦った事のある相手だ。だからこそ知っている。

——負けたら微妙なご飯食べさせられる……!!

——負けたら高い飯を奢らされる!

戦う理由など些細なものばかりだ。主に食事とMob狩りの対象。他には小さな言い合いから発展したモノもある。白星はキリトの方が多い。カウンターを主にしているナッツからすれば受け切れない攻撃はどうしようも出来ないのだ。

けれど、だからと言って負けを宣言するのは間違っている。

「今回は勝たせてもらおうで!」

「今回も勝たせてもらおうぜ!」

二人には負けれない理由がある。

キリト曰く胡散臭いNPCが営業している薄暗い店の中。ぐつてりと頬を机に乗せたナッツがボヤク。

「新スキルは卑怯やろ」

「新武器に言われたくねえよ」

萌黄色の髪を揺らしながらナッツは溜め息を吐き出して割り切る。頭の中で先程の重単発攻撃スキル《ヴオーパル・ストライク》を繰り返し思い出しながら対処方法を考えていく。

結果的に最適な解答も見付からずナッツは力なく「うなあ」と唸った。

そんなナッツを尻目に見ながらアスナは疲れたように呟く。

「ナッツの状態も相まって、なんだか残念会みたいね」

「気のせい気のせい。それじゃ、忙しい団長殿の為にさっそく本題に入ろうぜ」

圏内で起こった事件のあらましを聞いたヒースクリフはその表情をそれほど変える事もなく、淡々と情報を聞いていた。

「なるほど……ではまず、キリト君の推測から聞こうじゃないか」

「大まかに言って三つ」

キリトは頬杖を付いていた手を外して指を三つ立てる。

「一つ、正当な圏内デュエルによるもの。二つ目は既知の手段によるシステムの抜け道。三つ目は……アンチクリミナルコードを無視出来るスキル、或いはアイテムの可能性」

「三つ目の可能性は除外してよい」

即座に言い切ったヒースクリフにナッツは目を細める。細めた目はスグに不貞腐れたような表情へと変化して誰も見ては居なかったが。

「まあヒースクリフさんのユニークを除いて、公正さを欠くようなゲームでもないやろ」

「随分な事を言うね、ナッツ君」

「ユニークスキルが出現せえへん子供の我侬やと思って聞き流してください」

肩を竦めたナッツは不機嫌を表すように氷水の氷を口に含んで噛

み砕こうとして、固まってから少し不貞腐れて口内で氷を弄ぶ。

「何にしろ、今の段階で三つ目の可能性を云々は時間の無駄だわ。確認しようがないもの。てことで……仮説その一、デュエルによるPKから検討しましょ」

「よからう。……しかし、料理が出て来るのが遅いな。この店は」

「俺の知る限り、あのマスターがアインクラッドで一番やる気のないNPCだね」

「だから僕がデュエルで勝とうとしたんやって……」

「お前に負けると俺の財布の中身が無くなるんだよ」

「近場の店入るだけやん」

「あのな、主街区で一番近い利便性の高い店は値段も相応なんだよ」

「というか二人共そんな事何も言わずに理解してたのね」

「何回もしてる事やし」

「……………ああ、だからたまに普通の食事と変な食事がメッセージに送られて来てたのね」

「どうしてアスナにこんな目で見られなきゃいけないんですかね……………」

「自業自得やろ」

「ナッツもね」

「ウツ」とキリトとナッツは言葉を詰まらせてたじろぐ。ヒースクリフはそんな二人を眺めながら氷水を一口飲んだ。

「コホンと小さく咳をしたナッツは仮説の一つを口にする。

「それで、デュエルの可能性やけど——たぶん無いと思うで」「やっぱり結果表示が無かったからか？」

「デュエルでの勝敗はさつきみたいに二人の丁度間に出るのが普通やし。何メートルかは知らんけど、離れすぎてたら両方の目の前にウインドウが出るんよ」

「よく知ってるな、ナッツ」

「そりゃあ試したから」

ケロリと事実を言つてのけたナッツは付け加える様に言葉を並べる。

「相手が死人である場合も一緒。離れ過ぎてたらポリゴン片の前にウインドウが出てくる」

「……………ナッツ、どうしてそんな事を知ってるの？」

「見たことあるから」

「ふーん……………で済まないわよ！」

「ええ…………。別にデュエルでの殺人なんて珍しくもないやろ」

「ソレを見てるのがオカシイのよ！ どうして危険な事をするかなあ……………」

「危険はないよ。相手さんは低レベルやったし」

その時は、という言葉だけナッツは飲み込んだ。

心配しているアスナを適当になだめたナッツはヒースクリフへと視線を送る。

「ナッツ君の言っている事は正しい。十メートル程離れば両者の至近に表示が出る」

「だから、ウインドウが無かったならデュエルやない。もしもデュエルやったら、システムの矛盾やからバグやな。ゲームマスターの職務怠慢や」

ケラケラと笑いながらそう言っただけのナッツ。ゲームマスター——茅場晶彦を咎めるような言葉であるが、事実は真逆である。茅場晶彦だからこそ、この地獄を作り上げた茅場博士だからこそ、システムの矛盾はない、バグはない。故にデュエルである可能性が無いのだ。

「二つ目に関しても無理かも知らんなあ」

「なんでだよ」

「貫通継続ダメージに関して色々実験もしたけど、圏内に入ったらダメージは止まるんやで」

「そうだな」

「というか、どうしてナッツはそんな事も知ってるの？」

「実験したからに決まってるやん。百孝は一行にしかず言うし。嘘の情報吐くぐらいなら何も言わんよ」

「……………ハア」

「なんで溜め息吐かれなアカンねん……」

「ナッツは後でお説教するから」

「なんでやねん……」

横暴だー、と言うナッツを無視しながらアスナは言葉を進める。

「例えば、回廊結晶を圏内に設定して、圏外からテレポートしてくる……それでもダメージは」

「止まるとも」

「止まる」

ヒースクリフとナッツの言葉が重なる。ナッツはチラリとヒースクリフへと視線を投げかけた後に口を開く。

「ソレも実験済みや。睡眠PKが起こってからアルゴさんを含めて情報扱ってる人らと一緒に色々実験したけど、圏内でHPゲージが無くなる、或いは損傷する事はない」

「ソレを先に言っておけばアスナの説教も回避出来たんじゃないか……？」

「殺人見たんは別口やからどーせ説教や」

「わかってるなら言わなきゃいいだろ」

「……………はー!」

さも今気付いたように顔を上げたナッツ。けれども手遅れだと言うことが判明してぐつてりと椅子に体重を預けた。アスナの笑顔に負けた訳ではない。

ナッツは顔をのそりと上げてキリトとアスナを見る。

「そういえば《生命の碑》は確認したんよね?」

「ああ。カインズさんは確かに死んでる」

「……………ふーん。ま、エエわ」

「どうかしたの?」

「なんもないよ。ただわからなくて一旦考えるんやめただけ」

アツサリとそう言い切ったナッツは「ラーメン……も来たし」とどこか言い淀みながら付け加えた。

やる気のないNPCマスターがゴトリと置いた白いドンブリ四つ。ソレを見たアスナとヒースクリフは言い淀んだナッツの言葉を理解

した。

コレは食べ物ではあるが、ラーメンではない。

茅場晶彦の名言が、変化してどうしてか二人の脳裏に走った。

キリトとアスナと別れてナッツとヒースクリフは迷路のような街路を無言で歩く。

「それで、私に話かね。ナッツ君」

「なんや、話聞いてくれるんや」

「残念ながら装備部との打ち合わせがあるから君個人での話は聞けない」

「僕個人やったらな」

嫌そうに溜め息を吐き出したナッツはヒースクリフの前に立つ。フードから覗き見える瞳が真っ直ぐにヒースクリフを貫いた。

「——ギルド”クラウン・ブラウニー”の長である僕が血盟騎士団団長、ヒースクリフに話がある。コレならエエ言い訳にもなるやろ」

「そこまで言われては仕方がない。私も人気になったものだ」

「なんで嬉しそうやねん……」

心底嫌そうに言葉を溢したナッツは溜め息を吐き出して、頭を少し抱える。

「私に話したい事とは、先程の圈内事件に関して」

「やない。あんなモンもうどうでもエエ」

「ほう？」

「《生命の碑》での確認。カインズ——K a i n sは去年に死んでるプレイヤーや。貫通継続ダメージが死因、こんかいの事件を名付けるなら圈内事件言うよりも模倣事件言う方がエエやろ」

「……なるほど。それで、私に話とは？」

「大した事やない。」

茅場晶彦について、聞きたい事がある」

第7話

茶褐色の外套を纏った子供は空を見上げる。流れる雲、僅かに陰りを帯びた太陽、夕焼けに染まる世界。暫くすれば夜の帳が下りるであろう時間だが子供は——ナッツは主街区の外に居た。所謂、圏外と呼べる場所であり、死ぬ可能性が高いと言える場所でもある。

夜になれば敵Mobの出現率も上がり、同時に犯罪者^{オレンジ}プレイヤーも夜の影に隠れる事も出来る。

そんな中、ナッツは呑気に空を見上げていた。常に被っていたフードを外し、樹の根元へと座っている。瞼を下ろして、深呼吸を繰り返して、膝を抱えている腕に顔を下ろす。

決して眠る訳ではない。元々、眠りの浅いナッツはそこまで睡眠を必要と感じていない。

ゆっくりと呼吸を続ける。

吸う、吐く——吸う、吐く——

吸う——吐く——吸う——

呼吸だけをしていた人形がピクリと瞼を動かし、瞼を上げる。

ソコには女が居た。編み込まれた金髪を後ろに流し、透き通るような肌と青の瞳。まるで騎士のような甲冑に抜き身の片刃の両手剣を持った美女。その美女の頭上にはココが現実世界ではない証の様にカーソルが存在し、そして犯罪者である事の証の様にソレはオレンジ色に染まっていた。

「いけませんよ。こんな時間にこんな場所に居ては。悪い^{わるい}プレイヤーも居るんですから」

まるで忠告のように美女はそう言った。そんな言葉を呆れるように溜め息を吐き出して聞き流したナッツは立ち上がり付いてもいない埃を払った。

美女はニンマリと笑みを浮かべて剣を握り直す。剣先をナッツに向けながら腕を引き、一足で距離を詰めて踏み込む。まるでバネでも仕込だかの如く剣を突き出した。

「——隠蔽スキル、弱いんちゃう?」

「そもそも発動してませんから」

「やっば」

突き出された剣が自身の顔の横を素通りしても眉一つ動かさずにナツツは目の前の美女に対して呆れながら一言。その一言も美女はニツコリと笑んだまま応えてナツツは更に呆れたように溜め息を吐き出してから腰から《フォレスト・キール》を取り出して後ろをチラリと見やる。

剣に突き刺され既にポリゴン片へと変換されていく狼型の敵Mobを見送りながら、同種のMob達を視界へと入れた。

「さて、報告を聞こか」

「はい、我が君」

格好に倣うように、片膝を着き礼をした女——ウィードは自身の主君たる存在に得た情報を提示していく。

ギルド・黄金林檎。そこで起きた事の顛末。そして事件を起こした殺人ギルド・ラフィン^笑・コフィン^{棺桶}。

——事の始まりは《黄金林檎》でドロップした敏捷力を上昇させる指輪が原因であった。換金か、ギルドで使用か。どちらともがギルドを考えた答えであった。そのどちらも望みは叶える事は出来なかったが。

黄金林檎のリーダー、グリセルダの死亡。同時に指輪の紛失。偶然にしては出来すぎた死亡。暗殺、共謀、疑心暗鬼。お互いに信じられない状態でギルドという群れは存続する訳もない。

「それで、我が君は誰が犯人と思いますか?」

「シユミット……とは言いたいけど、ちやうやろなあ」

「あら、そうでしょうか。人は追い詰められれば人なんて容易く殺してしまうモノでしょう?」

「逆に言えば追い詰められなシュミットは人を殺せん人間や」

「あら、知り合いでしたか」

「壁役として何回か喋っただけやけどな」

それでも為人はある程度把握している様にナッツは言い放つ。少なくとも、ナッツの知るシュミットなる人物は人を殺して素知らぬ顔を出来るような人間ではない。だから疑いを外す。

「まあグリムロックが有力やな」

「そうでしょうか？ 死んだグリセルダの夫だったみたいですが」

「夫婦だろうと、人は追い詰められれば人を殺すモンやろ？」

「……そうですね。アナタに嫌味を言われる程に当然の事でした」

「君は僕が常に嫌味を言うような存在やと思つとるん？」

「そんな、我が君に嘘を言うわけがありません」

「思つとるんやな」

大きく溜め息を吐き出したナッツに満足したようでウィードは立ち上がり、甲冑に付いてしまった草を払う。

「それで、ヒースクリフはどうでしたか？」

「アレは灰色のまんまやな」

「そうですか。白ではなくて安心しました」

「今からヒースクリフが白くなるんやったら……せやな。血盟騎士団がS A O最強じゃなくなるぐらいやな」

無理でしょうね、と断じたウィードを見つめながらナッツは小さく息を吐き出した。

数時間前にナッツとヒースクリフが喋っていた内容は実に普通の事だった。あのモンスターは経験値が美味しい、狩場の優先順位、戦力の底上げなど。実にギルド長として——トツプギルドと名高い血盟騎士団と底辺ギルドである《クラウン・ブラウニー》との差はあったが——有益な情報交換は出来た。

茅場晶彦——この世界で神様と言ってもいい人物については多く語る事はなかった。お互いに表向きの感情を言い、客観的に茅場晶彦に関しての意見を交換した。

ヒースクリフは茅場晶彦を知っている、或いは親しい人物。という

のがナッツの見解であった。同時にヒースクリフへの疑念は少しばかり晴れた。

ナッツを含めた情報を取り扱うメンバー達による実験。そしてナッツが個人としてした実験。試さなければわからないであろう情報達。ソレをヒースクリフは容易く口に出来ていた。

「なんや、同じ研究してて、SAOに関しても携わってたらしいで」「なるほど」

「まあ茅場晶彦やったら、アレほど自分を羨むような発言はしとらんやろ。詳しく聞かれへんかったけど、夢を叶えた茅場の事が羨ましいらしいで」

「茅場晶彦だったなら？」

「こーやって話を広められてる会話ログを見て身悶えしとるんちゃう？ あのヒースクリフのそんな様子見たくないから、アレは黒やなくて灰色のまま」

「なるほど、了解しました」

あつさりと引き下がったウイードの隣を通り抜け、ナッツは歩く。ウイードも格好に倣うようにナッツの二歩後ろに従う。

「それで、グリムロックはシュミットを殺す気なんやろ？」

「はて、犯人がグリムロックと決まった訳ではない筈ですが」

「アンタが答えも知らずに来るわけないやろ。大方、グリムロックと《笑う棺桶》を繋いどったギルドから証言とつとるやろ」

「ええ。苦手な方法で、拙いですが、しっかりと、情報をいただきました」

「あつそ。ごくろーさん」

悦を含んだ笑みを浮かべるウイードを振り返る事もなく、あつさりとナッツは事実を受け入れた。ナッツの知らない所で知らぬギルドが一つ殺し尽くされた所で何の感情も湧いてこない。ウイードが殺した、という事は攻略に力になっている、とも思えない。

ナッツは空を見上げて、瞼を落として深く息を吸い込む。

「ウイードはカルマ回復させてグリムロックの方へ」

「こういうモノは探偵役の我が君が行くべきでは？」

「どうせウィードが行くつもりなんやから、僕は笑う棺桶の妨害や」
「いつそ壊してしまってもいいのでは？」

「アレはアレで必要悪として、集合体として有用やからなあ……壊すにしても一回で壊すんは手間や」

「そうですね。それにP.O.Hは危機察知も高いみたいですし」

「そういう事。まあP.O.Hさんもゲームを楽しんだだけやけどなあ」

殺人プレイヤー^{レッド}に対して、楽しんでるだけ、とナッツは判断していた。殺人に対しても忌避感を抱かないナッツを見ながらウィードは身震いする。

初めてナッツと出会ったあの時の様に。絶望していた自分を拾った少女。きつと自分の事なんて使える駒程度にしか認識してないだろうご主人様。だから自身は見逃されている。必要だから、というちっぽけな理由で。必要が無くなればどうなるかなど考えなくてもいい。その時は斬り捨てられるだけなのだから。

「そういう事やから、君はグリムロック側や」

「承りました。全ては王冠^{crown}を頂くアナタの為に」

「……こんな世界の王様なんて確かに道化^{clown}やな」

「いい名前でしょう？」

「セヤナー」

好き勝手殺すのも、好き勝手殺されるのも、所詮は他人であるからナッツからしてみればどうでもいい。

幾度の消失を噛み締めたナッツにとって死ぬことは恐ろしい事ではない。物言わぬ肉塊、思考も出来なくなった人形。加藤夏樹であった時に幾度も生まれ、そして死んだ自分達。

この地獄でしか生きる事を許されていないナッツ。けれどナッツとして、彼は役を熟さなくてはいけない。それがナッツの役目である。

だからこそ、ナッツは死を恐れない。ただ受け入れるだけ。だからこそ、ナッツは戸惑わない。ただソレを届けるだけ。

「はああ。やっぱ気に食わんな」

故にナッツは手前勝手に、自身の快樂の為に、自身は躊躇しているのに、ソレを与えている存在達を許すことなど出来なかつた。

茶褐色の外套を揺らしナッツは腰に差している曲剣を鞘から抜いた。

目の前には顔も知らぬ濃紺色の髪の女性が怯えて、男性へと擦り寄っている。そして視線を下げれば顔を知るシュミットが倒れている。ソレらを一瞥して、ナッツは前を向く。

「よお、久しぶりじゃねえか。ナッツ」

「やあ、POHさん。残りは——まあエエやろ」

頭陀袋のような黒いマスクを被ったナイフ使いと髑髏を模したマスクを被った細剣使いへと視線を流したナッツは真っ直ぐに膝丈の黒いポンチョにフードを目深に被った男へと視線を向ける。

「それで、こんな所に散歩って訳じゃねえんだろ？」

「さあ、どないやろな」

「余裕ブツてんじゃねえぞ！アレか？正義の味方ぶりいたい年頃つてヤツか！」

ナイフ使いの甲高い声が響いてもナッツはただ真っ直ぐにPOHを睨み、溜め息を吐き出した。

殺人ギルドを倒すから、正義の味方。その役回りは自分ではない。あれこれと理由を考えてみたが、ナッツはその思考を打ち切った。

「別に——ただ殺したいだけや」

「おいおい、攻略組の希望の星である『落下星』様の言葉とは思えねえな」

「アンタは理解しとるやろ。同類^{P.O.H}」

「……やっぱりお前の目は気に食わねえな」

「奇遇やな。やから答えも決まっとるやろ」

「Wow……俺たち三人を一人で相手に出来ると思ってるのか？」

シュミットが震える手をどうにか握る。力一杯に叫んでやりたい。

変則的ではあるが壁役として横に並んだことのある少女に「逃げろ」と叫んでやりたい。

剣を突きつけられ続けているヨルコとカインズも似た気持ちであった。それこそ、自身よりも年下であろう存在が自分達の所為で死ぬなど考えたくもなかった。

「せやな……」

綺麗に殺せんかもしれんけど、痛くても叫ぶんやないで？」

その一言を皮切りにナッツは地面を蹴り飛ばした。

それとほぼ同時に細剣使いとナイフ使いが剣を構え、P O Hは愉快そうに声を漏らした。

ある程度の位置で足を止めたナッツは迎撃態勢へと移行する。そもそもナッツの本分は攻撃ではなく防御に傾いている。

端的に言えば、相手の攻撃を見切った上でのカウンター。極論で言えば相手の攻撃を見切らなければ攻撃は出来ない。だからこそナッツは足を止めて、少しだけ腰を落とす。

エストツクの刺突を避けて、待っていたかの様に振り下ろされたナイフを曲剣で受ける。ナイフ使いジョニー・ブラックの攻撃だけには注意しなければならぬ。倒れているシユミットがいい証拠である。

シユミットに効いた麻痺毒が自分に通るか、という疑念が湧いたが後々試そうと決着してアツサリと思考は戦闘方面へと向く。

そこそこにはしか攻撃しないナッツに対して攻撃の手を緩めない二人。P O Hが動かない事を疑問に思いながらもナッツは常にP O Hを視界に入れ続ける。

現状、ナッツの中で一番注意しなくてはいけないのはP O Hの動き。そしてナイフ。残りは濃紺髪達ヨルコが不必要極まりない動きをするかどうか。

先程から迫っては外套を掠るだけの細剣など注意する意味もない。このまま行けば、P O Hは動かない。殺せない。それはそれでいいけれど。気に障るモノを置いておく意味もない。

ナッツは迫っていたナイフを打ち払い、細剣使いを押しつけて飛び

退く。ある程度距離が開いているのを確認し、息を細く吐き出す。

失敗すれば死ぬだろう。ダメージの計算的に、死ぬ。

「死ぬだけか」

ならば恐怖する意味はない。幾度も体験した消失をまた味わうだけ。その役回りが自分だっただけ。

あつさりとソレを決定したナッツは曲剣を構えて踏み込んだ。最初に踏み込んだ時よりも幾分か遅く、捉えられやすいように。

当然、そんな意図など知らず細剣使いは腕を伸ばし、切っ先はナッツを狙う。僅かな手応えを感じた。ソレは確かに手に伝わった。

ナッツの左脇からは血液の代わりにポリゴン片が散っているが、細剣はナッツの顔の横を通り抜けている。

「残念」

ナッツのその眩きに細剣使いはゾクリと背筋に悪寒が走る。細剣の一撃によりフードが捲かれて露わになる顔。その顔は歪んで嗤っている。

細剣を握る右手が掴まれる。咄嗟の出来事で細剣^ザ使いは驚き、一歩後ずさってしまふ。同時に掴まれていた右腕が押し出され体勢があつさりと崩れてしまった。

「ほな、さいなら」

曲剣を逆手に握り直した萌黄色の髪をした少女。瞬間に察したのは自分が死ぬという事実。けれど、剣は降ろされる事はなかった。

高い金属音を鳴らし、ナイフと曲剣がぶつかる。

ナッツは舌打ちをする訳でもなく、予想していたように攻撃を受け流した。自身の横を通すように勢いを流し、刃でナイフ使いの腹を撫でる。たったそれだけで十分だった。

見えにくい左の視界に影が動いた。ナッツが辛うじて把握出来たのはそこまで。残りは顔を動かして右の視界で把握した。

黒いポンチヨが大型ナイフを振り上げている。

「じゃあな、^{ナッツ}同類」

振り下ろされる《友切包丁^{メイトチヨッパー}》。曲剣はナイフ使いの腹を撫でて動かしにくい。少なくとも、防ぐ事は不可能。避ける事は不可能ではない

が——それでは釣った意味が無くなってしまおう。

握った剣を手放し、盾のように大型ナイフを受けた右手が縦に裂けていく。裂けていく手を自身の外へと動かし、無理やり大型ナイフの軌道がズレる。それだけで十分だった。

構えた左手が発光する。黄色く光る左手を見て、P O Hは舌打ちをして足を後ろに動かすが既に遅い。

「つれん事言うなや、同類^{P。H}」

体術スキル・エンブレイザー。零距离で放たれる貫手は文字通り必殺と成り得る攻撃である。正しく放たればの話であるが。

貫手の手応えと違和感を同時に理解したナッツは眉間を擡めて大きく後ろへと跳んだ。瞬間に自身がいた場所に大型ナイフが横切る。

「ああ、惜しかったな」

「せやな、惜しかった」

もう少しで殺すことが出来たのに。

言葉に出さずとも相手の気持ちは理解出来る。

お互いに噛いを浮かべた所で足音に気付く。闇に溶けるような黒い騎馬。蹄が地面を揺らし、甲高いいななきが辺りに響いた。

ナッツとP O Hの間に巨躯な馬体をねじ込み、後ろ足だけで立った黒馬は鼻面から白い噴気を吐き出した。

「いってー！」

どすと馬体から落ちた黒い塊にナッツとP O Hは視線を向ける。呆れ、無粋を混ぜた視線を浴びた黒い剣士は立ち上がり、ナッツに向けて誤魔化すように笑ってみせた。

「大丈夫か、ナッツ」

「それはコッチのセリフやと思うけど……まあええわ」

諦めたように溜め息を吐き出したナッツ。文字通りボロボロになつている右腕と先程から視界不良を訴える左目。尻餅をついた剣士。果たしてどちらが重症かは比べるまでもない。

空いていた左手に絡めていた飾り布を引っ張り、愛剣を手元へと戻す。

「それで、コッチは二人になつたけど？」

「瀕死のお前を数に数えればな」

「お互い様やろ」

息を吐き出したナッツは曲剣を地面へと突き刺して外套の後ろに備えていた貫通型のピックを握りしめる。コレで戦う、という事ではない。そもそも《友切包丁》はコレで受ける事は出来ない。

明滅する左の視界。不安定なら安定させればいい。無いものには頼る事もしない。だから、左目は不必要だ。

「ちよ、おい、ナッツ！」

「Oh……」

左目を自ら貫いたナッツに狼狽するキリトと感嘆したように声を漏らしたP O H。ナッツはソレに反応するでもなく、ピックを戻し、左手で剣を握りしめる。裂けてしまった重しも必要は無いだろう。

肘辺りから刃を滑らせて、いとも容易くナッツは重しを切り離れた。地面に転がるソレを足で転がし、ナッツは右目だけでP O Hを見つめる。

「ほな、始めよか」

少女のように愛らしい顔は狂気に塗りつぶされていた。

結果だけを言えば、戦闘は続かずにP O Hを含む笑う棺桶三人は退いた。

緊張した面持ちで索敵スキルを使用し続けていたキリトは無言で3つのオレンジ色のカーソルを見つめていた。

「はあ、なるほど。ヨルコさんにカインズさんな。いやあ、よーあんな殺人紛い思い付いたなあ」

そんなキリトとは真反対のように陽気で納得するような声で今回の事件を起こした重要人達を話すナッツ。当然、右腕は無く、左目もポリゴン片自体は散っていないが開く事もない。

幾つかの引っ掛かりを覚えながらキリトはようやくやく消えたカーソ

ルから目を切って、ナッツへと向く。

「殺人紛いつて事はナッツは知ってたのかよ」

「カインズさんが死んだって所で気付いたかなあ。正確にはキリトがカインズさんの綴りを言うた所やけど」

「なんで言わなかったんだよ……」

「その時点では中堅プレイヤーが攻略嫌がつて隠居しようとしたた、なんて思っと思ったからなあ……。裏取りはしとったけど、確証を得たのはその後やし」

けろりと答えたナッツにキリトは溜め息を吐き出し、ナッツはソレを見て笑っている。エストツクによって貫かれたフードは被って居らず、少女らしい顔は露わになっている。

シユミットに解毒POTを渡したキリトは眉を顰めて、驚きを混ぜながら口を動かす。

「裏取りつて事は——」

「今回の事件は既に解決に向けて動いているのだよ、ホームズ君」

愛らしい顔で左手の人差し指を口元に添えたナッツに思わず見られるヨルコとカインズ。シユミットはそれどころではなく、キリトはナッツが男である事を理解している。それでも「様になってる」という感想が出そうになったが。

「ま、動機はわからんから本人に聞こうや」

とナッツが視線を動かした事に吊られて四人の視線も動く。三つの足音が聞こえ、次第にその姿が露わになっていく。同時にナッツの呆れたような、疲れたような溜め息が響いた。

正面に居るのは今回の事件で重要な人物であるグリムロック。ツバの広い帽子に眼鏡を掛けた柔和そうな男である。

ソレに両手剣を軽々と片手で突き付けながら、ニツコリと笑顔を浮かべている美女。編み込まれた金髪を後ろに流し、騎士のような甲冑を纏う女、ウィード。

更にその後ろに非常に胡散臭そうなモノを見るようにウィードに細剣を突き付けているアスナ。以上の三人である。前からも、後ろからもカーソルの色が緑、オレンジ、緑である事も忘れてはいけない。

「あー……アスナさん。えっと、こ、この人はどなた？」

「初めまして、《黒の剣士》さん。私はウィードという者です。《クラウン・ブラウニー》でサブリーダーを務めさせていただいています」

「こ、これはご丁寧にも……」

「キリト君、何デレデレしてるのよ」

「デレデレなんてしてないから。コレは、ほら、えっとコミュ障特有のだな」

「自分からコミュ障言うんか……」

アスナにジト目で睨まれたキリトの言い訳に思わず反応してしまったナッツ。そのナッツを見つけて、ウィードは目を見開いた。

「わ、我が君！ お怪我を!？」

「大した事ないよ。腕一本と目一個や」

「そんな大した事がないだなんて！ 今スグ私と一緒に治療しましょう！ もう余す所なく！」

「イタイのイタイの飛んでいけ」

「ゴハツ」

ツツコミとも言える体術スキル・閃打がウィードの右頬を捉えた。恍惚とした表情で地面に倒れたウィードに対してナッツを除く全員が思ったことは「残念美人」という四文字である。

「わがきみ?」

「僕がコレが言うてた《クラウン・ブラウニー》のリーダーって事」
「……………」

「はあ!？」

しっかりと溜めを作って驚いたキリトに「ふふん」ドヤ顔をしているナッツ。キリトは裏切り者を見るようにナッツを恨めしく睨みつける。

「お前は俺と一緒に絶対ギルドに入らないと思ったのに……!」

「知らんがな。まあ詳しい説明とかは今度でエエやろ」

アツサリと話を打ち切ったナッツはグリムロックへと身体を向ける。数秒程瞳を見つめ、ふむ、と一言唸った。

『まるで現実世界とは違う彼女を見て、怖くなったから』

「——ッ」

「なんや、一発目から当たりか。面白くない」

息を吐き出したナッツは既に興味を失ったようにグリムロックから視線を外した。

息を飲み込んだグリムロックはあり得ないモノを見るようにナッツを見て、膝を折った。

「ナッツ？」

「あとは勝手にして。もつと違う理由やったらよかつたのに」

ああ、つまらない。と一言零したナッツはヒラヒラと左手を振ってその場を離れていく。その様子を呆然と眺めていたキリト達はようやく恍惚とした表情から帰ってきたウイードに視線を向ける。

「えつと」

「主からしてみれば、私の事があつたので、二度目という事です」

「どういう事だ？」

「私も夫に裏切られて殺されそうになっていましたので。理由はソコにいるのと一緒ですよ」

笑顔を浮かべながら自身の事を話したウイードに全員は何も言えない。ウイードは「お気になさらずに」と言いナッツの後を追うために足を進める。

「本当は私が殺してあげたいのですが……とても残念です」

そう言い残した彼女の言葉はグリムロックには余りにも重かった。

第8話

——出てきなさい。夏樹。

——さあ、私の前に。

落下するような感覚を得ながら、ナッツは瞼を持ち上げた。

疼く背中になるべく意識を向けずに、日常を開始すべく索敵スキルを起動する。左手から落ちたピックを拾い上げて、ナッツは詰まっていた呼吸を再開する。

なるべく静かに、まるで誰かにバレないように。

索敵スキルで敵対するモノは付近に居ない事はわかっている。けれどもナッツは大きく呼吸することはなかった。

細く、短く、そして落ち着けるように深く、長く。

ようやく一通りのルーチンワークをやり通したナッツは肘から先のない右腕を触っている左手に気付いた。自分の行動であったにも関わらず、無意識に触れていた。

無いモノは痛む事はない。そもそも痛覚すらもこの世界には適応される事はない。故に、疼いていた背中も幻痛と言ってもいい。

「年かなあ、僕も」

なんて、呟いたナッツは苦笑する。年端もいかぬ子供が何を言っているのだろうか。

大人でもあり、子供でもあり、動物でもあり、そして人形でしかない加藤夏樹はそう思ってしまう。

ナッツは立ち上がり、鳴りもしない首を動かして誰も眠っていない綺麗なベッドを横切って窓を開く。

暁に染まる世界が人形の瞳に映された。

「よお、ナッツ。保護者同伴か」

「うっさいわキリト」

予定していたレベリング場所に到着したナッツはキリトの一言に苦い顔をしていた。その隣には中世の騎士のような金色の髪を編み込んだ美女が立っている。冷たく鋭い美貌の女——ウィードはキリトを睨みつけ、口を開く。

「黒の剣士。私が我が君の保護者だなんて、そんな嬉しい事がある訳がないでしょう」

「わ、悪い」

「確かに、我が君に『お姉ちゃん大好きー』なんて言われた日にはハラメントコードなんてバッチコイで襲うかもしれません。いいえ、襲います！　しかし、ロリやシヨタは触れてはイケナイ。そう、イエスロリータ、ノータッチの精神が大切なのです！」

「こんなんに保護者が務まると思っただんか」

「……色々悪かった」

キリトの中でのウィードが崩れていく。ミステリアスでどこか危険を纏った美女という殻が破れて、残念シヨタコン美女が完成した。美女である事は否定できないが、それ以上に肯定しなくてはいけない部分が現れてしまった。

保護者に狙われるという矛盾を得ているナッツは苦々しい顔をしながらかつから先のない右腕を外套の中で持ち上げる。

「まだ腕がこんなんやし。僕は普通に戦えるねんけどなあ」

「まだ治ってなかったのか、腕」

「言うて数日前やろ。色々検証したい事もあったし……スキルは発動するけど、威力は落ちるで」

「了解。そう成らないように気を付けるよ」

「せやな」

検証した内容をアツサリとキリトへと伝えたナッツはキリトの返事に神妙に頷く。確かに、腕を失っている時点で不具合は生じてしまう。バランスも悪い。

ナッツとキリトが微妙に食い違った思考をしていると今回の狩りに参加するもう一団が姿を現す。

バンダナに野武士染みた格好の男。その後ろに武士鎧を纏う五人。

総勢六人からなるギルド、風林火山。

「ワリイ、遅れたか？」

「いんや、僕らも今来た所や」

ヒラリと左手を上げたナッツから視線を外した野武士はその隣に立つ女騎士へと視線を向け、目を見開き、格好を付けたように真面目な顔へと成る。

「初めまして、麗しの騎士さん。俺の名前はクライン。是非、今回の狩りで俺の勇姿をその目に留めてほしい」

キメ顔でそう言ったクラインにウイードは微笑みを浮かべる。そして、自身の主を守るように一歩だけ前に足を進める。

「ウイード。外れや」

「ああ、そうでしたか。失礼」

「おい、ナッツ。俺のドコが外れだつて言うんだよ」

「僕に対しても同じ感じで声を掛けた所かな」

「そりやあ、オメエみたいな美少女が居たら声は掛けるだろ。なあキリト」

「……あ、おう。そうだな」

クラインの言葉にキリトは僅かに考えてから同意を示した。もしもナッツが男性である事を知れば、クラインはどうなるのか……想像に難くない。自身が迫っていたのは男だと知って新しい道を開いてしまうのか、それとも絶望するのか。いや、ともあれ、クラインは知るべきではない。

ナッツとウイードの会話は額面通りという訳でもない。ウイードが警戒して一歩前に進んだのは軽薄な男からナッツを守る為ではなく、『クライン』という名前の存在からナッツを守る為である。同時に『クライン』が当たりならば攻撃するつもりでもあった。

主からの制止の声が入り、幾分か警戒を薄めたウイードはまるで女神の様な微笑みを浮かべる。

「初めまして、今回の狩りに参加させて頂きます。ウイードと言います」

舞い上がる男達。微笑む美女。黒い剣士と茶褐色の塊は苦い顔を

しながら行く末を見守る。

「よ、よろしく。ウィードさん！ そのギルドとかに所属はしているのんですかね？」

「ええ、《クラウン・ブラウニー王冠の妖精》というギルドに所属させて頂いています。故に私の身体、命、魂の一片まで我が君に捧げさせて頂いております」

「なん……だと……」

なんて羨ま——不届き者だろうか。こんな美女の全てを手に入れているだなんて……!!

クラインは義憤に駆られる。決して羨ましいからではない。羨ましいからではない。クラインの脳内で一瞬にして展開されるギルド内でハーレムを築き上げるギルド長、そして手前勝手な妄想にて妖精さん達は実にキュートで美しい少女達なのだ！

なんと、なんと羨ましい!! いや、けしからん！

「ち、因みに。ギルド長は……どこのどいつで？」

「ココのコイツだ」

「ドーモ、クライン〓サン。ギルド長のナッツです」

「やったぜ！」

まるで魂を絞り出したような声であった。妖精達のトップまで妖精のような美少女なのだ！ なんと夢のような展開なのだろうか。いつそ夢かもしれない。いやココは現実であって、現実ではない。

「初めて茅場晶彦に感謝するぜ……！」

「なあナッツ。放っておいていいのか？」

「……ええやろ」

呆れるような、諦めるような、そんな溜め息と一緒にナッツは言葉を吐き出した。

「というか、ナッツも遂にギルドに入ったのか……。俺はテツキリ勧誘を受けてた血盟騎士団にでも入るか、入らないかだと思っただぜ」

「言うても、運営とかは全部ウィードがやってるねんけどな」

「ええ。僭越ながら、私が我が君の右腕として……そう、まるで独り身の夜の右手として働かさせていただいております」

ニツコリと笑みを浮かべながら分かる人には分かる毒を吐き出し

たウイード。なんとなく察してしまったキリトは少しばかり顔を赤くして、ウイードを何処かの女神として見てしまっていたクラインを含む風林火山の人員はまるで石化してしまったように動かない。

ナッツはニタリと一瞬だけ笑い、キョトンとして首を傾げる。

「なんや、右腕言うんは分かるけど。なんで独り身の、更には夜固定で、腕やなくて手なんや？　クラインは何か知つとる？」

「ナッツは……知らなくていい事だぜ」

「やつぱ知つとるんや。教えてくれへんの？」

僅かにズレたフードの奥に無垢な少女が、ただ純粋な興味本位で聞いている。大きな瞳がクラインを写し込み、身長差もあり自然と上目遣いに。

葛藤がクラインを襲う。果たしてコレはハラスメント行為なのだろうか。確実にハラスメント行為なのであろう。

「おい、ナッツ。クラインが困ってるからやめとけ」

「せやな。言われへんならソレでエエか」

「お、おう。悪いな」

バンダナの上から頭を掻き、謝るクラインにナッツは「エエんやで」とまるで気にしていないように答えた。

そんなクラインに同情するような視線を向けるキリト。キリトが止めたのは『クラインを弄り倒す事』なのであるが……その事をクラインが知る由もない。知らない方がイイだろう。

「それで、ウイードさんは今回の狩りに着いてこれるぐらいのレベルのあるのか？」

「おいキリト。ウイードさんのレベルが低かろうが、この俺、武士クラインを守るから問題ないだろ」

「守っていただく必要が無い程度のレベルですので、ご安心を」

暗にクラインに守られたくはない、と答えたウイードに落ち込むクライン。ソレを眺めて喉を震わせて笑うナッツはウイードを止めるつもりはない。

事実としてウイードの動きは良かった。片刃の両手大剣を軽々と振り回し、武器防御を行い、戦況を見つつフォローをしたり、フォローを頼んだり、と。単一としての戦力もそうであるが、動きが実に効率的であり、そして人の流れを掴むモノでもあった。

毒を吐き出した事もあり、近寄りがたい女神としての自分を美人なだけの人間。そして残念な美女として落とし込み、コミュニケーションを図ったウイードは既に風林火山の面々と笑い合いながら談笑をしている。

キリトはそんな輪からは離れ、ウイードを見ている。

「なんや、キリトはアツチに混ざらんのか？」

「生憎、コミュ障なんだよ」

「嘘、って言われへんのがアレやなあ」

ケラケラと笑いながらフードを外したナッツがキリトの近くに座る。肘から先の無い右腕の影響か、レベリングの最中は左手に剣を握っていた。それでも戦闘の方法や動きが変わる事はないかったが。

萌黄色の髪の少女——のような少年を横目で見たキリトは意を決したように、口を開く。

「ウイードさんは……レッドだよな？」

「せやな」

「……アツサリと教えるんだな」

「別に隠すような事でも無いやろ」

誇る事でも無いけどな、とケラケラと笑いながら加えたナッツに対してキリトは再度ウイードを見る。落ち込んでいるクラインを見てクスクスと笑っていた。

「必要に駆られて、人を殺した。正確には初めて殺されそうになったから、初めて殺した。それだけや」

「……前に言ってた夫関連か？」

「なんや、アレはそこまで言うてたんか」

「前の事件でナッツが興味を失ってからな」

「ふーん。まあ旦那の方も、グリムロックと似たような人やったし」

「……………ん？ お前、その、ウィードさんの旦那さんを」

「知つとる。というか、殺しの現場に居ったし」

「は？」

「ああ、どうして止めなかった？ とかいう疑問はいらんで。僕はあくまで立会人としてその場に居っただけやし。双方合意の殺し合いに口を出す程の無粋さは持ち合わせとらんし」

「そうか」

「なんや、キリトやったたら両方を助ける事は出来なかったのかー、とか言うと思つとつたけど」

「言いたいけど、聞かないだろ？」

「よーくぞ存知で」

聞く必要もない、既に終わった事である。ウィードにとつても、ナッツにとつても。

夫である男がオレンジギルドに頼み、妻であるウィードを殺そうとしたこと。不必要に溢れたオレンジギルドを潰していたナッツが偶然その場にいた事。悄然としていたウィードを唆し、夫であった男を殺させた事。

殺そうとしたから、殺した。双方合意の上での殺し合い。殺す故に、殺された。

たったそれだけでしかない。

「殺すんなら、殺される権利も生じるやろ」

「お前はドコかの革命家か何かか？」

「僕は誰でもないよ。単なるnuts^{ナッツ}や」

完結した物語を語るように、ナッツの言葉に迷いはなかった。その言葉に少し疑問を過ぎらせながらもキリトは一つの悩みを解決させた。

「そういえばナッツ。アレだけギルドを否定してたのに、ギルドを作ったんだな」

「ギルド否定はしとらんよ。攻略を目指す群れとしては優秀やろ。

ギルドに入りたくなかったんは入る理由がなかったンとアスナさんが煩いからやで」

「アスナが聞いたなら怒りそうだな」

「まあギルドに入った——作った事に関しては概ね喜んでくれてはるよ」

「概ね?」

『『どうして血盟騎士団じゃないの?』ってメッセージの末尾を飾った』

「ああ……」

キリトの頭に真つ黒い笑顔を浮かべているアスナが思い浮かんで、身体を震わせて消した。逆らえないスゴミがあるあの笑顔に立ち向かったナッツを少しばかり見習いたいと思う、マネする事は無いが。作ったンも流れみたいなもんやったし……。僕の目的に似通ったからなあ」

「目的?」

「こそ。低層、中層をメインに戦力の補強。まあ底上げやな」

「お前、そんな事やってたのか」

「ギルドが出来上がってから——というよりは、ギルドの全体方針みたいなもんやけどな」

「……俺の時はアレだけ説教したのに?」

「黒猫団の事言うてるん? アレはキリトが変にコミュ障拗らせて事故っただけやろ」

「ぐっ……」

「そもそも状況も立場もちやうよ。基本的にブラウニーがやっとなるんはクエストの情報精査と手伝い、低層でのレベリング安定の為にパーティに一時加入したり、させたり。僕個人でやっとなったモンスターの解析情報を元にしとるし、安定はしてると思うよ。」

あとは噂話を含めた情報収集と統合。こっちは情報屋達とは別口で動かしてるから雑味が多いけど、それも中々よくてやな」

「待て待て、色々ツッコミどころが多すぎて頭が痛い」

「なんや。まだ半分ぐらいやで?」

「お前は何を目的にしてるんだよ……」

「そら、SAOの攻略やろ」

何言ってるんだコイツ。と言いたげな顔をしたナッツに対してキリトは同じ事を返してやりたかった。

仕切り直しのように溜め息を吐き出して、キリトは頭の中を一度整理して、口を開く。

「モンスターの解析って?」

「そのまんまやけど?」

「……何? お前はデバッガーか何かなの?」

「でばかー? 何それ」

「デバッガー。システムのバグを探す人だよ。お前がディアベルを助けた時のアレは片鱗だったんだな……」

「ああ、割り込みによるヒットズラしな。まあ状況を再現した訳やないから確定とは言えんけど、もう出来ひんで」

「もう状況再現とか言ってる時点でお前はデバッガーの素質があるよ。おめでどう」

「なんや言葉に若干の憐れみがあるなあ……」

「気にするな。それで? モンスターの行動パターンでも解析してたのか?」

「いやあ、自分が相手してるんやったら十二分に相手出来るんやけど。他人の動きやとどうもちやう動きしよるんよね。自分との微妙な差異があるんはわかるねんけど」

「よし、ちょっと待て」

「……なんやさつきから話止めてばっかで。拘りのある監督さんかいな」

「いやいや、お前はドコまで細かく把握してるんだよ」

「ん? カウンターだけで殺せる程度やけど?」

キリトは痛む頭が余計に強く痛むのを感じた。そういえばそうだった、という感想が頭を過る。

一緒に狩りをしているときは基本的にタンク——と言っても武器を用いて攻撃を流す変則タンクを徹底しているナッツであるが、そもそも戦い方はカウンターによる攻撃が主である。

やれ、と言われればキリトもカウンターぐらいは出来る。但し、ソ

レだけでモンスターを倒せと言われれば話は変わってくる。

毎度狂人の所業だと思っていたキリトであったが、これで晴れてナッツはキリトの中で人外のカテゴリーへと入った。

「ま、そんなこんなで。カウンターを十全に出来るヤツは居らんから、敵M o bのHPとか攻撃力とかのデータは低層で配布しとるよ」

キリトの目が点になる。ケラケラと笑っていたナッツも笑いを止めてキョトンとキリトの顔を覗き込む。

一拍程置いて、キリトが再起動を果たした。

「はあ!? おま、はあ!?」

「うっさいなあ……」

「お前な、HPバーは見えるけど数値化とかはされてないだろ……」

「せやな。しかも敵M o bによって長さも本数も違うよって、正しい数値はさっぱり」

「……………つまり?」

「始まりの街でNPC販売してる剣で殴ったり、攻撃くらったり、まあ色々実験を重ねてやな」

「……………もうお前ホントバカだろ」

「失敬やな。これでも頭はエエ方やねんけど?」

「つーか、攻撃受けてるのかよ……。それで死んだらどうするつもりなんだよ」

「運がなかったなあ、ぐらい?」

「はあ……アスナがお前の事を心配する理由がよくわかったよ」

「アスナさんはこの事知らんし。死んでも死ぬだけやよって問題無し」

「問題しかねえよ」

狂人の人外かと思ったら、本格的に頭のネジが外れていた。閃光^{アスナ}様ががちよくちよく自身にナッツの食事などに関して聞いてくるから適当な返事を返していたが、次からは真面目に返そうとキリトは心に決めた。

ちよつとした説教が決定した事も知らずに、ナッツは果たして変な事を言ったのかと小首を傾げている。ようやく合点が言ったのか、両

手を合わせて補足するように追加する。

「流石に前線での調査は攻撃を生身でくらったりせずに、NPC販売の武器で防御して割り出しとかしとるよ?」

「ソツカー」

説教も追加された。

ともあれ、自身と同じだと思っていた——ギルドには絶対に入らないと思っていたナツツがギルドを作った理由は凡そ分かったし、そこに変態であろうが大人であるウィードが居るならば安心も出来るだろう。貞操は分からないが。

キリトは肩を竦めて立ち上がる。僅かにズレた背負った剣の位置を直し、ナツツに右手を向けようとして、苦笑してから左手を差し出した。

「そろそろ次の狩りの時間だな」

「ん、了解」

キリトの左手を見て苦笑したナツツは左腕を伸ばしてしっかりとキリトの手を掴んだ。引つ張られるように立ち上がり、首を左右に曲げてからフードを深く被り直しナツツはいつものナツツへと戻った。

そんなナツツを見て、キリトは思い出したように口を開く。

「そういえば、ナツツ。情報収集もしてるんだよな?」

「噂話からイベント、クエストまでなんでもござれ。まあクエスト関係やったらアルゴさんの方が詳しいねんけどね」

「腕のいい鍛冶屋を紹介してくれないか?」

「むしろトッププレイヤーに名を連ねてる黒の剣士様が鍛冶屋の知り合い居らんことに……あつ」

「何を察した、この野郎」

「アツハツハツ。鍛冶屋なあ、基本的にギルドに出入りしてるような人はキリトのお眼鏡に叶いそうにないし。第一、ソレよりも優秀やないとアカンねやろ?」

キリトの背にある剣を見ながらナツツは唸る。視線を宙に幾らか左右させて、「ああ」と何かを思い出したように声を上げる。

「フォレストキール作った人でエエなら、紹介出来るで」

「その武器を作ったって事はスゲー奇特で頭のネジはぶっ飛んでそうだな」

「あー、いや、最初は普通に性能のイイ曲剣やってんで？　ただ、ほら、もうちよつと耐久がやな」

「お前がオカシイだけかよ……今更だな」

「しゃーないやん。籠もってたら耐久なくなるねんし」

「違うそうじゃない」

フードの奥で唇を尖らせて不平を漏らしたナッツにツツコンでしまったキリト。極々当然の反応である。

「ま、普通の人やで。腕は確かやし。笑顔はヘツタクソやけど」

「その注釈いるか？」

「コミュ障には必要かなって」

「……………おう」

「落ち込みなや。幸い、僕からの頼みやつたら聞いてくれると思うし」
「ナッツって商人連中の弱味でも握ってるのか？」

「——こんな子供にお金借りてるような大人に弱味が無いと思うん？」

「お、おうソウダナ」

深く被ったフードの奥でケラケラと笑ってみせたナッツにキリトはそれだけしか言えなかった。思い浮かんだ悪役レスラー顔の商人とまだ見ぬ鍛冶屋のプレイヤーを憐れんでしまう。真実としては他にも商人プレイヤー達もその憐れみに含まれるべきなのだが、ソレはキリトの知る所ではない。

メッセージを件の鍛冶屋に送りつけたナッツ。

「いや、まだいつ行くか決めてないんだけど……」

「ああ、エエよ。『友人が行くからよろしゅう』とだけしか送ってないから」

「鬼畜か」

「因みに友人の特徴は『真っ黒のコミュ障』で送ったで」

「鬼畜だ！」

「軽い助言やけど。ちよつと煽ったらええ感じに喋りやすくなる人や

から、鍛冶関係で矜持を擽ればエエんちやうかな？」

「神様かよ……」

「失敬な。僕は茅場さんやないで」

ケラケラと笑いながら助言したナッツ。当然そこに悪気も何もない。それこそリズベットとキリトの性格を鑑みた結果での発言でもある。

故に、ソコには「キリトの剣ならリズベットさんの店売りの直剣はパキパキ折れるやろなあ」という変な想像は一切含まれていない。

第9話

完治して生えてきた右腕を外套の上から擦りながらナッツはウィンドウを眺める。

雑味の多い、とナッツが言う情報達。噂話であり、確認も取れていない目撃情報であり、誰かが確認して欲しくて故意に流した情報であり。ドコかのパーティに入った《クラウン・ブラウニー王冠の妖精》から送られてくる情報。真偽も無く、脈絡も無く、比較も無い。単なる世間話にすら劣る情報をナッツは一から目を通していった。

その中で幾つかをピックアップして、情報の真偽を確かめる為に妖精達を動かす。尤も、動かす人員を決めるのは取り仕切っているウィードなのだが。真偽の確かめられた情報は情報屋達に流されて、最初に情報を取得した妖精には別途で金銭やアイテムコルが送られる。当然、偽の情報であつてもソレは変わらない。正しく無い情報という意味では必要であるのだ。

そうして雑味のあるメッセージを流し読みで確認していたナッツの手が止まり、片膝を抱えて思考の沼へと埋没していく。

その情報の真偽はともかくとして、その情報が流れ始めている事が問題である。少なくとも、自身であつたならば流さない、流れる事すら無い。

けれど、事実としてその情報は流れ始めている。情報の始まりである噂話を越えて情報屋の口から流れている。

ナッツとて妖精達が全ての情報を探し当てれるとは思っていない。当然、自身も全ての情報を知っている訳もない。だからこそ、情報屋から初めて聞く情報も幾つかある。

低層、中層を主に情報収集をしている妖精達がその情報を知らないのも納得は出来る。出来るが――。

「……勝負？ いや、ちやうな……何やら」

《ラフィン・コフィン笑う棺桶》の所在地という大きな情報が流れ始めてしまった事に對してナッツは息継ぎも忘れて思考の中へ埋没していく。

見知った男、同族嫌悪にも似た感情を持つているPOHがそんな情

報を流す訳がない。殺人を煽動した男がそんな情報を容易く漏らす訳がない。

事実、漏れ出した情報がある。そして、その情報は恐らく正しい。何度か相対した男が自ら漏らした、と考える方が自然。というのがナッツの見解である。けれど、それならば、何故漏らしたのかわからない。

攻略組が煩わしいから。笑う棺桶という餌で圏外へと連れ出して釣り上げる為。恐らくソレは正しくない。もしもそうであるなら、もっと上手くする。混乱を招き、恐怖に叩き落とすつもりならばトツププレイヤーを捕縛、麻痺させて殺人上映会をしてやればソレだけでいい。そんな誰でも思いつく事をしないのは矜持に反するのか、芸術的ではないのか。

どちらにせよ、そういった手段を取らない時点で攻略組が煩わしい訳ではない。幾らか煩わしいと思っただろうが、そうであるならば彼は自身の手で害を為すだろう。

「……………まあ、エエわ」

思考の沼から這い上がったナッツは終ぞ男の思惑に辿り着くことはなかった。辿り着くには幾分も情報が足りなさすぎる。

何にしろ。とナッツは思考を断じて確定に近い未来を判断した。攻略組と笑う棺桶の衝突。コレは確定だ。正義感溢れる———それこそ殺人を許せない人間は笑う棺桶を許すことも出来ず、嘘の情報だったとしてもソコへ向かうだろう。

故に、ソレは逆手に取られる。

ココまでは、あの男の思惑を追えた。理由は不明。そしてP O Hはこの戦闘で死ぬ気もなく、攻略組を全て倒せるとも思っただろう。故に、意味がわからない。

攻略組を含めた、暫定的な笑う棺桶討伐組を止める事が出来るのか？ と自身に問うたナッツは否定する。

偽の情報であったとしても、取り越し苦勞で終わるのだ。そして情報の真偽も恐らく確かめられるだろう。故に止める事は出来ない。

討伐組の損害を考えれば、割に合わない。

「チツ……ゴミ処理するんに何人が死ぬとか、放射性物質やないんやから」

舌打ちを一つしてから、ナッツは自身の目論見の為にメッセージを送っていく。

■ ■ ■
ラフィン・コフィン

《笑う棺桶》のアジトの場所が判明したという情報は早々に広がった。広がった、と言っても極一部の攻略プレイヤーとソレを纏めているギルドが知った、というだけであり一般的には知られていない。

表沙汰になることの無いように情報規制された作戦——笑う棺桶を強襲するが確定したのも当然の流れであった。

その一団に含まれていたナッツは参加したメンバーをフードの奥で確認しながら小さく息を吐き出した。

「……第一段階はエエやろ」

「何か言った?」

「なんでもあらへんよ。アスナさん」

小さく呟いた言葉を聞き取れずにアスナは首を傾げたがナッツはケロリと笑って言葉を霧散させる。

総勢、二十六名の笑う棺桶討伐隊。レベルと装備を考えれば何も問題無い。それこそ捕縛という目的を含めても正面から当たっても損傷は生じるが損害無く終わるであろう。

「しかし、人数が少なくないか?」

「少数精鋭、って今回を取り仕切ってるシュミットさんが言うてたやろ。コミュ障は人の話も聞かんのか……」

「聞いてたけどさ。それでも多い方がイイんじゃないか?」

「……問題ないやろ。最悪皆仲良く死ぬだけや」

「死にたくはないだろ……」

「ま、何にしろ、足があるなら逃げれるやろ」

ケラケラと笑いながら最悪の未来を言ってみせたナッツにゲンナリとしながらキリトは周囲を確認する。頭で数えられる程度の仲間。当然、会話を交わした事のある人数は少ないが、それでも名前ぐらいは知っている人は多い。

動く足場による不安と人殺しをするかもしれない緊張。二つが入り混じった空気を感じながらキリト達は足を進める。

「もうすぐ、報告のあった笑う棺桶のアジトだが。突入前にもう一度確認しておく！」

大きな足場で立ち止まったシュミットが振り返り、士気を上げるためか、それとも自身を鼓舞する為か声を張り上げる。

「奴らはレッドプレイヤーだ。戦闘になったら俺たちの命を奪うのに何の躊躇もないだろう。だからこっちも躊躇うな！ 迷ったら殺られる」

シュミットの言葉にナッツは目を細める。経験上、見知った中で容易く一線を越えた人間は居ない。殺されるから殺す、という単純な理論も適応されない。躊躇する。戸惑う。

フードの先を摘んで、ナッツは息を深く吐き出す。机上の理論が嫌いな訳ではない。否定する訳でもない。

「レベルや装備は攻略組である俺たちの方が上だ。案外、戦闘に成らないで降伏、という事もあるが……。もしも。そう、もしも危険であったならば迷わず逃走を選択しろ。撤退は恥ではない」

シュミットは頭を振り、ため息を吐き出し、ナッツに一度視線を向けて、更に言葉を吐き出す。

「もしも撤退をするなら、俺の責任にしろ。俺も迷わず撤退を命じる。撤退の命令だけは必ず、守れ。

チャンスはある。命は大事にすべきだ」

気弱とも取れる、絶対の命令を言葉にしたシュミットを誰も責めはしなかった。誰だって、死ぬのは怖い。

「もしもだがな」とおどける様に付け足したシュミットに討伐隊は笑みを浮かべる。

最初に反応したのは、キリトとナッツであった。

「——ッ」

「ナッツッ！」

飛び出して来た黒ずくめの外套を被ったプレイヤー。ナッツはその凶刃を曲剣で受け止める。高い金属の音が響き渡り、同時に討伐隊が反応した。移動する足場。その上に並ぶ笑う棺桶。

「……—さあ二段階目や」

剣を弾いたナッツがそう呟いたのを聞いたプレイヤーは誰も居ない。

剣戟の音が響く。剣が剣と——或いは盾と打つかり、弾かれ、そしてスキルがプレイヤーへと迫る。

曲剣がその間に割り込み、スキルを弾き笑う棺桶を蹴り飛ばす。

「ありがとう、ナッツ」

「エエ」

短く交わされた会話。ナッツの視線は忙しく動き、目的の人物が居ない事を確認した。

やはり、居ない。

迫る剣を流し、喉元を柄で殴り飛ばしながら、僅かに乱れた呼吸を整える。

両方とも、目に見えた損害は少ない。それこそ討伐隊に死人は誰も居ない。武器とレベルの差を考えれば、このまま押し切る事は可能だ。

討伐、とはもはや言うべきではない。笑う棺桶による奇襲を受けてからナッツはそう思っていた。

「取っ、た」

「!？」

たった一瞬、その一瞬だけ隙を晒したナッツに迫った凶刃はナッツが咄嗟に出した左腕を貫いた。

反射的に貫いた細剣を持った腕を叩き切らんとナッツが右腕を振

るったが既に剣は抜かれ、持ち主は黒い外套を纏い、ユラユラと揺れている。

「ノーモーションでの突き、かいな」

「オレの、名前を、知りたくなつた、か？」

「ハッ。ガキの我儘みたいな事言うなや」

赤い双眸を光らせた男に対して、ナッツは余裕があるように振る舞う。ビクビクと動く左腕から赤いポリゴン片が散っている。ソレを見ながらナッツは舌打ちを一つ溢す。

「——て、撤退だ！」

ナッツの状況を見たのか、シュミットが慌てたように声を張り上げた。このままでは損害——死者が出てしまう。そんな臆病風だった。

その場に置いて、ソレを責める人間は居ない。嘲笑うのは棺桶達だけだ。

「しんがり殿はボクがするよ」

「ナッツは——」

「エエ。右腕一本でもある程度どうにかなる」

アスナの言葉を即座に否定して、ナッツは通せんぼするように握った剣ごと右腕を伸ばす。その剣に重なるように黒い直剣が重なった。

「お前だけに、いい格好はさせないさ」

横を確認すれば黒づくめの剣士が居る。ナッツはチラリとソレを見て、スグに敵へと視線を戻した。

シュミット主導で逃げる討伐組。ソレを逃がす為に時間を稼ぐ。

表向きに見ても難しい仕事である。

「死ぬかもしれないで」

「死なないさ」

スグに返された言葉にナッツはニヒリと口を歪めた。その自信が何処から来るかはわからなかったが、黒の剣士と手負いの落下星。

これほど都合のイイ餌は無い。

「……下がりながら、引き寄せるで」

「……了解」

ナッツが小さく呟いた言葉にキリトは同じく小さく返した。

手負いの餌を前にして、笑う棺桶は楽しみを優先しながらも殺人に興じる。

流星の如きカウンターと名高いナッツであっても、複数人からの攻撃全てを流す事は出来ずに傷を増やしていく。黒の剣士とてそんなナッツを守りながら下がるのは至難であり、HPが削られていく。

殺せる。自身達を殺しに來た攻略組を返り討ちにして、更には上位プレイヤーである黒の剣士と落下星を殺す事が出来る。

もう少し、もう少し。惜しい所で回避される。受け流される。

「もつと人数を増やせ！」

「もう狩れるぞ！」

誰ともない声が響き、攻勢が強まる。同時にフードの取れたナッツの顔が歪み、ソレを見た笑う棺桶達が確信する。

もう少しで狩れる。いけすかないガキを殺す事が出来る。例えソレが現実でないにしても、システムで許されている行為だからこそ――。

「キリト」

「――ああ」

短いやり取りで、キリトが大きく下がった。肩で息をしたナッツが一人だけ、その場に残った。

大きく呼吸を繰り返し、ナッツは気丈にも剣を構える。震える剣先で、笑う棺桶へと向ける。

その様子に下卑た笑いを浮かべながら、笑う棺桶達は足を進めた。

「お仲間のみーんな逃げちまったな」

「うっさい」

「お前だけだ」

「うっさい……」

「お前は裏切られて一人寂しく死ぬんだよ」

「うっさい言うとするやろが！」

自身を鼓舞する為か、声を張り上げたナッツは震える剣先を下げて、腰を落とした。

「ッ……ウツ……」

顔を俯かせ、子供のようにはやくりを上げる。殿を勤めた少女に対して、笑う棺桶達は賞賛するでもなく、ただ欲求に従う。

どう殺したモノか。散々に手こずったのだ。楽しみは沢山ある。どんな声で叫ぶのか、絶望した顔はどんな顔か。

欲求が鎌首を擡げ、ソレに突き動かされるように笑う棺桶は一步を進めた。

「ッ、来ないで……！」

少女はその一步に反応して、這うように後ろへと下がった。左手を床に付け、バランスを保てずに崩れながら、剣を手放した右手で後ろに這う。

面白がって、ソレをゆつくりと追いかける。スグに取り囲む事もできた。けれどそれでは面白くない。

ゆつくりと、追い詰める。

カラリ、と音が響いた。床に何か——金属が擦られたような音。その音の発生源はナッツが手放した筈の曲剣であった。飾り布が伸び、ソレはナッツまで伸びている。

誰かが叫ぼうとした。けれどソレは最早遅い。

「——ああ、バレてもうたか」

ナッツはニヒリと歯を見せて笑い、右手に握った飾り布を引き寄せ、て剣を握った。

剣で肩を叩きながら、ナッツは大きく息を吐き出した。

「さて、笑う棺桶。君らには二つの未来がある。

一つ、抵抗をせずに黒鉄宮に入る。

一つ、抵抗をして無残に殺される。

まあ何にしても、君らがこの状況を打開する能力はないで。包圍されたこの状況からは、な」

自身達の居る足場を包圍するように、動いていた足場の上には血盟騎士団の制服を着た存在が幾つもある。更には軍と称されるアインクラッド解放軍の姿もある。

笑う棺桶は完全に包圍されていた。

「ご苦労だったね、ナッツくん」

「ドーも、ヒースクリフさん。本人が来てくれるとは思わなかったなあ」

「落下星直々の頼みだったからね」

「さいで。嬉しい事で」

ヒースクリフに対応しながら、回復POTを飲みながらナッツは笑う棺桶達を見やる。ジリジリと身を寄せ合い、何処から攻撃が来ても対応出来る様になっている。そんな姿にナッツは笑ってしまう。

「抵抗せんほうがエエで。完全無傷の攻略組相手にして、奇襲無しで勝てる訳ないやろ」

「そんな訳——」

「理解してるから、誰も立ち向かわんねやろ？ さっさと降伏しいさ。時間の無駄や」

凶星であった。勝てない事はわかっていた。だからこそ誰も攻撃をする事はなかった。

ただ流されるがまま、その場に立ち、逃げれないから、けれども降伏も出来ないから、立ち往生してしまう。

「先に可能性を潰しとくけど、POHさんが君らを助けに来る事はない。そっちの方が面白いかも知れんけど——もう逃げとる」

ナッツの視線の先には金髪の女騎士が立っていて首を横に振っていた。ナッツの舌打ちに、笑う棺桶達は理解させられる。

もう、助からない。降伏するしかない。

一人、剣を落とせばソレに続くように剣が落ち、無抵抗な降伏が示される。

「ん。じゃあ後は任せよ——」

「うああああああ!!」

ソレはある意味勇気を振り絞った行為であった。落とした剣を拾い上げ、今回の主要人物でもあるナッツへと向かった。泣きそうな顔で、必死に自身を奮い立たせ、剣を振りかぶった。

「ハア」

ため息一つ。

剣を受ける事もなく、ナッツは曲剣を横に一閃し、両腕を切断した。

ポリゴンへと変化した切り落とされた腕と突き刺さった剣。尻餅を付いて、怯える男。

「――抵抗、したな？」

愛らしい顔に笑みを浮かべて、ナッツは一步進む。

「違う、手が、滑ったんだ！ 許してくれ、降伏する！」

「さよか」

腰を床に擦り付けながら、必死に足だけで後ずさりする男を追い詰めるようにナッツは歩き、剣を振りかぶる。

振りかぶった曲剣を一閃――。

「なんで邪魔するんや、キリト」

「もういいだろ」

黒い剣が曲剣を止め、ナッツはキリトを睨む。

既に討伐戦は終わったのだ。これ以上、殺される事もないし、殺す事もない。

キリトの視線にバツが悪くなったのか、ナッツはため息を吐き出して剣を弾く。

「――せやな」

笑みを浮かべて、意識を整えるように息を吐き出した。

「――」

でもケジメはつけなアカン

次はキリトが抑える暇さえなく、ナッツは容易く男の首を切り落とした。

赤いポリゴン片へと変換される男の身体と首を見て、キリトは目を見開き、歯を食いしばってナッツを睨む。

「ナッツ！」

「なんや？ まるでボクが悪い事をしたみたいやん」

「どういう事だよ！ アイツはもう抵抗する意思はなかっただろ!？」

「でも抵抗した。ボクは最初に言うたで。抵抗したら殺す、って。だから、殺した。それが？」

」
息を飲み込んだ。

キリトの言葉がまるでさっぱりわからない、と疑問を顔に浮かべたナッツはキリトから視線を切り、笑う棺桶達へと向ける。

「改めて言うたる。その害獣以下の頭脳で理解出来たやろ。」

お前らが許されてるんは、牢獄か、死亡や。死にたいなら頭を垂らしい。その首落としたる」

少女のような死神は武骨な曲剣を片手にそう口にした。

証明されれば、抵抗など出来る訳もなかった。ドコか『攻略組なら殺しはされない』という甘えは死神によって刈り取られてしまった。

第10話

——どうしてこんな事も出来ないの!?

——私なら、もつと——!!

詰まった呼吸をどうにか再開して、目を覚ました。吹き出した冷や汗を拭う事もせず、意図せず立ち上がってしまい、疼く背中を木に押し付けながら周囲を見渡す。

「——めんなさい……ごめんなさい……」

断片的な浅い呼吸を何度も繰り返して、唾を飲み込んで、小さく呪詛のように謝罪を繰り返す。

誰も居ない。居る訳もない。

息を整えるように呼吸をゆっくりと深くして、ナッツはようやく自身のHPが減少し続けている事に気付く。右手を見れば赤いポリゴン片を散らし続け、握っている筈の柄が見える。

溜め息を吐き出して、投げナイフを返して、柄を軽く握って投擲する。真っ直ぐに投げられた刃は目の前の木に刺さり、揺れる。

震える身体を戒めるように、左腕を外套の上から強く握った。痛みは無い。感触はあるが、ただソレだけ。だからこそ、背中に何も感じない。

落ち着けるように、何度も深呼吸を続けて、ナッツは視界の端に映る時計を見た。

——いつもよりも長く眠っていた。

長く眠っていた、と言ってもたった数分程長くなっただけ。常の事を考えれば倍程の時間であったから、ナッツにしてみれば長いと言えた。

数分程、意識をハッキリさせながら身動きもせずに、ナッツはボンヤリと空を視界へと映す。暁ですらない時間の空。青と赤が僅かに混じり始める時間。

小さく息を吐き出して、ナッツはいつもの様に空を睨んで閉じ込め

た。

味わうように、ゆつくりと。視界に入れた空を飲み込んでいく。

「ん……よっしゃ」

気合を入れるにしてはやる気の欠片もなかったが、鳴らない首を曲げて、ナッツは細く、長く息を吐き出した。

雑味の多い情報達と依頼を確認しながらナッツはその日の寝床から立ち上がった。

既に震えは止まっていた。



お揃いの黒鉄色の金属鎧に濃緑色の戦闘服。十二人が隊列を組み、金属鎧を鳴らしながら一定の間隔で歩いてくる。

ようやく目的の集団が来たとばかりにナッツは立ち上がり、気軽に手を上げる。

「今回はよろしゅうに、コーバッツ中尉殿」

「失礼ながら、中佐だ。落下屋殿」

「コレは失礼。ソーバッド中佐殿」

「コーバッツだ。コーバッツ中佐」

やや苛立ちを孕んだ声にもナッツはさして気にした様子もなくケロリとフードの奥で笑うだけであった。

コーバッツはそんな小さな存在にバイザーの奥で眉間を盛大に寄せて舌打ちを一つする。

「何故、君のような輩に——」

「それは君の上司たるディアベルさんに言うべきやで？ 依頼したのはディアベルさんやし、依頼を請けたからには全うするのが《王冠の妖精》の責務やとも思ってる」

「それは理解している。が、ギルドの長である君では無くていいのではないか？」

「ウチで最前線でも戦闘出来る言うたらボクかウイードだけ。ウイードはギルドの運営で忙しいからボクや。何か反論は？」

暗に子供だから、と語っている視線も物ともせずナッツは言葉を吐き出した。コーバッツは言葉を詰まらせて、舌打ちを一つだけ漏らし、苛立ちを隠そうともしない。

「なぜディアベル殿はこんな子供に——」

「迷宮区を歩き慣れてるから。」

最悪君らを逃がす事が出来るから。

ガキに頼らな前線すら歩かれへんのが現状やから。

前の《ラフィン・ゴフィン笑う棺桶討伐戦》で貸しがあるから。お好きな理由をどうぞ」

指折りに数えられた理由にコーバッツは顔を顰める。未踏破エリアに向かうにあたり、最前線で名前を轟かせているナッツの協力は非常にありがたい。頼らずとも戦闘も出来るであろうが、安全という意味では自分達には必須である事も理解している。

が、物怖じしない子供は厄介すぎる。

「ま、納得出来ひん理由も分かるけど、君らはそういう軍に所属してる。ボクは依頼を請けた。割り切ろうや」

「む……」

「基本的にボクは君らに従うし、危険になれば君らを逃がす為に殿務めてでも逃したる。君らは損害は痛手ではないやろけど、損失は損失や」

空を見上げて、ナッツは細く息を吐き出しながら頭を振る。一個人としての戦力とアインクラッド解放軍という大勢の戦力。比べるまでもなく、後者の方が優遇されて然るべきだ。

一を切り捨てて多数を救い、そして攻勢に出られる。

そもそも今回の解放軍が前線に出る事をディアベル個人は良く思っていない。時期尚早である、という事はナッツも理解出来た。けれど、そう出来ない理由もある。外間的な、ナッツにしてみれば理解出来ない事柄ではあったけれど。

ココでコーバッツが死んだ所でナッツは何も思う事はない。ただ

死亡者のカウントが増えるだけ。大多数の内、一人が死んだだけ。

けれど、解放軍が立ち上がるとうとしている。という前提条件があれば話は変わる。守勢であった解放軍が攻勢に出れば進行速度も必然と上がる。士気も上がる。同時にソレは今回の失敗——運悪くコーバッツが死ねばどうなるか。全ては反転する。解放軍が立ち上がる事は殆ど無くなってしまふ。

「——ま、仲良くいこうや。コーバッツ中佐殿」

「……ああ、よろしく頼む。落下星殿」

故に、ナッツとしての行動など既に確定したも同然であった。

ソロでの動きを基準にしてみれば、アインクラッド解放軍、コーバッツ中佐率いる小隊の行軍速度というのは目に余るモノだった。

戦闘は効率化されず、事前に情報収集はしているだろうが不足も見える。慎重に慎重を重ねるクセに無策が目立ち、無謀とも取れる行動はしないが被害が出るであろう立ち回り。

基準がソロである事、そしてその基準で判断しているのがナッツだからこそ、まるで蠟燭を眺めているようであった。尤も、ナッツはソレに苛立ちもせずノンビリと歩幅を合わせて行軍しているのだが。

ソロと集団での行動差が出るのは仕方がない。ナッツ自身、自分の行動速度が速い事は理解している。特に地図埋めに関しては索敵技能と隠蔽技能を十全に張り巡らせ踏破していくのだから、差が生じるのも当然である。

準備不足に関して、これと言って意見はない。そもそも未踏破エリアの情報を準備しろ、と無理な事を言うつもりもない。回復POTはそこそこに持っている分自分よりも準備はしている、という感想すら溢れる。

戦闘に関しても多数だから取れる戦い方だ。誰かがミスをすれば、誰かがカバーする。当然の行為であるし、現在はナッツもその一端を担っている。

最前線を一人で歩くナッツとしては楽な速度であったが、小隊人員としては過酷と言ってもいい速度であった。

最前線である緊張。未踏破エリアという不安。知らぬ敵。減っていく回復POT。終わりのない迷宮。肉体疲労は殆どない世界であるが精神的な疲労は大きすぎる。

更に言えば、フードを被る小さな存在もその緊張の一端であった。

《笑う棺桶討伐作戦》において、見せしめとして殺しを行った少女。解放軍の一員がソレを目撃し、抵抗したと言っても、既に腕を切断されていた無抵抗の存在を躊躇なく殺した。ソレは、事実である。

仕方ない、という事も頭では理解していた。けれど、ソレは事柄の理解であり、ナッツ個人の理解ではない。

殺すことはなかったのではないか？ そんな思考が過ったが、自身達はその場に居なかった。決定的に自身達とは相容れないであろう存在。異質と言ってもいい。

「なんや？ 疲れてるん？」

「いえっ！ 大丈夫です！」

「さよか。ま、疲れたんやったら言うんやで」

こうして少女が疲れた誰かに寄って聞いていく事さえ、隊員達の緊張を煽っていた。

人殺しをした少女。効率を求め続ける戦闘方法。被害対効果を第一とした出発時の宣言。もしも「疲れた」などと言ってみる。疲れる事すら出来なくなるに違いない。

肩で息をしている隊員を不思議に思いながらナッツは首を傾げつつも先頭を歩くコーバツツに並ぶ。

「落下星殿。我が隊への命令権はない筈ですが？」

「行軍速度が下がるぐらいなら休憩いれた方がエエやろ？ コーバツツ中佐殿」

そうした苦言を言われる程度には会話は交わした。ナッツからすればコーバツツ中佐の評価は上がる一方であった。

ロールプレイなのか、元々がそういう気質であったのか。実直な――目的の為に多少の無理を顧みない事を考えれば愚直な男である。

使いやすい、という意味では実に素晴らしいとも思った。軍としての規律を重んじる存在。

自身の部下であるウィードと似通っている、とナッツは思い、その思考を捨てる。あんな小児性愛者というべきか、自身をまるで神様でも崇めるように見る存在は二人と要らない。

「ん？」

「どうかしたか？」

「……インヤ。目の前にある安全エリアに冒険者一同がおるだけや」

「ふむ。マップデータを持っているかも知れんな」

「……………あ……………譲ってくれるとは思うけど、どうやろ」

「？」

索敵範囲に引つ掛かった反応に眉間を寄せたナッツは言葉を濁らせる。ソレを疑問に思いつつナッツを見たコーバツツであったがナッツはこれ以上何も言う気はないのかフードの端を摘んで前へと無理やり引つ張った。

マップデータを埋める苦労はナッツとてわかっている。伊達にソロで動いている訳ではない。そもそもマップデータがない前提で思考しているのだから、ソレは重要ではない。

問題は、その一団である。

あの一件以来、まともな会話はない。メッセージのやり取りはするが、それでも以前よりも交流は減ったと言える。

安全エリアに入り、その一団とは逆側の端に集まった小隊はコーバツツが短く「休め」と言った瞬間に崩れるように座り込んだ。

ソレをチラリと見たナッツは「やつぱり疲れてたんやん」と溜め息を吐き出して視線を前へと向けた。どうしてか後ろで金属鎧が震えるような音が聞こえた気がしたが、気のせいであろう。

赤い武者鎧の隊。野武士のような無精髭に趣味の悪いバンダナの刀使い。

血盟騎士団の制服である白い装束に綺羅びやかな細剣。栗色の髪の毛の細剣使い。

ソレと相對するような黒い装束に身にとった、黒髪の直剣使い。

「……久しぶりだな、ナッツ」

「ん。久しぶりに。キリト」

ドコか遠慮したように手を上げたキリトにナッツは苦笑しながら軽く手を上げて反応した。

意図せず殺してしまった者。意図して殺した者。結果は同じであろうが、その意味は決定的に違いすぎた。

「ナッツ。どうして軍なんかと」

「ちよつと依頼で。アスナさんが考えてるような内容は……
あー、うん」

「いや、誰もダジャレとか思わねえからな？」

「せやけど、関西弁使^っウてるどダジャレに聞こえてしまうやん？」

せつかく飲み込んだ言葉をクラインにより掘り返されてナッツは肩を落しながらゲンナリと口を開いた。

金属鎧の音を聞いて、ナッツが横を見ればコーバッツがヘルメットを外して立っていた。

「あー、コチラ、アインクラッド解放軍のコーバッツ中佐」

「コーバッツだ」

「キリト。ソロだ」

握手をすることもなく、一定の距離を挟んだ会話であったが自己紹介は簡潔に終わった。

「それで、君らはこの先も攻略しているのか？」

「……ああ。ボス部屋の手前まではマップングしてある」

「うむ。ではそのマップデータを提供して貰いたい」

まるで当然だと言わんばかりのコーバッツの物言いにナッツは頭を抱えて溜め息を吐き出した。ここまで認識が違くと怒りを通り越して呆れてしまう。

「手前エ、マップングする苦勞が解つてソレを言つてんのか!？」

「我々は——」

「あー、はいはい。コーバッツ中佐。ちよつと、あつちで休んどき
「む?」

「こういう交渉もボクがするから。知り合いやし、中佐がするよりも

円滑に進む。中佐も疲労してるんやし、ちょっとは休んどき」

「というか、アツチに行つてろ。とは言えなかった。言えば反発してこの場に居残り、更には義務の強制を振りかざしたであろう。」

「暫し考えた素振りを見せ、「では頼む」と短く、どこか納得してなさそうに応えたコーバツツにナツツは小さく息を吐き出して安堵する。キリトの性格だけを考えればコーバツツに任せても問題はなかったが、アスナとクラインが居れば話は別である。あるデータを貰える事もないかもしれない。ソレは避けるべきである。」

「離れたコーバツツを見送り、ナツツはフードを外してその顔を晒す。萌黄色の髪が迷宮の明かりに照らされる。」

「あー……そのスマンね」

「ナツツが謝る事じゃねえだろ」

「ま、ほら。アチラさんは軍としての矜持もあるんやろうし」

「しかしなあ」

「ココはボクの顔に免じて、でアカン？」

「ニヘラと弱々しく笑ったナツツにクラインは何も言えなかった。決して見惚れていたわけではない。これだけは真実である。」

「それで、ボスは覗いたん？」

「ああ。パツと見の武装は大型剣だけ。特殊行動もありそうだ」

「ふーん……」

「ナツツ。ボスに挑むなんて言わないわよね？」

「ボク個人は挑むつもりはないって」

「ホント？」

「心配性やなあ」

「眉尻を下げて情けなく笑うナツツにアスナは何も言えない。挑むつもりはなくても、心配は心配だ。」

「特にナツツはアツサリと自身を切り捨てる。以前の討伐戦でも囚役である事は後で聞いたが、殿を申し出た。そして極めつけは《見せしめ》である。ナツツがやる必要はなかった。けれど、誰かがやる必要はあっただろう。」

「……マップデータは譲るよ」

「ホンマに?」

「どうせ渡さなくても、お前なら行けるだろうし。安全を考えれば渡すべきだろ」

「過分な評価やで」

トレード画面を開きながらナッツは苦笑する。キリトはキリトで真面目な顔でナッツを見ながら、少しだけ目を伏せてからナッツを真っ直ぐ見つめる。

「ナッツ。お前は——大丈夫なのか?」

「——わかってたことやからね。ま、問題はないよ」

「……そうか」

「うん。ありがとう」

キリトの言葉を飲み込んで、ナッツは力無く笑いながらフードを被って踵を返す。

そうナッツはわかった事だ。周知で人を殺せば針の筵に座らされるという事は。そこにナッツは後悔はない。自身の作戦に組み込まれた事でもあった。

問題も何もない。

ナッツは細く息を吐き出しながらトレードしたマップデータを確認していき、ある程度のルートを絞り込んでいく。

コーバッツはようやく戻ってきたナッツを見下げて問いかける。

「どうだ?」

「ん。万事問題なく」

「では行くか」

「……立ち向かうつもりかいな」

「ああ、当然だ。我々は一般プレイヤーを解放するために戦っているのだから」

そこに意地があるのか、退けない何かがあるのか。ナッツは目を細めてコーバッツを見たけれどバイザー越しには何も分かりはしない。

唯一わかっているのはコーバッツが退く気もなく、無謀な挑戦をしようとしている事という事実だけである。大きく息を吸い込んで、思考に埋没し、溜め息で息継ぎをしたナッツは口を開く。

「……………ま、エエわ。ただ、ボスに挑戦するんやったら引き際の判断はボクがさせてもらおうで」

「……………我々はこの程度で根を上げるような軟弱者ではない」

「現実性の違いや。突破だけが攻略やない。必要な情報を持ち帰る事も攻略の一手や。」

自分の事やけど、君らが死んだら王冠の妖精達の評価にも関わってまう。今のところ依頼の達成率はイイ方なのに、ギルド長自ら下げてもうんも問題やし」

「……………了解した」

「ん。どーも。折れるべき所で折れる事の出来る矜持でよかったわ」

へにやりと口で笑みを作ったナッツはコーバッツの部下達を一人一人眺めながら、大きく息を吐き出した。

「ほな、行こか」

第11話

ボス部屋までの道程はアツサリと踏破した。それこそ、先程の安全エリアでの休憩を挟んだことも原因なのであろうけれど。

灰青色の巨大な二枚扉を撫でながらナッツは小さく息を吐き出した。

損傷率は悪くない。けれど、退くべきである。

客観的に導いた答えにナッツは頭の中で否と応える。現在の自分が口を出した所でコーバッツは退かない。

既に士気向上の為に部下たちを鼓舞しているコーバッツを視界の端に入れる。

幸いな事に、退避のタイミングは譲ってくれた。今までバケモノか鬼かを見ているかのような部下たちの視線が、助けを求めるように続ったモノへと変化している。

「ん、じゃあまずはその二人。転移結晶の準備を」

「え？」

「何故だ？」

「この中で比較的損傷が大きい。回復POTで回復を待つのもエエけど、そもそも帰る前提や。あと、ボス部屋がトラップ部屋みたいに結晶阻害とかあった場合、後々の指示で混乱するやろ」

当然のように理由を述べたけれど、耐える事を目的とした戦闘だ。回復POTを無駄に使う事もないし、それならば他に渡して置くべきだ。

細かい指示、それこそ回復POTの分配なども口を出し始めたナッツをただ見るだけのコーバッツ。そんなコーバッツの視線に気付いたのかナッツはバツの悪そうな顔をする。

「なんや、領分以上の指示言う気？」

「いや、こう言っってはなんだが。……見くびっていた」

「ハッ。伊達と酔狂で最前線に居るからな」

鼻で笑いながらも各自の持ち物の確認をしたナッツは満足そうに頷いた。それこそ多くもない自分の回復POTも渡しているから、生

存率も上がる事だろう。

「ん、命令系統分けるんもアレやけど、戦闘中は任せるで」

「了解した」

ヘラリと笑ったナッツはフードを深く被り直してバレないように息を吐き出した。

本当に命令系統は分けたくはない。退避の命令もコーバッツに任せてもいいのならば、任せてしまいたかった。けれど、ソレは無理だ。初見のボス相手に勝つつもり、或いは善戦出来るだろうと思っっているコーバッツには任せられない。

実直だからこそ、任務を完遂したくなる。愚直だからこそ、部下の疲労と自身の疲労を鑑みない。

逆にナッツに全ての指揮系統を任せるのならば、それこそそのまま回れ右をして撤退を指示した。ボス部屋までの情報で大きな成果である。それこそキリトから取得したモノであっても、迷宮区の敵MOb情報は必要だ。

ボス部屋に挑む事が命令だったとすれば、それこそ自身だけでいい。幸い、ソロよりも楽にこの場に居るのだから、常よりもいい条件で情報収集することも出来る。

ナッツは来ることもない近い未来を想像して、否定する。考えた所で意味もない。現実は今であるし、そして未来はソレではない。

「では、征くぞ」

コーバッツの両手が扉へと触れ、両開きに開かれていく。容易く、滑らかに動いた扉はコーバッツの手を離れて重々しい音を響かせて衝撃と共に止まり、大きな口を開いた。

迷宮の光すら飲み込む暗闇が広がった部屋。ふわりと頬を撫でる冷たい空気。誰かの生唾を飲み込んだ音が、誰かの鼓膜を揺らす。

コーバッツですら緊張を顔に滲ませて、けれども実直すぎるその性格故か、一步を踏み出した。

今にも臓腑に入るのであろう生贄を歓迎したように、音を立てて青白い炎が灯される。左右に一つずつ灯されたソレは連動したように奥へと向かう。

入り口から真っ直ぐに伸びる青白い炎に挟まれた道。最後と言わんばかりに大きな火柱が吹き上がり、部屋全体が青白い光に照らし出された。

——広い。

部屋の壁を見渡しながらナッツは単純な思考に落ち着いた。キリトから送られたマップで確認はしていたけれど、自身の瞳で見てもその感想を抱くことは出来た。

自身の周りを確認すれば、僅かに手を震わせる者。強く武器を持つ者。構えた盾を震わせる者。僅かに隊列をズラして一步下がった者。その表し方は様々であったが極度の緊張を把握するには十分だった。

火柱が揺れ動き、その後ろから巨大な姿が現れる。見上げる程の体軀。ソレを支えるべく、敵を殺すべく発達した筋肉。筋肉を包み込んだのは炎にも負けぬ深い青。心臓まで刃を届かせない分厚い胸板の上には山羊の頭が生えていた。

頭の両端からは捻くれた太い角が後方にそそり立ち、まるで炎を宿したような青白い瞳は確かにナッツ達を捉えていた。濃紺の毛に包まれた下半身も人間のソレではなく——叩きつけられる絶望と緊張は正しく悪魔と言うに相応しい姿形であった。

ボスの証である定冠詞のある名前。
《The Gleameyes》のカーソルを読み取ったナッツはコーバッツへと目配せをする。

ナッツの視線を受けたコーバッツはまるで何も思考出来ないように停止し、一拍を置いて起動を果たした。突き動かされるように、盾と剣を構え、自身を鼓舞する。

「——全員、突撃イ!!」

「ッ、オオオオオオオオオオ!!」

コーバッツの指示に呼応し、隊員達が叫ぶ。恐怖に打ち勝つべく、振り払うべく、身体ではなく喉と心を奮わせる。

対してナッツはその一団へと入れる事はなかった二人の肩を叩き、合図する。驚きを顔に浮かべた二人に対して短く、端的に命令だけを与える。

「君らは撤退」

「りよ、了解」

震えていた手でカーソルを弄り、何度かミスをしながらも二人の手には転移結晶が握られた。しかし、反応はしない。片方だけならば、転移の定員オーバーという可能性もあったけれど、ソレもない。

絶望に塗りつぶされた顔をした隊員を見ながら、ナッツは自身の回復POTを二人へと分配する。

「コレを持って君らは撤退。迷宮区を走り抜けて、たぶんまだ居るやろうキリト——さっきの安全エリアに居ったソロに救援を求めて」

「し、しかし」

「他の事は気にせんでエエ。君らの仕事はそうなたただけや。もしも危険なら転移結晶砕いて、ホームに戻って情報拡散をする事。エエな？」

「は、はい！」

何度かコチラを振り返りながらも走り出す二人の背中を見送り、ナッツは息を吐き出した。

転移結晶が使えない。結晶の類は全て封じられたと考えるべきだろう。ボス部屋なら——初めてか。

敵の攻撃は斬馬刀によるモノ。大型剣のモーションはある程度覚えてはいるけれど、大きさの違いからタイミングもズレるだろう。

情報を整理しながら、ナッツは愛剣を抜く。深緑の飾り布が揺れ、床に擦れる。踏み込んで、自身に速度を加算する。一步で半分、二歩あれば接敵する事も出来た。

「スイッチー！」

震えそうな声でそう言った攻撃班に代わり、ナッツが躍り出た。同時に《挑発》をする。スキル効果により、青白い瞳がナッツへと向いた。

自分だけを狙う状態であるならば、それはナッツの本分である。相手を注視する。全ての動作を見逃すつもりなどない。剣の動き、足捌き、呼吸、動作所要時間、予備動作と思われる動き。

呼吸すらも忘れて、ナッツはその全てを視界に収まるグリーンムアイ

ズへと捧げた。

振り下ろされた巨大な斬馬刀を《フォレストキール》で受け、横へと流す。威力を物語るようにフードを撫でる剣圧すらもナッツは意に介さない。愛剣の消耗具合からの威力を計算しながら、僅かに下がる。

流され、床板を砕いた斬馬刀を引き抜きグリーンアイズはナッツを——ブツブツと何かをフードの中で呟きながらコチラを観察する小さな存在を睨む。

憤慨したのか、グリーンアイズは仁王立ちになり雄叫びを上げる。怒りの度合いを表すように地面が揺れ、その口からは眩い噴気が撒き散らした。

青白い輝きに包まれたナッツの眉間が歪む。

特殊行動の動作は十全に理解したが、発動する契機は不明。HP減少のデバフ。毒よりも減少率は軽微。

迫る攻撃を受けて流しながら、ナッツはモーションを読み取っていく。両手用大剣技を基礎に僅かにアレンジを加えた技。

削られていくHPバーを認識しながらも、その全ての攻撃を受け流す事に集中していく。剣戟の音と架空とも言える鼓動だけが鼓膜を揺らす。

受け流される攻撃に嫌気が指したのか、それともナッツの立ち位置が起因したのか、グリーンアイズは大きく斬馬刀を振り上げる。斬馬刀に光が灯り、スキルの使用を合図する。

勢い良く振り下ろされる斬馬刀はスキルの光を軌跡として残す。

「スイッチッ！」

その斬馬刀の腹をスキルで弾き飛ばしたナッツは隊員達と入れ替わるように後ろへ跳んで移動する。止まっていた呼吸を再開させて、頭の中で秒数を数えながら、防御班として回復していたコーバッツに寄る。

「次の攻撃が終わったらそのまま撤退や」

「なっ!?!」

「このボス攻略は無理や。ボスの足止めはボクがするよって、逃げろ」

「ッ！ 我々はまだ——」

「余裕がある。だからこそ、逃げなアカン」

この決定を覆す事は絶対に許さない。そう言わんばかりのナッツの言葉にコーバッツは歯を食いしばる。

確かに撤退の命令権は渡した。けれども決断が早すぎる。この悪魔に恐怖し、臆病風に吹かれた。『落下星』と持て囃されても、所詮は子供である。

「わかった」

「ん」

攻撃班の「スイッチ」という言葉に反応して、コーバッツを含む盾持ち達が敵の攻撃を受ける。

何が『落下星』だ。何が「ボス攻略は無理」だ。何が、何が、何がッ

!!

頭に血が昇ってしまったコーバッツは隊員から貰った回復POTを飲んでいるナッツを視界に入れて余計に憤ってしまう。

だからこそ、ソレを見逃した。

「ウグッ！」

斬馬刀の横腹がコーバッツを捉え、すくい上げられるように弾き飛ばされ、悪魔の頭上を越えて地面へと打ち付けられる。

自身の身に何が起きたのかコーバッツは理解出来なかった。回転していた視界。景色が早送りの動画のように変化して、いつの間にか地面に押し付けられていた。点滅しているHPバーだけが、自身が攻撃を与えられた事を明確に示している。

「——撤退！」

そんなコーバッツにナッツの命令が届いた。自分が攻撃をくらったことで撤退を早めたのだろう。

だからこそ、コーバッツは絶望に染まる。脱出すべき扉と自身の間にはあの悪魔が立っている。その猛攻を潜り抜けて脱出、などという甘い考えなど出来る訳がない。

腰を抜かし、絶望し、死を悟る。足掻く事すら、あの悪魔の前では許されない。

コーバッツは理解した。あの小さな人殺しは自身を餌に逃げ果せるつもりだ。

仁王立ちし、地響きを伴った雄叫びを上げた悪魔がコーバッツへと向き、その足を進める。

一步進む毎に僅かに揺れる地面にへたり込みながら、コーバッツは悪魔を仰ぎ見る。青白い瞳の悪魔はコーバッツを見下した。

「は、ハハハ……」

死ぬというのに、コーバッツは笑った。笑うしかなかった。

頭の中は否定と罵詈雑言が満たされたが、ソレを口にはしなかった。先に逝く自身だからこそ、ソレを遺す訳にはいかなかった。

大人として、男として、最期の矜持を抱き、コーバッツは瞼を閉じて、審判を待った。

待てども来ない攻撃を訝しみ、コーバッツは瞼を上げる。視界には悪魔の背中が映った。振り下ろされる斬馬刀と激しく音を鳴らす剣戟。

「ちゅ、中佐!」

「お、お前たち、撤退ではなかったのか!」

「ハイ! 中佐を助けて撤退です!」

ならば、撤退を命じた本人はドコに居る。応えるまでもない。コーバッツ達にターゲットが向かないように時折《威嚇》を混ぜながら、悪魔の猛攻を捌き切っている。

コーバッツは震えて、その震えを止めるように剣を握り直す。見えているのは敵の背中。そして自分達は隊列を組める程度に残っている。

そんな思考に塗りつぶされそうになっていたコーバッツの視線が一瞬——ほんの一瞬だけナッツとぶつかる。まるでその思考を読み取ったように、咎めるように、罰するように。

錯覚にも思える一瞬。それこそナッツはグリーンムアイズの猛攻を捌きながらである。コーバッツの気のせいかもしれない。けれど、確かに見られた。

「——て、撤退だ……」

「了解」

弱々しく呟いたコーバツツに続くように隊員達は動く。部屋の外周を移動し、悪魔に気付かれないように、入り口へと向かう。

ナツツの戦闘を見ていたコーバツツは移動しながらも息を飲み込んだ。あの猛攻を捌ききつている事もそうであるが、悪魔が自身達に常に背中を向けているというのも十二分に異常であった。

剣戟の音が激しく響く部屋を出る間際、コーバツツはナツツへと頭を下げた。隊員達も、同様に。

ソレは自身達を逃し、そして死ぬであろう存在への出来うる限りの手向けであった。

入り口から出ていったコーバツツ達をグリーンムアイズの脚の間から見送ったナツツは斬馬刀を大きく弾き、少しだけ距離を開けて、落ち着けるように息を吐き出した。

これで自身も逃げ切れれば、上々であるが――。ナツツは思考を捨てる。もはやそんな事は出来ない。

運良く、キリト達が来て助かる場合もある。けれどもソレは望み薄であった。救援を求めたであろう二人は恐らく転移結晶を使った筈だ。ナツツはソレを咎める事はしない。極度の緊張から解放され、そして絶望に僅かに触れた。今すぐにでも逃げ出したかっただろう。

だからこそ、救援は望めない。

愛剣を視れば、耐久値も殆ど無い。「これでも耐久に極振りしているのだけれど……」と愚痴を言いたくなかったが、口を噤む。きつとピク髪の鍛冶師は顔を真っ赤にして怒るに違いない。

アスナは自身が死ねば、悲しんでくれるだろうか？ きつと悲しんでしまうだろう。クラインは義憤に駆られ軍に何かを言うかもしれない。ウィードはきつと平常運転で妖精達へと引き継ぎをして、追い掛けてくるかもしれない。キリトは悲しむだろうけど、ソレも踏み越えてくれるだろうか？

ナツツは口元を緩ませる。

「なんや、結構工工人生やったな」

加藤夏樹に自慢出来るモノならば嫉妬されるかもしれない。ナツツは歯を見せて笑い、剣を構える。

決死、というには常にそうだった。死を恐れた事はない。生を惜しんだ事もない。ただ在るように在る狂人。ソレこそがナツツだ。

自身の役柄を再度理解し、ナツツは息を吐き出し、悪魔の巨軀を見上げた。

「死ぬ予定やけど、足搔かせてはもらうで」

宣言する。

救援が来ない事は理解している。防御に限界が来るのも理解している。相手のHPバーを削りきれない事も理解している。

けれど、ソレがどうした。そんなモノ、無意味でしかない。

ナツツは笑みを浮かべて、その一步を踏みしめる。相手の攻撃エリアへと身を移動させ、立ち止まり、悪魔をその視界に収める。

行動を判断し、体を同時に動かす。最早、扉と護衛対象の位置など考えずともいい。ただ純然に相手の攻撃を捌き、反撃の機を逃さなければいい。

ジリジリと身を焦がすようなリスク。攻撃を流す度に減少する耐久値。吐き出された噴気によるHPの減少。

「ハハ、アハハハハハハ!!」

ナツツは——加藤夏樹は生きていた。この危険も、命の減少も、全て、全て全てスベテその証明であった。

他人ではなく、人形でもなく、物でもなく、『加藤夏樹』が——ナツツが今この瞬間に生きていた。それだけで十分だった。

誰も邪魔などしない生。唯一許された自由を満喫するように。いつか見ていた羽ばたく鳥のように。夢ですら見なくなった世界。

溢れ出た笑いを止める事など出来ようか。神に垂らされた蜘蛛の糸に絶望などしようものか。

今まで経験してきたどの人生よりも確実に、明確に、想像でなく現実に、妄想ではなく実感して、夏樹は生きている。

だからこそ夏樹は理解している。生の終わりは——物語の終結は

死である事を。そう身に刻み込まれている。

生を惜しみ、涙を流す事はない。ソレはナッツの役柄ではない。死を恐れ、震える事はない。ソレはナッツの役柄ではない。

斬馬刀を弾いた《フオレストキール》の刃がまるでガラスのように砕け散った。愛剣の死を惜しまんばかりにそのポリゴンを身体いっぱいに浴びたナッツは尚も笑っていた。

「——スイッチ!!」

それは既に二年も続けた行動であった。だから身体も反射的に動いてしまった。自分と入れ替わるように両隣を白と黒が通り過ぎた。見知った後ろ姿を見つめながら、ナッツは瞬きを何度かして首を傾げる。

どうしてキリトとアスナがココにいる？

「大丈夫か！ ナッツ！」

「わあ、なんでクラインさんまで居るん？」

「なんで、つてそりゃあ助けに来たに決まってるんだろ！」

「……………ええ」

自分で救援を頼みながらもナッツはその判断に呆れた。呆れてしまった。いや、確かに喜びもあつたけれど、風林火山とキリトとアスナ、そして主要武器を失った自分。逃げるにしても人数が足りなさすぎる。

「——スイッチ！」

「つと、お前は後ろ！」

キリトの声に咄嗟に反応しそうだったナッツを手で制したクラインがキリトとアスナに入れ替わる。

飛び出すタイミングを逃したナッツは肩を落として、そして困り顔で目の前に迫ってくるアスナをどう避けようかと視線を動かす。

「ナアツツウ？」

「す、スンマセン……………わっぷ」

「生きててよかった……………」

アスナに抱きつかれた事でナッツは驚きの声をあげながら両手を

上げる。目の前にはコード発動を促すシステムメッセージが出て
いるが、押すことはない。

離されたアスナは「説教は後」と言い、目に見えて肩を落としてシヨ
ボクレたナッツはキリトをジト目で見る。

「それで、勝算は？」

「……ナッツ。何秒持ちこたえられる？」

「ちよつとキリト君!？」

「『フォレストキール』が在るんやったら何秒でも——つて言いたいけ
ど」

ナッツは手に持った柄だけになってしまった愛剣を見せて肩を竦
める。その柄だけの剣を見てキリトは何かを言いたげに口を開きそ
うになったが、噤み口元に手を置いて思考する。

その思考を打ち切るようにナッツが更に口を開く。

「五回——いや、六回だけ。攻撃は流せる」

「六回か……」

「攻撃のパターンにもよるけど、十秒とちよつとぐらいやな」

「十分だ。頼む」

「ん、了解」

「ちよ、ちよつと、武器も無いのにどうやるつもりなの!？」

「主要武器が壊れただけやよつて……」

ナッツは慣れたように手元を弄って剣を一本取り出す。装飾も、飾
り気も、何もないただの三日月刀^{シミタ}。

「武器はまだあるよ」

その無骨さを見て、アスナは目を見開いた。

魔剣と呼ばれるモンスタードロップに感じる重圧。

鍛冶師産の剣に感じる遊び心。

そのどちらも無い。

何か口を開く前に、ナッツは悪魔へと歩き出す。

「ああ、先に言うけど、絶対に邪魔はせんといてね？」

「な、ナッツ！」

「入るタイミングは任せるでー」

キリトの了解の声を聞く事もなく、ナッツはその一步を踏み出した。スイツチ、と一言だけ叫んで悪魔の前へと立つ。一步進めば、悪魔の射程距離である。

だからこそ、ナッツはその外套を外した。スルリと身を滑るように落とした外套を意に介さず、ナッツは大きく息を吸い込んで、吐き出す。

そして、一步を進んだ。

迫る斬馬刀を見切り、三日月刀で受け流す。なるべく武器を労つた、無理のない、不必要な力すらもない、無駄を省ききつた受け流しであった。

けれど、武器はガラスを割るように碎け散る。

再度斬馬刀は振られる。横薙ぎに振られたソレを見つつ、ナッツは右手の指を動かす。既に慣れた動作だった。

右手に新しく船刀カトラスを握り、身を背中側へと倒しながら、斬馬刀を上へと弾いた。その衝撃により船刀は碎け散り、ポリゴン片をナッツへと撒き散らせた。

「スゴイ……」

ソレはアスナの眩きであった。

悪魔の猛攻を流す度に散るポリゴンがナッツを包み込む。

斬馬刀を受け止めた剣先から碎け散っていき、寸での所で流しているナッツとしては呼吸も出来ない。

これで四度目。消耗品である武器は残り一つ。その一つを手元に出しながら、ナッツはただ正確に相手の攻撃を見切っていく。

避けれる攻撃は受ける必要もない。既に十秒は過ぎている。流せる攻撃はそこそこある。受けれる攻撃は少ない。弾ける攻撃はもつと少ない。

なるべく自身の情報を削って、グリーンムアイズの攻撃を誘導しているが、限界もある。

完璧に、カウンター判定を付随して、弾ける攻撃は――

大きく構えて振り下ろされる斬馬刀。ソレを視界に入れてナッツは噛いを浮かべる。

——これだけである。

身を捻り、船刀に光が灯る。まるで独楽のように身を回転させて、ナッツは斬馬刀の横腹を斬り弾いた。

「スイッチ!!」

片足だけで、不器用に後ろに跳んだナッツと入れ替わり黒の剣士が悪魔へと接近した。その背中には黒の魔剣と白い刃の剣が背負われていた。

ナッツはソレを見惚れて——受け身を取るのを忘れて、背中から思いつきり地面に打ち付けた。痛みは無い、ただ集中の倦怠感からか、ボンヤリと視界が白い。

遠くでアスナとクラインの声が聞こえたが、ナッツは適当に手をヒラヒラとさせて無事であることを示し、そのまま天井を見つめた。

まるで空のように、遠い天井である。

第12話

第七十四層のボス攻略から翌日。

キリトは精神的に参った身体をベッドへと転がしてそのまま泥の様に眠っていた。

朝日が差し込み、瞼を焼かれる事で微睡みへと引き上げられ、ぼんやりと意識を覚醒していく。

視界の下部に設置されている時計で時間を確認して、大きく息を吐き出して布団を被り直す。《強制起床アラーム》で起こされないのは久しぶりかもしれない。

寝起きが悪い訳ではないが、昨日の戦闘を思い出せばもう暫く眠っていても罰など当たりはしないだろう。

そんな、誰に言ってるかわからない言い訳を頭の中で唱えながら、キリトはまたゆつくりと瞼を降ろしていく。降ろしていく最中、自身の視界の端——新着メッセージのアイコンが点滅している事に気がついた。

眉間に皺を寄せながら、攻略情報だったならば必須である、ということなんともゲーマーらしい寝惚けた思考でメッセージをタップした。

『脅威の五十連撃!? 二刀流剣士の謎に迫る!!』

そんな週刊誌のような冒頭を読んで、キリトは目を点にした。未だに思考は正常に回っていない。半ば現実逃避を決め込みたい気持ちであった。

が、そうも言つてられず視線だけで文章を——恐らく情報屋が共同して全プレイヤーに発信されているであろう記事を読んでいる。

曰く『軍の大隊に大きな損傷を与えた絶望的な悪魔』、曰く『その悪魔を単独で打ち破った二刀流の剣士』、曰く『神速の五十連撃』。

いいや、《スターバースト・ストリーム》は正確には十六連撃である、この情報には間違いがあった。そんな事は関係無い。

「……………ええ」

キリトはとりあえず全く回転しない頭をどうにか起床させて、頭を抱えてからもう一度メッセージを頭から読んだ。文章は変わること

はない。読めば読むほど週刊誌のようだった。

まるでアイドルが逢引してソレを報じられている様な、そんな文章だった。アイドルの立場であるキリトからすれば堪ったもんじやないけれど。

そもそも、この独占インタビューなる物を受けたらしい緑髪の美少女は一体誰なんだ。少なくともよく知る鬼畜ロリ(♂)はこんな語り口調ではない。いや、この記事は恐らくあの鼠が添削しているから違うと言えば違ふのだろう。

「とても格好良くて。私、好きになっちゃいそうでした(ハート)」なんてあの鬼畜ロリが言う訳がない。とてもつもなく甘ったるい声で送られてきたとしてもキリトは信じない、トキメカない。絶対にだ。

幸いな事に、ある程度のプライバシーというモノは守られている様で、キリトの名前は無い。それこそ緑髪の美少女の名前も匿名だ。

果たして美少女は誰なんだろうか。少なくとも七十四層のボスエリアに居たという事はトッププレイヤーに違いない。アーヤバイナーダレダローナー。

大きく息を吐き出して、キリトは現実逃避から戻ってきた。まあ誰の名前も出てないから情報屋達がせっせと頑張っている事だろう。ナッツもアルゴも最低限のプライバシーというモノは守っているだろうし……。

ハハハハハ、と乾いた笑いを浮かべながらキリトは布団から急いで起き上がり、カーソルを素早く操作して身支度を整えた。現実逃避している脳とは別にある種の脊髄反射で肉体は動いていた。

自宅から出る為に玄関の扉へと手を向け、手を止める。踵を返して、何度か自分に「落ち着け、落ち着くんだ」と言い聞かせてながら玄関とは逆側の窓から外を覗く。NPCと僅かなプレイヤー達。些か早い起床であつたからか、人通りは普段よりも少ない。

窓を静かに開けて、足を掛け、飛び出した。そのまま自身のパラメータに物を言わせて着地して、影から自宅の玄関を見る。人だかりが出来ていた。

あのまま出ていたならばどうなっていたこと。考えるに難くない。

果たして自宅の玄関を確認するのに態々隠蔽スキルまで発動して警戒する男は居るのだろうか。

安堵の息を吐き出したキリトは決めていた予定通りにエギルの店にてドロップ品の鑑定を任せる為に踵を返した。

「居たぞー・黒の剣士だー!」

そんなキリトの背中を突き刺すような声が響いた。

ビクリと肩を震わせて、キリトは冷や汗を流しながら背後を確認した。人の群——いいや、軍がソコにはあった。一つの目的に愚直な嫉妬に塗れたゲーマー達の欲望が、ソコに固まっていた。

キリトは一つだけ深呼吸をして、前を見た。後ろに活路は無い。前にこそ活路はあるのだ。

「追えええええええ!!」

「うおおおおお!!」

群集がグリーンアイズにも劣らない低い雄叫びを上げて走り出すと同時にキリトも走り出した。

やばい、アレはヤバイ。

キリトは捕まれば死すらもヌルい事が起きるのだろうか、と直感し、逃げた。転移結晶の準備もしながら、逃げた。

頭に思い浮かんだのは、ドルマークが描かれた太った布袋を持ち、黒い笑いを浮かべている鼠と妖精であった。

「おお、ぶくろーさん」

「ナッツ……お前!」

なんとか逃げ切ったキリトを雑貨店で待っていたのは今回の仕立て人とも言える鬼畜ロリであった。

いつものフード付きの外套は装備しておらず、長袖のシャツに長ズボンにブーツというなんとも味気ない格好である。申し訳程度に腰に巻かれた細いベルト二本と曲剣の鞘だけが後ろ腰に揺れているだ

けである。

椅子に座ってケラケラと笑っていたナッツに対してキリトは苛立ちを隠す事もせずに声を僅かに荒げた。

「おっと、ちよつと待った。先に言うけど、コルの為に情報を売った訳やない。当然、キリトを弄くり回して愉快な感じにしたかつた訳でもない」

「……本当か？」

「当然。まあ、そこらの説明もしたいし、二階に行こか」

「……ああ」

「勝手に話を進めてるが、オレの店なんだが？」

「普段の販売に色つけて払うで」

「鑑定代を弾むよ」

「よし、お茶の準備をしていくから二階に先に行つてろ」

悪役レスラー顔をニツと笑わせた店主を尻目にキリトとナッツの二階に上がった。普段から偶に使うからか、慣れた様子で扉を開き、ナッツはソファに座り、キリトは揺り椅子へと腰掛けた。

疲れたように身体を揺り椅子へと預けたキリトは大きく溜め息を吐き出し、ナッツはクスクスと笑う。

「なんや、お疲れやね」

「誰のせいだと思ってる、コノヤロー」

「すまん。ま、許してとは言わんよ」

少し目を伏せてそう言ったナッツに対してキリトは追撃する事を止めてしまう。悪気が無い訳ではないのだろう。悩み、迷い、アルゴにまで相談して出したであろう結論。

ソレが友人である自分を追い詰める事になったとして、ナッツからすれば打たなくてはいけない一手だったのかもしれない。

「……アルゴさんに相談した時はしつかりと情報封鎖までするつもりやったんや……」

「……そっか」

「ただ、こう……話し合ってる内になんか面白うなつてしもてな」

「……ん？」

「後は雪だるま式に週刊誌風になるのが決まって、気の置けない情報屋の人集めて、あんな感じに——」

「待て待て待て！ 悪意全開かよ！」

「他意はないんやで……まさかこんな面し、悲しい事になるなんて！」
「絶対知ってやっただろ！ お前！ そんなまるで悲劇のヒロインみたいに振る舞うのやめろ！ 悲劇を受けてるのは俺だよ！」

「許してとは、いわんよ。恨んでくれてもいい……でも、仕方なかったんや……ボクとアルゴさんの力では……ッ！」

「泣いてるマネしても許ささねえよ！ 何キレイに纏めようとしてるんだよ！ 仕方なくなかったよな!? 明らかにお前とアルゴの楽しみで情報統制してるよな!？」

叫び倒して肩で息をしているキリトは変わらず顔を両手で覆って泣いている演技をしているナッツを睨んでいる。部屋に入ってきたエギルは口をへの字にして、わかりやすく息を吐き出す。

「まあキリト。ナッツも悪気があった訳じゃねえんだ」

「いや、絶対あるだろ」

「ま、そんな感じの冗談は置いとくとして」

「………たちの悪い冗談だな」

「まあまあ。実際、楽しみも何もない話やから。ちよつとぐらいいは笑える方がエエやろ」

「笑われる側の俺として悲しいだけなんだけど」

「ちよつとしたアイドル気分を味わえたやろ」

「ゴシツプ誌に乗った、って付けとけ」

怒鳴り疲れたのか、揺り椅子に深く座って脱力したキリト。ソレを見て、エギルとナッツは笑みを浮かべている。

友人とも呼べる人達に笑われて、ドコか納得出来ないままキリトはそもそもの目的である鑑定をエギルに依頼していく。当然、普段よりも鑑定料を弾んで。

「毎度ー」と気持ちのいい笑みを浮かべた悪役レスラーはその場で鑑定をし始め、ナッツとキリトはカップに入れられたお茶を一口飲み込んだ。飲み込み、眉間に皺を寄せる。

「なんというか……スゴイ味だな」

「飲めたらなんでもよくない？」

「ナッツはそういう所だけは淡泊だよな」

「……ま、ソレはエエやろ。本題入ろ」

カップを両手で包むように持ちながら、ナッツは真面目な顔をすする。ソレに倣うようにキリトは佇まいを直す訳でもなく、揺り椅子を鳴らした。

「最初に、キリトの情報開示をこんな形にしてゴメンナサイ。一応、今回の代表として謝罪します」

「お、おう……別にもう怒ってないさ」

「それはよかった。何回も言うてるけど、許してもらわんでもいい。恨む権利はあるで」

「……じゃあ適度に恨んどくよ」

「……………キリトってたまーにコミュカ上がるよな？」

「おっと」と悪戯妖精は口元に笑みを浮かべてクスクスと笑う。そんな様子をやや疲れたように見ながらキリトは話を促す。

「今回の一件。表向きの目的——攻略組視点での目的は中層で燻つてる人らを煽って上層へ持つてくる事やね」

「表向き？」

「あー……それは後で説明するわ」

「そうか……それで、中層のギルドを前線に持ち上げるのはわかったけど。実力不足じゃないのか？」

「レベルに関しては今回の一件があるから軍の人らに融通を効かせた。コーバッツとディアベルさんを中心に協力もしてくれてる」

「……なんかスゴいな」

「《王冠の妖精》もある程度はフォローに回れるし……。たぶん、こつからボス戦が余計に厄介になるやろ」

「……結晶禁止領域か」

「お前らそんな所でボス戦したのか……」

「無事やったから儲けもんやね」

エギルの驚いた顔を見ながらケラケラと笑うナッツ。もしも助けが少しでも遅れていたならば——、とキリトは考えて頭を振る。考えでも仕方がない、考える意味の無い事だ。

「そんな感じで戦力増強の為、って言うのが表向きの理由」
「それで、裏側は？」

キリトに急かされたナッツはコホンと一つ咳払いをして、佇まいを直す。瞼を閉じ、呼吸を少し深くして、何かを読み込む。瞼を静かに上げ、ナッツは光の灯らない瞳をキリトへと向けた。

「……おめでとうございませす、黒の剣士——キリト様。今日より、アナタ様はプレイヤー全ての導き手、勇者となるのです」

まるでRPGの最初で王に言い渡されるように、ヒロインである巫女に祝福を受けるように。どこか神々しさと、儂さを纏ってナッツはキリトに微笑んだ。

呆気にとられるキリトとエギル。微笑んでいたナッツはその雰囲気霧散させるようにケラケラとした人懐っこい笑みを浮かべた。

「ま、概要はそんな感じ」

「コイツは驚いた……名女優じゃねえか」

「——……あー、まあ、ハハハ」

まるで巫女か、女神を思わせた演技を褒めるエギルにナッツは困ったように笑う。

キリトは迷う。エギルには言うべきなのだろうか。ナッツは女優ではなく、男優なのだ。ナッツも困った様に笑うしか無いだろう。

「あ、えっと、それで？」

「始まりの街での自殺者がちよつと多くなつてきてなあ」

「は？」

「攻略組のキリトとか、商人のエギルさんに言うのも問題やけど。遅れる攻略からの不安、不透明すぎる攻略組」

「……なんだよそれ……俺たちは——」

「わかっとする。その前線にボクも居るよつて。ただ、ソレは始まりの街で待つゴミ達に伝わる訳やない。誰かのせいになりたい、なんて大人の特権やろ」

憤りを露わにしたキリトを諭すようにナッツは淡々と事実を言葉にする。カップの淵を指で撫で、目を伏せる。

「……耳が痛いな」

「エギルさんはちゃんと責任持つとるやろ。ボクが近くにおるから余計に」

「あー……まあ、な」

「ぶっちゃけ始まりの街で人が死のうが、POHさんに誰かが殺されようが、どうでもエエ……いや、よかった、言うべきやな」

「……正直に言い過ぎじゃないか？」

「ニユースで『ビルの屋上から人が飛び降りました』言われても『わー、可哀想ー。仕事行こ』と思うんとそんな変わらんやろ」

「理解は出来るが……」

「ま、ソレはエエんよ。問題は、これ以上人が死ぬ事は防がなアカンって事や」

「それで、勇者か」

「伝染する絶望への対処としてはベターやけどな。一種のプロパガンダやな。」

「……キリトを神輿に担ぐんはボクの本意ではないんやで。ホンマはボクが立つつもりやったし」

「ナッツ……」

「お前勇者になりたかったのか」

「ちやうわ、ボケ」

キリトの気の抜けたセリフにツツコミをしつかり入れたナッツは唇を尖らせて不満を露わにする。

キリトはそんな様子を笑い、決意するように瞼を閉じる。瞼をゆつくりと上げ、ナッツを見る。幼気な少女——のような少年が、この不安を背負う。

「そう考えれば、自然と意思は固まる。」

「頑張るよ」

「さよか」

短いやり取りであったけれど、なんとなくお互いの気持ちはわか

る。

「一応、今は匿名性を武器にしてキリトの名前は出てない。黒の剣士は皆の勇者やけど、キリトは自由に決めていい。戦場から遠ざかるのも、誰も咎めへん」

「……わかった」

「そもそもヒースクリフさん居るから、一応は問題なかったんけど……」

「いいよ。大丈夫だ」

「……さよか」

逃げ道は準備している。そんな事を暗に伝えたナッツであったけれど、キリトに止められる。

もしも攻略組からキリトが抜ければ、大きな穴になるだろう。出来る事ならば欠けてほしくない人員。そんな事はわかってる。

けれど、よくわからない感情が自分を突き動かして逃げ道を開けてしまった。そのフォローを考えている自分がいるのも確かである。

ナッツはバツが悪そうに頭を掻いて、思考を切った。

「ま、以上が今回の顛末やな」

「なんか俺が手の平の上で転がされてませんか……」

「最初の突った印象が丸くなってるからよかったやん」

「泣きたい」

「アスナさん来るんやろ？ それでも泣いてエエんなら、勝手にどうぞ」

「可愛げねえな」

「むしろ可愛さしかないと思うけど？」

眩しい笑顔を浮かべてカワイ子振るナッツにキリトとエギルは納得する。納得されたナッツは「ツツコミどころやでー」と拗ねたように付け足した。

エギルの鑑定作業も終わり、アスナを待ったために談笑を繰り広げていたナッツとキリト。キリトはパーティを組む為、ナッツは説教を受ける為、というのが違っているが。

階段を上がる音がして少し、両者の待ち人が扉を勢い良く開いた。

「ど……どうしよう……」

「なんかあったん？」

泣き出しそうな声のアスナにナッツは首を傾げる。何度か唇を噛み締めた後に、ようやくアスナは再度声を出した。

「大変なことに……なっちゃった……」

第13話

「ひい、ふう、みい……なんや、もうちよい露天詰めれたなあ」

「これ以上は運営に支障を来しますので、よろしいかと」

「そんなモンか」

「はい、我が君」

しっかりと被ったフードの奥で露天を数えたナッツの言葉に隣に居た女騎士然としたウィードが応える。

七十五階層主街区《コリニア》は活気に満ちていた。古代ローマを思わせる造り。その象徴とも言うべき巨大なコロシアムの前に露店が所狭しと並び、商人達が声を上げている。

「我が君」

「なんや？」

「人波でハグレない様に手を繋ぎましようか？ 誘拐されては大変危険です」

「誘拐犯が何言うてるん」

「失礼ですね。私は我が君のお手を撫で回したいだけであって、誘拐など、そんな……ふへっ」

「ボロ出とるでえ……」

ふえへへへへ、と妄想の世界に旅立った美人を放置してナッツは溜め息を吐き出した。

S A O 始まって以来の大イベント——キリトとヒースクリフの戦い。それこそ攻略組と呼ばれるメンバーは決着に興味はあるし、観光としてこの街に来ている人にも大きな宣伝にはなる。

キリトを勇者にはしたが、それは未だに広まっていない。もしも、キリトが前線を退くというのならば……そこまで考えてナッツは思考を切り捨てる。

キリトが前線を退く確証はない。それこそ、あのキリトが前線から遠ざかるのが想像出来ない。

「ナッツはん、ウィードはん。おおきに、おおきに」

血盟騎士団内にて制服が似合わない事で追隨を許していない男、ダ

イゼンがその立派なお腹を揺らしながらナッツとウイードに近付いてくる。

「あら、ダイゼンさん。お腹をハムのように縛られたいのなら私に仰つて下さればいいものを」

「せやねん、最近どうにもたぶたぶして——つてちやうわい！」

ウイードはんは綺麗な顔して言う事が過激やわあ」

「冗談ですよ」

ニツコリと笑っているウイードを横目で見たナッツは息を吐き出して視線をダイゼンへと戻す。ウイードの言葉は半ば本気であることは当然黙っておくとして。

「それで、売上はどない？」

「エライ儲けさせてもろてますわあ！ 急な事やったけど、ナッツはんのお陰で色々都合つきましたわ！」

「ボクは商人達と情報屋に話通しただけやって。ウチも融通してもらてるし」

「いつそ月一でやってくれれば助かりますなあ！」

「無理やと思うでえ。あのキリトやし」

「俺がなんだって？」

「おお！ キリトはんにあすなはんまで。おおきに！」

心底疲弊している顔をしたキリトとその横で苦笑いしているアスナがようやく転移門からやってきた。

キリトのその疲れた顔でナッツを睨みつける。

「どうしてこんな大事になってんだよ……」

「そりやあ、神聖剣様と黒の剣士様のデュエルやで。こんなデカい儲け話、逃すわけないやろ」

「……本音は？」

「こんなデカい娯楽、皆で楽しまな損やろ」

「逃げたい。逃げようアスナ。今ならまだ間に合う筈だ」

「もう遅いと思うなあ……」

「せやで。キリトはん！ ここで逃げたら男が廃る、ちゆうヤツや！」

「……………本音は？」

「ギルドの儲けがパアになってまうやろ！」

「……………はあ」

「それに血盟騎士団とは非公式にコツチでトトカルチョまでやっ取るんや。不戦敗は洒落ならんで」

「ナッツはんも悪やなあ！」

「ちやつかり取締に噛んだるダイゼンさんほどでは」

なっはっはっはっはっ！ と大きく笑うダイゼンといつもの様にクツクツと意地の悪い笑いを浮かべるナッツ。キリトは「ああ、競走馬ってこんな心境なのか」とどこか達観している。

そんな競走馬を付き添いと一緒に控え室へと案内していくダイゼンを見送りながらナッツは視線を後ろに向ける。

「それで？　なんでサチは隠れとるん？」

「ふえっ!？」

転移門の柱の影からナッツ達を覗いていた黒髪の少女へと呆れた声で問いかけてみれば、驚きと焦りの声を出したサチ。

手をバタバタとしながら言い訳を考えているサチに微笑みを浮かべながらウィードが口を開く。

「あら、サチさん。いらっしやっただんですね。相変わらず影が薄くて気が付きませんでした」

「それ、笑顔で言う事じやないと思うんですけど……」

「失礼しました。可愛い子を苛めるのが趣味です」

「……ナッツも危なくない？」

「コレに襲われとるんやったら、もうコレはボクの目の前に居らんよ」

「ええ、そういう事です」

「……あ、黒鉄宮に送られるもんね」

それなら安心か、と息を溢したサチの間違いを二人は訂正することもなかった。言った所で意味の無い事である。

「それで？　なんで隠れてたん？」

「こう……キリトを見てるとやっぱり、ね」

「失恋なんざ腐る程するモンやろ」

「うぐっ。ナッツ……そうやって私の心を抉るのはやめてっ」

「そうですね、サチさん。沢山恋愛をして、女は綺麗になるんですよ」
「ウィードさんが言うのと説得力がありますね……私、頑張ります！」
「まあ私は元々美人でしたけどね」

何かを察した様な顔をして、流れるように地面に手を突いて落ち込んだサチ。そんなサチを見て満足げに、何かに満たされたウィードが微笑みながら見下している。

そんなウィードに溜め息を吐き出してナッツはフードを深く被り直す。

「サチ、他の黒猫団は？」

「あ、えっと……皆、私に気を使つたみたいで……」

「あつそ。ボク怖がつて先行つた訳やないんやね」

「う、うん、ソダヨー」

「……ふうん」

「我が君、今度黒猫団のギルドホームを尋ねられては如何ですか？
きっと楽しいですよ」

「それ、ウィードが楽しいだけやろ」

「ええ」

「……はあ。まあエエわ」

いい加減、自分に正直過ぎる従者もどきをどうにかすべきなのか。ソレはそれで面倒であることも分かつてしまうので、どうにかする訳もなく、自身に害が無いことも事実なので結局どうにもしないのだけれど。

「ナッツも観戦するの？」

「当然や。その為に今回の祭りを裏で取り仕切つとる訳やし」

「……ナッツつて本当に子供？」

「さあ？ どうやろなあ」

クツクツと逸らかすように笑つたナッツにサチは不満な表情を浮かべる。そんな表情にも微笑みを浮かべていた加虐者を見て、サチは肩を揺らしてしまふ。

「じゃ、じゃあ私は皆の所に戻るから」

「あら、ご一緒でもいいんですよ？」

「遠慮します！」

文字通り逃げるように去ったサチを見送って、相変わらず楽しそうに笑みを浮かべるウイード。そのウイードに溜め息を吐き出すナツツ。

「ウイード。あんまり遊びなや？」

「ふふ、つい我が君が愛おしくて」

「……礼は言わんで」

「従者として当然の行いです」

「さいで。……ほな、行こか」

「我が君が照れて可愛くて生きるのが辛い」

「ならさっさと死ね」

息を荒くしている美女を放置してナツツは足早にコロシウムへと入っていく。ウイードはウイードでストーカーの様にナツツを追いかけていった。



「ぶはっ。いやあ、似合わんななあ。黒ブラックくめの愛称も取り下げやな」

「ナツツ、お前は心配してきたのか笑いに来たのかどっちなんだよ」

「そら、笑いに来たに決まっとるやろ」

「もう、ナツツもキリト君も喧嘩しないの！」

ヒースクリフとのバトルに負けたキリトは諦めたのか、ジタバタする気もなく、あっさりと血盟騎士団へと入団した。

二日という準備期間を経て、血盟騎士団では地味な方であるらしい純白に赤いラインの引かれた制服を纏っている。普段の資格好を思い出せば、全く真逆ということもあり違和感がある。

普段の外套姿のナツツといつも通りの制服を纏うアスナ。そして真逆のキリト。

「それで？ 結局、ギルドには入ったけど服装変わっただけでいつも

通りなんやろ？」

「まあな。ただソロで動いていた時よりも自由が効かないと言うか」

「私が許しません。あと、ナッツも前のボス戦みたいな戦い方、許しませんからねー！」

「おっと、あの説教は勘弁してや」

「私はまだあの時にナッツの武器が一本足りないのを怒ってるんだからねー！」

「いやあ、気合と根性で一発ぐらい弾けるかなあ、思て」

「弾けませんっ！」

けらけらと巫山戯た様に笑うナッツを叱りつけるアスナ。何かとやって、ようやくいつもの慣れ親しんだ空間に戻った事にキリトは少しばかり安堵する。

「それにボクの武器もまだ直してないし」

「まだ直してないのかよ」

「ああ、まあサブで使ってる武器はあるから問題ないんやで。耐久寄りじゃないからなんとも言えんけど」

「つまり、普通の曲剣なのね」

「ま、キールの方は直せる見込みも出てきたから——」

「やっぱイベントがあったのか」

「そうそう。キリトの言うた通りやったわ」

SAO内で耐久値が無くなったモノは全てポリゴンになって碎け散る。それこそプレイヤーも然りである。

そんな中、耐久値が無くなって刃だけが碎けた曲剣——《フォレスト・キール》。日々の積み重ねか、何かしらのイベントフラグになっているかもしれない、とナッツに伝えたキリトも「まさか本当にフラグだったとは」と唸っている。

「曲剣カテゴリーから出る可能性もそこそこあるから、あんまり嫌やねんけどなあ」

「ナッツの戦い方だと盾を持ってても邪魔なだけだしな」

「速さも必要だしね」

「ステータスビルドが変な感じやしなあ。まあ一から始める事はない

やろ」

「いやいや、ユニークかもしれないぜ?」

「その時はリズムベツトに新しい曲剣打ってもらわ」

「勿体ねえ……」

「別にユニークでも構わんけど。カウンター出来んようになるんわなあ」

「そこまでカウンターに拘る意味はないでしょ?」

「ソロの効率と安全性の問題やな」

「十分危険だと思っただけ?」

「なんで? 確定しとる動作に反撃したらエエだけやん」

「それをアツサリ言うお前が怖いわ」

知っていた応えを聞いてしつかりと引くキリトとキョトンとして
いるナツツ。アスナにしてみれば危険な行為はやめてほしいのだが、
最早言っても無駄だと言う事は知っている。

「ああ、そうやアスナさん。ヒースクリフさんとちよつとお話出来ん
?」

「团长と?」

「うん。出来れば一対一がエエかな」

「うーん……難しいかも。どういう話なの?」

「この前キリトが残念ながら敗北を喫してしまいアスナさんを手に入
れる事が出来んようになったお祭りでの売上と裏でやってたトトカ
ルチョコでの報酬をちよろつと」

「すげー嫌な言い方だな」

「裏で賭け事してたのね」

「因みに、キリトの方が倍率高かったで」

「あーあー、どうせ負けが決定してましたよー、だ。くそっ」

「もう、ナツツ! キリト君が拗ねて可愛くなっちゃったでしょ!」

「アスナさん。本音本音」

「もうやだこの空間」

先程まで安堵していた空間が自分を苛める為のモノになってきた
事に涙しそうになるキリト。ソレを見せれば嬉々として弄り回すで

あろう鬼畜妖精と軽く咎めるだけであろう閃光様。

それでも、なんとなく。キリトはこの空間の事が好きであった。

「仕方ない。無理やり場所設けるか」

「無理やりって」

「そこまで急ぎなの？ それ」

「さつさと精算した方がエエやろ。ダイゼンから渡せれば楽なんやけど、立場的に無理やろうし。ボクが個人的に行く方が色々都合もエエんよ」

「うーん、ちよつと団長に相談してみるね」

「ホンマに？ ありがとう、アスナさん。流石副団長！ やっぱりどっかの平隊員とはちやうなあ」

「うっせえよ！」

クスクス笑いながらコンソールを弄りだしたアスナを尻目にナツツはキリトの方を真っ直ぐ向く。散々イジられたからか不貞腐れ顔でナツツを睨んでいるキリトはやや訝しげな表情になる。

「……なんだよ」

「今回は助けられんで」

「わかってるよ……もう危険な目に合わせないさ」

「それ、私の事言ってる？」

「……まあそうやな」

「何その含みのある言い方……。キリト君、もしかして何か隠してる？」

「あ、いやあ……」

「おっと、ほなボクはコレで退散するよつて。……後は若い者二人にしましょか」

「ま、待てナツツ！ 古いお見合いみたいな言い方してドコに行くんだ！」

「そうよ、ナツツが一番若いじゃない！」

「二人とも赤あなつて何言うてるんさ……頑張るんやで！」

邪気も何もない笑顔を浮かべてサムズアップしたナツツが扉を閉める。システムの都合で中の音は聞こえないが、それでも二人の性格

をある程度把握しているナッツは状況は思い描ける。

細く息を吐き出して、ナッツは扉から背を離す。

「おう、ナッツ。キリトの格好はどうだった？」

「もう爆笑モンやで。ただ今は入らん方がエエで」

「……なるほどな。キリトには別口で何か請求しとくか」

「まあ今回はボクの責任もあるよって、接客手伝うで」

「その姿で言われてもな」

「安心し。ちゃんと外套外して接客するよって」

「本当かッ！」

そりゃ売上が期待できるな。と意気揚々と喜ぶエギルにナッツは苦笑する。ちらりと先程出てきた扉を確認して、ナッツは何か気付いたのかフードの上から頭を掻く。

瞼を閉じて、一度深呼吸して、求められているであろう可愛らしい微笑みを浮かべて外套を装備から外した。

翌日となり、血盟騎士団団長室の扉が開かれる。

「やあ、ナッツくん。来ると思っていたよ」

「どーも、ヒースクリフさん」

フードを外したナッツが笑みを携えてヒースクリフの前に立つ。

無表情という訳ではないが、学者然とした雰囲気纏うヒースクリフに対して可愛らしさを備えた少女のようなナッツ。その可愛らしさに狂気が混ざっている事を団員は知っていたので、この一対一の対談も幾人かは否定していた。

「なんや、ヒースクリフさん直々に許可出したらしいやん」

「何、私も欲深い人間だ。分前ぐらい求めるさ」

「欲深い、なあ……まあエエわ。世間話でもしながらトレード始めよか」

慣れたようにコンソールを弄るナッツと同じく流れるようにコン

ソールを出したヒースクリフ。今回の本題にしていたコルのやり取りをしていく。

「そういや、そちらさんのクラディール？ やったつけ。エライ悪い噂があるやん」

「アスナ君とのやり取りであるなら、団内で既に罰則を与えた。君が介入する事ではないと思うが？」

「ああ、そっちや無いよ。なんや——」
《ラフィン・コフィン笑う棺桶》との繋がりが見え
てきたで」

「……ほう」

「因みに、この情報は既に売却済みや。いつもお世話になつとるし」

「そうか。アスナ君とキリト君には悪い事をしたな」

「せやなあ。まあ、世間話はこのぐらいでエエやろ」

トレードのコンソールを閉じたナッツはヒースクリフを真っ直ぐ見つめて、口を歪める。

「それで。茅場博士はどういう台本を書いてるん？」

「……………驚いたな。君は私をアツサリと殺すと思つていたよ」

驚いた、と言いながらもそれほど顔色を変えた様子もないヒースクリフが言葉を吐き出した。

ナッツからすれば拍子抜けで、アツサリと認められた事に肩透かしであつた。

「なんや、氣い付かれるとは思つとつたんやね」

「君が私と会話した時からね」

「それは買い被りや。前の試合での違和感が決定的やつたけど」

「なるほど。キリト君の動きに圧倒されシステムのオーバーアシストを使つてしまった…………」

苦笑したヒースクリフにナッツはクツクツと笑ってみせる。

「さて、君には私の正体を見破つた——」

「報酬とかは無しでエエよ」

「ほう？ この世界から脱出出来る可能性もあるのだが…………」

「アンタと戦え、いう事やったらボクは役やないよ。それにヒースクリフさんも暗殺、なんて事になったら味気ないやろ」

「……ふむ。では君の望む報酬は無しという事にしておこう」

「それでエエよ。その報酬は次の人に任せるわ」

「喧伝でもするのかな？」

「せんよ。ボクの中で事実秘匿する」

契約書でも書こか？ と苦笑して言ったナッツにヒースクリフは首を横に振った。そんなモノは意味がない。それこそ、ヒースクリフの立場で言えば、口約束以下である。

「それで、どういう筋書きにするつもりなん？」

「君もこの世界の楽しむプレイヤーの一人だろう。未来を教える事は出来ないよ」

「ふうん。ま、エエよ」

「あつさりと引き下がるのだね。先程の報酬を使ってもいいのだが？」

「アナタもこの世界を楽しむプレイヤーの一人やる？ ヒースクリフ 団長殿」

「そうだね」

意趣返しのような言葉に応答したヒースクリフに呆気なさを感じたのか、溜め息を吐き出してナッツは踵を返す。

それこそナッツの中で予定は全て完了した。茅場晶彦の所在を誰かに言いふらすつもりはない。それこそヒースクリフが茅場晶彦など、現状で伝えればマイナスでしかない。

ふと、ナッツは立ち止まり、ヒースクリフに振り向く。

「そういえば、会ったら言いたかった事があつてん」

「なにかな？」

「この地獄ゲンジツをありがとう」

ニッコリと笑みを浮かべて満足したのか、ナッツは団長室から出ていった。

「まったく、恐ろしい子供だな。彼は」

小さく笑みを溢し、ヒースクリフは佇まいを直す。慌ただしく入ってきた団員達の言葉に耳を傾けながら、ヒースクリフはこの世界へと埋没していった。

第14話

——夏樹。アナタは才能があるの。

——だから、私の言う事だけを聞けばいいのよ。

——アナタはワタシなのだから。

「それで、キリトはアスナさんと一緒に一線を退くと?」

「ああ……その、ナッツには悪いと思ってる」

申し訳無さそうな顔をしているキリトに素顔を晒しているナッツは目を伏せる。

ヒースクリフとの対談の翌日。キリトに呼び出されたナッツは淡々とキリトの話を聞いていた。彼の主観的な事も、アスナと相談した結果も、そして現在の気持ちも。

キリトはナッツに口汚く罵られると思っていた。

それこそ半ば惰性的に迷宮区へと潜り経験値を稼いでいた自分とは違い、この少女——のような少年は明確にゲームをクリアする事を求めている印象を受けていたからだ。

その意思の強さはわかっている。悪く言えば、誰の命すらも——自分の命すらも淡々と賭けて戦っているのだ。罪悪感を押し殺してまで、殺人を犯し、自身の中の規律で動く少年。

そんなナッツが『これ以上自殺者を出さない為』という理由でキリトを勇者に仕立て上げたのだ。

そして、キリトは逃げ出してしまふ。

神輿に無理やり担がれたから逃げる、と言えばキリトに非はない。ナッツが責める権利はない。

けれどキリトは一度その話を承諾してしまった。だからこそ、逃げ出す事に罪悪感がある。

「まあ、エエよ」

「………いいのか?」

「構わんよ。元々、キリトを無理やり持ち上げたんはコツチやし。前も言うてるけど、フォローの仕方は何個かあるよって」

「そうか」

「なんや、アツサリ行つて驚いとるなあ」

「そりやあ、ナツツだったら怒ると思つてたからな」

「そこまで頭固くはないよ。その……兄貴分の尻拭いぐらい考えとるよ」

「……このやろう」

照れた様に顔を背けたナツツに同じく照れ隠しの様にナツツの頭をぐしゃぐしゃと少し乱暴に撫でたキリト。少なくとも、こうしてナツツがキリトの事を評した事はない。キリトの方も何かと頼りになるナツツを同列に扱っていたし、二人の仲に明確な上下はなかった。

ナツツからしてみれば、キリトに頼る部分も多かった。それこそ経験値稼ぎの時は彼主導であったし、ダメージを稼いでいるのもキリトである。

それを除いても口喧しいアスナとは違い、なんとなくで自分を食事に誘ってくれたりしてくるコミュ障なのだ。

「髪が乱れるやろ、やめい」

「どうせフード被るだろ」

「そういう事やないわ、ボケ」

「この弟分めえ」

浮かれるキリトを鬱陶しく感じてきたのか、いつもよりも数段冷たい視線を叩きつけたがどうやら無意味だったらしい。

ナツツはキリトの手を軽く払い除けて、鼻を鳴らした。そんな様子もキリトには通用しない。

「ほな、ボクは行くわ」

「もう少し頼つてもいいんだぜ？」

「頼りない兄貴分の為に色々することが増えたんやけど？」

「本当に申し訳ない」

「わかればエエんや」

キリツと格好良く言つてのけたキリトであるがナッツの一言にアツサリと手の平を返した。流れるようなやり取りにナッツが吹き出して、キリトも笑みを溢す。

しつかりとフードを被ったナッツが踵を返せば、キリトが声を出す。

「いつでも遊びに来いよ。アスナも待つてるからな」

その一言にナッツはヒラヒラと手を振るだけで応え、人混みの中へと紛れていった。

ソレは必然だったのかも知れない。

特に何かを感じた訳でもなく、単なる直感的なモノでナッツは納得していた。

キリトとアスナの結婚。結婚、たとえばシステム上の行いであり現実のモノとは違うだろうが、それでも二人はお互いの為に手を取り合い、一緒に前を向き合う事を誓った。

この世界の攻略を本格的に望んでいなかったキリトとソレを想うアスナだからこそ。一線を退くというのはある種の必然だと思う。

だから、ナッツはキリトの為に逃げ道を作っておいた。自身がフォー出来る様に、色々と根回しはしていた。

「はあ……」

理解出来ない。出来る訳が無い。キリトとアスナが欠ければ攻略に支障が出る事など分かりきっていたことだ。

それでも、自分は逃げ道を作った。戦力の温存、という言い訳も用意は出来る。けれどもソレは違う。明確に自分の中で逃げ道を作った自覚はある。

キリトで無ければ？ それこそ自身の知らぬ存在であったならば？

きつと逃げ道を作る事はなかっただろう。期待と希望で押し潰し、責任を押し付けた。文字通りに勇者として名を広げただろう。

ソレをしなかつたのだ。ナッツはしなかつた。

それにキリトを兄貴分だと言ってしまったこと。コレもナッツは不本意である。

言うにしても、先程では無くてよかった。いつでも問題は無いし、言う必要もなかった。

けれど、言つたのだ。言つてしまった。お陰で面倒臭いキリトに軽く絡まれたが……まあ、ソレはいい。

路地へと入り込んで、へたり込む。自分を抱きしめる様に身を縮める。

キリトやアスナとの繋がりを切りたくなかった。だから、キリトの事を兄貴分だと言つて、繋がりを持つてしまった。

それは、ナッツではない。

ナッツはそんな事をしない。

じゃあ——

僕は誰？

痛む訳もない背中がズクズクと痛みだす。叩かれたような、焼かれたような、熱を持った痛みが背中に広がる。

次第に荒くなる呼吸。浅く、上手く呼吸が出来なくなる。吐き気が波の様に押し迫る。吐くことは出来ない。ソレはシステムで許可された動きではない。

ただ単純な不快感だけが身を支配していく。

寒い訳でもなく身体が震え、震えを抑えるように外套の上から腕を掴む。痛みはない。

喉に何かが詰まったように息が吸えず、嘔吐だけが呼吸を助けるように口から空気を押し出した。

「ン？ ナッツじゃ——どうかしたのか？」

特徴のある鼻に掛かった声にフード姿。

その人物を見れば、鼠を思わせる髭が描かれた見慣れた顔を心配に染めている。

近くに膝を付いて背中を擦るアルゴに大きくビクツと動いた少年はフードの奥からアルゴを注視する。

「大丈夫か？」

「……あ、あ、——」

「？ ナッツ？」

「………あ、ああ、いや、なんでもあらへんよ」

震えが止まり、ナッツはゆっくりと深呼吸を始める。大きく肺を膨らませて、空気を押し出す。フードの上から押し付けるように手を置いて顔を無理やり隠す。

アルゴは目を細めて、背中に触れていた手を離す。

これ以上、介入すべきである。そんな事はわかっている。けれど、ソレをナッツが許すのか。

「あんまり心配をさせるな。ビックリするダロ」

「せやなあ。ちよつと立ち眩みしただけやで」

だから、心配あらへんよ。と加えたナッツにアルゴは何も言わなかった。嘘である事など分かっていた。それでも、踏み込んでナッツをどうにかする事などアルゴには出来ない。

「そうカ。何かあれば頼るんだゾ。お姉さんとの約束ダ」

「それ、有料やろ？」

「ハハハ」

戯けるように言ったナッツにアルゴは否定する事をしなかった。無料でも問題などないけれど、それではきつとナッツは自分を頼らない事をわかっている。

自身の無力さを感じながら、アルゴは立ち上がる。

「そうや。キリトの事やねんけど」

「ああ、アスナと結婚するんだってナ」

「そそ。やから、計画の変更しよう思つて」

「………そうカ」

色々な感情を飲み込んでアルゴは返事をした。フードをなるべく深く被つて、表情をナッツに見せないようにする。

理解は出来ても、納得など出来る訳がない。先程まで震えていた子供を人々の希望として祭り上げるなど。その責任も、重圧も、理由も、理解出来てしまう。

危惧していた無気力に繋がる絶望を塗り替える為の希望^生。戦う事^費

を余儀なくされた偶像^{アイドル}。

「ナッツがいいなラ、向きを変えるヨ」

「ほな、お願いな」

「……………わかったヨ。分ならず屋」

そう言い残して去ったアルゴを見送り、ナッツは小さく息を吐き出した。

分ならず屋、と言われた事に何かを感じている訳ではない。言葉の語調、僅かに見えた表情、把握している限りの性格。ソレを考えれば、凡その答えはナッツは出すことが出来た。

「許してとは言わんよ、情報屋さん」

誰にも聞こえてないナッツの呟きは路地裏へと消えていく。

第15話

——違うっ！ そうじゃない！

——何回言えばわかるのっ!?

——さあもう一度ッ！ 出来るまでッ！

——何度でもッ！

六日が経過した。

前線で活躍するプレイヤー達にとっては驚く事が起こっていた。

緑髪の少女が戦っている。

たったそれだけの事であるし、事実として少女は元々最前線に居たプレイヤーでもあった。

名前をナッツ。普段は隠している顔を曝け出し、外套を揺らし、戦っていた。

いつも通りと言えばそうなのだが、キリトとアスナが欠落した精神的な穴を埋めるように少女はその場に立った。

落下星などと称された通り、受け流しと回避を主にした反撃戦術。キリトの様に華々しいダメージはないものの、敵の目を常に引き続け隙を作り出す。

プレイヤー達の目を引く深緑の飾り布。意匠を凝らした鍔と鞘。まるで血で染め上げたような深紅の刃。

《インペリアルラス》と銘打たれた曲剣。折れてしまったナッツの相棒の新しい姿。

「お疲れ様です。我が君」

「ん」

従者の劳いの言葉を聞き流しながらナッツはその深紅を鞘へと収めた。

変わらずに女騎士然とした金髪の美女であるウィードと儂さと愛らしさを備えた緑髪の美少女ナッツ。噂にならない訳もなく、前線では既にある程度の尾ヒレと背ヒレを付けながら広がっている。

更に言えば、美少女のナッツが笑顔を振りまきながら前線の補助をしているのだから惹かれる人間も数多である。その度にウィードが牽制を入れるのだが、美女に牽制されて一石二鳥じゃないか？ などと巫山戯た思考をお持ちの紳士も同数いるのだ。

「これである程度の根回しは出来たかな」

「そうですね。あとはボス攻略が上手く行けば、認知度も上がるでしょう」

「戦力補充の為にちよつと下の人ら持ち上げてるけど……六日程度やとこんなもんか」

「ええ。ぐ苦労様です」

「別に必要な事やから疲れはないよ」

キリトの抜けた穴を補強する為の行為。そして自身の知名度を上げる為の行為。それこそキリトが抜けてしまった穴をナッツは埋めなくてはならない。

勇者——人々の希望になるために、わかりやすい形で立たなくてはいけない。

強行して組まれたスケジュール。ウィードが確認している中でナッツが眠った時間はない。睡眠が浅い事は知っていたけれど、眠らずに動ける道理ではない。

それでもナッツは動き続けた。弱音すら吐かずに、ましてや必要だから、と断じている。

期間を六日間としていたのはこれ以上は自身達の攻略に支障を来たしてしまうからだ。だから過密な予定を組んだ。

なんと完成された存在だろうか。崇拜する主の在り方に歪さと狂気が内包されている事などわかっている。その狂気に従う訳でもなく、歪みを正す訳でもなく。それで完成した主。

定められたかと思えるほどに戸惑いも、躊躇も無い。物語の登場人物のように、何かに——自身の規定に従って行動している。

汚れもない。歪みすらも納得させる程の完成形。狂気すらも必要な項目であるかのように……。

だからこそ、ウィードはナッツに心酔した。全てをナッツに捧げて

しまいたい。この血肉すらも、存在の一片すらもナッツへと。

この完成された主の片隅を自身で占領してやりたい。それだけでウイードは満足なのだ。

「それではギルドホームへと戻りお姉さんと一緒に寝ましょう。今日まで一睡もしていないでしょう?」

「……………」

フードが無くなった事で分かりやすくなったジト目をウイードへと向けたナッツ。そんな視線にすら頬を赤らめる淑女^{ヘンタイ}。

そんな変態を放置して、ナッツは今しがた来たメッセージを確認し、眉を寄せる。

「どうかしました?」

「…………ウイードはホームに戻るとき。ちよい用事が——」

「そんな! 私と一緒に寝るといって褒美は!」

「元々無いやろ」

バツサリとウイードの言葉を切り捨てたナッツは転移結晶を手にとって聞き取れない程小さな声で転移を命令し、姿を消した。

その様子を涙ぐんで見ていたウイードはナッツが消えた事を確認すると息を吐き出して、表情を改める。

「ああ、羨ましいですね。またキリトさんですか…………ああ、羨ましい羨ましい。いつそ殺してしまえば、私は我が君に殺されるんでしょうか」

それはそれでイイかも知れない。と思考をしたけれど、キリトに真正面から戦えば必敗であるし、不意打ちにも反応されそうだ。

溜め息を吐き出して思考を捨てる。ナッツが一番であるけれど、ウイードがやるべき仕事もある。

「我が君が帰ってこれるように、さっさと根回しを終わらせましょうか。次々回のボス戦はギルドでの参加をしないといけませんし」

主が褒めてくれる。なんて事を考えながらウイードは鼻歌混じりにメッセージを妖精達に送りつけていく。

妖精達はそのメッセージを確認し、顔を真っ青にしながら行動を始める。

触らぬ神に祟り無し。誰も鬼に触れる様な事をしたくはないのだ。



茶褐色の外套に付いているフードをしつかりと被ったナッツははじまりの街を歩いていた。慣れ親しんだ、というには日数が足りないけれど凡その地図は頭の中に入っている。

東七区にある教会へとやってきたナッツは早々に入り込んで目的の人物を探す。索敵スキルを発動し、部屋の中の人数まで知り得ているナッツは小さく息を吐き出して声を出す。

「サーシャ、居るんやろ？」

「な、ナッツちゃん……」

怖ず怖ずと扉から暗青色の髪を揺らしながら顔を覗かせた女性――サーシャは安心したように息を吐いて姿を現す。

相変わらずの怯えよう、というべきか。はじまりの街の現状を把握してナッツは口をへの字に曲げる。

「ナッツじゃねえか！」

そんなナッツの意思を両断するように甲高い、嬉しさを隠しきれてない少年の叫びが響く。同時に扉が開き、わらわらと出てきた少年少女達数名がサーシャの両脇に並ぶ。

「久しぶりい。元氣い？」

「元氣だぜ！ ちゃんと約束を守ってるんだから剣とか見せてくれよ！」

「はいはい。しゃーないなあ」

わいのわいのと群がる同学年であろう少年少女をアツサリといながらナッツは近くの机に余剰分の武器をオブジェクト化していく。つい数時間前までウィードとコンビを組んで他のプレイヤーのフォローをしていた為か、それなりに要求の高い武器達が並んでいる。

歓声を上げながら、武器達に手を出してはハシャイでいる子供を見

ながらナッツは申し訳なさそうな顔をしているサーシャへと向く。

「毎回ごめんなきいね。ナッツちゃん」

「エエよ。一応、全部要求レベル高いから持ち出す事もないやろ。あとコッチも渡しとくわ」

「ホント……申し訳ないデス」

「それこそ今更や」

心底申し訳なさそうなサーシャに苦笑しながら、ナッツはトレード画面を開きサーシャへと多額のコルを渡していく。

名目は情報の報酬。実際は子供たちの保護の為。それこそナッツ自身がサーシャは必要だと判断した結果だ。

「それで、頼んでた事は？」

「実際に見てみるまでわからないけど、話で聞いていた子は見たことないかな……」

「さよか……。まあそろそろ来るやろうし、話はそこからしよか」

「話は終わったか!? ナッツ遊ぼうぜ！」

「ナッツは私達と遊ぶの！」

「……遊ぶんはまた今度な」

困ったような声でナッツがそう言えば子供達の不満そうな声が教会の中に響き、サーシャは可笑しそうに笑みを溢す。

ナッツの噂は聞いている。ここ数日でよく聞くようになった緑髪の美少女剣士がナッツの事だというのは分かっていた。

そんな最前線で戦っている少女が今はこうして年相応——とは言いが、同い年であろう子供達と喋っている。なんとも不思議な光景だった。

「何笑ってるんや」

「いえ、別に」

クスクスと笑うサーシャに疲れたように溜め息を吐き出したナッツは扉の方へと顔を向ける。

公共の場で鍵なども掛からない扉は開き、黒髪の少年と橙髪の少女——そしてその背には幼女が眠っていた。

「久しぶり、キリト。言うても六日ぐらいやけどな」

「久しぶり、ナッツ。無理を言って悪いな」

「エエよエエよ。それで——結婚早々に子作りとはお盛んやなあ」
「ぶっ!？」

「な、ナッツ!? ち、違うから!」

「なんや、そうなん?」

「ナッツちゃん。駄目でしょ、女の子がそんな事言っちゃ」

「せやな。ボクもそう思うわ」

キリトとアスナを弄ったナッツは満足そうにケラケラと笑ってみせる。顔を真っ赤にして恨めしそうにナッツを睨む二人など意に介さない様に笑ってみせた。

教会の一室にて、キリト達から詳しい事情を聞いたナッツは悩むように口を手で隠す。

少女——ユイ。黒い髪に白磁の様な肌。くつきりとした顔立ち。ナッツ自身が言うのもアレであるが、まるで人形のようなだ。

サーシャも元々言っていた様に、ユイを街で見ただけではない。加えて下層に詳しいナッツもこの少女を見たことがなかった。まるで幽霊のように湧いて出た少女。……そういうえば幽霊の噂も二十二層だったか。すっかり流していたから忘れていた。

「それで、ナッツもココでお世話になったのか?」

「アホ言いなや。一ヶ月経つとった時は1階層のボス戦や」

「そーいやそーうか」

「むしろ私がお世話されてる側と言いますか……」

「と、言うど?」

「《王冠の妖精》経由でココに寄付しとるって事。まあその分情報買つとるけど」

「……ナッツってホント色々手を出してるよな」

「ネット弁慶が悪化しとるヤツに言われたくないけど?」

「け、結婚したから」

「……キリトくん。情けないからやめて」

「ハイ……」

隣にいたアスナからのジト目に耐えきれずに肩を落としたキリトに苦笑するサーシャ。

前線で戦っている人たちの事を何処か空の上の出来事だと思ってしまう。けれど、話してみれば何てことはない、普通の人なのだ。

そんな普通の人達にサーシャは申し訳なさそうな顔をする。

「それで……二二年間、毎日一エリアずつ全ての建物を見て回って、困ってる子供たちが居ないか調べてるんです。そんな小さな子が残されていれば絶対に気付いた筈です。その……残念ですが」

「そうですか……」

アスナは俯いて、ユイを静かに抱きしめる。

「先生！ サーシャ先生！ 大変だ!!」

「こら、お客様に失礼じゃないの!」

扉を乱暴に開けて雪崩込んできた子供たちにサーシャは叱りつけるように言うが、子供は目に涙を浮かべながら叫んだ。

「ギン兄イたちが、軍のやつらに——」

「どこや?」

「ひ、東五区の道具屋裏の空き地」

と少年が言った所でその少年の肩をナッツが掴む。少年は目を見開いて驚きながら、吃りながら場所を告げる。

告げたと同時に弾かれるように飛び出したナッツを呆然と見送ってしまったサーシャ達。

二秒ほど時間が空きキリトが慌てたように立ち上がる。

「ナッツ！ 待て!」

「そ、そうです。危険じゃない!」

そう危険だ。

ナッツが並々ならぬ想いをこの教会に抱いている事は聞いた。だから、危険なのだ。あのナッツの事だから頭に血が昇って暴走する、なんて事は有り得ないが、逆に言えばあのナッツが飛び出たのだ。

頭に思い浮かぶのは《笑う棺桶》討伐戦の最期にナッツが首を斬り

飛ばした場面。ヤバイ。間違いなく、ヤバイ。

「アスナ、ユイを頼む」

「うん！」

短いやり取りで意思疎通を熟し、キリトはナッツを急いで追いかける。システムで保護されていたとしても、あの状態のナッツであるならば、圏外へと移動させて首を刎ねる可能性もある。

まるでゴミを捨てるかのような、あの目をナッツにさせてしまうのだ。

まるでソレが当然かと思うほど、悪びれた様子もない不快な大人の声。

はじまりの街の現状は理解している。それこそ情報収集してれば嫌でも目に付いた。

徴税。システムとしてではなく、プレイヤー間での——《軍》がプレイヤーに対して税を納める。街を守っているから、いつかアインクラッドを救うから。だから自分達に投資するのは当然の事。そんな理由で。

少ない期待でナッツも《軍》には投資している。義務だから、という理由ではなく、戦力に成り得るからだ。コーバッツを助けたのもその一因に過ぎない。

「ん？　なんだ、お仲間か？」

「おいおい助けを呼んだんじゃないのかよ？」

けれど実際はどうだ。正義と正論染みた鉾を片手に下卑た笑いを浮かべ子供に脅しを掛けるゴミだ。

情報では知っていた。ディアベルを通して話もした。《軍》との溝を作るのは——面倒極まりない。

ナッツは深く息を吐き出して、フードの奥から大人達を睨む。目視出来るので六人。索敵スキルで更に四人。

「アンタら、邪魔やから退どき」

「あ？」

「この剣が見えねえのか!？」

取り出した直剣をナッツは視界に入れた。よく知る直剣だ。なんせ、幾度もナッツ自身が扱い折った消耗品に違いはない。

耐久値、要求ステータス、攻撃力。頭の中を巡るデータを思い出し、ナッツは溜め息を吐く。フードを外して、男達の先へと視線を向ける。

「邪魔」

そう、言葉に出してナッツは男二人の間を悠々と歩く。触れられる訳がない、少女に触れれば問答無用で黒鉄宮へと送られるだろう。

だからこそ男達が取る手段は一つ。

「武器が見えねえのか!？」

男の怒声すら耳に入れず、ナッツは淡々と歩く。脅しが怖くないという事ではない。それ以前の問題だ。

「ん、ギンとケインとミナかいな。助けに来たで」

「ナッツ……」

「さつきと出ていき。後ろからサーシャも来とるやろし」

「おい……オイオイオイ！ 何勝手に話進めてるんだよ!」

大人に囲まれて震えていた三人へと微笑んだナッツ。その間に割り入るように男が喚き声を上げる。

眉を寄せて睨めつけるがナッツは一切の興味すら持たずに冷たい瞳を男へと向けた。

「まあ待て。おい、嬢ちゃん。解放軍に楯突くことがどういう事か分かかってねーのか?」

「知るかボケ」

「——は、ハハハ！ つまり、嬢ちゃんは正義感だけでこいつらを助けに来たってことか!」

大型のブロードソードを手にした——恐らくリーダー格であろう男が下卑た笑い声を上げる。

そのリーダーを見て、小さく息を吐き出す。

「ほな、ゲームをしよか。ボクのHPを一ドットでも減らせたら、ボクがココでストリップでも何でもやったるわ。当然倫理コードも解除したる」

「ほほお？」

「代わりに三人はさつきと逃し」

自身を生贄にし、三人を助ける。きつと男達は自己犠牲、献身という言葉を頭に思い浮かべて、それを掻き消すように下卑た思考で塗りつぶす。

リーダー格が他の男へと視線を向けて、子供達が逃げれる道を開けた。

子供達はナッツを見て、泣きそうな顔になりながらも大人に追い立てられて逃げ出す。その様子を微笑みながらナッツは見送り、男達へと視線を向ける。

「ほな、一人ずつデュエルしよか。誰かがボクのHPを減らせたら、約束は守るよ」

「へへ、言っただぜ？」

「ああ、言っただよ」

コンソールを弄ってナッツは一本の短剣を取り出す。櫛状になった峰が特徴的な短剣。特別な銘もない、モンスタードロップ。

もしも男達の中でナッツの容姿から最前線プレイヤーであることを知っていればこのデュエルは行われる事もなかっただろう。けれどももう遅い。

男たちから申し込まれたデュエルのウィンドウをナッツは無感情に見ながら、受け入れる。

下卑た笑い。興奮しているであろう男の息遣い。カウントダウンの音。金属鎧の擦る音。

どれも、無意味で無価値だ。だから、徹底して絶望させてやろう。その顔を下卑た笑みではなく絶望に彩り——殺してやろう。

「うらあー」

男が振りかぶり、振り下ろしたブロードソード。勢いと重みのある剣撃。はじまりの街にしているにしては、早い方なのだろう。

それでもナッツにしてみれば愚鈍の一言に尽きる。剣の軌道に合わせて、櫛状の峰にブロードソードを当てる。横に寝かしていた短剣を相手へと向ける。

ブロードソードはナッツに触れる直前でポリゴン片を撒き散らした。

「はっ」

呆気にとられた男とは違い、ナッツは短剣を男へと向けながら一歩進む。刃が迫った事で男が後退りをする。

理解など出来よう筈がない。短剣が大剣を破壊するというあり得ない事が起きたのだ。

その短剣——ソードブレイカーが剣の破壊に特化したモノである事も。ナッツが同時に武器破壊スキルを発動したことも。男達には理解出来ようか。

「次の剣、出しいさ」

「え？」

「待ったるわ。全部折ったるから、はよお」

ナッツは更に一歩前に進む。後退る足が纏れて、男は尻餅を付いた。折れたのは剣だけではない。

瞳に感情を灯すこともなく、ナッツはソレを見下し、更に一歩。

「ま、待て！ 降参だ！」

「……………」

片手を開いて向けてきた男に対してナッツは表情も変えずにもう一歩前に。見つけたゴミをゴミ箱に捨てる為に歩くように、そこに感情など必要無い。

慌てて男は右手を振って、降参の為のウィンドウを開いた。降参する前に、その右手は自分の意思とは別に動かされた。

呆気にとられた男の顔が衝撃に歪む。地面に押し付けられた右腕。その右腕を踏んでいる黒色のブーツ。

「…………おっと、一撃決着やから手加減せな判定されてまうな。危ない危ない」

「こ、降参する！ 許してくれ！」

「やめろやめろおおおお!!」

男の絶叫など聞こえないように、ナッツはその手に力を込めた。

瞬間、ナッツは男から視線を外し、曲剣を退く。深い紅色に染まった刀身が黒の直剣と打つかり火花を散らす。

咄嗟の行動だった——そしてソレはナッツが最も得意として、幾度も繰り返した行動でもある。曲剣に打つかった直剣を滑らせ、攻撃の勢いを流しきる。そのまま剣を翻してその切っ先を攻撃をしてきた存在へと無意識に向ける。

向け、向けて——、ナッツはようやく脱力する。

「なんや、キリトかいな。急な攻撃でビビったわ」

「ナッツ、落ち着け。剣を下ろせ」

「今から下ろすつもりやったよ、言われんでも」

「違う。その人を——、その、殺すな」

「? なんで? 子供らから生きる事を剥奪しようとした大人に同じ事をするのも因果応報やろ?」

「……それでもだ、ナッツ。やめろ」

真つ直ぐにキリトを見ていたナッツは数秒程して、曲剣を鞘へと納める。

ソレを見て安心したのか、キリトは出していた直剣を消して、溜め息を吐き出す。最悪、ではない。取り返しがつかない事にはなっていない。

ナッツは踏んでいた腕から足を退けて、男を見下す。

「——さっさと負けを宣言して、去ね」

怯えた表情で男は震える手でウィンドウを慌てて操作して、ナッツの顔を何度も確認しながら敗北を認める。そのまま何度か立ち損じながらも男達はその場から逃げ出した。

その様子を淡々と見送ったナッツは大きく息を吸い込んで、切り替える様に吐き出した。

「なんで止めたん?」

「……あのままだと殺してただろ」

「せやな。でも殺されても文句言われへんやろ」

「そういう事じゃなくてだな」

「子供らの生きる方法を奪おうとした。それも自分らが立つ為やなくて、欲求とか嫉妬でや。咎められて然るべきやし、罰せられて当然やろ。なんか間違いがあるん？」

確かにナッツの言う事は正論である。

欲求の為に子供を間接的に殺そうとした。十二分に罪な行為だ。だからこそ、あの男達も許しを乞うた。罪を罪と認識していた。

キリトはそんなナッツの言葉に詰まって、口を開く。

「それでもだ」

「……なんやそら」

「キリトくん！ ナッツ！」

キリトの言葉に不満そうに顔を歪めたナッツであったが遅れてやってきたアスナとサーシャの顔を見て、意識を切り替える。

アスナの背中には未だに眠っている黒髪の少女が背負われている。

「ナッツ無事だった!? 怪我はない!?!」

「ある訳無いよ。心配しすぎやなあ」

近寄ってきたアスナを避けるようにナッツは一步後ろへと下がった。怪我が無いことを示すように軽く両手を上げる事も忘れない。

「サーシャ、そっちはどない?」

「問題ないわよ。三人も無事」

「さよか。ほな、ボクは絡まれる前に逃げよかな」

子供達に囲まれると面倒やし、とカラカラと笑ったナッツ。自身の姿勢好と年齢を思えば実にヘンテコな発言である。

苦笑したサーシャとアスナ。その横を素通りしようとしたナッツが止まる。

視線を落としたナッツ。その先には自身の外套を掴む手を見つけた。サーシャではない。アスナでもない。キリトである訳もない。

「――」

少女は薄く目を開き、ナッツへと視線を向ける。黒曜石のようにナッツを写し込んだ瞳が僅かに揺れて、小さく口が開かれた。

「……………ころが」

「ユイちゃん?」

細いが、よく通る声がその口から奏でられた。ナッツはユイの手を払うことも出来ずに、真っ直ぐにユイを見返す。

「あたし……あたし……」

「ユイちゃん、何か思い出したの?」

「ずっと……ずっとくらいところにいた……ずっと、ずっと……ひとりで」

「――」

息を飲み込んだナッツは外套を摘んでいたユイの手をしっかりと握る。

なるべく強く、壊れないように。指を絡めてしっかりと握った手をユイと自身の視線を間へと移動させる。

「――大丈夫や。君はココに居る。大丈夫やから、もうちよつとだけ寝とき」

「――……うん」

「ええ子やね」

ユイは瞼をゆつくりと降ろして、静かに寝息を立てる。

僅かに微笑みを浮かべたナッツは手を離そうとしたが、ユイに強く握られており外す事も出来ない。

「あー……アスナさん提案やねんけど。今日は教会に泊まん? この子――ユイも離してくれそうに無いし」

「私はいいけど」

「コチラは問題ありませんよ」

サーシャに視線を投げかければアツサリと了承の言葉が口から出てきた。

そのままユイを受け取り、背負ったナッツ。ナッツに安心したのか、ユイは腕をしつかりと回して抱きつく。

「フフ」

「なんや?」

「まるで姉妹みたいだね」

「……セヤナー」

不貞腐れるように眩いたナツツを微笑むアスナ。冷や汗を流すキ
リト。気付かなければ、問題は無い。問題は無いのだ。

第16話

窓枠に囲まれた月はまるでフレームに収まった写真の様で、手を伸ばしてみれば触れる事が出来そうな程に近く思えてしまう。

そんな月をボンヤリと眺めていたキリトは小さく息を吐き出して、眠っている愛しい人を見る。小さく寝息を立てるアスナを眺めて困ったように微笑む。

同じく愛娘とも言えそうな少女——ユイはこの部屋には居ない。昼間の一件から少しして目を覚ましたがナッツに付きつきりであった。ナッツの方も鬱陶しく思っていなかったのか、それともただ何処かに利点を見つけたのかユイを突き放そうともしなかった。

結果的にアスナとキリトは同室であるけれど、ユイは今もナッツと共にいるだろう。離そうとしても離れないのでナッツに任せた、という事もあるけれど。

キリトから見れば異性の少年少女なのであるけれど、アスナ達の視点では少女二人なのだ。故に何処か安心している部分もある。少なくとも、少年少女と分かっていたとしてもナッツとユイならば変な事は起きないだろうが。

あの昼間の一件。軍を追い払う名目であったにしろ、自分が止めなければナッツは容易くあの赤い刀身を男へと振り下ろしていただろう。それこそ笑う棺桶討伐戦の様に。

「悪いから罰する」という当然の事柄ではあるのだが、過激すぎるくらいがある。納得出来る訳はないが、理解はしている。

問題はあるのだろうけれど今スグに矯正されるモノでもない。そもそも矯正出来ているのなら既に完了している程度にはキリトとナッツは共に戦いへと身を投じていたのだ。

だからこそ、問題ではない。

キリトの脳裏にへばり付くユイが溢した言葉。震えながら吐き出された言葉。『暗い所』、『ひとり』。様々な要素を含んだ予想が頭に流れるがソレも一旦保留する。

その震えるユイの手を握ったナッツが問題だった。

同情の瞳ではない。まるで境遇を知っている様にナッツは震えて少し錯乱したようなユイをなだめてみせた。

ユイの存在に凡その当たりを付けているキリトからすれば、同程度に——或いはそれ以上か以下、差異はあるにしろ理解出来る程に何かを飲み込んだであろうナッツの方が問題だった。

そもそもナッツという存在が異質であった。自身よりも年下、それこそこの教会にいる子供たちと同年代であろう存在。その存在が死ぬかも知れないという覚悟を持ち戦いへと身を捧げている。

死ねば死ぬだけ。殺そうとしたから殺す。不必要だから殺す。まるで獣のようにハツキリとした規律。

『殺し合いの中で生を渴望する狂人』などというまるで小説に出てくる存在。一体何を飲み込めばあの年齢でそのような思考に至れるのか。

一体、何を飲まされたのだろうか。

ゾクリと背筋に走る悪寒。同時に自身が憤りを感じている事に気付く。一般的な常識をある程度持ち合わせているキリトからすれば自身の想像が当たっていない事を願うばかりである。

小さく息を吐き出してキリトは思考を改める。現実リアルの事を聞くのは禁忌だ。それこそ自分の予想が当たっているのならばナッツはココへ逃げてきたのだろう。

だからこそ、聞くべきではない。

ふと、気になって。というべきか、悪癖を知っているキリトは索敵スキルを起動して口をへの字に曲げる。

静かな足取りで部屋を後にして、隠蔽スキルでも使っているかのよう
うに足音すら鳴らさずに廊下を歩く。

肌を撫でる冷たい空気。騒がしいとも言える昼間と真反対に静か過ぎる空間と差し込む月光が余計に空気を冷たくしているのだろうか。

僅かに身震いをして、キリトは足を進めて礼拝堂へと繋がる扉を開

いた。

窓から差し込む月光。規則的に並べられた長椅子。その一つに座る萌黄色の髪をした美少女。ボンヤリと魔法のように淡く手元を光らせている美少女——ナッツは顔を上げて首を傾げる。

「どないしたん？ こんな時間に」

それはコツチのセリフだ。とはキリトは言わなかった。苦笑だけしてナッツに近付いて、彼の隣に横たわる茶褐色の塊に気付いた。

僅かに上下する茶褐色の塊から黒い頭がひよっこりと出ており、隣にいるナッツの手をしっかりと握っているユイ。ソレを払いもせず、にいたナッツを見てキリトは笑みを深めて一つ前の椅子に座り、背凭れに腕を乗せて後ろを向く。

「ユイをありがとうな」

「離れへんからなあ」

何処か諦めたように返したナッツにキリトは苦笑する。そうは言いつつも嫌がつている訳ではないらしい。少なくとも、自分の防具をトレードする程度にはユイの事を気にかけているのだろう。

そんな含みのあるキリトの苦笑に気付いたのか、拗ねるようにキリトを睨んだナッツであるが、スグに諦めたように息を吐き出した。

「それで？ こんな時間まで起きてるんは珍しいやん」

「まあ、ちよつとな」

「ふーん……」

ナッツはそれ以上キリトに言及する事は無い。

キリトは未だに”殺し”を引き摺っている事も知っている。笑う棺桶もクラデールも。何にしる、言及した所で生産性も解決もしない兄貴分自身の問題であるからナッツは触れる気もなかった。

「それでナッツは？」

「ボクが起きとるんは別に普通やろ」

「そうだけど……」

「……この娘、ユイの情報の再確認と新しい情報がないかの確認やね」

「何かわかったか？」

「さっぱり情報が無いって事ぐらい？」

そうか。と小さく呟いたキリトを目を細めて確認したナッツは溜め息を吐き出してウィンドウを消す。

「どうした？」

「新しい情報もないし、見当もついとるんやろ？」

「まだ予想だけだな」

「さよか」

「……なんでわかったんだ？」

「何日一緒に過ごしてると思うねん。顔見てれば分かるよ」

「マジか」

「冗談。カマ掛けただけや」

「この野郎……」

自分の顔をムニムニと触りだしたキリトを鼻で笑って種明かしをするナッツにキリトは何処か恥ずかしそうにナッツを睨んだ。

クスクスと小さく笑うナッツに疲れたように溜め息を吐き出したキリトは改めて幸せそうにナッツの手を握って眠っているユイを見つめる。

「それにしても、ホント懐いてるな」

「なんや羨ましいんか、お義父さん」

「お前に娘はやらんぞ」

「……似たもの同士やから仲良くはなれるやろうけど、夫婦とかは無理やろなあ」

ユイを見ながら自嘲気味に吐き出したナッツにキリトは気まずそうに頬を指で掻いた。

そんなキリトを見てナッツはコロコロと笑ってみせる。

「なんや、ソレを聞きに来たんやと思っただけど。違っただん？」

「……顔に出てるか？」

「性格を知つとるだけやよ」

へにやりと笑うナッツにキリトは何も言えず、ただただ困ったように目を伏せた。

対してナッツは窓の外に映る月をボンヤリと眺めて、大きく息を吸い込んで、細く吐き出した。

「別に、特別な事やないよ。普通の事や」

「……そっか」

「そうや。ただ伸ばされた手を取った、それだけなんや。ただそれだけやってん」

まるでその行動を無理やり飲み込むように、ナッツは言葉を吐き出した。視線は相変わらず空を向いている。

その表情に悲しみはない。後悔もない。憐れみもない。ただただ月を眺めるナッツにキリトは何も言う事が出来なかった。

「……んう」

「お、起こしてもうた？」

「なつつくん……？」

「キリトも居るから、ちゃんとベッドで寝エヤ」

「ん……うん」

何処か夢見心地なのかボンヤリと瞼を上げたユイにナッツは穏やかに微笑んで寝惚けているユイを誘導する。

それが会話の終わりだと察したキリトは何も言える訳もなく、ゆらりと立ち上がったユイを支えて抱き上げる。

「ほな、おやすみ。キリト」

「……ああ、おやすみ。ナッツ。……ちゃんと寝ろよ」

「わかつとるよ」

肩を竦めて応えたナッツにキリトは苦笑して抱き上げたユイと共に自分の部屋へと足を進める。

その背中を見つめて、扉が閉まるのを見届けたナッツは深く息を吐き出して居住まいを直す。

見上げた月に手を伸ばして小さく息を吐き出す。

「ナッツらしくは無いなあ」

小さく震える手を握りしめて呟いた。

握った手を包むようにもう片方の手を置いて、ナッツはボンヤリと空を見上げる。

窓枠の中に浮かぶ月。遠く、届くことの無い月。太陽と月が交互に変わる絵画。どれほど手を伸ばした所で絵画の世界に行ける訳もな

い。

まるで月に帰る事が出来ないお姫様のように、ナッツは少しの間、その絵画を見上げていた。

第17話

「ミナ、パン一つとって！」

「ほら、余所見していると溢すよっ！」

「あーっ、先生ー！ ジンが目玉焼き取ったー！」

「かわりにニンジンやったる！」

「これは……すごいな……」

「そうだね……」

長机二つに所狭しと並べられた大皿の卵やソーセージ、野菜サラダを二十数名の子供たちが騒ぎながら手を忙しなく動かしている。

眼前で繰り広げられる戦闘を思わせるような食事風景にキリトとアスナが呆然としながら眩きを溢した。

長机とは別に準備されたテーブルに座ったサーシャとナッツは同席しているそんな二人を見て苦笑している。

「いつもこんな感じやな」

「そうですね」

「ナッツはアツチじゃなくていいのか？」

「子供らの取り分を減らす程コドモやないよ」

カップに口を付けながらキリトの問いに応えたナッツ。十分に子供ではないか、というキリトとアスナの思考に気付いたのか、それともカップに入ったお茶がSAOの味覚システム特有の変な味だったのか、ともあれナッツは口をへの字にしてカップを置いた。

そんなナッツの隣にいるのはニコニコと楽しそうに食事をしているユイである。

早朝になり目を覚ましたユイが朝食の場に訪れた際、自然とナッツの隣に座ったのがそもその原因なのだが。ソレを邪険にする訳もなくナッツは何も言わずにユイに世話を焼いているし、微笑ましく見守るに至ったアスナとキリト、そしてサーシャの感情は十分に理解する事が出来る。

「それで、ナッツ。軍の事なんだが」

「……半年ぐらい前からやね。知ってる限りやけど」

とナッツがサーシャの方を向けば、サーシャが頷く。子供達を保護するに至ってサーシャは《王冠の妖精》に情報売っている。基本的には街の事であり、それこそ噂話に至るまで沢山の事を《王冠の妖精》は買い取ってくれるのだ。

その中の一部に軍——《アイ^Aインクラ^Lッド解放^F軍》の事も含まれている。

「軍の上の方で色々あって、その弊害やね」

「色々？」

「これ以上は情報料出しや」

「む」

「あんまり僕から情報出ていくと情報屋達の収入無くなるし。これ以上情報屋から恨まれたくもないんよ」

「お前……何したんだよ……」

「情報屋に金をバラ撒いて情報の操作とか、まあ色々？」

ニツコリと綺麗な笑みを浮かべたナッツ。果たしてアイ^Aインクラ^Lッドの裏に潜んでいるのはP O Hだけではないのである。

思わず引きつった笑みを浮かべたキリトとアスナを咎める事など出来ないだろう。

優雅にカップを傾けているこの美少女(♂)と扇動家でもあるP O Hが組めば忽ちS A Oの社会など壊されてしまうだろう。尤も、目的の違いすぎる二人が組むことなどあり得もしないのだが。

「ま、軍の方にも色々持ち掛けたり、恩は売ってるけど末端には影響ないみたいやし」

「そうか……なあアスナ。奴はこの状況を知ってるのか？」

奴、という不特定の一人を示す呼称であったが、良人の何処か嫌そうな響きに誰か察したアスナは笑みを噛み殺しながら某人の事を思い浮かべる。

「知ってる、んじゃないかな……。ヒースクリフ団長も軍の動向には詳しいし。聞いている限り、ナッツも報告はしてそうだし」

「情報屋を通じてやけどな。まあヒースクリフさんは動かんと思うけ

ど」

「そうなのよね……。あの人、ハイレベルの攻略プレイヤー以外は興味無さそうだし」

「攻略目的やからなあ。《笑う棺桶》討伐の時もエライ出費と説得させられたし」

その時を思い出した様で苦々しい顔をしたナッツ。彼がどれほどの苦勞を強いられたのかはこの際置いておくとして。

「だからあの人がこの件で動くんやったら……せやなあ……。軍の人員を攻略組にする為の育成時間、経費、規律の厳格化、KOBに対しての工面もせなアカンし——」

「わかった、アイツが動かないって事はよくわかったから落ち着けナッツ」

指折りに必要であろう条件を口にしていたナッツをキリトが至極嫌そうに止めた。果たして討伐戦の時には一体何を求められたのか、キリトの想像は恐らく超えているのだろう。

申し訳無さそうな顔をしているアスナとは違いナッツは重々しく溜め息を吐き出してカップを持ち上げようとして途中で静止した。

横目でキリトへと視線を送り、カップを置いて立ち上がる。

「キリト」

「ああ」

「どうしたの？」

「お客さんや。コッチは任せてええ？」

「任せろ」

自身の後腰に僅かに反った愛剣を出現させたナッツは飾り布を揺らしながら歩き食堂から出ていった。

そんな様子を不安そうに見つめるユイに警戒を表に出していたキリトが苦笑して頭を撫でる。指の間をすり抜けるような艶やかな黒髪を撫でればユイはそれでも不安そうにキリトを見上げた。

「ナッツは大丈夫だよ」

「……ほんと？」

「ああ。なんたってパパの相棒なんだからな」

ニツと歯を見せて、なるべく安心させるように笑ったキリト。よもやナツツも教会の目の前で何かを起こす事はないだろう。それこそ危害を加えられた訳でもなく、危害を加えてきた昨日の男達があっさりしに對して一日で動き出すとは考え難い。

そんなキリトの笑みを見てユイは視線をアスナへと向ける。アスナもユイを安心させるように微笑みを浮かべて頷いた。

それを証明するように食堂の扉が開きナツツが戻ってくる。その後ろには一人の女性が立っている。

銀色の長い髪をポニーテールに束ねた、怜悯な女性。空色の瞳が何処か申し訳無さそうにサーシャを捉えて、頭を下げる。

「……ナツツ」

ありありと警戒を露わにしたキリトの空気に察したのか、それとも彼女の鉄灰色のケープの下に隠された見覚えのある制服に気付いたのか、子供たちも押し黙り食事の手を止めている。

「大丈夫や。問題ない」

ナツツ自身が武器をストレージに戻した事から子供たちは安心してように息を吐き出して、食事という名の戦争を再開する。

その様子に苦笑したナツツは女性をキリト達の座る丸テーブルへと促して、椅子に座らせる。

「コチラ、ユリエールさん」

「はじめまして、ユリエールです。ギルドALFに所属しています」

ナツツの紹介に肖り軽く頭を下げたユリエールが自己紹介をする。

「ALF?」

「《アインクラッド解放軍》——A i n c r a d L e a v e F o r c e sの頭文字三つの略称やね」

「すみません、正式名はどうも苦手で……」

はじめて聞くギルド名に疑問を抱いたアスナに對してナツツが応えてユリエールが補足を加える。

なるほど、と一つ呟いてからアスナは慣れたように挨拶を返す。

「はじめまして。私は《血盟騎士団》の——あ、いえ、今は一時脱退中なんです、アスナと言います。この子はユイ。それと——この人は

キリト」

「旦那が挨拶するもんやないんかなあ」

礼儀作法の類いでキリトにジトリと視線を送ったナッツに対してキリトは逃げるように視線を宙へと飛ばした。

フルーツジュースを飲んでいたユイは、顔を上げてユリエールを注視し、ニパツと笑った後にまたフルーツジュースへと挑みかかった。

「KOB……なるほどナッツが信頼する訳ですね」

「ほほう。ナッツが信頼、と」

「なんやねん」

こっそりとそう評されている事にニヤリと笑ってナッツへと向いたキリトであるが、残念な事にナッツはその事に関して恥ずかしさも何も持ち合わせていない。当然だろう、という顔で肩を竦めてみせた。

「それで、ナッツ——」

「迅速に動くなら二人の協力は必須や。僕一人で動けん事もないけど、リスクが大きい。準備するなら時間で時間が掛かる」

「何かあったのか？」

「ちよつと、な」

「……はい。最初から、説明します」

決してナッツから説得される訳ではないことを察したユリエールは起こってしまった問題を——そこに至るまでに起こった事を説明していく。

そもそも、《アインクラッド解放軍》は独善的なギルドではなかった。情報や食料などの資源を均等に分ける為に作られたギルドであった。

けれど、それは理想なのだ。理想を実現する為には圧倒的なリーダーシップ——カリスマか、協力、もしくは恐怖や暴力によって統制されていなければならない。

アインクラッド解放軍のリーダーであるシンカーにその力量が

あつたのかと問われれば、既に解は出ているのだ。

得たアイテムの秘匿、肅清、反発。悪循環の結果として理想は崩壊した。指導力を失っていくリーダーに打って出るように一人の男が台頭した。

名をキバオウ。

キバオウは指導力を失ったりリーダーの為に立ち上がった。体制の強化、志を共にする幹部プレイヤー達の統率。ギルドの収入の増大。善良な言い方をすれば——と頭に付け加えられるのだが。事実としてアインクラッド解放軍の横行は酷くなる一方であつた。狩り場を独占。街区圏内での《徴税》。

そんな事をして許される訳もなかった。そもそも安全な所で胡座をかいている解放軍は攻略に参加していない。それこそヒースクリフが見捨てる程に、攻略組としての名前は連ねられていない。

末端プレイヤーからの不満を押さえ込む為にキバオウは博打を打つ。最前線の攻略である。同ギルドに所属し、シンカー派であつたディアベルはソレに反対を示したがキバオウは無視をして作戦を実行した。

キリトとアスナ——そしてナッツの記憶にも新しい第七十四層攻略である。

結果として、《アインクラッド解放軍》はナッツに——《王冠の妖精》に大きな借りを作っただけに過ぎない。

当然、キバオウは事実の隠蔽と捏造に動いた。幸いな事にコーバツツを含めた実働部隊は生存して戻ってきたのだ。コレを使わない手はない。

けれど、どうしたことか。隠蔽した事実は流れる事もなく、事実が大きく喧伝された。末端プレイヤー達に「隠蔽をしようとした事実」も一緒に。よもや情報系統が既に握られているなど気付く訳がない。そもそもキバオウがその思考をする余裕すらもない。時間が経つにつれて次第に悪化していく立場。栄華が遠のく感覚。どうにかしなくては……どうにかしなくては。

キバオウは強攻策へと打って出る。

シンカーの謀殺である。

シンカーを謀殺して、キバオウの立場が良くなるのか？ と問われればYesだ。ギルドリーダーの証である《約定のスクロール》を操作出来る存在がシンカーとキバオウだけなのだ。

シンカーが死ねばどうなるのか？ キバオウ体制はより盤石と成り、そして軍はより横暴に振る舞うだろう。数の暴力とは言ったものである。

件のシンカーの名前に横線は引かれず、今もまだ生きている事が示されている。

ユリエールの依頼はそのシンカーの救助だ。
ならばそのシンカーが何処にいるのか――。

「ぬおおおおおー！」

キリトに握られた右の剣が鋭くモンスターを切り裂く。

「りやあああああー！」

これまたキリトに握られた左の剣が唸りを上げてモンスターを吹き飛ばす。

黒鉄宮の地下に出現した大型ダンジョン内でキリトの声が響く。ソードスキルが輝くごとに消し飛んでいくモンスター達にユリエールは唾然としつつ、キリトの狂戦士っぷりにやや引き気味である。

その隣ではアスナがキリトを眺めながら「やれやれ」とでも言わんばかりに苦笑をしており、同じく溜め息混じりにマツピングを行っているナツツに手を握られたユイに至っては「パパーがんばれー」となるとも緊迫感の薄れる声援を送っている。

もっと言えば、余裕がありすぎるのかユイの声援が聞こえる度に「おうっ！」とキメ顔で返事をするキリトが原因でもあるのだが。

ダンジョンにユイも共に潜るのはキリト、アスナの両名は反対であった。当然のようにサーシャへと預けようとしたのだが頑固にも一緒にいくと聞かなかった。

困ったようにしているアスナとキリトに対して「僕が守るからエエ

やろ」と進言したのはナッツである。ナッツの防御能力を知っている二人にすれば納得出来るような要因であるが、それでも危険な事には変わりない。更に加えるように転移結晶を持たせる事でようやくキリトとアスナは納得し、ユイはナッツの隣で声援を送っている訳である。

「しかし、ナッツがユイに助け舟を送るとはなあ」

「なにいき」

「お前に娘はやらんぞッ！」

「はいはい」

モンスターの群衆を吹き飛ばして来たキリトがニタニタと笑いながらナッツに絡む。絡んできた兄貴分を邪険に扱う様子にユリエールが耐えられないようにくつくつと笑いを溢す。

「お姉ちゃん、はじめて笑った！」

それを嬉しそうに指摘したユイも満面の笑みである。果たしてアスナは何を感じたのか、そんなユイを抱き上げてギユツと抱きしめた。

そんな様子を見て、羨ましそうに見ていたナッツに気付いたキリトは少しだけ考えて口を開く。

「お前もやってやろうか？」

「ド阿呆」

バツサリとソレは切り捨てられたが……。

ダンジョンに入って少ししてからキリトに任せっぱなしが気に食わなかったのか、ユイが抱き上げられた事で手持ち無沙汰になったのか戦闘にナッツも参加しはじめて少し。

モンスターも水中生物型だったモンスター達がゾンビやゴーストなどといったおぼけ系統へと変化し始めた。スポンした端から二刀と紅色の牙によって消し去られていくのだが。

「……なあナッツ」

「何？」

「お前一人でも行けたらろ」

「……せやね」

「どうしてだ？」

「僕はお人好しにはなれんのか。それこそキリトやアスナさんみたいに」

後腰の鞘へと紅い牙を収めたナッツが苦笑してそう応えた。

キリトやアスナを巻き込まなくとも、ナッツ一人で問題は無かっただろう。連戦になった所でナッツならば突破は容易いとキリトは確信している。ナッツがダンジョンの安全マージンをユリエールから聞いていなかったとは考え難い。

きつとナッツ一人だったならばユリエールの依頼をアツサリと断っていただろう。ナッツ自身、そして《王冠の妖精》に、攻略に利がないのだ。

それこそ『シンカーの救助』は絶大な恩を売ることが出来るが、現体制の軍にそれ程の価値はない。シンカーが死んでしまう事もナッツにとってはそれ程大きな損失ではない。

軍の横行が悪化すると決定した時点でキバオウを殺せば話は終わる。残ったハリボテの軍を吸収し、体裁を整えて、攻略組へと編成すれば結果としては得になる。

巨大な組織であるが、ナッツには大きな力がある。カリスマでも、誰かの協力でもない。《人殺し》という圧倒的な恐怖がある。ソレを基点として規律を守らせればいい。

何にしろ、ソレはシンカーが死んでからの話だ。幾度か話した事もある男を好き好んで殺す意味もないが死んでしまつては仕方ない。

だからこそ、ナッツはユリエールの依頼を《王冠の妖精》として受けるつもりはなかった。個人としての助力をするつもりではあつたが、それこそ利がない。ただか数回話した程度の男にリスクを負うなどナッツは願ひ下げであつた。

そのリスク軽減の為にユリエールをキリトとアスナに案内した訳である。お人好しになれない狂人のせめてもの抵抗である。

「ま、シンカーが死ぬんは惜しいけどな」

「なら受ければ良かったら」

「天秤の都合や」

そんな真意を語る事もなく、適当な言葉で誤魔化したナッツにキリトは、不器用な弟分だ、と小さく溜め息を吐き出した。

そんなキリト達の先に暖かな光の洩れる通路が目に入った。

「目的地、みたいやな」

「……ああ、奥にプレイヤーが一人いる。グリーンだ」

「シンカー！」

キリトの確認を聞いたのか、ユリエールが全身鎧を鳴らして走り出す。

その様子に慌てて後を追うキリトとユイを抱えたアスナ。ナッツは索敵スキルを十全に展開しながら急ぎ足で追う。

右に湾曲した通路を進めば、大きな十字路と、その先にある小部屋が目に入った。

暗闇に慣れた瞳には眩いばかりの光を溜め込んだ小部屋の入り口には一人の男が立っており、両手を大きく振っている。

「——チツ」

瞬間、ナッツは息を飲み込んで舌打ちをした。警戒をし続けたナッツだからこそいち早く気付くことが出来た。

脚へと力を込めて低く飛ぶように地を蹴り出す。アスナの隣を素通りし、同じく疾走し始めたキリトが並走する。

一瞬、キリトとナッツの視線がかち合い、同時に剣を抜いた。

曲刀の柄尻にある飾り布をキリトが握り締め、ナッツが更に速度を上げてユリエールの腹部に腕を回す。

「キリトッ！」

「ああー！」

合図と同時に剣を地面に突き立てたキリト。けたたましい金属音が響き急制止が掛かる。ソレは飾り布を伝ってナッツの速度を落とす、そして抱えられたユリエールの制止に繋がった。

焦げた匂いが漂い、ようやく制止した所でナッツ達の前の空間を地響きを鳴らし巨大な黒い影が横切った。

ソレは左の通路に飛び込むと、数十メートル程進んで動きを止めた。

その動きを見て、キリトとナッツは同じく左の通路へと入り込み剣を構えた。

《The Fataliscythe》。定冠詞を飾った名前。

全長二メートルを優に超えるであろうボロボロの黒のローブを纏った人型のシルエット。

袖から見える白骨の手には肉の代わりだと言わんばかりに密度の濃い闇が蠢き、フードの奥に備えられた髑髏には爛々と獲物を見据える生々しい瞳。

右手に握られた体躯相応の巨大な鎌。その気味悪く湾曲した刃の先から深い赤の雫が落ちていく。ベチャリと音を立てそうな程粘っこい雫が地面に痕を残す。

「ナッツ、見えるか？」

「まったく」

「だよな」

短いやり取りで簡潔に情報を交わす。

ソロに特化した二人の識別スキルであってもそのデータは見る事が出来ない。このダンジョンに置いてソロであっても安全と言える程のレベルがあつてもだ。

純然たる事実と絶望がキリトに突き付けられる。

「キリト君ー」

そんなキリトの後ろで細剣を構えるアスナ。横目でチラリと確認したキリトは息を飲み込んで、真っ直ぐに死神とも呼べるべき存在を睨んだ。

「アスナ、今すぐに安全エリアにいる三人を連れて、クリスタルで脱出しろ」

「え……？」

「僕らの識別スキルでデータがまったく出ん。八十後半ぐらいの相手や」

ナッツの言葉にアスナが息を飲み込んだ。

ナッツは一切視線を動かさずに死神へと定めている。深く呼吸を繰り返し、相手の動きを見切る為に。

「俺とナッツが時間を稼ぐから、早く！」

「ふ、二人も一緒に——」

「あとで行くよって、はよ逃げ」

アスナの言葉を封殺するようにナッツが被せて言葉を放つ。

キリトとナッツならば自分たちが脱出出来る時間を稼ぐことは容易いだろう。けれど、その後はどうなる？ 二人の速度で安全エリアへと飛び込むことは可能なのか？ この死神が先程見せた突進速度で——。

アスナの心がゾクリと震える。キリトが戻って来なかったら——ソレこそ耐えられるモノではない。

右の通路の奥を見たアスナは内心でユイへと謝罪する。深く、何度も謝り、決意した。

「ユリエールさん、ユイを頼みます！ 三人で脱出してください！」
その言葉にピクリと身体を反応させたのはナッツであった。決して視線を動かす事はなかったが、それでも僅かに気が逸れてしまった。

まるで見計らったように死神は動き出す。大きな鎌を振りかぶり、横振りする。

死神の行動に一瞬だけ遅れてナッツが動き出す。一瞬だけだった、それが致命的である事はナッツが一番良く分かっていた。

だからこそ反撃ではなく、無様にも防御という選択を選んだ。ナッツは”受け流し”の為に幾度も攻撃を覚えている節がある。無様、と称したがソレは最前線のタンクにも劣らぬ防御だ。

その防御を嘲笑うように、凶刃はナッツを弾き飛ばした。

ピンボールのように弾き飛ばされたナッツは天井に叩きつけられ、地面を跳ね、壁へと打ち付けられた所でようやく速度を落として床へと落下する事が出来た。

明滅する視界。衝撃によるスタン状態。HPバーは半分を下回り

黄色に染まっている。

「ナッツ！」

「キリト君ッ！」

吹き飛ばされた戦友へと声を掛ければソレが切欠だったように凶刃はアスナとキリトへと振り下ろされた。

呼吸が止まり、視界が暗くなる。

キリトも自分も死に体だ。立ち上がらなければならぬ事は理解しているが身体に力が入らない。

死神へと視線を上げれば、一つ一つ丁寧に魂を回収すべく重々しく鎌を振り上げていた。

最初は一番近かった、自分らしい。

強張った唇は声を紡ぐ事が出来ない。アスナの脳裏にキリトとの休日が駆け巡り、必死に立ち上がろうとするキリトが視界に入った。何かを言いたい、けれど声が出る筈もなく虚しく唇が震える。

カラリ、と音が響いた。

萌黄色の髪が揺れ動き、曲剣を握りしめる。

「——アアアアアアアアアアッ!!」

まるで獣の咆哮であった。恥も外聞も捨て去った威嚇。

《威嚇》^{ハッル}に反応して、死神がゆらりと向きを変える。曲剣を杖代わりに辛うじて立っているだけの存在をその視界に捉えた。

震える脚で強く床を踏みしめて、ナッツは曲剣を構えた。

内心ではこの行動を否定している。狂人——ナッツらしからぬ行動である、と。良き人生であったと嘯き、粛々と運命を受け入れる。狂人としてならば、そう在るべきなのだ。

だからこそ——この行動はナッツの行動ではない。ただ助けるだけの行動など、あり得ない。そんな役柄では無い。

——知ったことではない。

「——ハッ」

咳き込むように、鼻で笑ったナッツは食いしぼる様に笑みを浮かべ、死神へと向いた。

役柄としての行動ではない。与えられた存在ではない。経験してきた人生のどれでもない。

まるで意識を入れ替えるように、瞼を閉じて——ゆつくりと開いた。

「死なせない……絶対に」

震えていた切っ先が真っ直ぐに死神へと向いた。濃密な死の塊に煌々と決意した瞳が向く。

行動を咎める様に騒がしかった心は既に落ちついている。夏樹は静かに微笑みながら感謝と謝罪を心に落とす。

「キリトさん、アスナさん。僕が死んだ瞬間にスタンが解けます。逃げて下さい」

「ツギけんなー！」

「彼なら、敵を引き寄せも出来るんでしょうが……すいません」

キリトの糾弾を聞いても、ナッツは——夏樹は穏やかに笑みを浮かべ、息を深く吐き出した。

死ぬのは怖い。そんな事、知っていた筈だった。

生を惜しみ、死を恐れる。なんと人間らしいことか。

加藤夏樹は震えながらも、笑みを深めた。

迫りくる凶刃をじつくりと視界へと収めて、受け入れるように瞼を閉じる。

金属が硬い何かに打つかったような、大きな音が鼓膜を揺らし、瞼を上げる。

鮮やかな紫色の障壁が視え、そして黒い髪の少女が目の前に見えた。

「——だいじょうぶだよ」

幼子に言い聞かせるように——自分がそうされたように、ユイの口から穏やかな声が紡がれた。

笑みを浮かべるユイとソレを見てか納得したように笑んだ少年。

「少しだけ眠ってもいいよ。私が居るから、もう少しだけ」

紅蓮の炎をそのまま剣にしたような真つ赤な剣を握ったユイに安心したのか、穏やかに微笑んだ少年は糸が切れた人形のように力が抜け、地面に倒れた。

「——大丈夫。アナタもココにいるよ」

そんな少女の声を鼓膜に残しながら。



数分程して目を覚ましたナッツは心配そうに見るアスナとキリトの顔にへニヤリと笑ってみせた。

「ユイは？」

周辺を見渡して少女が居ない事に気付いたナッツはキリトとアスナの顔を見て何処か納得する。

気付いていなかった、という訳ではない。自分と似たような存在であったけれど、自分とは決して違う存在である事は分かっていたのだ。

「その、ユイは——」

「エエよ。なんとなくわかったし」

ソレだけを言ってナッツは立ち上がって背を伸ばす。小さく息を吐き出して、シンカーとユリエールへと向く。

「軍はどうするん？」

「——解散するつもりです」

「さよか。入り用なら手伝うから連絡しいや」

「……もっと怒るかと思いましたがよ」

「アホ言いな。ココで繋がりを絶つ方が損や」

バツサリと損得勘定を述べたナッツに噂通りだとシンカーは空笑いをする。

歩き出そう脚を進めるナッツをキリトが呼び止めた。

「簡単なパーティーでもしようと思っただけど？」

「……僕は遠慮するわ。ちよつとギルドに戻りたいし」

「そつか。じゃあ、またな」

「ほな、また」

ヒラヒラと背中越しに手を振ったナッツは転移結晶を使ってギルドホームへと転移する。

大きく息を吐き出して、ホームの扉を開けばギルドメンバーの視線が集まり、片手で簡単に挨拶を交わす。

そんな長の姿に気付いたのか、金髪を揺らした美女はいち早くナッツの前へと現れた。

「我が君、お帰りなさいませ」

まるで従者がそうするように、胸に手を当てて軽く頭を下げたウイード。

そんなウイードを見て、ナッツは疲れたように溜め息を吐き出した。

そんな溜め息にもニンマリと笑みを浮かべたウイードにナッツは近寄り、倒れ込む。

珍しくお疲れなご主人様を不思議に思いつつも支えたウイードに視界にメッセージが出現する。

「……ちよつと寝る」

「はい、お疲れ様です」

ハラスメント警告を即座に理解し、奇跡的に弱っている主を抱きしめたウイードは穏やかに言葉を吐き出した。

ギルドリーダーに充てがわれる部屋のベッドにナッツを降ろして、ウイードは小さく息を吐き出して扉を出た。

「良いですか！ 絶対に！ 絶対ゼエエツタイに部屋に入つてはいけませんよ！」

ウイードは現在居るギルドメンバーに聞こえるようにそう宣言してから、自然と浮かび上がる笑みを抑える事もせずに鼻歌でも奏でそうな程上機嫌で部屋へと姿を消した。

誰も入んねえよ。アンタもリーダーも綺麗な顔して怖いんだから。
というギルドメンバーの心の声など届くこともない。

第18話

ナッツは静かに瞼を上げた。

木々の間から日の光が射し込み、視界の隅に映る時計が早朝の時間を知らせる。

手に持ったナイフを弄びながら、ゆっくりと息を吸い込んで細く吐き出した。

あの日から、耳心地のいい女の声が聞こえなくなった。

その原因がナッツから言わせれば惰眠にも等しい睡眠時間を得た結果か、それともその惰眠に付き合ってくれた彼女が原因か、はたまたあの日居なくなってしまうた同類紛いの少女の所為か、或いは珍しく彼が矢面に立ったからなのか。

もしかすればまったく別の要因なのかもしれない。

思考した所で原因の究明になっていく訳でもなく、結果として自身を進める為の原動力が失くなってしまったと言い換えても差し支えない。

原動力が無くなったからと言ってナッツが行動を止める理由にはならない。神様が居なくなったからと言って人間が生きるのを止める訳でもない。

「ま、エエやろ」

すっぱりと愚考していた内容を切り捨てたナッツはツマラなさそうにナイフを正面の木へと投げつけた。自身を震い立たせるに幹へと直立したナイフを睨めつけたナッツは満足そうに鼻息を吹き出してウインドウを右手で操作する。

妖精達から送られてきた情報を精査しながら口をへの字に折り曲げた。文面を確かめるように二度三度読み直して、事実を確認する。情報を噛みしめるように瞼を閉じて深く呼吸をし、溜め息のように吐き出した空気を睨めつける為瞼を上げて立ち上がる。

茶褐色の外套から草を払い、後腰に差した曲剣の位置を直す。萌黄色の髪を揺らしながら歩き始める。その手には青色の結晶が握られていた。

第七十五層。攻略組にとってソレは特別な数字だった。

二十五層の双頭巨人型のボスモンスターは軍の精鋭を壊滅させた。五十層の金属製の仏像めいた多腕型ボスでは全滅の可能性もあった。クォーターポイントで起こった激闘を考えれば、攻略組は普段のボス攻略以上の警戒と緊張をせざるを得ない。

ナッツにとつても——いや、攻略組で轡を並べるメンバー達よりもナッツは一層の意思を七十五層に注いでいた。

ソレは自身が勇者として台頭する為のモノであり、ヒースクリフが——茅場晶彦がどのような行動を取ろうが攻略の速度を緩めない為の行動でもあった。

「こ、困ります、ナッツさん」

「邪魔やボケ」

白地に赤の十字架が刻まれた制服を纏った団員がギルドを我が物顔で闊歩するナッツを止めようとする。その制止の声に舌打ちでもせんばかりに苛立たしげに応えたナッツは隣に居た金髪の女騎士に目配せをする。

ウィードはその目配せに応えるようにニコリと笑んで血盟騎士団員を止めた。

変らずナッツはその脚を止める事もなく、見知った扉を蹴り開ける。

「邪魔するでえ」

「ナッツ!？」

「やあナッツ君。来ると思ったよ」

「そう思つとたんやったら団員に情報共有ぐらいしといて欲しかったわ、ヒースクリフさん?」

蹴り開けられた扉に驚いた黒の剣士と閃光の騎士とは違い部屋の主は悠々と佇まいすら直す事もなく言葉を吐き出した。

ナッツは自身とヒースクリフの間に立っているアスナとキリトを

一瞥した後にはースクリフを睨む。

「で、どういう事か説明してくれるんか？」

「君の事だ。既に情報は掴んでいるんだろう？」

「七十五層に向いてた先遣隊の一部が死んだ事は知つとる。結晶無力化空間、退路封鎖が今回のボス戦って情報も掴んどる」

「ならば説明する事はないと思うが？　今回は統制の取れる範囲での大部隊をもって当たるしか無いことは聡明な君なら分かるだろう」

「コツチの思惑を知っててそれを言うんか」

「……ふむ。君はもしや、今回の戦いで自分の我儘を通そうと言うのかね？」

我儘。そう我儘である。

ナッツが否定したい事実はこの場にキリトとアスナが居る事だ。戦線を退いた二人が再び戻ってきたことが問題なのだ。

二人が居れば戦力は増える。攻略は安定する。けれど、それでは自身のできた事が全て水泡に帰す。誰も希望になる為に、攻略を滞らせる事を無くす為に――。

そんな矛盾を孕んだ理由が建前であることはナッツ自身が理解している。そしてヒースクリフが建前の否定ではなく本音の部分を我儘だと指摘している事もわかつている。

「――君では力不足だよ、ナッツ君」

まるで思考を読み取ったようにヒースクリフはナッツを咎めた。

建前を否定するように放たれた言葉はナッツにとっては違う意味を持つ。そして瞬間に意図を理解した。理解してしまった。

「――わかった。僕が折れたる」

「助かるよ。私としても現状で君と事を構えるのは避けたいからね」

「戦争ふっかけるにしてもボス攻略が終わった後や」

今にも決闘デュエルを行いそうな雰囲気纏う二人の間に挟まれたキリトとアスナは直ぐにでも止められる様にやや身構えている。

そんな二人を安心させるようにナッツは両手を上げて溜め息を吐き出してみせた。

「別に今すぐケンカする訳やないよって、そんなに睨みなやアスナさ

ん」

「ボス攻略が終わればするんでしょ？」

「両方共生きとつたらな……って冗談やって」

縁起の悪い事を言ったナッツはアスナの睨みに怯んだように戯けてみせた。

「それではナッツ君。今から三時間後——作戦が開始されるまでに状況と統制、道具各種について少しばかり詰めようか」

「それで溝でも埋める気かいな」

「さて、それも君次第だろう」

苦笑し立ち上がったヒースクリフに至極嫌そうな顔をしながら言葉の口にしたナッツ。彼とてヒースクリフとの作戦会議は必至と思っているからこそ、拒絶を表に出しつつも指示には従おうと足は動いている。

お互いに攻略という目的があるからこそ、二人は味方であり続ける事が出来た。

一時間程して、会議が終わったのか、それとも方方に指示を出すために血盟騎士団が保有するギルドホームの一室から出てきたナッツは驚いた表情をする。

「なんや、キリト。待ったんか」

「ああ」

壁から背を離れた黒の剣士はフードもしなくなつた弟分に申し訳なさそうな顔をする。

英雄になろうとした少年。希望という責任を背負う為に立った子供。

対して自分はその責任から逃げた男であり、そして少年が努力したであろう事柄全てを無駄にしようとしている。

仕方ない、攻略の為だ。

そう割り切ってしまうのはきつと容易い事なのだろう。そんな事が出来るような性格であれば。

「その……」

「——はあ。まったく、僕の頑張りが水の泡やで。せつかく色々根回しして、無償の人助けまでしたのになんで戻って来るんかなあ」

「……………悪い」

「そんな言うほど怒つとらんよ。戦力が增えるんは確かやし」

厭味つたらしく言葉に出したナッツは疲れたような顔を一変させて穏やかに笑う。

ナッツにしてみれば、既に終わったことなのだ。

自分が英雄に——希望になるという表向きの理由も。

二人に死んでほしくないという我儘らしい事情も。

既に水泡に変化して、破裂した。

キリトが戻ってきたから、とキリト本人は感じている。それは間違いではない。確かにキリトが戻ってきたのが原因である。

「ま、攻略が楽なるし。僕としては万々歳や」

あっけらかんとした口調でケラケラと笑うナッツにキリトは安堵したように苦笑する。後ろを顧みない弟分だからこそ、なのだろう。少しばかりその性格を羨ましく思ってしまう。

「というより、アスナさんと一緒に居らんでエエの？ あれでいて嫉妬深いから後ろから刺されるんちゃう？」

「怖いからやめてくれ」

想像したのか顔を青くしてナッツの言葉を止めるキリト。閃光と呼ばれる彼女が笑顔のまま自分の背後に立っているだけなのに、どういふ訳か背筋が凍りついた。

「ま、コッチは大丈夫やし、準備もあるからアスナさんの近くに居ったりいさ」

「……………ホントに大丈夫なんだな？」

「むしろ頼りない兄貴分が居らんほうが動きやすいまでであるで」

「頼りなくて悪かったな！」

ケラケラと笑いながらキリトの背中を押したナッツは手を振る。その様子に安心したようにキリトは足早に閃光様の元へと馳せ参じる。彼女に黒い笑顔をさせてはいけない。

キリトの背中を見送りながらナッツは溜め息を吐き出してウインドウを開く。淡々と業務的に内容を妖精達へと送りつけていく。

作戦の中止。攻略の準備内容。尤も、ギルドとしての参加はしていないのでアイテムをかき集めて配るだけなのだけれど。

メッセージを送りながらのんびりとした足取りで街へと出たナッツは空を見上げて息を吐き出す。

力不足。英雄に成りえない。

ヒースクリフ——茅場晶彦から告げられた言葉。そして呼び出されたキリトとアスナ。

攻略の為に必至である。それはナッツとて理解している。二人の戦力は大きい。

自分への嫌がらせとして茅場晶彦が二人を呼んだとは考えにくい。そんな自意識過剰な精神をナッツはそもそも持ち合わせていない。

二人を呼んだ意味。戦力としての意味、英雄、力不足、攻略。

バラバラの欠片を頭の中で繋ぎ合わせながら、ナッツは路地裏へと身体を滑り込ませてようやく深く溜め息を吐き出した。

そのまま力任せに壁を殴りつけて自身の感情を発散する。

壁を殴ったというのに痛くもならない手と「Immortal Object」の文字。張り付けていた笑顔が剥がれ落ちていく感覚にナッツは顔を手で軽く覆う。

ナッツらしくない激情。攻略を目的としたナッツで言えばこの感情は排他すべきモノだという事は理解出来ている。それでも溢れてくる感情を制御する事が出来ない。

「ナッツ、大丈夫か？」

「ツ——、なんやアルゴさんかいな」

「オオ、わかったなら早くこの剣を下げてくれないか？」

突然声を掛けられた事で反射的に曲剣を引き抜いて声の主の首元へと突き付けてしまった。

苦笑したアルゴに指摘されるまで半ば無意識であったナッツはようやく気がついたように剣を収めた。

「それデ、どうかした力？」

「別に。僕はいつも通りやで」

「お姉さんに吐き出してみナ、全部聞いてやロウ」

フードを目深に被った三本ヒゲのお姉さんをジト目で見たナッツは分かりやすいように溜め息を吐き出す。

「……キリトか？」

「残念」

「アスナさんかいな……敵わんなあ」

自分では上手く隠しきったと思っていたのに見破られてしまった事にナッツは肩を下げる。

そんな様子にアルゴは笑みを浮かべてナッツの隣で壁に背を預ける。

「それで？」

「……動いてた事が丸つきり無駄になった事は別にどうでもエエんよ」

「そうなのカ？ 結構なコルを注ぎ込んでいただロ」

「貯金の半分ぐらいやし、ギルドに入れてる分考えると大した事あらへんよ」

「次から妖精ブラウニーに情報を売る時は割高にしよう」

「それは困るなあ」

お互いに『お得意様』である二人で静かに笑う。

「それじゃア、何を怒ってるんだ？」

「……さあ、なんでやろうなあ」

「キー坊達に戻ってきたからカ？」

「それは違う」

確かに、キリト達に戻ってきたのも要因の一つなのだろう。

戦わせない為に、戦ってほしくないから、自ら退いた彼らを引きずり出さない為に立ち回った。ソレが無駄になってしまった。

ヒースクリフから言い渡された力不足という言葉。キリトを呼ん

だ理由。これから先の予想。

茅場晶彦はキリトを英雄として選んだ。極々自然な選出の仕方だ。茅場晶彦がラストボスである事を考えれば、ヒースクリフの脱退、希望の消失。

連鎖的に起こるのであろう絶望とラストボスに英雄——勇者として選ばれた存在。勇者に成りたかった訳ではない、キリトを勇者にしたくなかっただけなのだ。それすらも無駄になった。

「……ちよつと気分が悪くなっただけやよ」

もしもその要素の一つでもアルゴに漏らせばどうなるのか。恐らく彼女の事だ、スグに結論に辿り着くことが出来るだろう。

秘密裏にヒースクリフの打倒を考えるかも知れない。ソレは——無駄だ。

この世界で神にも等しい茅場晶彦を騙し続ける事も、多人数で彼の前へと立とうが、無駄なのだ。ラストボスは然るべき手順で殺さなくてはいけない。

結果としてヒースクリフという戦力が抜けるだけに終わってしまった。ヒースクリフである間は戦力として使う方が便利だ。

「……そうか」

「こう日差しがキツイと……って何トレード開いてるんさ」

「——その情報幾らダ？」

ナッツは息を飲み込んだ。

隣を見れば真っ直ぐにコチラの瞳を射抜かんばかりの瞳。情報屋としての彼女の顔は見慣れているけれど、それ以上に真剣で、本気だ。

「十万コル」

「エライ大金やなあ」

「千万コル」

「……………」

「一億コル」

「この情報は言われへん」

増えていく金額にゾツとしながらナッツはそう言葉を溢した。その言葉に目を細めたアルゴは唇を尖らせてみせて戯ける。

「なんだ、残念だな」

「そもそも何とも解らん情報に大金掛け過ぎやろ」

「そうか？ ナッツが言えないとなるとそれこそ——SAOの根源に
迫りそうだからナ」

「……」

「ビンゴ」

ニツと歯を見せて笑ったアルゴにナッツは両手を上げて降参の意
を示す。

内容は言えない、と漏らしてしまった自分が悪かったのだろう。普
段ならば適当に逸らかしていた筈だ。

「何にしろ、言われへんで。金にもならんし」

「ほうほう。つまりナッツは茅場晶彦が何処にいるか知っているト
？」

「……………知つとつたんかい」

「いんヤ。正確な場所まではさっぱりダ」

「最上階で待つとるやろ」

「そうじゃない。オレっちもナッツと一緒にプレイヤーの中にアイツ
が居ると思ってたんだ」

「……はあ、僕の動向からの逆算かいな」

「あれだけ大きく探してたのに、いつの間にか止めればバレるだロ」

「緩やかに止めていったから諦めたと思われたとばかり」

「ナッツの性格上、止めるならスグだロ」

「カモフラージュが過ぎたんやなって……」

溜め息を吐き出しながらナッツはアルゴを横目で見る。

どうすればアルゴを助ける事が出来るだろうか。少なくとも攻略
をバックアップしている彼女はボス攻略には出てこない。多少の安
全は確保されているだろう。

そう考えた所でナッツは苦笑する。

「どうかしたか？」

「いや、アルゴさんを殺すのが一番早いかなあ、思つて」

「やめてくれヨ!？」

「せえへんよ」

慌てて身構えたアルゴにナッツはカラカラと笑いながら否定する。ナッツの行動を知っているアルゴにしてみれば恐ろしい冗談である。殺す方が早い。けれども殺さない。茅場晶彦に迫る答えは少ない方がいいのにも関わらず、である。

これもナッツらしくはない考えなのだろう。

情報屋達にもバレてると思った方がエエンやろうなあ」

「オレっちが一番近いと思うけどナ」

「流石アルゴさんやなあ——お姉ちゃんスゴイツ！」

「お、オウ……急に可愛いくしないでくれ……心臓に悪い」

「なんや似合ってないかなあ」

「似合はずぎダ」

目をキラキラさせて尊敬の眼差しで愛らしく振る舞ってみせたナッツにたじろいだアルゴは胸に手を当てながら深呼吸をする。

見た目は可愛い癖に普段は子供っぽくないナッツが急にそんな事をするとは破壊力がスゴイ。頭の中の情報一覧に追記された事実を確かめながらアルゴは呼吸を落ち着ける。

「この階層を切り抜けたら最上階も近くなるし……多人数で押しかけていくのもあの人好きそうやしなあ」

「……茅場晶彦像が崩れるんだけど？」

「僕よりもある意味で子供っぽいよ」

「それはナッツが——」

「——どうかしたの？」

「いや、ナンデモナイ」

「なんや、意外とこういうのに弱いんやな」

「ウルサイ」

ケラケラ笑うナッツに頬を少しばかり染めたアルゴは拗ねたように言葉を吐き出した。

「ほな、攻略して来るわ」

「……死ぬなヨ、ナッツ」

「うん。頑張るね、お姉ちゃん」

キユツと拳を作り身体の前に軽く構えて愛らしく振る舞って見せたナツツにアルゴは溜め息を吐き出してフードを摘んで顔を隠そうとする。

「……普段からそうすればもっと人気もあるのにナア」

「人気は求めとらんよ」

ケラケラと笑ったナツツは路地裏から身体を出して空を見上げる。

遠い空には現実から見た時と同じように雲が流れていた。

第19話

軽い立ち眩みにも似た感覚の後、瞼を上げればそこは既に迷宮区の中であった。

広い空間の壁際には太い柱が並べられ、その置くには大きな扉が一つ。

次々と転移してくる存在を眺めながらナッツは小さく息を吐き出し、冷たく感じる空気に外套を少し揺らした。

「大丈夫ですか？ 我が君」

いつの間にか隣に居たウィードに軽く手を上げる事で応えたナッツは辺りを見渡して今回の参加メンバーを再度確認する。

転移前よりも一層に緊張感を持つプレイヤー達。ボス戦という事柄に対しての高揚感よりも今回ばかりは恐怖の方が勝っている様だ。

死ぬかも知れない。たったソレだけの事実で恐怖は伝播してしまふ。それでもココに立っているのは自身の意思であり、攻略の為に――或いはこの世界の生活を守る為の意志がある。

何かしらの発破を掛けようとしたけれど、ソレはどうやら必要が無いらしい。七十四層――それこそ二年もこの世界で戦っているのだから、当然と言えば当然なのだろう。

ナッツは瞼を降ろして静かに笑う。外套の中で手の感覚を確かめる様に拳を何度か作り、解く。

頭の中で誰かが警告してくる。死にたくない。死んでほしくない。そんな我儘な事を何度も何度も叫んでくる。

幻聴にも似た感覚にナッツは苦笑しながら震えの止まった手で愛剣の柄に触れる。

「死んでも死ぬだけや」

誰かに言い聞かせるように、けれども眩く程度の声量で溢れた言葉は白く染まった吐息と一緒に消えていく。

その様子を見つめながらウィードは蕩けそうになる顔に無理やり笑顔を張り付ける。

あの日から完璧だと言えた主の見方が変化した。躊躇が無く、自身

の規律を守っている所は変化が無い。ただ神様だと思っていた主が人に――王になっただけなのだ。

完璧ではない。完璧を装う主。だからこそ冠を被るに相応しい。

「何わろてるん？」

「少しばかりいい事ばかりだったので」

「走馬灯か何か？」

「だとすれば主の事ばかりでとても良い走馬灯でしたね」

「……さよか。ほな、行こうか」

「はい。我らが王よ」

大扉が重々しく地面を擦りながら開いていく。僅かに立つ土埃すら見ることの出来ない暗闇がゆつくりと口を開いていく。

誰かの抜刀を皮切りにプレイヤーたちが抜刀していく。その誰もが開いていく扉を注視しており、自身を鼓舞する様に剣を強く握りしめる。

先頭に居たヒースクリフが十字盾の裏側から長剣を引き抜き、右手を高々と掲げ、叫んだ。

「――戦闘、開始！」

完全に開ききった扉へと雪崩れ込む。

走り込んだ三十二人が自然な陣形を組み、各々の距離を開ける。辺りを見渡したが、そこに敵らしい姿は無かった。

内部を見渡し、内側に反っている壁を辿る。自身達の頭上の高いところで封をされているドーム状の空間。たった一つの出入り口から射し込んでいて光が轟音と共に閉じられる。

情報の全てが正しいのならば、既にプレイヤーとボスモンスターのデスマッチは始まっている。先程閉じられた大扉は自身達の全滅か、ボスモンスターの討伐をしなければ開くことはない。

隣にいる仲間の息遣いすら聞こえそうな静寂。

自らの緊張を表すように鼓動の音すら幻聴する程の沈黙。

張り詰めている神経を繚る様な時間がプレイヤー達を支配する。

「おい――」

誰かの声が響いた。大きいなどとは言えない声であったが、静寂の

中では十分な程その声は響いた。

「上よ!」

アスナの鋭い声が響き渡り、全員が上へと注視した。

キシキシと耳障りな異音が響き渡る。まるで獲物が掛かった蜘蛛の様にソレが動きだす。

数えるのも億劫になりそうな数の白く尖った骨の足が動く度に異音が鼓膜を不愉快に揺らす。

人の背骨を思わせる灰乳色の体節一つ一つから飛び出た足。全体で見れば百足のような長大な巨躯。

流線型に歪んだ頭蓋骨には二対四つの眼窩が空き、瞳の代わりに薄気味悪い青い炎がボンヤリと浮かんでいる。前方に大きく突出した顎骨には鋭い牙を並べ、頭骨の両脇からは反りの少ない鎌状に尖った骨の腕が生えている。

The Skullreaper
《骸骨の刈り手》。定冠詞をその名に被せた存在が威嚇するように吼えながらその身体を宙へと放り出した。

「固まるな! 距離を取れ!」

ヒースクリフの声に凍っていたプレイヤー達の時間が動き出す。凡その落下予測地点から飛び退り、誰もが息を飲み込んだ。

落ちてくる脅威に足が竦んだのか、落下予測地点直下いた三人の動きが遅れた。右か、後ろか、左か、前か。

「こっちだ!」

キリトの叫びによって三人が呪縛が解けたように慌てて動き出す。

その三人の背後に百足が地響きを立てて落下し、地面にエフエクトが走る。床全体を震わし、三人がたたらを踏む。

百足の右腕が雑草を刈り取るように低く滑る。

茶褐色の小さな塊が三人と鎌の間に滑り込み、赤い刀身を構える。息を短く吐き出し、たった数秒に集中する。

鎌と曲剣がかち合い火花を散らせた。瞬間にナッツの顔が歪む。

「伏せエッ!」

短く指示だけを口から放ち、ナッツは鎌に転がり乗るように身を避

ける。

ナッツの指示に咄嗟に従えた二人は身を地面へとへばり付けた。そう、二人である。

鎌に飛ばされた一人のHPが減る。緑が黄に、そして赤へと変化し、呆気なく消えた。

無数のポリゴン片へと変化させた仲間を見る事も無くナッツは真っ直ぐにスカルリーパーへと向きながら舌打ちをする。

守れなかった。精鋭が一人死ぬだけで攻略の手が緩んでしまうというのに。

その思考を断ち切るようにスカルリーパーが蠢き、獲物を狙う。左の鎌を振り下ろし、ナッツを狙う。

曲剣を横へと寝かし鎌が当たった瞬間に身をズラす。この二年間で染み付いたナッツの防御術であったが、ナッツは顔を歪めた。右の鎌を大きく距離を取るように回避して、仕切り直すように構える。

反撃の隙が無い。それこそ目の前の百足と何十時間も打ち合いをすればパターンは組めるだろうけれど。ソレは出来ない。

かと言って大きく弾く事も現状では出来ない。自分一人では手詰まりだろう。

「手助けしよう」

「どーも。マトモに当たると死ぬで……ま、ヒースクリフさんがマトモに当たるとは思われへんけど」

「手厳しいな」

隣で盾と剣を構えた魔道士の風の騎士にナッツは皮肉を口にする。ヒースクリフは皮肉を返す事もなく、ナッツと共に敵を見据える。

ナッツはチラリとキリトを見る。攻撃役としての統率はおそらく彼がしてくれるだろう。

だから、何も考えなくて良い。防御に専念し、片方の攻撃を弾けばいい。

一つのミスは命取りになるだろう。愛剣の耐久値の減り具合を考えればミス一つで死ぬ。

死んでしまう。死ぬだけか。ならば何も問題はない。

舞台上に立つ時の様に、全てをただソレだけの為に捧げてしまえばいい。

攻撃役に任命——いいや、否応無しに攻撃役になってしまったプレイヤー達は役目を果たしつつもその動きに魅了されていた。

盾と長剣によって絶対の防御力を誇るヒースクリフが左の鎌を防ぐ。曲剣により絶技とも呼べる防御を続けるナッツが右の鎌を弾き飛ばす。

まるで演舞でもしているかのように二人が入れ代わり立ち代わり動く。スキルエフェクトが散りながら二人を彩り続ける。

ナッツ自身が威嚇ハッルを使っているからか、鎌による攻撃は全て二人に集中している。一撃で全てを消し去るその攻撃を既に数分は受け続けている。

けれど、誰もその役目を代わろうとはしない。恐ろしい訳ではない——いや、恐怖はある。けれど、それ以上にナッツを止める事など出来ようか。

絶望とも呼べる攻撃を笑いながら捌いているナッツを止める事など出来ようか。

スキルによる硬直時間さえ楽しむように笑い、迫る鎌に対しての恐怖すら感じさせない。そのような狂った空間に誰が入れようか。

けれども誰もが理解している。あの集中力が長時間続くことは無い。もし続くのならば、ナッツが反撃という隙を見せる意味が無くなってしまう。ギルドの長としてパーティを組んでいるであろうナッツが反撃を主に戦うという事は、つまり短時間の集中力ではない事の証明だ。

ソレを理解したプレイヤーは一刻も早くこの戦闘を終わらせる為に攻撃を続ける。ナッツの集中力が終わるまで保つ事を願いながら。

一時間近くに及ぶ長期戦。

ようやくHPバー全てを消失させ、地面へと伏したボスモンスター。攻略の証明として《Congratulations》と浮かんだ文字。

けれどもプレイヤー達は歓声を上げる余裕もなく、黒曜石の床に脱力して座り、仰向けに転がって呼吸を整えている。

——終わった。

誰かがソレを言うでもなく、誰もが思っていた事だった。

「……………ッ」

「我が君！」

張り詰めていた空気が弛緩したことでナッツの集中が途切れたのか、忘れ去られていた疲労が顔を覗かせる。

膝が折れて倒れそうになるナッツをウィードが素早く支えて抱きとめる。あの脅威を一时间近く受け止めていたのだから、その疲労は他のプレイヤーの比では無いだろう。

「何人……………やられた……………？」

がっくりと座り込んでいたクラインが掠れた声を小さく漏らした。その声で目減りしている仲間達をナッツはようやくその視界へと入れた。

「十二人だ……………十二人、死んだ」

戦闘中に数えていたのか、それとも今のメンバーから逆算したのか、キリトが正確に居なくなってしまった人数を応える。

十二人。恐らくこれ以上に危険な戦いであろう先を考えれば、最終階層には何人生き残れるのだろうか。

——そして、何百人が死ぬのだろうか。

単純計算で三百人。クォーターポイントという事も考えればソレ以下になるかも知れない。同時に失ってしまう人間と新たに補充した人間の力量を考えれば——もっと被害は出るだろう。

ナッツは目を細めて小さく息を吐き出した。今は、まだイイだろう。問題はヒースクリフが離脱した後だ。

今回の戦いで彼が居なければ突破は更に厳しくなっていただろう。恐らくこの先もだ。

芸達者な事に、あの危険な状態であつても自身のHP調整をしてみせた男にナッツは憎らしく視線を向ける。

果たしてその視線がどう映つたのか、ナッツには分からない。

けれどもキリトに疑念を抱かせるには十二分の状況でもあつた。

二人の防御方法の差はあつたであろう。キリトが彼を深く知っている訳ではない。けれどもナッツの事は十二分に知っていた。

あのナッツが——モンスター相手に初期武器と防具なしで《検証》するナッツがこの程度の時間で集中を切らす事が無い事は知っていた。そして疲労していても他人にはあまり見せない事も。けれども現実には疲労困憊でウィードに抱えられている。

同じ役割を果たしていたであろうあの男はどうだ。

一つ疑念が湧けば、不思議と更に疑問が出て来る。

本当に些細な事だつた。視線であつたり、普段の行動であつたり、そして不動とも呼べるHPであつたり。

散りばめられたピースが一つ一つ積み、仮説が出来上がる。けれども、そうであるならばナッツはこの事実を知っている事になる。

何故言わなかつたのか。そんな事は分からない。ただ自身と一緒に今しがた仮説に行き着いたのかも知れない。情報屋である弟分だからこそ、先に仮説に行き届いたのかも知れない。

ならば、試す価値はあるだろう。

もし間違つていたらならば——その時はその時で考えよう。黒鉄宮で過ごすもよし、犯罪者として逃げるもよし。

「キリト君……？」

アスナをチラリと見れば、二人の視線が交錯した。愛しい人ならば自分を止めるだろう。当然だ。コレは仮説でしかない。

だからこそ止められる訳にはいかなかった。

アスナの制止の声が聞こえる前にキリトはヒースクリフへと狙いを定める。十メートル程度の距離であり、走れば数秒程けれどもソードスキルを用いれば数秒すら掛からない。

刀身を輝かせたキリトは真っ直ぐにヒースクリフへと突進する。誰もが一瞬呆気にとられ、声を出す事すら忘れてしまう。

驚きの表情を浮かべたヒースクリフであったが、冷静に盾を構え、予想外の襲撃者の攻撃を防ごうとする。けれどその刀身は防がれる事もなくヒースクリフへと向かい……

……紫色の——システムメツセージにより防がれた。

「Immortal Object」と浮かんだ文字。その文字が浮かんだ瞬間にキリトはヒースクリフから距離を取り、真っ直ぐに睨めつけた。

その隣に歩み寄ったアスナが信じられないモノを見るようにヒースクリフを見つめる。浮き出た文字は既に消えているが、しっかりと見てしまった。

「システムの不死……どういう事ですか、団長」

頭の何処かでは理解している。それはアスナ以外の血盟騎士団団員もそうだ。

もしも、そうであるならば、自身達の忠誠や希望というモノは架空の、ハリボテの、何の意味すらない……。

そんな懐疑的な団員達の視線すら無視してヒースクリフはキリトを見ている。まるで立証を待っている様に。

「……この世界に来てからずっと考えていた事があった……。あいつは何処から俺たちを観察し、世界を調整しているんだろう、ってな。でも単純な真理を忘れていたよ。子供でも知っている事だ。」

《他人のやつてるRPGを傍から眺める程詰まらない事はない》
……そうだろう、茅場晶彦」

自身の中の答えをヒースクリフへと告げたキリトは剣を構えたまま視線を動かさない。

その視線に捉えられたまま、ヒースクリフは苦笑を浮かべる。

「さて茅場晶彦博士は存外、この世界を作って満足しているかも知れない。」

が、ココで否定した所で既に遅い、か」

諦めるように頭を振ったヒースクリフはあり得ないモノを見るような視線ではなく、純粹な敵として自身を見てくるキリトへと視線を合わせる。

「……君も私とのあの決闘での違和感が決定的だったのかね？」

「俺も、つて事は」

「ナッツ君も私の正体に気付いていたよ」

その言葉と同時に視線がナッツへと集まる。何故言わなかったのか、という疑念の視線。それにヒースクリフは人の欲深さを垣間見て笑みを深める。

視線が集中して恥ずかしくなったのか、それともある程度の疲労が取れたのか、ナッツはウィードの腕から離れて一人で立ち上がる。

「彼を恨んではいけない。結果論だが、あの時点で私の正体が広められていれば今回の攻略は更に被害を出していただろうからね」

「……僕はもうちょい黙っとくつもりやってんで」

「そうだろう。君は私の事を精々お助けキャラ程度にしか考えていなかっただろうからね」

苦笑の色を強め、ナッツを一瞥した後ヒースクリフは——茅場晶彦は超然とした、明らかな上位者として下位者を見下すべく笑みを浮かべる。

「——私が茅場晶彦だ。付け加えれば君たちを最終層である紅玉宮で待つ最終ボスでもある」

突きつけられた現実。その現実小さくよろめいたアスナをキリトが支える。

「……世界最強のプレイヤーが一転して最終ボスかよ。趣味が悪いぜ」

「中々いい演出だろう？ ナッツ君には予想されていたからゲームマスターとしては肝を冷やしたが」

「何言うてるんき。僕は単なる役者やで。台本にケチ付ける事はせんよ」

「どうだろうか……。まあ、そういった想定外の展開もネットワークRPGの醍醐味とも言うべきかな……」

薄い笑みのまま肩を竦めた茅場晶彦にナッツは何処か疲れたような顔をする。

その時、凍りついていたかのように動きを止めていたプレイヤーの一人が動き出す。血盟騎士団の制服を身にまとった一人の男であった。

ハルバードを握りしめ、凄惨な苦悩を瞳に浮かべた男。

「貴様……貴様が……俺たちの忠誠を——希望を……よくも」

けれどその男が地を蹴るよりも茅場晶彦の方が早い。左手を動かして素早くコンソールを操作する。

「うがっ」

「くっ」

誰もが呻きながら倒れていく中、キリトとナッツは神から許されたように何事もなくその場に立っている。

「麻痺か」

「どうするつもりだ。このまま皆殺しにでもするつもりか？」

「そんな理不尽な事はしないさ。精々、私が去る姿をその目に焼き付けてもらうだけだ……が、その前に」

冷徹とも思えるその双眸が真っ直ぐにキリトを捉えた

「キリト君。君には私の正体を看破した報奨を与なくてはな。チャンスをやろう。今この場で私と一対一で戦うチャンス。無論不死属性は解除するし、私を倒すことが出来ればこのゲームはクリアだ、現在生き残っている全プレイヤーをこの世界からログアウトさせよう……どうかな？」

それはまるで悪魔の誘いであった。

鉄壁とも言えるヒースクリフ、GMである茅場晶彦。どの点を取った所で勝てる術は無いだろう。

けれど、そんな事はどうでもよかった。

神を気取り、人殺しを傍観していた男を許す道理もない。

「いいだろう、決着をつけよう」

何より愛しい人の心を何度も傷つけたこの男を許せる程、自分はいかではない。

「そういう事だ、ナッツ君——」

「……先に僕の報奨要求や」

「ほう。無しで良いと言ったのは君ではなかったんかな？」

「別に、確約がほしいだけや。キリトが勝てば現在生き残ってる全プレイヤーをログアウトさせる事を、な」

「……なるほど。が、君の手出しは封じさせてもらおう」

「みんなと同じ麻痺にでもする気かいな」

「いいや、君にはこの戦いを見届ける使命がある」

「……キリトが負ければ僕が勇者ですか」

「君が望んだ地位だろう」

「趣味悪いとしか言われへんなあ」

課せられた使命に嫌気が差しながらナッツはちやうどキリトと茅場晶彦との間へと立つ。立会人としてはこの場がイイだろう。

「ナッツ……その、悪かった。お前は考えて茅場の事を明かさなかったのに——」

「あー、エーエー。それは終わった事や。僕では勝てんとも思ってたし、そういう判断や」

「……少しくらい格好を付けさせろよ」

「無理な事言いなや。無理そうな事は全部止めて来とるやろ……だから今も止めて無い訳やし」

「……ああー」

どこか回りくどい弟分の激励にキリトは応じる。同時に何かを決めた様に、ナッツへと真っ直ぐ向く。

「アスナを頼む」

「……ん、安心し。ただ死になや、キリト」

ソレは自身が負けた時の保険だった。アスナの性格上、後を追う可能性が大きい。それはキリトが望む所ではない。

最期になるかも知れない。立会人として立つ弟分はきつとその役職を真つ当するだろう。

憂いは断つた。守るべきモノもある。

キリトの思考が戦闘へとシフトしていく。景色も弟分も、愛しい人すら消し去り、目の前にいる敵を倒す為に——殺す為に思考が回転し始める。

だから気付く事が出来なかった。

戦闘を始め——殺される直前に自身とヒースクリフとの間に入り込んできた愛しい人に。気付いていたならば止める事も出来たであろうに。

そしてゲームは無慈悲にもクリアされた。勇者とも呼べる男を救わないまま。



一定のタイミングで音が鼓膜を揺らす。

空気の香りが鼻を擽る。何処か薬品臭い香り。

瞼の上から強烈だとも思える光を感じて、瞼を強く閉じ、ゆっくりと慣らすように上げていく。

知らない天井だった。

記憶に残っている場面はキリトさんがゲームをクリアした所だった。ああ、そう——SAOはクリアしてしまった。

まるで夢の様だった。自由に動け、自由に外に赴き、自由に自由だった。そういった役であった、と言えばソレまでだけれど、それでも僕は自由を感じる事が出来たのだ。

窓の外を見れば、青い空が広がっている。とても広い空が、広がっていた。

帰って来た。戻ってきてしまった。
アインクラット
あの世界を地獄だと言うのならば、僕にとってこの^現世界は真逆にな
る。

第20話

ある女——加藤冬子カトウトウコの話をしよう。

彼女は人間としてはそれなりに優れていた。芸術品には届かない美貌を持ち、そこそこに優秀な頭脳を備え、人間らしい夢と目標を心に宿していた。

自身の美貌に自信を持っていた彼女は役者を目指していた。

けれども、その夢が叶うことは無かった。

彼女は所詮、彼女にしか成れなかった。他の誰に成る事も出来ず、役に入り込むことも出来ず、演技という技能に関しては彼女は素人目にも判断出来た。

美貌と人柄、その他の技能で数多の指導者、監督に指導を受けたが、さっぱりと演技は上手くならなかった。

冬子の夢はココで幕を閉じた。

自慢であった深緑色の髪をバツサリと切り落とし、夢への未練を断った。

夢への道を途中で降りた冬子は仕事に没頭した。ありふれた事務職であったけれど、冬子にしてみればどれも新鮮で、やり甲斐を感じていた。

男と出会ったのはこの時である。

男は冬子に一目惚れをして、彼女へと幾度もアプローチをした。

冬子にしてみれば御曹司であった彼と交際する訳もいかず、許嫁も居た彼の事を咎めた。

意識しない人物、嫌悪すべき人物であったならば冬子はバツサリと断りの言葉を放ったであろう。けれどもそうしなかったのは、少なからず冬子も彼の人となりには惹かれていたのだろう。

結果を言えば、彼は全てを捨てた。捨てた、というには語弊があるが、概ね自身の立場を全て捨てたのだ。

許嫁には土下座をして事情を話し、許しを乞うた。許嫁はそんな彼に苦笑し、許した。

家には事情を話し、勘当を言い渡された。彼と仲のよかった従弟は

苦笑して彼を送り出した。

そして彼は冬子の前に立った。何も無い彼は改めて冬子の前に立ったのだ。

冬子はそんな彼を馬鹿だと罵った。馬鹿だと罵った彼を好いている事を理解しながら。

彼と冬子は結ばれた。

幾年かの蜜月を経て、冬子は身籠った。

幸せの絶頂とも言えた。この平和が永く続くと思っていた。

彼が死んでしまうまでは。

その報を聞いたのは、本当に何事もない日であった。いつもの様に彼を送り出して、洗濯物を干していた、そんな時間だった。

人を助けて彼は死んだ。道路に飛び出した子供を助ける為に彼は車にはねられた。

葬儀には沢山の人が居た。冬子は半狂乱になるでもなく、ホロホロと彼の為に涙を流した。彼を撥ねた車の運転手も、彼が助けた子供も恨む事をせずにただただ涙を流した。

遺された自身と腹の中にいる子供。彼の従弟が冬子を助けようとしたが、冬子はソレを辞退した。

彼は既に勘当された身であるから、助けを受ける訳にはいかなかった。

冬子が子を産んだのはそれから数ヶ月後であった。

自分にも似た萌黄色の髪。愛らしい顔。

不幸の底にいる自分とは真逆になるように、彼のようにと一文字貫い『夏樹』と名前を付けた。

冬子の中にあつた感情が鎌首を擡げる。

——きつとこの子なら、自分が叶える事の出来なかつた夢を叶える事が出来る。

——彼と私の子だからこそ、きつと。

閉じられた幕がゆつくりと開く。力尽くで開けるように、歪んだまま、幕は開いた。

愛していなかった訳ではない。冬子にしてみれば夏樹は自身と彼との間に産まれた愛の結晶にも等しいのだ。愛せない訳がない。

だからこそ冬子は全てを計画した。一から育て上げる我が子に自身を夢を引き継いでもらう為に。

冬子は優秀だった。天才には程遠いけれど大凡の人間から言わせれば優秀すぎた。

幼い夏樹はその全てを一身に受けた。

立ち振舞であったり、言葉使いであったり、発音であったり、そして演技であつたり。

特に演技に関しては冬子自身が不得手という事もあり、指導にも熱が入った。当然だ、冬子にしてみれば自身が出来なかつた事なのだ。

きつと自分と彼の愛の結晶ならば――。

自分の子ならば――。

願いは本当に些細な事だった。

ただ、止める人間が居なかつた。それだけなのだ。

夏樹には逃げ道が無かつた。

度重なる指導から逃げる方法が無かつた。重圧ストレスが蓄積する。

逃げる為に息を殺して生活する。けれどソレは意味の無い事だ。心が押し潰されていく。

怒声が鼓膜にへばり付き、痛みが身体を支配する。心が磨り潰された。

夏樹には逃げ道が無かつた――いいや、一つだけ存在した。

その逃げ道へと夏樹は自身の心を押しまめた。見知らぬ誰かに守って貰う為に、不必要だった心に封をした。

物語の登場人物。それは今となっては架空の存在であり、誰かに演じられる事によって存在出来る存在だ。

夏樹は母の予定通りに登場人物へと成った。演技という技能ではない。成ったのだ。

登場人物の全てを投影した。そこに加藤夏樹は存在しない。存在しているのは物語の登場人物たる存在だけだった。

冬子は歓喜した。ほとんど完成した。

自身の理想を再現した存在。自身の夢を叶える存在。自身となるべく存在。

あとはコレをより一層に深くすればいい。自身に成るように女性ホルモンの投入もしなければならぬ。

何処かで理想が変化した事など、冬子は認識していなかった。

夏樹を冬子にする為に。冬子はようやく夢を叶える事が出来る。

だからこそ、冬子は夏樹に存在している登場人物達を殺した。いや、死に至らしめた。

物理的な方法ではない。

ただ、物語を——その登場人物の人生を圧縮し、濃縮し、凝縮し、人形に投影させた。

登場人物達はその役目を終え、死に至る。そしてまた彼の中で生を得て、死ぬ。

戦記物の登場人物として。

恋愛物の登場人物として。

サスペンスの登場人物として。

ミステリーの登場人物として。

ありとあらゆる物語の登場人物として。

人形の中で幾度の生と死が繰り返された。その度に奥底に在る”夏樹”が磨り減っていく。

夏樹としての存在を希薄にする為に外界の情報を与える事もなかった。人形に外は必要無い。

故に、冬子は完璧に成った人形に不安を抱いた。

果たして、本当に他人に通用するのだろうか？

夏樹という人格をひた隠しにして、全く別の存在を演じる事が出来ているのだろうか。

冬子の目線では、間違いなく出来ている。けれど、所詮ソレは一つの視点でしかない。

もしも、そうでなければ――。

不安に駆られた冬子が一つの手段を見つけた。

ヴァーチャル・リアリティの空間で、多人数に見られ続ければ。それで問題が生じなければ――。

冬子は自身の伝手を頼りにソレを入手した。幾らか手間はあったものの無事ソレを入手する事が出来た。

ナーヴギア、そしてV R M M O R P G 『ソードアート・オンライン』。ソレを我が子に被せる。登場人物に成るように言い渡す。

狂った存在。何処かネジの外れた存在。だから名前は狂者^{nuts}に。

そして加藤夏樹は――ナッツは浮遊城アインクラッドへと足を付けた。



目の前に壮年の男が居た。何処か懐かしさも感じる男だった。スーツを着こなした男は僕を真っ直ぐに見て、口を開く。

「初めまして、かな。これでも君が小さい頃は会った事があるのだが」
そういつた男に対して僕は疑問を浮かべてしまう。懐かしさを感じたのはそういう事なのだろう。

そんな疑問符を浮かべている僕に苦笑を浮かべる。

「夏樹君。私の子供にならないかい？」

そんな言葉が僕を襲った。思わず、聞き返してしまう。

そんな僕に一つ一つ、ゆっくりと語る彼。それはまるで贖罪の様だった。

助けられなかったから、助けたい。

そんな事も織り交ぜられた語られた言葉に一つの仮説が出来上がる。

僕は彼に——結城彰三ユウキシヨウソウに確かめなければならぬ。

僕は震える口を開き、母について聞く。

彼は何かを迷う様に言い淀み、目を伏せてから僕を改めて真っ直ぐ見る。

「冬子さん——君のお母さんについてなんだが」

一度そこで言葉を止めて僕の反応を伺う。瞳には憐れみ、同情、後悔——そういった感情が浮かんでいる。

ゆつくりと仮説が真実を帯びていく。きっとこの仮説は正しいのだろう。

なにより、僕の目が覚めて未だに出来ない母が何よりの証拠でもあった。

「君のお母さんは——」

——死んだよ」

だって、もうこの世界には居ないのだから。

第21話

日が落ちかける黄昏時。

廃墟と成り果てた高層建築群の市街地で静寂とは程遠い銃声の楽曲が響き渡る。

長細い身体にボロボロの外套を羽織った男は底の厚いゴム靴で土埃を乱舞させながら疾走し、瓦礫の一部に手を付いて乗り越えて、瓦礫に背中を付けて身を隠した。

途端に響く銃声と着弾音。鼓膜でその発砲音を数えながら男は息を吐き出した。

「もう逃げ場はねえぞ！」

銃撃が止めば怒りを露わにした男の声が聞こえる。罾を張り、看破されて尚追いかけて続けた獲物がようやく追い詰められて瓦礫の向こう側に居るのだ。

追いかけられていた方の男は小さく息を吐き出して瓦礫の向こうに居るであろう存在へと声を掛ける。

「ええ加減追いかけるん止めたら？ アイドルの追っかけもここまでしつこうないで」

「うるせえ！ テメエが今まで俺たちから奪った分しつかりと返して貰うからな!!」

それは君らが攻めてきたからやろ。と小さく溢した男は自身の装備を確かめる。

武器——弾が残っているのは《トカレフ TT—33》だけ。残弾数も心許ない。

今回の襲撃も罾も分かっていた事だけれど、よもや集団で襲つてくるとは思わなかった。男は『まだまだ人間観察が足りない』と的はずれな事を考えて頭を振る。

大凡の人数と武装を頭の中で思い浮かべてから、細く息を吐き出す。

死んでも死ぬだけだ。何を恐れる必要があるのだ。

男はニヤリと口を歪めて手に円管を出現させて、安全ピンを引き抜

いて瓦礫の向こうへと放る。

突如投げられたソレに反応し、幾人かがソレを撃ち抜いた。開いた穴から煙が吹き出す。

「スモークか！ 逃がすかよー！」

纏わり付くような白い煙が地面に落ちてなお吐き出され続け、追手達は獲物を逃がさない様に銃を乱射する。

相変わらず瓦礫の向こうに居た男は瞼を閉じて銃声を聞き漏らさないようにする。

一秒、二秒——口には出さず数字を数えて、四秒目で瞼を上げて勢いを付けて瓦礫を飛び越え、銃声が止んだ煙の中へと身を投じる。

一番近くに居た男へと接近。

「どーも」

「ッ」

視認性の悪い煙の中でお互いが視認出来る程の距離。突然現れた深い緑色の髪に驚きながらも《UZI》を構えた。けれども、遅い。

発砲音が二つ。足に走る衝撃と自身のパラメーターに異変。膝に力が入らず折れてしまう。

「おっと、危ない危ない」

男に背後から抱えられれば唾然としてしまう。形の良い顔が耳元に寄り、息が耳を擦る。

伸びた手がUZIを持った腕を這い、狙いをしっかりと定められる。

「や、やめ——」

「ドロップ運が悪くてなあ。スマンな」

横薙ぎに9ミリパラベラム弾が乱射される。聞こえる仲間たちの声と怒号。煙の中では何が起こっているかなど分からない。

裏切り。

独り占め。

様々な憶測と怒号と銃声を鳴り響かせながら反撃が飛んでくる。

それもそうだ。この集まりはこの男を倒す為だけに——利益を求めめる為だけに結成された烏合の衆だ。チームワークなどない。

「もうエエかな。ほな、またね」

煙の中で起こる内輪もめに満足したように、そして必要無い物を捨てる様に躊躇せず、男の眉間を撃ち抜いた。

ポリゴン片へと変化する男を見送りながらドロップしたアイテムを確認する。弾は落ちていたが、生憎自身が使える物は無い。

ドロップ運の悪さは慣れていた彼であるが、やはり何処か納得もいかずに小さく息を吐き出して内輪もめに巻き込まれない様に、そしてソレがいち早く終わるように他の獲物へと向かった。

数十秒程して煙は晴れた。

そこに立っていたのは一人の男である。筋骨隆々の男で、その手には《PKM》が握られ銃口からは今も熱々しい煙が吐き出されている。肩で息をしながら辺りを見渡す男は地面に散らばるドロップアイテムの数々を見て、思わず口を歪める。

アイツと仲間のアイテムが独り占め。そう考えれば悪い仕事ではなかった。恨み辛みの集団であったが、死ぬ奴が悪いのだ。

男は更に口を愉悦へと染め上げていく。

銃声の一つ。

急激に減っていくHPゲージに驚く間もなく男は倒れてポリゴン片へと散っていく。

「また死なれへんかったなあ」

嫌味にも取れる言葉を吐き出した深緑色の髪を揺らした長身の男は手に持ったトカレフをホルスターの中へと入れる。既に残弾は無い。

ドロップアイテムを一頻り見渡してから、砂利を踏みしめる音が鼓膜を揺らす。

咄嗟に脇下のホルスターに向きそうだった手を制止させて、ゆっくりと両手を上げて長身の男は諦めたように大きな溜め息を吐き出した。

「なんや、一発も撃ってないとは思わんかったわ」

「ふん、言ってる」

両手を上げて振り返れば、そこには最初に怒声を放っていた男が居た。こちらに銃口を突きつけ、命を狙っている。

「それで、こうやって後ろから撃たれてないって事は交渉でもするん？」

「当然だ。テメエの持つてる物全部置いていけ」

「なんや、普通に死んだ方がお得そうやなあ」

「ハッ。不死者イモータルには似合わねえ言葉だな」

「嫌やわあ。僕も普通に死ぬねんで？ ただ一回も死んでないだけや」

「十分バケモノだぜ。その名誉に傷をつけたくなきやあ、ストレージを全部吐き出せ」

不死者と呼ばれた長身の男は何かを考えるように視線を上へと逸して、溜め息を吐き出してからコンソールを弄る。

地面にばら撒かれていくアイテムに思わず舌舐めずりをしてしまう。ようやく追い詰めた獲物を狩れる。それも報酬は独り占めだ。

興奮と歓喜を浮かべながらも頭を冷やし、最後であろう武器へと手を伸ばした長身の男を止める。

「おっと、脇のヤツは俺が引き抜いてやるよ」

「それはドーモ」

両手を上げたまま男の親切心に溜め息が溢れた。どうせ弾も無かったのだから反撃の手段など無いのだけれど。

歩み寄ってきた男が腰へと手を伸ばし、ガラスの割れる音と共に停止した。

力無く膝が折れ、頭の一部からポリゴン片が覗いている。

意地でも倒れない様に失っていく力を振り絞り長身の男の外套を握りしめ、憎々しい顔を睨みつける。

「仲間が居たのかよ」

「居おらん、とは言うてへんよ」

「くそ……」

ずり落ちる様に倒れた男はポリゴン片へと変化する。消えたポリゴン片を見送り、ようやく両手を下げた男は溜め息を吐き出した。

恐らくである狙撃地点を見ながら耳に付けたインカムで通信をす。僅かなノイズが切れて通信が繋がる。

「ちよい遅かったんちゃう？」

『アナタが死んでから撃つてもよかったけれど？』

嫌味を言えば嫌味で返ってきた。と、言っても否はコチラにあるので言い返す事も出来ない。

「そりやあどーも。お騒がせしました」

『スグに合流するわ』

「エエんやで、先帰ってても」

『追加報酬を全部取られるのは嫌よ』

「そーでっ……って切りおった。はあ、がめついこつて」

そんなケチな事はしない。と言っても彼女が聞かない事は知ってるのでブツリと切れた通信に嫌味を吐き出しておく。

当然、吐き出した所でこの世界での相棒は耳にしないので意味が無いことである。今しがた自身の右足近くに鉛玉がツツコミとしてやってきたが溜め息を吐き出して無視を決め込む。

数分程で姿を現した狙撃手スナイパーに軽く手を上げて迎える。空色の髪を揺らしてその長い腕を鬱陶し気に睨めつけた狙撃手は分かりやすい様に溜め息を吐き出してみせた。

「それで？ その無駄に長い図体に怪我は無いようだけれど？」

「当然やろ。これでも不死者とか噂されてるんやで？」

「本当残念。どうせ回復キットを持ち合わせていない馬鹿に借りを作れるチャンスだったのに……」

「なんやその馬鹿は。シノン、どこの馬鹿や？」

「鏡を見ればすぐに分かるわよ、ナッツ」

長い腕を首の後ろの持つてきた長身の男——ナッツはケラケラと笑って見せて狙撃手——シノンは疲れたように溜め息を吐き出した。



ガンゲイルG・オンラインG。荒廃とSFの混ざり合う銃と殺し合いの世界。対人戦闘Pと対モンスターP戦闘Eが交差する世界。

そんな殺伐とした世界に諸事情を抱えながらも参加していたシノンは目の前で長い腕を器用に折りたたみながらグラスを傾けている長身の男を注視した。

身体を無理やり上下に伸ばしたように横幅の無い細身長身をボロボロの外套で包み込み、深い緑色の髪が低い位置で纏められ定位置である肩に乗っている。

何処か女性を感じる様な中性的な顔つきは今は強い酒精が原因か僅かに赤らんでいる。

「？ 僕の顔になんかついとる？」

「……目と鼻と口がしつかりと」

「なんやて……眉毛が無いやん」

「マジックで描いてあげましょうか？」

「種も仕掛けもない方で頼むで」

ケラケラと笑うナッツに溜め息で応じたシノン。こうしたツマラナイギヤグを放つ男の年齢層を頭の中で考察。

細々とした言動と明らかに飲酒に慣れて……それこそバーボンに氷を溶かしながら飲んでる姿から自身よりも年上である事は明らかだ。

成人にも満たない自分がアレを飲めば確実に嘔吐えずくだろう。というか嘔吐いた。成人しても洋酒は飲まない事を心に決めた瞬間である。

そんなバーボンなどの度数の高い酒を好んで飲んでるナッツが同い年、或いは年下だとは思えない。

加えて彼の言動が何処か古めかしい……と言わべきか年上の様、いやオッサン臭いのも原因なのだろう。

当然、ナッツの現在の姿が——シノン自身の姿でもあるが——
架空存在アバタであるのは重々承知している事だ。

と、そこまで考えてシノンは思考を打ち切る。

目の前で酒場らしく店員NPCに追加のアルコールを注文した男の詳細など気にしても意味はない。気にはなる、が聞く程でもない。
「ん、どないかした？」

「別に……というか飲み過ぎじゃない？」

「一応バフ付くからなあ」

「短時間のバフの後に長時間のデバフが掛かるでしょうが……」

「むしろそっちが狙いつても知らんで？」

ニヤリと口を歪めたナッツはジト目で睨んでくるシノンから逃げないようにケラケラと笑ってみせる。

カラリとボールアイスがグラスに当たり音を鳴らす。透明な茶色の液体がナッツの口に一口入り、少ししてから喉が鳴る。

「或いは現実で忘れたい事があるから、とか」

「え？」

「……冗談や。儂げな男ってモテるう思ってたな」

「それ言ってるいや世話ないわよ」

「せやな。ま、現実^{アツチ}世界の話してスマンな」

一瞬だけ虚しさを感じさせる表情をしたナッツは取り繕うようにケラケラといつもの様に笑ってみせて謝罪を述べる。

「マナー違反だけれど、別に謝る事はないわよ」

「さよか。てつきりアツチが嫌いな人かと思っただわ。何かしらの悩みがある、とか」

「幸せの壺でも売ってくれるのかしら？」

凶星を付かれた。即座に切り返せたのは普段から冗談を言うナッツと付き合っ居たからだろう。

冗談を言うくせに彼は目敏い。その証拠に踏み入った事を察知しただろう彼はアツサリと興味が失せたように「さよか」と溢してグラスを傾けた。

話を続けた所で恐らくナッツはシノンに踏み入る事はないだろうが、話を切り替えた方が無難だろう。

ふと、彼の脇下にあるホルスターの中に今日使っていた筈のトカレフが存在しない事に気付いた。

「そういうえば、今日使ってたトカレフはどうしたの？」

「売った」

アツサリとした回答であった。頭の中で数える限り、彼がトカレフ

を用いたのは今日の狩り一部と先程の襲撃だけである。

ナッツがよく銃を取り替えているのを知っているシノンですら肩間に皺を寄せてしまう。

「……アナタのその悪癖はもう何も言わないけど、いつもならもつと使っていたでしょ?」

「せやな」

これまたアツサリとした回答である。

トカレフの何が彼の琴線に触れてしまったのか実に気になる。どれだけ性能が悪くとも、もう暫くは使っていただろう。事実、《テリンジャー》も一週間程は使っていた。

少し考えに浸っていたシノンはナッツが向いている事に気付く。その顔は実に呆れ顔であった。

「何?」

「別に。ま、単なる気紛れや」

「あらそう」

随分と自分に都合のいい気紛れもあつたものだ、とシノンは苦笑してNPCを呼び止めて彼のグラスに透き通る茶色の液体を注いだ。

注がれた液体を見ながらグラスを軽く持ち上げる事で礼を示したナッツは一息にソレを飲み干した。

「ふう……」

「いい飲みっぷりね」

「おっと、惚れてもうた?」

「その馬鹿っぽい所が無ければね」

「それは残念やなあ」

それほど残念そうでもない様子でナッツは笑い、グラスを置いた。

「ほな、僕はそろそろ落ちるわ」

「今日は早いわね」

「オッサンオッサン言うわりには無理させようとするなあ、シノンは」
「そこまで年齢高くないでしょ」

「せやな。ま、明日の仕事が早いから今日はココまで」

シノンにナッツを束縛する理由は無い。それこそコンビを組んで

いる時もあるが、スコードロンという訳でもない。

挨拶を交わし、Mob狩り或いはナッツを狙ってきたプレイヤーを狩り、報酬を分割する。そういった利害一致の延長でしかない。

「私はもう少し残るわ」

「さいで。インした時にはまた誘うわ」

「気が向いたらね」

「ツレへんなあ」

口をへの字に曲げてみせたナッツはそのままコンソールを弄つてログアウトをした。

消えていく男の姿を見ながらシノン溜め息を吐き出し、机の上に残ったグラスを指で弾いた。

第22話

最初は——興味本位であった。

GGOの世界へと誘われたシノンはよく耳にする存在に興味を抱いた。首都SBCグロツケンにて噂の尽きない男であった。

深緑髪の長身男——ナッツ。

噂は多岐に渡った。主武装はハンドガンである。主武装はサブマシンガン。主武装は——。

そういった武器に関しては勿論の事、戦闘スタイルも同様に多数の情報が入り混じっていた。

そして眉唾のようなモノもある。

——GGOが始まって、現在に至るまで死んだ事が無い。

当然、ナッツ本人が証明した訳でも、『「急募」僕を殺せる人、おる？【Pv強者】』なんて掲示板に立てた訳でもない。そんなモノはクソスレ扱いされてデータの山に埋められるのだ。

始まりはスコードロンの一つがナッツの名前を出した所からである。逆恨みにも等しい晒し上げであった。証拠に投稿者は掲示板の住民達に叩かれていた。

情報を否定していた掲示板の住民達が興味本位を切欠としてパーティを組み、ナッツへと襲撃した。

結果としてそのパーティは負け、新たにスレッドが立てられる事になる。そんな事が幾度も起こり、その全てをナッツは撃退した。

そしてナッツは不死者^{イモータル}へと成ったのだ。

死なず。殺されず。相手へ一方的な死を与える存在。

不死者と呼ばれる様になった事で「ナッツを倒せばレアアイテムをドロップする」なんて噂も付随したのは言うまでもない。そもそもナッツとてプレイヤーであり、そして襲撃してきたプレイヤー全てを倒しているのだ。レアアイテムの一つや二つ持っていて然るべきである。

そんなレイドボスの様な男に興味を抱いたのは決して悪いことでは

はない。それこそGGOを生きるプレイヤーとしてはある種の『当たり前』とも言えた。

画像で見るだけでは物足りず、幸いな事に自身は狙撃手だ。そして何より、諸事情を抱えた自分がどれほど強くなったのか……。

レイドボス討伐よろしくパーティの募集に自身の名前を挙げるのに時間は掛からなかった。

レイドボス討伐パーティだったならば、これ以上に面倒は少なかっただろう。

シノンには首に巻いたサンドイエローのマフラーで口元を隠しながらそう思う。マフラーが吸いきれなかった溜め息が顔の両脇で結わえた房の細かく揺らした。

レイドボス討伐であつたならば、効率重視のパーティが出来上がつて居ただろう。けれども、現在のパーティメンバーは何処か緊張感がない。

不死者という観覧物の見学。事実の確認。運が良ければレアアイテムをゲット。その程度にしか思っていないのだろう。相手がプレイヤーであるから、という根本的にレイドボスとは違う理由で。

慢心や油断が見て取れる。と、言うべきか真剣ではないのはよく分かる。女性である自分に嬉々として話しかけてくるからだ。

言葉巧みに現実世界の事を聞いてくるパーティメンバーを苦笑いと当たり障りもない言葉で躲しながらシノンは自分の容姿を呪う。

スカイブルーの髪も、お人形めいた華奢な少女のアバターを。お陰で現実世界では必要にならないだろうナンパの避け方を覚えてしまった。

ともあれ、アバターを捨てるには些かレベルを上げすぎた事は確かであろう。知人であるシュピーゲルが頑なに「勿体無い」と言うのも原因であるに違いない。

「来たぜ」

そんな面倒からシノンが解放されたのは、件のレイドボスが予定通りに現れてからである。

掩蔽物である瓦礫の隙間から双眼鏡で覗いていたメンバーの声に全員の意識は少しばかり引き締まる。

狙撃手である自身は肩に担いでいた《ウインチェスターM70》のスコープを覗き、小さな黒い点を発見し、ゆっくりと倍率上げ、ピントを合わせてようやくその姿を確認した。

茶褐色のボロボロの外套を揺らしながら歩くターゲット目標。外套の中に装備が隠されているのか、何を装備しているかは分からない。

情報通りであるならば、彼はMob狩りに行く筈であるから光学銃を持つている筈だ。果たしてGGO内で彼にプライバシーがあるかは思考の端に置いておくとして。

目標が予測的地へと到着するまでの間に幾つかある狙撃ポイント。狙撃手であるシノンが独断で決定した襲撃場所であるが、誰も文句を言う事は無かった。

ナッツが姿を現した事で各自が持ち場へと向かう。《H&K G36C》を持ったナンパ男がシノンへと視線を送りながら連れ去られていくが、シノンはソレをアツサリと無視した。

そんな男に呆れ果てながら、シノンはメンバーに伝えていた狙撃地点とは少し離れた場所へと走る。信じていない訳ではないけれど、念には念を入れたかった。

地面に腹を付けて寝そべり、グリップに頬を押し当ててスコープを覗き見る。

深緑色の髪が風で揺れ、長身を隠すボロボロの外套がパタパタと慌ただしく動いている。

『……配置に着いた』

ヘッドセットから聞こえたノイズ雑音混ざりの声。ソレに続くように他のメンバーからも到着の音が聞こえた。

シノンはその声に短く返事をして、照準器を合わせる。距離と風向き、標的の移動速度を考慮して着弾位置を合わせ、トリガーへと指を掛ける。

スコープの向こうにライトグリーンターゲットの円が出現する。目標とした男の胸元を中心とした円が静かに縮小しては拡大する。

一定の感覚で拡張する《着弾予測円》の中に目標を入れながら、シ
ノンは大きく息を吸い込んで、ゆっくりと息を吐き出し続け、止める。
トクン、トクンとシノンの鼓動に合わせるように拡張していた円の
リズムが遅くなる。

縮小――

拡大――

縮小……

拡大……

緊張による心拍上昇など感じさせない。

時間が引き伸ばされたと錯覚するほど思考が冷める。

不安、恐怖、緊張。その全てを捨て去る。

指に力が入る。内部にある機構がゆっくりと音を立てる。

目標が停止し、両腕を広げた。まるで撃てと言わんばかりの行動で
あり、同時にそれは冷徹な機械へと成ったシノンを単なるプレイヤー
へと戻すのには十分な異常であった。

飲み込まれた息と同時に放たれた弾丸。その弾丸は真つ直ぐに
ナツツへと向かい、外套に新しい穴を開けた。

「――外したッ！」

即座に思考を仕切り直しシノンはスコープを覗き、慌てて掩蔽物へ
と転がり込んだ。

その掩蔽物を削るように当たった何かナツツが構えていたライ
フルの銃弾であることはあのナンパ男でも分かる事だろう。

掩蔽物を乱打する銃弾が「居るのはわかっている」とシノンの鼓膜
に訴える。

狙撃の失敗など多々あるけれど、ココまで即座に居場所を割り出さ
れた事は無かった。フラッシュサプレッサーの異常？ 神がかった
勘？ 情報の漏洩？

どれもあり得ない。

銃声は未だに聞こえるけれど、掩蔽物に当たる銃弾は少なくなっ
た。パーティメンバーが攻撃を開始した事はすぐに理解した。

混乱する頭を無理やり機械のソレへと落とし込み、シノンは身を屈

めながら移動を開始する。

援護。狙撃ポイントの変更。周辺地形。掩蔽物。目標の立ち位置。ここ一ヶ月程で染み付いた行動が身体を動かす。

掩蔽物の影から目視で目標を確認し、太陽の位置を確認する。スコープが反射する事はないだろう。

ならば、何故自身の場所がバレた？ マズルフラッシュ 発火炎での特定……いや、彼

は撃たれる前に両手を広げてみせた。

自分が撃たれる事が分かっていた様に――。

即座に切り捨ては湧き出てくる思考の波を抑えつけて、シノンはスコープを覗き込む。

目標と仲間達の戦い。いや、戦いなどではない。こうして遠距離で見れば一方的な戦闘であつた。

当然だ。そもそも目標である男は一人なのだ。複数人に囲まれてしまえば――。当然の思考に引っかけかりを覚えた。

人数が足りない。自分を合わせて五人。現在戦闘に参加しているのは三人。スコープを僅かに滑らせ倒れている存在を見つける。ナンパ男だ。

視認出来る限り――ポリゴン片へと変換されていない所を考えれば死んではいけない。それこそ、パーティとして名前を連ねているからこそ死ねば分かる。

「――ッ」

シノンの背中を冷たい何かが走る。

スコープで見た目標がコチラを見ていた。視線が合った。気のせいではない。確実に。

あり得ない。掩蔽物で視界を切つて移動したのだ。それに戦闘中に他のメンバーを放置して自身の場所を確認するなんて――。

けれど、彼は間違い無くシノンを見たのだ。

未知の現象に遭遇した事による本能的な恐怖。その恐怖をシノンは噛み締めて、無理やり笑ってみせる。

フレイク 嘘だ。偶然だ。思い込みだ。

思考に無理やり言い聞かせてシノンはM70を構える。ボルトハ

ンドルを操作して空になった薬莖が弾き出され、弾薬がバレルに押し込まれる。

五月蝍い心臓を呼吸を止める事で無理やり抑えつけ、トリガーに指を掛け——指を離す。

射線上に仲間の背中が入り込んだ。撃てない。

愛らしい眉の間に皺が寄り、それでもシノンは冷徹にスコープを覗き続けた。来るべきチャンスの為に。

最初に死んだのは、今回のパーティの取り仕切り役であった。《スプリングフィールド M14》を装備していた標的に接近され、頭が弾け飛んだ。

ソレを皮切りにして《イサカM37》を装備していた一人が銃床で殴られ、アサルトライフルとは思えない銃声によりポリゴンへと散った。掩蔽物へと逃げようとしていたもう一人はその背中を撃たれて倒れた。

既に倒れていたナンパ男の頭に銃を突きつけた狩人は何の戸惑いもなくその引き金を絞った。

呆気なかった。自身が新しい狙撃位置に着いてから起こった一方的な虐殺をそう感じる他無かった。

その虐殺を容易く行った男はドロップしたアイテムを見ること無く、コチラが隠れている掩蔽物へと弾丸を撃ち込んでくる。

撤退……背中を撃たれて終了。

ログアウト……無抵抗な所を撃たれて終了。

シノンは溜め息にも似た空気を吐き出し、呼吸を深くする。

果たして彼の接近と自身が狙いを付けて彼を撃ち抜く事。どちらが早いのだろうか。

トリガーへと指を掛け、意識を研ぎ澄ませていく。ライトグリーンが鈍を構えながら歩いてくる彼を捉える。

脈動と同期して拡張する円。掩蔽物である瓦礫が散り、鼓動が大きくなる。

落ち着け——落ち着け——。

止められた息、音が離れていく感覚、縮まる円。

彼の手元が動く。リロードであろうか、手元にマガジンが握られている。狙うならば今——……。

いいや、これは揺さぶりだ。

トリガーに掛かった指がピクリと動き、停止した。思考の中の違和感。現状見ている限りの彼の行動。嘘。偶然に思わせる必然。

今撃てば、避けられていたかもしれない。そんな思考が過ぎった。ただそれだけの油断だった。

交換されたマガジンが地面に落ち、二つに割れる。いや、割れた訳ではない。跳ねたのはマガジンともう一つ、円柱型の——っ。

即座に思考を戻し、シノンは躊躇せずにトリガーを絞った。

彼を包み込む煙幕に一瞬だけめり込んだ弾丸は着弾が確認出来なかった。

やられた。撃つていけば——。

そう考えた所で仕方がない。すぐさまボルトを引つ張り次の弾丸を装填する。

スモークの中から、自分に向かってではなく横に向かって新しい何かが投げ込まれた。円柱型のソレは地面に落ちてから回転しながら同色の煙を吐き出していく。

その方向へと逃げるつもり——？ 嘘？ 陽動？

思考が乱れ、ライトグリーンの円形が激しく揺れる。それでも何かに即応出来るようにM70は構え続ける。

煙幕から横に向かって外套が飛び出した。揺れる外套に反射的に狙いを定めてトリガーを引き絞る。着弾予測円は広がったが、見事に弾丸は外套へと命中した。

取った。不死者を倒すことが出来た。

一瞬だけ歓喜に満ちた思考が地面に落ちた外套を見て一気に冷める。

冷めた思考が捉えたのは煙幕から真っ直ぐに飛び出てきた狩人が原因だ。牽制射撃を行っていた先ほどまでとは違う、射撃もせずにとただ真っ直ぐにコチラへと走っている。

ボルトハンドルへと手を伸ばし、排莢、装填、構えた瞬間に地面が揺れる。

浮遊感が身体を支配した。

声を出す間もなく、空が穴へと飲み込まれていく。ビュウビュウと風を切る音が耳を揺すり、手から離れそうになったM70を引き寄せ、抱きしめて目を瞑る。

一度何かに臀部が打つかり、落下速度が下がり——数秒程してシノンは最下部へと落ちた。幸いクツシヨンのようなモノがあったのか、HPバーは僅かに減るだけに終わった。

「んー！」

「え？ きやつ?!」

クツシヨンからの声と自身を叩く長い手によくシノンは尻に敷いた男から腰を上げた。

口を塞いでいたのかゲホゲホと咳き込む長身の男は恨めしくシノンを睨んで、溜め息を吐き出してから上を見つめた。

「ダンジョン条件はペアやったんか？ パーティ登録もしたらんからちやうか……。《マスターキー》も装備してたけど、ソレで開いたら苦労せんなあ」

外套も無く、戦闘に必要な最低限の筋肉を残した細身。その機能的な肉体に張り付くようにして濃紺のシャツが手首まで伸びている。サスペンダーのように肩から腰に掛けられたベルト。脇にはハンドガン、腰にはマガジンポーチ。カーゴパンツにも似たシャツよりも暗いズボン。

ようやくくっきりと姿を確認出来た標的はシノンを見ることもせず、考えを纏めていく。

「んー……狙撃手限定って訳でもなさそうやし、《投げ物》無いのも要因か？ わからんなあ」

敵である自分を無視して考察を口にしていくナッツ。少しばかりムツとなったシノンは腰に控えていた《FN ハイパワー》をナッツ

へと向ける。

「ん？」

「ココでアナタを倒せば——」

「あー、やめときやめとき。僕を殺してもレアドロップが出る訳やなし、ここから出れる確率下がるだけやし」

ドロップしたアイテムを更にドロップするかもしれんやろ、とケラケラ笑う。不死者と呼ばれ、躊躇もなかった戦闘をした男とは思えない陽気さである。

ケラケラと笑いながら歩み寄ってくるナッツに呆気にとられてしまった。

ナッツの腕が伸びる。銃を構える手を握り、逆の手でスライドを掴み銃を奪う。

たった一瞬で起こった事に目を白黒させるシノンを余所にナッツは変らずケラケラと笑いながらマガジンを外してスライドを引いて残弾を吐き出させる。

「先に言うけど持つとるM70を撃つよりも僕が君のタイムカード切る方が早いぞ」

「……わかった」

「いやあ、残業してくれて助かるわあ」

確定した負けと自身のアイテムドロップなどを考えて、シノンは今しがた来たパーティー申請を受ける。自身の名前の下に現れた名前とHPバー。

「それで？」

「このダンジョンの脱出確率上げる為のパーティーやと思えばエエよ」

「……アナタ一人でも行けそうだけど？」

「あー。入るつもり無かったから弾数がなあ」

脇のホルスターに入ってた《ワルサー PPK》を引き抜いて引き金を絞る。カチン、という音が虚しく響いて、シノンは深く溜め息を吐き出した。

あれだけ自信満々に決め台詞まで吐き出したコイツは銃さえ装備していなかったのだ。いや、装備はしているが弾丸が無い。

「そっちは？」

「こっちも少ないわ」

「ふーむ……ま、敵に見つからんように行ったらエエやろ」

落としていたハイパワーとマガジンを拾い上げ、スライドをずらし中を確認してからマガジンを装填し、スライドを操作する。

グリップをシノンの方へと向けて手渡そうとして、シノンが訝しげにナッツを見る。

「……私が撃つとか考えないの？」

「撃つてもエエけど、レア武器も持っていない僕のドロップアイテムなんて高が知れてるで？」

「それもそうか……。と変に納得してしまいシノンはハイパワーを受け取る。」

「と、言うの忘れてたわ。ナッツ言います。よろしゅうに」

「……シノン」

「ん。ほな、適当にハンドシグナルだけ決めてささっと進もか」



ナッツとのダンジョン攻略は思った以上に楽であった。

落下時に落としたのか、それとも囷に使った外套と一緒に置いてきたのかM14すら装備していないナッツであったが、ダンジョン攻略における嗅覚は凄かった。

先に居る敵の把握。罠の解除及び設置による敵撃破。隠蔽能力の高さ。

まるでずっとダンジョンの中に居たようにも思えてしまう程にナッツは自然にソレをやつてのけていた。

ただその技能に比例するように彼のドロップ率は悪かった。それもナッツは慣れているようだったけれど。

時折挟まれる休憩の時も女であるシノンにはさっぱり興味が無いのか、マツピングに集中していたりする。会話らしい会話も雑談程度

にシノンが噂の確認をする程度である。

「倒したらレアドロップして……なんやそれ。レアモンスターかレイドボスの話やんね?」

「アナタの話に決まってるじゃない」

「なんでそうなるんや……あれか、倒しすぎたんか? いや、でも攻めてくるから殺してるだけやし」

うんうんと唸っているナッツに苦笑しながらシノンは流れている噂の大概は本当なのだ と確信した。

だからこそ、聞かなくてはならない。

「今日の襲撃も知ってたのかしら?」

「……日取りだけやけどな」

「やっぱり……」

「相手の数まではわからんよ。情報屋も面白がって教えてくれんし……」

「不死伝説に傷を付けたいのよ」

死んどらんだけやのに……と溜め息と一緒に呟いたナッツにシノンは更に踏み込む。

「どうして……あの時両手を? 私の場所が分かってたとか?」

「神様やあらへんしわからんよ。両手広げたんも偶然みたいなモンやし」

「都合のいい偶然ね」

「……死なへん為には何をしたらエエか」

ナッツの口から溢れるように呟かれた言葉にシノンは背筋を凍らせる。内容を聞いた訳ではない、ただナッツの雰囲気は軽々しいモノから変化した。

「情報の精査。地形の把握。自分と相手の技能を度外視するとして、これだけは完璧にしただけや」

「……つまり、襲撃位置を予測してた?」

「そうやね。まあ何個もあったけど、全部警戒してたし。狙撃手前提で考えててよかったわ」

頭が冷えた。もしもナッツの言葉が本当ならば、今回の襲撃は彼の

手の平の上から出ていない事になる。

自分の狙撃も。ポイントの移動も。……ここに入ってしまった事は彼の手の平から零れ落ちたようだけれど。

「自分とは予定外の時に来たら？」

「抵抗はするよ。まあ、死んでも死ぬだけやろ」

「……それもそうね」

肩を竦めたシノンにナッツは少しバツが悪そうにコメカミを指で搔いた。

その表情に疑問を感じたけれど、表情自体が一瞬だったので聞くタイミングを逃してしまった。

「ほな、攻略に戻るか。頼りにしてんで、狙撃手^{スナイパー}」

「レイドボスに言われちゃ、頑張るしか無いわね」

「……ずっとソロでやってた影響なんかなあ？」

長い身体を縮こませるように肩を落としたナッツのクスクスと笑いながらシノンが追隨した。

第23話

揺れる視界と地に着かない足。鈍化した感覚達の中で左手だけが冷たいグラスを掴んでいる事を明確に伝えてくる。

吐き気はない。高揚感も、呂律が回らなくなる事もない。舌に乗る苦い液体を呑み込んで、小さく息を吐き出す。

味覚エンジンは優秀だった。酒の味など現実では味わえないけれど、少なからず過去に経験したモドキのどれよりもハッキリとした味であるには違いない。

こうして考えるとアインクラッドで酒に溺れていた大人達は自分と一緒にデバフの調査をしていたのだろうか。味を愉しんでいた訳ではない事は確かだろう。それは他の料理モドキが証明している。

不必要な思考を回転させながらナッツは腕を真っ直ぐ伸ばす。

筋肉の付いた長い腕。その腕の先に付いている手を動かして鈍化した感覚を確かめる。指先ひとつ一つを丁寧に折り曲げて自分の中の歯車を修正していく。

長くなった体躯。幸いな事にスキルのアシストによって身体は問題なく動いてくれる。動いてくれるが、それだけだ。

一ヶ月程この世界に潜り続ければ、とも思けれどどうにも慣れなかった。現実での夏樹との差は問題はない。けれど、違う。

根本的な部分で、ズレている。

ナッツに必要な部分が増えたのか？ いやナッツは何も問題ない。

ナッツに必要な部分が削がれたか？ いや、ナッツは何も問題ない。

自分に誤差が生じたか？

グラスの中に残った液体を飲み干してバフとデバフを確認する。重ねに重ねたデバフのお陰で船にでも乗っている様に視界が揺らぐ。

グラスを机に置いて、立ち上がれば立っているのもやっとの状態だ。重ねたデバフで新しいデバフでも追加しているのだろうか。

不必要な事を考えながらも染み込んだ行動を繰り返す。索敵スキ

ルを起動し、周囲を確認する。街であってもソレは変わらない。

索敵スキルに引つ掛かった存在達。その一つに首を傾げて、一つ唸る。

穴も空いていない平面の床を踏み外し、覚束ない足を後ろに置こうとすれば背中を支えられる。

「飲み過ぎじゃない？」

「ん？ んお。ああ、シノンさんかい」

呆れた口調で行動を窺める知人にナッツは酔っ払いのようにケラケラと笑いながら応えてみせる。実際は酔っていない——そもそもバーチャルにアルコールによる酔いは無いにも関わらずにである。

支えられたままケラケラと笑うナッツに溜め息を吐き出して鬱陶しい身体を引き離そうとすれば腕を肩に回されて絡まれる。

「ちよつとー」

「まあまあ」

珍しく絡んでくるナッツに驚きながら怒りを露わにしたシノンであるが、ナッツは理由も言わずに顔をニヤけさせている。

目の前に出てきたハラスメント警告をタップしようにも器用に腕は抑えつけられている。

鬱陶しさを全面に出しながらナッツを睨めばケラケラ笑っているのは口元だけでその瞳はシノンに向いてすらいない。

「おいー」

そんな二人の前に現れたのは優男であった。そこそこ長身の男であるが肩から下げている《Mini UZI》が余計に彼の優男度を上げているのだろうか。

シノンはこの男を知っている。なんせ自分をGGOへと誘った男なのだから。

「シユピーゲル!？」

「シノンを離せ」

「……なんや知り合いやったんか」

パツとシノンを離してナッツは溜め息を吐き出すようにそう呟いて、すぐさま笑みを浮かべてみせた。

「いやあ、スマンスマン。ちよつと足が覚束んくてなあ」

「……はあ」

「シノン大丈夫？」

「彼の言う通りよ。酔っ払いに絡まれてただけ」

「酔ってないねんけどなあ」

「酔っ払いはそう言うのよ」

酔っ払いの常套句を口にしたナッツにシノンの鋭い指摘が刺さる。シノンと仲よさげなセクハラ男に警戒を隠そうともしないシュピーゲルをナッツは観察する。

武器の種類。装備。警戒の仕方。視線の位置。表情。

彼の観察が終わった所で本格的にシノンから距離を置く。パーソナル・スペースに入り続けて不興を買う意味もない。

ナッツが離れた事でシュピーゲルが寄り二人の間へと入り込み、ナッツを睨めつける。強い敵意を感じる視線であったが、ナッツは彼を笑んだ。

「まるで騎士様やねえ。おつと、この世界やとエージェント言うべきかな？」

エージェントが守っているのは腕利きの傭兵なのだが、言わぬが花だろう。

そんな皮肉に気付いたのかシノンがナッツを睨み、ナッツは両手を挙げて降参の意を示した。

シュピーゲルに向けた皮肉は置いておき。ナッツはしっかりとした足取りで二歩ほど後ろに下がった。

「それで、コチラさんは？」

「彼は——」

「僕はシュピーゲル。彼女の、……友人だ」

「……なるほどなるほど」

「変に勘繰らないで。単なるリアルでの友人よ」

シュピーゲルの言葉にニマニマとした笑みを浮かべたナッツであったが、シノンの言葉によりその表情をつまらなさそうに歪める。

シノンの口撃が飛び火したシュピーゲルは表情をピクリと動かし

だが、どうにか未だにナッツに敵意を向け続けている。

「初めまして、僕はナッツ言います。シノンとは……いや、君に言うんはちよい残酷やね」

「なっ!？」

「はあ……クエストのパーティを組んだりする程度の仲よ」

目を白黒させてシノンとナッツに視線を行き来させていたシュピーゲルとそんなシュピーゲルをニマニマと笑っているナッツ。溜め息をわかりやすいように吐き出したシノンはハッキリとナッツとの仲を口にする。

「そ、そうなんだ……ん？ ナッツ?」

「想像してるボスよ」

「誰がボスやねん」

「鏡でも見たら?」

「イケメンが見たい訳や無いねんけど」

「病院にでも行ってきたら?」

「目はいい方や」

「精神科の方よ」

シノンからの一言に唸るナッツ。返す言葉もないとはこの事なのだろう。現実世界でも受診しているかと言われれば否なのであるが。言葉の殴り合いはともかくとして。殴り合いに参加すら出来なかったシュピーゲルは目を輝かせてやや興奮気味にナッツを見ている。

「ほ、本当? この人が襲撃を全て撃退して、不死者の二つ名まで持つてるナッツ? 最近模倣されて噂が交差してるけど……」

「なんやそら」

「髪色を替えたとか、別の人がアナタに成りきってるとか」

「ふーん」

自身の模倣人が出回っている事に関してそれ程の興味を見せずに左肩にひよろりと乗っている深緑色の髪束を指で弄る。

襲撃が減ったのはそういう事なのだろう。噂が出回る事はいい事だが、アイテムボックスが自分から来ないという点では損だろう。

「ま、エエわ。それで、僕がそのナッツやけど、どないかしたん？」

「ホントにプレイヤーだったんだ……」

「なんや、この都市伝説そのものに会ったみたいな感想は」

「文字通りでしょ」

「僕は都市伝説やった……？」

「不死者って言われてる時点で察しなさいよ」

わざとらしく驚いてみせたナッツに溜め息でも吐き出さんばかりに呆れるシノン。そのシノンは都市伝説を言葉のサンドバックにしている訳であるが……。

「シノンは普通やん」

「幽霊の正体見たり枯れ尾花」

「それにしても僕の扱いがぞんざいやと思うねんけど」

「酔っ払いにマトモに接した所で意味ないでしょ」

街で見かければ酒場で酒を飲んでいるか、店売りの銃を買い替えているかのどちらかである。悪癖二つが重症過ぎた結果の扱いである。絡まれ方もあるが、配分としてはそれ程大きくない。

「その……パラメーターってやっぱりAGI敏捷力優先なんですか？」

「シュピーゲル！」

「ええよええよ」

シュピーゲルが不死者に恐る恐る聞いた内容にシノンは声を少し荒らげ、ナッツはケラケラと笑ってシノンを抑える。

パラメーターやスキル構成に関して聞くのはマナー違反だ。ステータスの情報さえあれば大凡の戦術を立てられる。対人戦PvPを主にしているこの世界であれば尚更である。

「僕が長く生きてる理由は銃弾に当たらない事を主にしてるからや。昔の人も言うとしたやろ？ 当たらなければどうということはない、って」

「なるほど……やっぱりAGIに振ってるのか」

自身の強さを披露したナッツに考えるように唸るシュピーゲル。そして眉間に皺を寄せるシノン。

ナッツの言葉に嘘はない。彼の戦闘は確かに言葉通りだ。銃弾に

当たらない。だから死なない。

けれど、AGIを重点にパラメーターを振っている訳ではない。それは彼がアイテムの所持数が証明している。

「シノンみたいにSTR^{筋力}優先でもエエンちやう？」

シノンの眉間を見て取り繕うように口にしたナッツであるが、皺の原因はそこではない。

彼の言葉を訂正すべきなのか。このままシュピーゲルが騙されたままでもいいのか。マナー違反をしたのはシュピーゲルであるけれど……。

「まあ、プレイヤーの強さやないし。装備決めたら好きなように上げるんが一番やろ」

店売りを順繰りに装備して使い潰しているナッツが言うのと随分と違和感のある言葉である。

それでもその言葉を彼は体現していた。好きなようにこの世界を生きていた。

何かに束縛されることもなく。

何にも従事することもなく。

ただただ純粹に、この世界を満喫し、生きていた。

「ん、話し過ぎたかな。ほな、僕は狩りに行くから」

踵を返してヒラヒラと手を振った長身の男を呼び止める事はしなかった。シノンもシュピーゲルもアルコールによるバフとデバフは知識として知っている。

短いバフの時間を割いてもらった事に申し訳なく思うシュピーゲルに長いデバフの時間を割いてしまったと呆れるシノン。考える内容は二人とも真逆であるが、時間を割いてもらった事に関しては申し訳なく思ってもいる。

シュピーゲル。シュピーゲル……。

「武器とか、話の結果的にはA G I特化なんかなあ」

ふむ、と小さく息を吐き出して呟く。全てが敵、という大きな事は言わないけれど出会った人物が敵に回っても問題無いように思考するのはあの世界での癖みたいな物であった。

戦い方を見ていない分、戦闘方法などわからないけれど武器の種類と会話の結末から動きを予測する。得意そうな行動から今まで相手にしたプレイヤーを当て嵌める。

S M Gで一定の距離から撃ち続けられれば面倒であるけれど、決定力は無い。或いは武器は見せ掛けで《P 9 0》や《ファマス》を持っていたならば……。

「ま、考えてもしゃーないか」

座ったまま覗いていたスコープの向こうに現れた人型機械のM o b数体を見ながら吐き出す。

目の前の掩蔽物にバイポッドを立て固定された狙撃銃——《ドラグノフ》の銃床に頬を押し当てて細く息を吐き出し続ける。視界に入り込むライトグリーンの円を収縮させ、M o bの胴体部分へと集中させる。

トリガーを引けば後は銃弾が勝手に仕事をしてくれる。咆哮と共に吐き出された弾丸が空気を削りながら直進し、M o bの胸元に命中した。

M o b達は姿通りに機械的な動きで撃たれた味方を見ることもなく狙撃地点へと銃を向け、数体程は先行して移動する。

自動的に排莢された薬莢を耳で捕らえながらスコープを覗き続けるナッツ。移動し始めた敵を捉えてトリガーを引く。

撃てば即座に標的を変更し、遮蔽物が近い敵を正確に撃ち抜いている。十体を撃ち抜けば、スコープから目を離す事なくマガジンを外して、新しいマガジンを装填しコッキングハンドルを引いて敵を捉え直す。

マガジン三つ分の銃弾を撃ち尽くして、ナッツは一息吐き出した。スコープから覗く敵達は沈黙していないが大きくダメージは入っているだろう。光学銃であれば倒せた筈だ。

既存のプレイヤーに無駄弾と言われそうな弾薬を消費したナッツは満足気に笑みを浮かべてスコープから目を離す。

「ドラグノフ用の徹甲弾って店売りされてたっけなあ。いや、徹甲弾入れるんやったら別の銃になるんやっただけ……。ま、胴体に三発撃ち込んだら倒せるな」

考えを口に出しながら外套の上からドラグノフを背負い倒れているMob達の元へとのんびりと向かう。

「AGI特化型の攻略なあ……。うーん。このMobみたいに遠距離からが倒すか、トラップ仕掛けとくか……。真正面からやといっそ接近する方が楽だな」

レベル差はあるであろうし、スキル構成的にも自分が近接戦闘寄りである事は明白である。

明確に決定した対処法を口に出したナッツはその口をへの字に曲げて苦笑する。

「しっかし、お粗末なストーカーやったなあ。僕目当てやなくてシンさん目当てやったし……。シンンさんも苦労すんなあ」

当事者達には言わないし、もしかしたら勘違いかも知れない。元ストーカー被害者としては確信を持って言える事であったけれど。

溜め息を吐き出して苦笑してから、ナッツは首を傾げる。

癖である事は確かである。それは間違いない。あのキリトでさえ倒す為に思考を巡らせた事もある。それは事実だ。

「……ま、エエか」

覚えた引つかかりを無理やり飲み込んだナッツは息を吐き出して、敵をリポップさせるべく行動する。

第24話

G G O 最強者決定バトルロイヤル戦。大会名称、
Ballett・オブ・Balletts。略称、B O B。

果たして最強は誰なのか。そういった論争に終止符を打つが如く開催された今大会はG G Oを熱狂させた。

カジノなどの娯楽施設が設立されているG G O内において、今大会は賭けの対象にもされていた。参加者には最強の称号とレアアイテムを。勝負師達には狂乱と富を。

誰が強い、誰が弱い。誰は誰よりも強い。そんな現実世界も含んだ情報のやり取りも盛んになった。

名だたる強者達の中にナッツの名前もあつた。不死者であるナッツの名前が無い訳がない。

ナッツが大会に出れば――。そんな論争もあつた。

まとめサイトに上がったナッツの情報が幾つも精査され、結果として意味の分からないプレイヤーが出来上がった訳である。

死なない。武器は毎回違う。近接戦強い。長距離狙撃に撃たれる前に気付く。撃とうと思っていたら撃たれていた。ボロ外套の裏にはデリンジャーが沢山仕込まれている。全身から武器が飛び出る。放たれた銃弾は必ず敵に当たる。銃弾が曲がる。壁に隠れてるのに居場所がバレる。壁を透過出来る。チャック・ノリス。

果たして空想に出来上がったのは完全チーターであつたが、ナッツは一切のチート行為を行つてはいない訳である。

完全に存在で遊ばれているナッツであるが、一部情報が本当なだけに否定も出来ない。する気も無いのだが。

さて、ここで問題が発生した。

大会が始まる直前に並べられたプレイヤー名。ズラリと並んだ名前の中に『ナッツ』の名前が無い。それこそ参加はプレイヤー各員の自由なのだから、ナッツの不参加も認められる。

認められるのだが、ソレはソレ。コレはコレ。

期待していた分、失望も大きい。ナッツはソレに対して何かをした

訳でもないし、何かをする訳でもないけれど。

『【悲報】不死者に賭けた結果 W W W』などとスレ立てして大いに盛り上がっているのが現状である。

「で？」

「で？ って何が？」

「なんで参加しなかったの？」

「参加しても意味ないからやけど」

そんな期待していたプレイヤー達の一人でもあるシノンは酒場の隅に座り、酒を飲んでいた当事者に答えを求めた。バツサリと言葉を放ったナッツは眉を顰めてシノンに視線を向けている。

確かに現状で炎上している彼であるが、彼自身には全くの否はない。否はないのだが……納得は出来ない。

「そもそも B O B への参加は強制や無いし」

「そうだけど……」

「それに、B O B 当日は仕事で家居らんかったし」

「……そういえば社会人だったわね」

「あんなあ。見てくれはアバターやけど、これでも確り自立してんねんで？」

「見た目じゃなくて、普段の行動を見て言ってるんだけど？」

「……別に変な事しとらんやろ」

「それもそうね。肝臓には気をつけるのよ」

「お酒は止められてるから問題ないな」

「手遅れだったのね……」

ケラケラと笑いながら現実では飲めないアルコールを喉に通していくナッツが何処か憐れな物に見える。

リアルで禁止された物をバーチャルで飲む。果たして彼にとってアルコールはそれ程重要な物なのだろうか。

そんな憐憫の視線を感じたのか、ナッツは不満を表情に出しながら口を曲げる。

「いや、医者やなくて、法律がボクを止めるんやって」

「……ああ、そう。それは残念ね」

「うわあ、余計に可哀想な物を見る目になつとる」

「キメ顔で言われたらそうなるでしょ？」

本当の事やねんけどなあ。と眉尻を下げて呟いたナッツであるが、その言葉はシノンに届かない。届いた所で「はいはい」と言われて流されてしまうのだが。

「それで、本当の理由は？」

「……なんで嘘みたいに扱われてるんや」

「アナタ普段仕事終わった、とか言いながら夕方ぐらいからログインしてるじゃない。B o Bの開始時間でログインの確認もしたし」

「わお……ボク、シノンさんに狙われてる？」

「命の事かしら？」

「今度から確定で狙撃手居るんかあ……」

口元を隠してまばたきを連続でしたナッツをシノンは言葉の弾丸で撃ち抜いた。撃ち抜かれたナッツは口元に置いていた手を顎に置いて真面目な表情で攻略法に思考を巡らせる。

次回、何処かで戦う事になれば狙撃手前提での立ち回りが要求される。掩蔽物、予定される射撃ポイント、射線が通らない位置取り、覚えているマップを脳裏で広げながら戦術をある程度決める。

「なに真面目に考えてるのよ」

「いやいや、シノンさん相手は凡百の狙撃手相手にするんとは違うやろ」

「……ふーん」

「ボクの手札知つとるし」

「はあ……」

褒められたかと思ひ内心で少しだけ照れたシノンは一気に冷めた。浮かれた自分も悪いけれど、結局の所ナッツは自分の力量しか信じていない訳である。

コンビとしてそこそこ戦闘をしているけれど、未だにナッツが何を考えているかがよく分からない。普段の立ち振舞は完全にダメなおツサンなのだが、戦闘になれば指示が的確すぎるのも問題なのだ。

狙撃ポイントに到着した瞬間に『あと五メートル東』と細かい通信

が届くのだ。当初、意味も分からずに聞き返せば『敵M o bの索敵範囲内と射線の都合』と随分と当然の事が返ってくる。実際、彼の位置だと狙いやすいしM o bがコチラに気付くこともなかった。ナッツのヘイト管理もあるのだろう。

果たして彼は何を思って戦っているのか。何も考えていないかも知れないけれど、変に戦闘に傾倒しているから何かしらの理由はあるのかも知れない。或いは単なる戦闘狂か。

単なる戦闘狂ならばB o Bに出て然るべきである。それこそ人狩りに定評のある不死者様なのだから。

「ま、出エへんかったんは、マップ把握出来んからなあ」

「……それだけ？」

「それだけって……。地形把握は大切やねんで？ 視界で把握出来る分はエエけど、狙撃ポイントは実際に立たなわからんし」

「ああ、だから毎回口出ししてるのね」

ああ、なるほど。とやや思考を停止させたシノンの頭に一つだけ引っかかりが出来る。

そんなシノンの頭の中の事情などはさっぱり分からないナッツはジト目でシノンを見つけた。

「別にそっちにヘイト向いてボクが受けてる攻撃が向かってエエならドーン」

「……狙撃位置でのヘイト管理も実証済みなの？」

「そうやなかったら細々指示出さんやろ……」

「どうやって？」

「どうやってって……こう」

と銃を構えるように両手を出し、ありもしないスコープを覗き見るナッツ。シノンは頭が痛くなってきた。

つまり、つまりである。この男はスナイパーライフルを自前で持つて、大凡の立ち位置を予定した場所で構え、狙撃した訳だ。ヘイト管理に関して言いたい事は沢山ある。お前はデバツカーか何かかと聞いただしたい気持ちもある。がその前に。

「ステータスどうなってるのよ……」

「……マナー違反ですよ。シノンさん」

「その格好で可愛く言われても気持ち悪いだけだからやめて。本当にやめろ」

「お、おう……すんません」

「ピストルで近接戦闘も出来て、アサルトライフルで中距離射撃も可能。挙句にスナイパーライフル？　どういう振り方してるのよ……ホント」

「秘密。まあ、前やってたゲームの都合でレベル高いし、いろんな武器触れる程度には筋力もあると思ってくれたらエエよ」

果たしてどんなゲームをすればそんな上げ方になるのだろうか。そのゲームでも様々な武器を握っていたのだろうか……ナッツならありえる、と思えるあたりシノンもナッツに毒されている。

自分を落ち着ける為に深く息を吐き出す。今に始まったことではない、とかなり酷い結論をはじき出したシノンはナッツに視線を向けた。

「それで、何を使ってるの？　VSS？　VKS？　それともリボルバーライフル？」

「シノンさんがボクの事をどう思ってるかよくわかったわ。もっと普通なんは無いん？」

「……………マスケット？」

「狙撃銃ですらないんやけど……あと、普通でも無いから」
「でもナッツだし」

「普通に店でドラグノフ売つとるやん……」

「……ああ、そういえば」

店売りのソレを思い出したようにシノンは手を打った。実際の所、店売りのスナイパーライフルでナッツが満足する訳がないと思っていたのだが。

店売りを順繰りしているとは言え、変な所でドロップ武器を背負っていたりするものがナッツである。彼の戦闘頻度を考えればレア武器の一つや二つ持っていてても可笑しくはない。

「それで、シノンさんは新しい銃でも見つけたん？」

「……やっぱりエスパーか何か？」

「失礼な。人の表情である程度はわかるよ。喜んでるとか、何か言いたそうとか、VRやと特にわかりやすいな」

「何その特殊能力……人？」

「レイドボス……いや、最近はチート疑われてるんやっただけな？」

チートや、チーターや！ と一人でケラケラ笑いながら言うナッツ。ノリが完全に酔っ払いのソレである。

そんな酔っ払いに果たして言っただけのものか迷ってしまう。二秒ほど迷った結果、この酔っ払いがレアアイテムに対して執着の欠片も無い事を思い出したシノン。シノンはナッツの隣に移動して耳元に口を寄せらる。

「……へカートIIをドロップしたの」

「……………」

「ナッツ？」

「……ん、ああ、いや」

どこか気まずそうなナッツが酒を呷ってシノンが居る方とは逆の頬にグラスを張り付ける。

首を傾げながら数秒程そのままだったナッツをシノンは訝しげに視線を向ける。へカートと聞いて彼のレアアイテム欲求が刺激されてしまったのだろうか？ 狙われる可能性は？ 勝てる可能性は？

「……ん、ていうか、へカートIIって対^{アンチ・マテ}ぶt——あー……いや、マジかあ」

「マジよ」

どうにかその名称を言わずに止まったナッツは彼女の持っている銃のレア度に舌を巻いた。その銃を保持しているシノンは珍しくドヤ顔で口元を緩めている。

「ちなみにドコでドロップしたん？」

「ココの真下。遺跡ダンジョンになってて、そこのボスドロップ」

「……因みにマツピングは？」

「出来てる訳ないじゃない。レベル的に無理だと思いつながら攻略したし」

「よし、行こう。今すぐ行こう」

「ちよつと待ちなさい馬鹿」

「なんでや、もう自慢は終わったやろ。そこに未探索のダンジョンがあるんやで？ 情報集めな……！」

「その探索は目に見えてるトラップ全部引くような探索でしょう？」

「それよりもヘカートこII子を上手く使えるように訓練したいの」

「そんなんソロでやれや」

「あ？ アナタこそソロでマッピングすればいいじゃない！」

「シノンさんしか入り口知らんやろ！ 連れてって、連れてって下さいお願いしますなんでもしますから！」

「なら先に使いこなせるようにしたいの。わかる？」

「ダンジョン潜りながら出来るな！ よっしゃ！」

「流石にあのダンジョンを慣れない銃で行くのは無理だから——」

「ならいつもの銃を使えばエエやろ。よっしゃ、行くでー」

「ちよ、待ちなさい！ もう！ ナッツ！ せめてアナタのデバフを解除してから——」

ケラケラと笑いながらボロボロの外套を揺らす長身の男の後ろを喧しく小言を言いながら追従する人形めいた少女。

小言を聞かない為か、片耳に指を押し当てて塞いだ男に対して少女は眼光を鋭くしてから溜め息を吐き出すのであった。

第25話

響き渡る鉄の咆哮。

吐き出された超音速の弾丸が螺旋を軌跡に描きながら空中を滑り、目標としていた的に命中する。

抉れるように弾け飛んだ的を見ながらシノンは小さく息を吐き出して、ボルトを操作して薬室から薬莖を弾き出した。

カランと高い音を鳴らした空薬莖を見送る事もなく、スコープを覗きながらボルトを押して新しい弾丸が相棒へと装填される。

鳴り叫ぶ鼓動を無理やり抑え付けて着弾予測円を収縮させる為に一定だった呼吸を変化させる。

大きく息を吸い込んで、肺の中に空気を留めるように呼吸を少し止める。細く、静かに吐き出しながらトリガーに指を掛ける。

ドクンと心臓が脈打つ気がした。同時に視界に映るライトグリーンの円が脈動する。

トクリと心臓が動く気がする。同時にライトグリーンの円が広がり、元の円よりも小さくなる。

もう音は聞こえない。ライトグリーンの点が的の中心を捉えて動かない。

指に掛けていたトリガーを引き絞り、弾丸が咆哮と共に銃口から吐き出される。マズルブレーキから左右に噴出したガスが土煙を上げて弾丸を見送った。

《ウルティマラティオ ヘカートII》。直径13.0mmの弾丸を担い手の命令通りに無慈悲に吐き出す対物ライフルアンチマテリアル・ライフル。

GGO内でも両手で数える程しか存在していない冠を被った死の女王。

当然、レアリティの高い武器であった。それこそ売ってしまえばシノンが今までGGOへと捧げた奉納金月額料金を取り返す事も可能であり、収支で言えばプラスになる。

ヘカートIIは売られる事もなく、現在もシノンに引き金を引かれて
いる。

売らなかつた理由は純粹な強さを求めたからでもある。

弱い心を守る為ではなく、乗り越える為に。そしてヘカートⅡとの出会いが運命的だった事。幸いな事に要求されていた筋力値^{S_TR}は辛うじて越えていた。きつとそれも要因の一つだ。

シノンの内情……それこそ現実世界^{リアル}の事を考えれば、この決定は間違いであった。そもそも月額料金を払えなければGGOをプレイすることすら出来ない。都合上、ギリギリの生活をしているシノンにとってこの月額料金という物は大きなウェイトをしめていた。

それこそGGOに入り浸れば、月額料金以上を稼ぐことは出来るだろう。けれどもソレをすれば現実世界に響く事は分かりきっていた。

ボロ・ボロの布に伏せていたシノンがスコープから目を離して隣へチラリと視線を向ける。手首まで肌を隠す濃紺のシャツを着た長身の男が脚を組んで座っている。三脚で立った望遠鏡を覗き見ている男——ナッツ。覗いている先は先程まで自分が覗いていた先と同じ場所である。

「……………」

「土埃がキッツイ」

「隣に居たらそうなるに決まってるでしょ」

「それ、監視人^{スポッター}やれって頼んだ人に言う？ フツ」

いつも肩の上に乗っている一房の深い緑色の髪が身を隠すように背中に垂れ下がり、眉間に皺を寄せた彼の口からは溜め息が零れた。鬱陶しそうに土埃を払い除けながら、望遠鏡の先を見つめてナッツは一つ頷く。

「まあエエんちやう？」

「…………ソロの視点からお願い」

「クソやな。ヘカートⅡ盗られたなかつたらもうちよい精進した方がエエで」

バツサリとシノンの力量を叩き切った男はカラカラと笑って望遠鏡をストレージへと戻した。

ナッツの言葉を受け取ったシノンも自覚はあるから反論はしない。彼のソロとしての実力は折り紙つきである。今日に至るまで伊達

や酔狂で『不死者』などと呼ばれてはいない。

不死者。^{イモータル}レイドボス。チーター。そんな呼ばれ方をされている彼であるが、近頃もう一つ呼び名が増えた。

チュートリアルである。

ダンジョンに好んで潜り、迫るPKプレイヤー達を返り討ちにして
いる存在とバディを組んでいるシノンが稼げていない訳がない。ド
ロップ品を売り捌き続ければ優に月額料金を支払う事が出来るだろ
う。

けれどもシノンは月額料金を苦心している。何故か。

ナッツがシノンに対してドロップ品を売らないように言っている
訳ではない。そもそもそんな物を聞く必要はない。

ナッツとシノンのドロップ品の分配が偏っている訳ではない。
キツチリと二等分されている。

ナッツがシノンを倒す事によりドロップ品を押収している訳でも
ない。そんな事をされてもナッツと共にいるのならば彼女は特殊な
性癖をお持ちに違いない。当然、そんな事はない。

ナッツのドロップ率が極端に悪いのだ。運営の手によってナニカ
サレタヨウにも思える程、ドロップ率が悪い。

例えば、敵Mobを数十体程ナッツが撃破したとする。その後、シ
ノンが同種の敵を数体程倒せばナッツには出なかったレアアイテム
がドロップする。

例えば、迫り来るPKプレイヤーを倒すとする。当然、不死者と呼
ばれる存在を倒す為に装備を整えるのだから、それなりのレア武器を
所持している訳である。それらPKプレイヤーを倒しに倒しても、結
果は散々である。

彼に負けたプレイヤー達がドロップしてしまった物を羅列した結
果、彼は運営が用意したチュートリアルである可能性が浮上した。当
然、そんな事は一切ない。彼は純粹にゲームを楽しむプレイヤーの一
人である。

彼のドロップ運の悪さを逆手にとって、同プレイヤーが何度も襲撃
する時期もあった。当たり前前の如く撃破したナッツの目の前にはレ

ア武器がドロップした訳である。その事が余計にチュートリアル感を出しているのも問題であった。

ともあれ、そんなチュートリアルと一緒に狩りをしているシノンの稼ぎが良い訳がなかった。

効率だけを考えれば非常に良い。極悪に等しいドロップを二等分して月額料金の半額程は賄えているのが証明でもある。

戦闘以外の飲ん兵衛であり、偏屈デバツカーであり、武器の取替など——はなるべく含めたくないが、含めてもナッツは強かった。

純粹な戦闘力も、立ち振舞も、心も。

「どないかしたん?」

「……別に」

羨ましいまでに完成された不死者に何か言うでもなく、何かを言った所で彼がマトモに答えてくれる訳もない。わかりきった事を聞く意味もない。

そう割り切ったシノンは身体を起こしてヘカートIIを持ち上げた。いつもよりも素っ気無い友人に首を傾げて疑問に感じたがナッツはそれ以上を聞くことはない。

地面に敷かれたボロ外套を拾い上げて身体を隠すように羽織って、ナッツは空を見上げて、目を細める。

「次の狩り場に移動する?」

「……………」

「ナッツ?」

「ん。いや、雨が降りそうだからちよつと休憩やな」

空に向いていた視線を下げて歩き出したナッツに入れ違うように視線を空へと向けたシノン。

薄い雲の隙間から見えた空。快晴であるし、雨が降るにしても首都まで戻れない程短時間で降るとは思えない。

訝しげに空を睨んでいた瞳をナッツへと向ければナッツの背中が随分と小さくなっている。

「ちよつとー」

「はよ行くでー」

待つ気など無いようで後ろ向きのままヒラヒラと振られた手がシノンを煽り、肩を竦めて大きく溜め息を吐き出したシノンはヘカートIIをストレージに戻して追いつくように駆ける。

数秒程でその背中に追いつく事が出来た。自身の速度を緩めれば彼の背中は遠ざかる。少しだけ速度を上げて追いついて、また少し離れる。

決してムキになった訳ではないが、どうにか彼の横に辿り着き、彼よりも速いテンポで脚を前に出す。決してムキになった訳ではない。

「……………」

「なんで怒ってるんさ……………」

「別に怒ってないんですけど？」

「お、おう……………さよか」

「ええ」

あからさまに怒っている声色であった。

果たして自分が何か悪いことをしたのだろうか。考えてもナッツに答えは出せなかった。

威嚇している猫の如くピリピリとした空気を放っているシノンはどう宥めたものかと考えながらナッツは空を見上げた。

雨が降るとは思えない、快晴である。



「ほな、ボクは周辺警戒してくるから」

「……………雨のデバフ確認じゃないのね」

「そんなん最初の方に終わらせたわ」

ケロケロと笑いながら後ろ手を振り、ゴム靴をコンクリートの地面に擦らせて彼は消えた。

一人になったシノンは彼の背中に呆れと気疲れを混ぜた溜め息を吐き出して窓の近くに腰を下ろした。

ひしやげた窓を見上げれば、しとしとと雨が空から落ちてくる。

割れたコンクリート片からポタリポタリと落ちる水滴の音と静か

な雨音を聞き流し、廃墟となったビルの一つで雨宿りをする。

ナッツの言うことは当たったのだ。

本当に彼はシステムか何かなのでは無いだろうか？ と半ば本気で疑問が湧いてきたシノンには柱に背を預けて膝を抱えた。

そのシステム野郎が居たならばきつと疑問を口にしていただろう。尤も、彼は飄々としてこの疑問を逸らかすだろうけど。

もしも、本当にシステムなら……いや、そうであったほうが色々説明出来るのだが、彼はプレイヤーだろう。もしもシステムなら高度過ぎるAIだ。

無駄な事を考えながらシノンは雨音で鼓膜を優しく揺らす。

瞼を閉じて、ゆっくりと思考の海に沈んでいく。

流れていく記憶と思考。

現実世界での自分。宿題。勉強。方程式。英単語。教科書。学校。

突きつけられるトイガン。嘲笑。銃口。

鈍色に光る鉄の塊。悲鳴。叫び。自分を呼ぶ声。怒声。

赤。耳鳴り。衝撃。

赤が溢れる。頭に穴を開けた男。

赤が落ちる。手に持った銃から煙が昇る。

赤色が広がっていく。呪いの様に思考を塗りつぶしていく。

伸びてきた男の手を弾き飛ばして、臆病に鳴る歯を食いしばる。

「シノンさん？」

「——アツ」

見えたのは心配そうに自分を見つめる長身の男。恐らく振り払われた手を宙空に漂わせたナッツ。

詰まった息を吐き出そうとして、吐き出せなくて、苦しくて、吐き出そうとして——。

ナッツは目を見開いてシノンの手を強く握って真っ直ぐに彼女を見つめた。

「ゆっくりでエエから。落ち着いて、大丈夫——シノンさん、大丈夫だから」

「——ツ、ハア、ハア、ハア……ゲホ、ゲホ」

「落ち着いて。ゆっくりと呼吸して」

関西特有のイントネーションもない、標準語のナッツに何かを言う余裕もなく。背中を擦られている事で目の前に出ているハラスメント警告のポップアップを叩く余裕すらない。

彼に縋り付いて、荒い呼吸を繰り返して頭の中に流れた映像を消していく。

大丈夫。大丈夫だ。ココは現実ではない。隣にいる長身男こそその証明である。

この世界にいる自分は朝田詩乃アサダシノではない。冷徹に相手を射抜く狙撃手のシノンだ。

「……ありがと。もう大丈夫だから」

「——ん、さよか」

数分程寄りかかった彼の胸に手を置いて自分から距離を離す。呼吸は幾分も落ち着いているし、思考にも余裕が僅かに出来ている。

アツサリとシノンを離して両手を挙げたナッツはシノンから距離を置こうとして、その場に座り込んだ。

非常に珍しく隣に座っている彼に疑問を感じながらもシノンは深く呼吸をして心を落ち着ける。

「……その関西弁。キャラ作りなの？」

「ブツ……いきなりぶっ込んでくるなあ」

吹き出して少し咳き込んだナッツは眉尻を下げて言葉を吐き出した。

「いいじゃない、別に」と小さく呟いたシノンに苦笑してから困ったように口を開く。

「キャラ作りって言うても間違いやないんやけど……まあナッツやからなあ」

どこか自嘲も混じった言い方であった。少なくともシノンはそう感じた。

少しだけ目を伏せてから、ナッツは壊れた窓から空を見上げる。

雨粒も見えない程細かい雨が静かに音を鳴らす。

何も言わないナッツを横目で見ながら、何度か口の中で言葉を反芻して、吐き出す。

「……聞かないのね」

「言いたいんやったら聞くけど、言いたい事でもないやろ」

シノンの呟きに対してナッツは視線を向ける事もなく答えてみせた。そんなナッツに僅かに苛立ちを感じながら、吐き捨てる。

「……知ったように言うのね」

ナッツはただ窓へ向けていた瞳を瞼で隠して、小さく息を吐き出した。

「知らんよ。何が起こって、それがシノンにとってどれだけの枷になってるかなんて、知ったことやない」

「冷たいのね」

「せやな」

言葉では突き放しているようであるがナッツは決してシノンの隣から動こうとはしない。

ただ震えていたシノンの手を握りしめて、沈黙を過ごす。

シノンの頭がナッツの肩に乗る。預けられた身体を押しつける事もせずにナッツはただ彼女を受け入れた。

雨と水の音だけが二人の鼓膜を揺らし、時間が流れていく。

「……どうして優しくするの?」

「……なんでやろ?」

ボンヤリと呟いたシノンに対してナッツは少しだけ考えて疑問を口にした。

何故シノンを受け入れたのか。言われてようやくナッツは自覚して、疑問を浮かべる。

攻略の為? いや、GGO内でのダンジョンでソロで困るような事は現在無い。

PKの対応として? いや、GGO内のプレイヤーに殺されるような事はない。

では、どうして? ナッツに答えを見つかる事は出来ない。夏樹な

らばどうだろうか？　いいや、答えは見つからない。

肩から彼の顔を観察していたシノンはどこか可笑しくなって息を吹き出し笑みを浮かべた。

「なんで笑われてるんや……」

「別に、いいのよ。気にしなくて」

自分よりも年上であろう彼がどうしてか幼く見えてしまった。そんなチグハグな彼が少し可笑しかった。それだけだ。

不満そうに唇を尖らせた彼も諦めたように口元に笑みを浮かべた。

「ま、雨が上がるまではこのままでエエよ」

「ふーん。雨が上がったら？」

「そらへカートの訓練を再開するんやろ」

「……」

「なんで腕抓るんや。HP減るんやで？」

チグハグでも幼くてもいいけれど、もう少し情緒という物を学んでほしい。無言で彼の腕を抓りながらシノンは顔を見せる事なくそう思ってしまった。

雨はもう暫く降り続ける。

第26話

普段よりも、勘は冴えていた。

遮蔽物に背を預けながらシノンには実感する。

極度の緊張状態が自分を引き上げてくれているのか。それとも純粹に自身の力量が上がったのか。もしくはあの雨の日が原因なのだろうか。

脳裏に深緑色の髪の方が映り、消える。

脳に焼き付いた彼の行動を自然と投影しているのかも知れない。不思議と嫌な気分には、ならなかった。

システムの都合上、同一とまでは言えないけれど。それでも彼が自分に影響している事は確かだろう。

かの不死者と似通っていると考えれば、ヘカートⅡと比べれば頼りない《IMI タボールAR21》も随分と力強く感じる。

小さく、息を吐く。

一定間隔で行われるサテライト・スキャン。今回の戦いに参加している全プレイヤーが映り込み、その居場所を特定されてしまう。シノンも例外ではない。

次回のスキャン時間を確認すれば、一分を切っている。

最初の遭遇戦はクリアした。あとは狩人の如く、獲物と決めたプレイヤーを狩ればいい。

スキャンされたプレイヤー達の軌跡を予測した。今の自分ならば、なんでも出来る気がした。

スキャンと同時に遮蔽物から飛び出す。

瞳に映り込む着弾予測円が脈動し端末を見ているプレイヤーを捉える。弾道予測線を見つけた敵は慌てて振り向くが、シノンがトリガーを引く方が早い。

タボールからフルオートで放たれた弾丸、身体に命中し赤いポリゴンが散っていく。

プレイヤーもまた、むぎむぎと死ぬ事に抵抗したのか持っていた《ベクター》をシノンへと向ける。けれど、それも遅い。

シノンから放たれた弾丸が飛翔し、プレイヤーの頭を射抜く。きつと彼の視界では急激に減少したHPを確認出来た事だろう。

散ったポリゴン片を見送る事もなく、シノンは駆ける。同時に先程までいた場所に銃弾が着弾し、弾痕と土煙を残した。

顔だけを後ろに向ければ赤い弾道予測線がコチラに向いていた。

狙撃手は恐らく完璧だった狙撃を避けられた事で狼狽しながらも再度狙いを付けているだろう。シノンにもその経験はある。

目の前の瓦礫を乗り越え、遮蔽物として背中を預ける。

顔を少しだけ出して狙撃手がいるであろう位置を見れば、咎めるように遮蔽物に銃弾が当たった。遮蔽物へ顔を戻して端末で正確な相手の位置を確認する。

狙撃手が見えていた訳ではない。けれど、自分も狙うのならばあのタイミングだった。

距離を考えれば、立ち向かうべきではない。

けれど、ここに張り付けにされているのも問題である。スキャンによつて大凡の位置は全プレイヤーにバレている。銃声で戦闘中という事もバレているだろう。

キルカウントが直接順位に関わる事はない。けれど、数は減らしておくべきだ。

戦闘中ならば気付かれる可能性も低くなり、安全に数を減らす事が出来る。

彼ならば、どう動くだろうか。

シノンの脳裏にナツツがケラケラと笑っていた。死んでも死ぬだけ、いつものように口にして不敵に、飄々と、大胆に、慎重に行動を決定するだろう。

そう、死んでも死に戻りするだけなのだ。

スキャンで確認した狙撃手の位置、自身の敏捷値、目標位置までの遮蔽物の数と位置。

立ち向かうと決めれば、随分と気分は楽になる。捨て身だからか、逃走を諦めたからか。

筋力値と敏捷値に物を言わせて遮蔽物から躍り出る。当たらない

事が明確であつても狙撃位置へと向けてトリガーを引き続ける。

次の遮蔽物へ滑り込み、土煙を吸い込みながらマガジンを変える。遮蔽物の数で言えばあと二つ前に行けば射程範囲だ。

そこまで辿り着いて、ようやく五分五分の博打になる。

残り二つまでは相手が一方的にベットし続ける。積み重なったチップの数だけシノンの命が削られる。

更に言えば、相手は一方的にこの勝負を降りる事が出来る。だからこそ、シノンは急がなくてはならない。勝負を降りられない為に、賭けたチップを総取りする為に。

ジャケットを脱ぎ、軽く丸めておく。相手も自分が立ち向かつてくと判断している事だろう。同時に接近される前に倒さなくてはいけない事を理解している筈だ。

緊張と集中。シノン自身も理解出来る狙撃手特有の感覚。

細く、息を吐き出す。

相手の射撃間隔からセミオートではない事は分かる。これでセミオートだったならばそもそも賭けは成立しない訳だ。

丸めたジャケットを遮蔽物の横から放り投げる。銃声と共にジャケットが弾けてポリゴン片へと散っていく。

その様子も見送らないままシノンは駆けた。二つ先にある遮蔽物に向かつて。

一つ目の遮蔽物を飛び越え、タボールのトリガーを引き続ける。先程よりも近くなった分だけ精度は良くなっている事だろう。それはつまり相手に当たる可能性が高くなっていると云えた。

当然、シノンは当たるとは思っていない。当たれば幸運程度の考えはあつたけれど、それ以上に相手を威嚇する為の射撃だった。

銃弾の飛び交う中で当たらないと心に決めて、着弾予測円を狭めていくのはさぞ難しい事だろう。

そんな事が出来るのは戦場帰りか、死を厭わない人外か、システム野郎に違いない。

予定通り、三つ目の——最後の遮蔽物へと滑り込んだシノンは息を吐き出した。

五分五分。距離と武器を考えれば相手の方が有利だろう。相手がシノンに銃弾を撃ち込むのが先か、シノンが接近出来るのが先か。

コインの表裏を当てるような賭け。両方共裏だったコインにどうか表を作り出す事は出来た。

後は裏が出ないように祈る……いいや、自身の力で表にするだけだ。

弾丸を全て吐き出してしまったタボールのマガジンを入れ替え、コッキングレバーを操作する。機械仕掛けの音を耳に響かせて、シノンはコインを空へと弾いた。



上から数えて十九番目。下から数えて十一番目。

第二回BOBの順位表に映る自身の名前を見ながらシノンは溜め息を吐き出した。

果たして投げたコインを裏を向いた訳である。

「エエ成績やん。予選の戦いもよかったし、本戦も中々に心踊る戦いやったよ」

場末の酒場に腰掛けたシノンの前に座っていたナツツはその成績を見ながら口を開いた。シノンの戦いぶりを一部始終見ていた男の慰めにしては随分とお粗末な物である。

そんな慰め下手な男を睨みつけて口は開かれる。

「ウルサイわよ、不参加男」

「ええ……」

「どうせ私の戦いを見ながらゼクシードや闇風の攻略でも練っていたんでしょ」

男は応えなかった。ただケラケラと笑ってグラスを呷った。凶星である。

この男の性質をある程度理解してしまったシノンはジト目で男を睨み続けた。

今回もB O Bには参加しなかったナッツであるが、当然理由などない。興味が無いという方が適切だろうか

いや、第二回B O Bが開催されると耳にした時のナッツは喜んでいい。第一回優勝者の戦いぶりを見て興味が向いたのか、バトルジャンキー戦闘狂よろしく参加までしようとしていた。

尤も、参加手続き前に日本サーバーのみでの開催と第一回優勝者が海外勢であった事を知ったナッツは興味が削がれたのか、この場末の酒場で傷心をアルコールに浸していた訳であるが。

ともあれ友人が出る事もあり、何かしら有益な情報でも転がっていないかと自分の目で観戦するに至ったナッツ。

通常戦と違い、大会という事もあつてかカメラ越しであっても各人のモチベーションが高い事は見て取れた。けれど、ナッツからすればそれだけなのだ。

理解はしている。自分がどれほどの外れな事を望んでいて、それが理解されない物という事も。

理想を抑えるようにグラスを呷る。

独特の薫りが鼻を抜け、冷たい液体が喉を焼く。肺から出した空気が喉を撫で、薫りを伴って口から吐き出された。

「やっぱりへカートで戦おうかしら」

「それがエエと思うで。そもそもシノン兵士ビルドやないやろ」

「それもそうね」

自分の持ち味を消して勝てるとは思っていない。

今回もへカートを持つていなかったのは、あの暴れ馬を自在に操れる自信が無かったのもある。後はへカートを装備するとサイドアームが重量的に装備出来なくなるのも問題であった。

暴れ馬のへカート一丁か、アサルトライフルとサイドアームのハンドガンか。比べるまでもなく、安定しているのは後者だった。シノンは迷う事なく後者を選択して、負けた。

肩を竦めてノンアルコールの炭酸飲料が入ったグラスを持ち上げたシノン。ナッツはその炭酸飲料が注文された時に「バフは無い」と明言したのだが、至極関係の無い事だった。

持ち上げられたグラスを見てケラケラ笑いながらナッツもグラスを持ち上げる。

「シノンの勝利に？」

「勝ってないわよ」

「やったら、敗北を味わう為に」

「……勝利への一步に」

互いのグラスがぶつかり高い音を響かせる。

敗北の味はシュワシュワと口の中に弾け、スツキリとした甘みと僅かな苦さを伴って飲み込まれた。

敗北風味の炭酸飲料をチビチビと飲んでいれば「ん？」とナッツが何かに気付く。首を傾げてみれば顎でシノンの後ろを示される。

グラスから唇を離して振り返ればそこには銀灰色の長髪を垂らした優男が居た。

「やあシノン。祝勝会、かな？」

「残念ね、シュピーゲル。反省会よ」

「それは、ごめん」

申し訳なきように眉尻を下げたシュピーゲルに半ば冗談の混じっていたシノンは肩を竦めた。

予選落ちだったシュピーゲルからすれば本戦へと出場した時点で浮かれて然るべきなのかもしれない。もしくは自分も含めた皮肉なのか。

「一緒はどう？」

「……じゃあご相伴にあずかろうかな」

「なんや、ボクが奢る雰囲気になってるんやけど？」

「奢ってくれるんでしょ？」

笑顔で言ったシノンにナッツは盛大に溜め息を吐き出した。

不死者と呼ばれている人もこと戦闘を離れば普通の人である。そんな事を苦笑に浮かべながらシュピーゲルは二人の座る席に向かう。

空いている席がナッツの横しかない事に気付いたシノンはシュピーゲル本人の事を考えて彼の為に席を譲る。当然、シノンはナッツ

の隣へと腰掛けた。

「どうかした？」

「いや……その、二人は仲がいいんだね」

「そうかしら？」

「どやろ？」

お互いに顔を見合わせて首を傾げた二人。片方は知りながらとぼけているが、もう片方は本当にわかっていない。

シュピーゲルから見れば、以前会った時と随分違って見えた。

シノンと彼の距離感であったり。ナッツが彼女を呼ぶ時であったり。

内心を隠しながらシュピーゲルは席に座ることなく、立ち惚ける。

「やっぱり……いいよ。僕も色々反省しなくちゃいけないし」

「そっか」

彼の申し出をシノンは聞き入れた。彼にも彼の思う所があるのだろう。反省点は人それぞれであるし、シノンの場合はナッツという模倣すべき存在もいる。

息を飲み込んで、どうにか笑顔のまま後ろを振り返って歩き出したシュピーゲルを見送った二人はそのままグラスを傾けた。

「エエの？」

「彼には彼の考え方が……。それに、反省を見られたくもないでしょ、男って」

「せやろか？」

男心を物語の中でしか知らない女と心自体がすっかり分からない男。自分を伝えられない男の背中はまだ見えないが、二人はボンヤリとそう呟いた。

「で、シュピーゲルが居らんようになったけど、いつまで隣に居んの？」

「いいじゃない、別に」

「……まあ、エエけど」

どういう訳か嬉しそうにしているシノンを見て戻れとも言えなくなった口が代わりに溜め息を吐き出した。

あの雨の日から、ゆつくりとシノンの世界は進んでいた。

自身の内心を全て吐露した訳ではない。その上でナッツはシノンを受け入れた。

ナッツ自身、何故受け入れたか分からないまま。

彼に受け入れられた——甘える事が出来たシノンからしてみれば、どうやら自分は思った以上に媚びを売れる人間だったらしい。と中々に的外れな感想を抱き、自己否定する。

アバターであるシノンは人形めいていて媚を売るには適した外見だろう。けれど、シノンは誰かに甘える事が苦手だ。

彼は——私がした事も受け入れてくれるのだろうか。

きつと軽蔑するだろう。なんせ人を殺したのだ。

憑き纏う悪夢。罪悪。業。侮蔑の視線。

それらに勝つ為に——乗り越える為にシノンはここに立っていた。ナッツは、どうなのだろう。

楽しむ為にこの世界に居る訳ではないことはわかっていた。少なくとも、彼自身が楽しんでるのは副産物みたいなモノだ。

明確な目的があつて、彼はここで勝っている。

名声ではない。富でもない。訓練というには遊び心がありすぎる。

発作を起こした時に甘えさせてくれた彼の手際は慣れているモノだった。まるでそういう人物と長く一緒に居たように。

行き過ぎたロールプレイ。発作対応の慣れ。卓越した戦闘技術。

彼は乗り越えたのだろうか。他人に優しく出来る余裕があるという事は、乗り越えたのだろうか。

彼は強い。私は弱い。

もしも、私が乗り越えた時にはその先で待っている彼に私は心の内を話す事が出来るだろうか。

そこまでは、甘えていても許されるだろうか。

「どないしたん？ そんなぶっさいくな顔して」

「……………」

「なあ場末でも首都内やからダメージないけど、足踏んでるで？」

「そうね」

「ええ……」

第27話

黒いポーンの頭をつまみ上げる。

その黒い足は白いポーンの頭を蹴り飛ばし、倒した。

その隣にあつた白いポーンも蹴り飛ばし、倒す。

チェス盤も広げずに白い兵士を蹂躪した黒の兵士を薄汚れた鉄の机に立てて、男は息を吐き出した。

相変わらず場末の酒場に居座るナッツの机の上には珍しくアルコールの入れられたグラスは無い。その代わりに重々しい頭を支える肘が乗っている。

空いた右手の指を宙に滑らせ、半透明のウィンドウを開いていく。流れる情報に目を滑らせながらウィンドウのひとつ一つを消していく、最後のひとつも消す。

「アカン……わからん」

大きく溜め息を吐き出したナッツは背凭れに体重を預けて椅子を軋ませた。

机の上に我が物顔で仁王立ちする黒のポーン。そして白のポーン二つが力尽きたように倒れていた。

場末であつても酒場という事もあり、古めかしいジャズや、公式の宣伝や映像も流れている。ナッツも酒の肴として、或いは自然と耳に入る為、耳を傾ける事はある。

その日も変わらず、未踏破ダンジョンのマッピングに備えてデバフを掛けるという矛盾極まりない行為に勤しんでいたナッツはボンヤリとサククスとウッドベースの音が心地いい曲に耳を傾けてた。

ただ違つたのは、その曲を上書きするようにポップな曲調が大音量で流れた事だ。

眉間に皺を寄せながら公式宣伝が流れる画面を見ればテクノポップな衣装を着た女が甘い声で喋っていた。

珍しく場末の酒場まで放送された《MMOストリーム》による《今

週の勝ち組さん』のテロップを眺めながらナッツは一つ溜め息を吐き出して席を立った。

見る価値はあるかもしれないが、意味は無いだろう。

出演するプレイヤーがB O Bで優勝したゼクシードと闇風である事は事前に知っていたし、その二人の対応は問題ない。敵対するにしても、倒すことは容易いだろう。

席を立ち、画面に背中を向けたナッツが今しがた始まったデバフと残りのバフ時間を確認する。

『——だから、僕はここに立って一つ宣言をしたいんですよ。きっと、^{イモータル}かの不死者も見ているだろう、この放送でね』
確認していたナッツの指が止まる。

残り短い時間を知らせるようにバフアイコンが点滅する。それを視界の隅に追いやつて、ナッツは振り返り画面を視界に入れた。

派手なブルーシルバーの髪。不敵に笑い、自信に溢れる顔。男の名前は第二回B O B優勝者、ゼクシード。

『その不死神話——不敗神話にピリオドを打つと、ね』
銃を形取った手がまるでトリガーが引かれたように軽く跳ね上がる。

明らかな挑発。分かりきった煽り。

朗々と用意していた台詞を語るゼクシード。準備していたように流れるテロップ文。

ナッツは一時だけポカンとその画面を眺め続け——口角を上げた。身体中に熱い何かが駆け巡る。

普段のお遊び染みた襲撃などではない。

明確な戦闘。純粹な殺し合い。強敵とのギリギリの戦い。擦り減らした物を実感出来る唯一の行為。

ナッツを完了する為のたった一つの可能性。

「——なんや、随分簡単に言ってくれるやん」

その可能性を握った男に獰猛とも思える笑み浮かべ、牙を剥く。

画面に向かい一歩、また一歩と進む。

競技性のある大会では味わえないと思っていた。けれど、それは勘

違いだったのかもしれない。

こうして宣言したことで、相手は逃げられない。ゼクシードは望み通りに不死者に魅入られた。

画面に触れそうな程顔を寄せたナッツの瞳がゼクシードを捉え続ける。

頭の中に駆け巡るゼクシードの情報。停滞していた熱が身体を廻り自然と笑みが溢れる。

「……は？」

溢した笑みが落ちるようにナッツは啞然とした。

放送の中で胸の中央を掴むように拳を握ったゼクシードが消えた。

浮いているウインドウにはログアウトの文字。司会の女性もやや混乱気味に慌てて「すぐに復帰するだろう」と口にしている。

消えたゼクシードのウインドウを数秒程睨めつけていたナッツは興味が失せたように息を吐き出して背中を向けた。

次は挑発される事はなかった。

果たしてゼクシードがログインしなくなって月も変わり十二月。

普段の狩り場を動かす事もなく、加えて挑発されたこともありゼクシード本人の情報を集めていたナッツがゼクシードがまったくログインしていない事に気付くには十分な時間であった。

そして不穏な噂も情報も耳にした。

曰く、その男が銃で画面の中にいたゼクシードを撃ち抜いてゼクシードがログアウトをした。

曰く、その男がゼクシードを殺したと宣言した。

その男の名は——死銃^{デスガン}。

死銃の代わりである黒のポーンの頭を指で弄ぶナッツは思考の海へと埋もれる。

倒れている白いポーンの一つはゼクシード。そしてもう一つは同じく死銃氏に殺されたと思われる《薄塩たらこ》である。

どちらも突然ログアウトし、そして今に至るまでログインされてい

ない。

死銃に撃たれてすぐにログアウトした。

偶然、というには出来過ぎている。必然、というには少し情報が足りない。

最初は獲物を奪われた事への憤慨であった。

可能性の一つを目の前で握りつぶされたのだ。容易く、無遠慮に、無作法に。

噂の死銃を調べ始めたきっかけなどその程度の物だ。

偶然に重なった偶然。その横に同じく偶然と偶然が重なる。

『VRMMOで——ゲームで人が死ぬ訳がない』。口々に言われる正論をナッツは無視した。

もしも、本当に、死銃に人を殺せる力が秘められていたならば？

それはあり得ない。それこそかの茅場晶彦博士もナーヴギアという装置を用いなければ殺せなかった。現在普及しているアミュスファイアでは脳を焼ききれるだけの出力など出る訳がない。

ゲーム越しに殺す事は不可能だ。あり得る訳がない。けれど、それを死銃は行使した。

一人殺し、二人目を殺した。

殺害方法は、別にいい。気にはなるけれどそこまで重要な事ではない。

問題はもう一つ。

「……この二人、共通点らしい共通点を当て嵌めると次の候補が多すぎるで」

倒れている白いポーン二つを立てて並べる。

蘇ったポーン二つの頭の上に透明のウィンドウで顔と情報が羅列された。

「恨み辛みで言うならボクが一番の筈やから、最初に殺されるんはボクやろ」

自慢にならない事を呟きながら新しく白いルークを取り出して机に置く。

チーターだの、チュートリアルだの、レイドボスだの、不死者だの

と逸話と恨みの多いナッツが殺されなかった。

銃で撃てないから？ いいや、銃弾一発を当てればいいのならば何
度も挑戦して殺せばいい。

けれどナッツは狙われなかった。

「B O B参加者やから……つてのも薄い。上位入賞者が条件なら闇風
も殺されるべきやった」

けれど闇風は殺されなかった。白いビショップを取り出してルー
クの隣へと立てる。

「……ステータスビルド——やったら薄塩たらこを殺したのはなんで
や」

ゼクシードの演説めいた敏捷^{A G I}値万能論の否定。喧伝していたのは
彼本人であつたことも含めて、恨まれていたから。これならば、理由
足り得る。

が、薄塩たらこ氏が殺された理由にしては薄い。

「成功者——やったらソレこそボク殺すやろ」

不死者と名高いナッツは殺せなかった。

それこそ薄い要素の積み重ねであればナッツと闇風を除外して、二
人の共通点はある。

「B O B参加者で、ある程度成功してて、敏捷^{A G I}値特化やない……候補者
居りすぎやろ」

白のポーン達をばら撒くように机に降らせたナッツは背凭れの頭
に首を乗せて脱力する。

そのままウィンドウを開けば死銃の標的に成り得る名前が上下反
転して並ぶ。自分の名前は入っていない。

理由はB O Bに参加していなかったから。その点だけが自分には
当て嵌まらない。

「どうしたの、そんな格好で」

ウィンドウから視線を外せば逆さまに直立した少女が立っていた。
スカイブルーの髪の少女が呆れたように肩を竦めて息を吐き出す。

慌てる訳でもなく、口をへの字に折り曲げてウィンドウを消した
ナッツが身体を起こし、首をコキリと鳴らす。

「……別になんでもあらへんよ」

「チェス駒をそこらに散らかして？」

机の上に散らばった白のチェス駒達とたった一つだけ直立している黒のポーン。

バツが悪そうに頭を掻いたナッツがウィンドウを叩いてチェス駒を片付ければ、クスクスと笑われる。

「なにいさ」

「別に、なんでもないわよ」

不満を露わにしながら吐き出した言葉は容易くシノンに流された。

嬉しそうな表情をしているシノンに何かを言うでもなく、大きく溜め息を吐き出し、手元にあった乾物を口に含んだ。

「それで、本当にどうしたの？」

「何が」

「アナタが呑んでない姿なんて滅多に見ないもの」

「休肝日や休肝日」

「コツチじゃ悪くならないの？」

下手な言い訳を肩を竦めて咎めたシノンは頬杖を突いているナッツを見つめる。

そんなシノンの視線から逃れるようにナッツは目を公式宣伝の流れる画面へと向けた。

「ホンマに、なんでもあらへんよ」

「ねえ、ナッツ。私が弱いのはわかるけれど、少しは信頼してくれてもイイんじゃないかしら？」

「シノンが弱かったらボクもここまで悩んどらんねんけどなあ」

ボンヤリと呟くように、溜め息と一緒に出てきた言葉はシノンには届かなかったようだ。

変らずに真っ直ぐ視線を向けてくるシノンに何を言えばいい。

VRMMOで人が死ぬ可能性の事？

死銃が人を殺せる可能性を持っている事？

被害者は恐らくまだ増える事？

その被害者候補の中に彼女が入っている事？

普通な彼女はきつと鼻で笑って、否定するだろう。もしくは危機感を煽られて怯えるかもしれない。

何にしろ、有益ではない。警戒したところで死銃がどのように人を殺しているかは分からないのだ。

「……ゼクシードと決着つけないアカンから、次のB○Bには出よかなあ思ってる」

「……アナタ、本当にナッツ？」

「なんや、君はボクの事をなんやと思ってるんさ」

「というか出れるの？ 運営から止められない？」

「待て待て。ボクは運営とは一切関わりないフツのプレイヤーやで？ 権利は持つとるやろ」

シノンが冗談交じの言葉にナッツは大きさに釈明してみせた。

適当に作った理由だったけれど、道理としては間違っていない。かのゼクシードはあの日から一切ログインしていないけれど。

シノンにとってナッツがB○Bに出るなど驚きしかないのも事実だ。

第一回優勝者が出ない、というだけで即座に出場を諦めた男である。強者を求めすぎているのか、それとも別の理由があるのか。

ともあれ、彼が出場を決定したというのなら——それは嬉しい事だった。

コンビを組んでいるから、彼が大会に出ないから、自分の内心で何処か勝てないと思ってるから。

そんな理由で立ち向かえなかつた絶対強者——イモータル不死者が自分の前に立ちはだかつてくれる。自分がどれほど強くなつたか、直接見てもらえる。

そして、彼の強さの片鱗を知る事が出来るかもしれない。

「そう。まあ精々頑張ることね」

「なんや素っ気無いなあ。もつと『きゃあ！ 不死者様が出るなんて勝てる訳ないわ！』とか可愛く言われへんのか」

「……」

「？ なんや？」

「いや、アバターでも声って変えられる物なのね……ハスキーな女の人みたい、見た目男だけど」

「喉の使い方やからな。練習すりゃあ誰でも出来る技術や」

果たしてそんな練習を必要とする技術に至って普通に使いこなすこの男の職業は何なのか。

シノン は納得したように相槌を打ってから口を開く。

「……声優?」

「ハズレえ」

「当たっててハズレって言うのは無しよ?」

「ホンマにちゃうって。っていうかなんでそんなムキになってるんや」

「隠されると当てたくならない?」

わかるけどさあ、と情けなく同意したナッツと本気でナッツの職業を当てに掛かろうとするシノン。

ナッツはナッツでリアルの事はマナー違反と咎めるべきなのだろうが、リアル世界の自分を匂わせるような行動はしていない。

「公式デバツカーじゃないの?」

「GGOのバグ報告はしとるけど、報酬貰ってないしなあ」

「……それ、デバツカーじゃないの?」

「別に報酬貰う為にやってる訳ちゃうし」

だから職業ではない、と言い張るナッツになんとも言えないような顔になるシノン。

果たしてボランティア感覚でデバックされていくゲームの時間は進んでいく。

第28話

ボンヤリと瞼を上げる。

高層建築群とそれらを繋ぐ空中回廊の網の隙間を埋める黄昏色の空。

甲高い女の声。泣くことも出来ずに謝罪を唱える子供の声。ガラス製のグラスが机から落ちて割れる音。投げられた本が壁に当たる音。

確か、あの時もこんな空だった気がした。

自分の中の何かが、そう呟いた。

あの時よりも幾分も近い空に手を伸ばして、ゆっくりと瞼を落とす。味わうように、瞳に覚え込ませる。

大きく息を吸い込み、細く吐き出す。

大会に出る意味は、無い。それこそ大会自体に興味はない。参加商品にも、B o B 優勝という肩書にも、大会に参加する猛者達にも。

それでも第三回B o Bに参加を決めたのは、死銃の中にあるであろう『殺しのリスト』に含まれる為だ。当然、それも確定ではない。

まだ二人しか殺されていない。

だからこそ、B o B参加者という条件も外れの可能性がある。そもそも死銃が殺人を犯していない可能性もある。

殺す理由も、殺す方法も一切不明。殺人鬼としての彼は劇場型の間だろう。

人の集まる場所で、人に分かるように動作し、弾丸を放つ。

誰にでも『自分が殺した』という事を知らしめるように。自分は力を持っているという誇示の為に。

「……ま、とりあえずは参加やな」

ボソリと呟いた言葉は色褪せたフードを揺らす。

友人が冗談で言ったように、システムとして弾き出されては洒落にもならない。と誰にでもなく呟いたナッツは口元に笑みを浮かべる。

チュートリアル、チーター、レイドボス、と悪名高い自分であるが実際に運営と繋がっている訳でもないし、システムに関与する方法も

心得てはいない。

外套を揺らしながら大会受付の端末を操作する。

大会の規約が公式サイトで流している物と同一の物である事を流し読みで確認して同意。

画面が切り替わった所で、指が止まる。

『以下のフォームには、現実世界におけるプレイヤー本人の氏名や住所等を入力して下さい。空欄や虚偽データでも——』

止めていた指をそのまま画面最下部に存在している『SUBMIT』ボタンへと向かわせた。

瞳で受付完了の旨が書かれた文章と予選トーナメントの時刻を確認して、端末を離れた。

現実世界の住所が特定されていたならば。

いや、特定していたからといって、おいそれと他人の自宅に侵入出来る訳がない。一昔前ならいざ知らず、電子化も進んだ現代の住宅でピッキングが通用する訳でもない。

それに加えて他人の端末の操作を見ていると他のプレイヤーに知られれば、それこそ炎上物だろう。

けれど、もしも、それらの条件を——それこそネットを通じてリアルを殺せるような超常現象を理由にクリア出来たとして、GGO内で殺害する意味がない。

自宅に侵入して、殺せばいい。けれどそれをしない。

死銃が劇場型の殺人鬼とすれば、納得は出来る。

納得は出来るが……説明をするのに死銃は最低二人必要になってしまう。

GGO内でプレイヤーを殺す死銃Aと現実で自宅に侵入しアミュスフィアを装着しているプレイヤー本人を殺す死銃B。

これならば説明が付く。現実も含めて考えれば殺した方法の矛盾点は一切解決する。

けれど、更に別の問題が生じてしまう。

「……現実世界も含めたら、ゼクシードと薄塩たらこのリアル側の共通点もあるかもわからん」

一瞬で肥大した架空の共通項目を頭に思い浮かべてナッツは疲れ
たように溜め息を吐き出した。

妖精達が居るならば、ソレを用いて調べる事も用意であろうが……
ここはS A Oでもなければ、ファンタジーとは程遠い世界だ。それに
加えて、ナッツに現実世界をどうこう出来る力もない。

吐き出した溜め息を掻き消すようにエレベーターの扉が開き、ナッツ
は薄ぼんやりとしか見えない世界へと足を踏み出した。

フード付きのボロ外套で全身を覆い隠した長身の男性アバター。
それを見る目は失望と落胆、そして僅かな興味と敵意だ。

ナッツというプレイヤー……いいや、イモータル不死者と名高いクソ野郎の情
報は多岐に渡る。それこそ、使用武器が乱雑に並べられ、出現位置も
特定されない。唯一の共通項目として『ナッツ』n utsという名前とボロ外
套の長身アバターという事は知れ渡っていた。

同時にそれは模造品が容易く並べられた事も意味する。模倣し、騙
し、その悪名に肖ろうとした者も少なくはない。その誰もが店売りさ
れている防御力も何もないボロ外套を纏っていた。

その並んだ模造品が第三回B O Bにも来た。誰かにとつてはそう
なのである。現に第二回B O Bで同様の事をした勇敢なる兵士は
ナッツが保有する恨みの数々を受けて予選敗退している。

そんな模造品の中に紛れた本物は辺りを軽く見渡して、笑みを浮か
べた。

「な、ナッツ!？」

「ん？ おお！ シュピーゲルやん。どないしたん？」

「ど、どうして君がここに……」

「どうしても何も、参加する為やけど？」

ニマニマと笑みを浮かべていたナッツに対して驚愕してしまう。
無理もない。散々大会に出場しなかった不死者が今目の前に居るの
だ。参加者が更新する度に盛り上がる現行スレもさぞ賑わっている
事だろう。

そんな全ての者の代弁者を必然と任されたしまったシュピーゲル
は目を丸くして驚きの余り一步後ずさりをする。

「ほ、本気かい？」

「そりゃあ出るからには本気やろ」

流石に大会出場者に失礼な事はせんよ、とケラケラ笑いながら言っ
てみせたナッツであるが、シュピーゲルからすれば堪ったものではな
い。

不死者が本気で大会を荒らしに来ている。

戦慄しているシュピーゲルを余所にナッツは大きさに辺りをキョ
ロキョロと見渡してみせる。長身の男が背を更に伸ばしているもの
だからナッツのアバターよりも少しばかり低いシュピーゲルでも嫌
に威圧されてしまう。

「――シノンなら、まだ来てないよ」

恐らく探しているであろう存在の名前をシュピーゲルは挙げる。
果たして無意識だったのか、ハッと気付いたように肩を揺らしてナツ
ツはフード越しに頭を掻く。

「いや、別にシノンを探してた訳やないんやで」

「へえ。じゃあ誰を探していたんだい？　かの不死者が警戒するプレ
イヤーは興味があるけど」

「――死銃」

その名前にシュピーゲルは目を細める。僅かに滲み出た緊張を察
したナッツはケラケラと笑ってみせて言葉が続ける。

「ほら、噂通りならこういう公の場に出とつてもおかしゆうないやろ
？」

「……そうかな」

「僕の勘頼りって事もあるけどな。ゼクシードは殺されるべきやった
し」

「……そうだね。彼は死んでも仕方ない奴だったよ」

「お、エエやん。ま、不必要な情報流してたんは許せんよなあ」

ケラケラと笑いながら話すナッツと違って口元に笑みを浮かべる
だけのシュピーゲル。

適当な会話をしながら、ナッツはシュピーゲルへの警戒を上げてい
く。

決定的だったのは、「上位入賞景品をどうするか？」というありふれた会話だった。決して現実の住所を知ろうと探りを入れてきた訳ではない。けれども住所を入力したかどうかの探りは入れられた。

シュピーゲルに疑いが無ければスルーしていた質問であった。死銃の殺害方法を考えていなければ疑問に思う程度のもだった。

「ほな、そろそろ僕は装備の準備してくるわ」

「お互い、頑張ろう」

「当然やろ」

踵を返してシュピーゲルから離れたナッツは小さく息を吐き出した。

否定、されなかった。死銃がゼクシードを殺した事に否定が入らなかった。ありえない事であるのに、確かにゼクシードが死んだ事を口にした。

彼が死銃本人である可能性……は少ない。けれど、関係者である可能性は高くなった。

「……ヒースクリフさんやったら、もうちよい上手く僕を騙してくれたんやろなあ」

今は居ない魔術師めいた聖騎士を思い出してナッツは大きく溜め息を吐き出した。



◆◆
キリガヤカスト
桐ヶ谷和人

キリトはGGOの世界に降り立ち自身の姿を見て驚愕した。

鮮やかな紅の唇も肩甲骨近くまで伸びた黒い髪。大きく無闇に輝かしい瞳が長い睫毛に縁取られて白黒していた。

恋人である結城明日奈ユウキアスナが今の自分の姿を見たならば黄色い声を上げて可愛いと連呼するに違いない。自画自賛であるが、自信を持ってそう言えた。

自身がGGOへと来た理由を考えれば嗜好のベクトルを百八十度程変更してアバターの再選をしたかった。いや、それで筋肉モリモリ

の女装男が出てきても困るのだが。

多重構造になっている首都SBCグロツケンで見事に迷子になっていたキリトを助けたのはスカイブルーの髪をした山猫リンクスを思わせる少女であった。

同性として助けてくれた少女に悪いけれど、キリトは自身の性別を言うこともなく少女の助力に感謝した。

SAO時代に自身の性別を明言する事のなかった友人はこんな気持ちだったのだろうか……。いや、あの世界ではソレが得になる事は少なかったか。

「どうしたの?」

「あ、いえ。なんでもないです」

思考に少しばかり浸っていたキリトにスカイブルーの毛並の山猫は首を傾げて、初めて銃を握ったり、見たりすればそうなるか。と納得しながらシヨップに映る銃一覧へと視線を向ける。

キリトの視点ではどれも同じ銃に見える。銃の種類など大雑把にしか分からないのだから、当然と言えば当然なのだけけれど。リボルバー、ハンドガン、アサルトライフル……。なんだこの形の銃……。銃? 「……いくら沢山銃を使いたいからって、店売りの物を取っ替え引っ替えるのはオススメしないわよ」

「うえ!? し、しませんよ」

「そうよね。ごめんなさい。知り合いにそういう馬鹿がいるから」

「……何かしらのステータスポーナスがある訳じゃないんですよね?」

「無いわよ」

山猫の頭の中でケラケラと笑いながらデリンジャーからリボルバーに持ち替えてシヨットガンへと変化させアサルトライフルを所持した長身男が現れる。

キリトの頭の中ではクツクツと意地悪い笑みを浮かべながら店売りの曲剣を巧みに操り、敵の攻撃を受け流していく鬼畜シヨタ口リが現れる。

両者とも他人であるからこれ以上口にすることもなく、何故か理解

しあつたように同時に溜め息を吐き出して銃一覽へと視線を戻す。

「そういえば、コンバートなのよね。そのアバター」

「え、あ、はい」

「……ということは所持クレジットは」

「え、……あー!」

キリトが慌てて思い出したようにウィンドウを操作して所持クレジットを確かめる。何時ぞやのバグのようにSAO時代の所持金を持っていく訳がなく、そこには一が一つと零が三つ並んでいた。

「千、クレジットです」

「初期金額だね……あの、もしよかったら」

山猫の申し出にキリトは首を横に振る。熟練者ベテランから過剰な援助を受けるのは決して褒められた事ではない。ゲームを楽しみに来たわけではないが、その一線はゲーマーとして越える事はなかった。

「い、いや、いいですよ。その……ほら、ここってカジノがあるらしいじゃないですか」

「……アナタ、カウンティングでも出来るの?」

「かうん?」

「やめときなさい。スる前提で行くものよ。どこかのシステム野郎が一時期荒稼ぎして余計に難易度を上げたし」

「はあ……」

《システム野郎》という人物がいかなる人物であるかは分からないが随分な言われようである。

溜め息を吐き出しながらどこか嬉しそうに《システム野郎》を思い出したであろう山猫の視線にギャンブルゲームが映る。

「ここにも似たようなのはあるわよ、ほら」

山猫の視線を辿り、見つけたのは西部劇よろしくのNPCガンマンである。

幅三メートル、長さ二十メートルの端にいるガンマンに触れれば、今までつぎ込まれた金額が全額バック。その金額、三十万クレジット。

説明を続ける山猫の補足をするように挑戦者が現れて、そして更に

金額が増える。

弾道予測線。NPCガンマンによる射撃。

なるほど、と頷いたキリトが頭の中でシミュレートして、再度頷いた。

きつと問題ない。自分ならば攻略出来るだろう。

実際に立ってみるまでわからないけれど、大丈夫な筈だ。

頭の中で少女にも見える中性的な少年が遠距離攻撃に関しての見解を述べているのを思い出した。検証と実戦の末に見出した答えであつたが、中々どうして当たつていた。

自分とはきつと違う方法で攻略するだろう存在を思い浮かべてキリトは口元に笑みを浮かべた。

結果だけを言えば、キリトはガンマンに触れる事が出来た。

そしてその金額のほとんどをGGOを生きるガンマンとは程遠い光剣——《フォトンソード》へとつき込んだ。当然、GGOを生きるスナイパーである山猫はそんなキリトにげっそりしたような視線を向けたが。

残りの金額で《FN ファイブセブン》、予備弾倉、厚手の防弾ジャケット、ベルト型の《対光学銃防護フィールド発生器》などを購入したキリトは腰に感じる重みにどこか満足気である。装備を一新した時に感じる充実である。ここに友人であるロリがいたら「SAOやつたら全部ドロップ品やのにな」といらないことを言ったに違いない。そんな鬼畜とは違いコチラの山猫少女は「よかったわね」と喜びを増すような事をちやんと言ってくれるのだ。

出場受付時間ギリギリである事を理解した二人がSBCグロッケンをバギーで爆走という事態も起こつたが、二人はどうか第三回BOBへの出場を決定した。

総督府内のエレベータを降り、地下二十階に辿り着いたキリトは息を飲み込んだ。

へばり付く視線。自身の容姿が原因ではなく、持っている武器を探

るような視線にキリトは固唾を飲み込んだ。

対モンスター専門であるキリトに対して、ここにいるプレイヤー達は全て対人専門である。SAOに居た時であったならば、キリトの牙も研がれていたであろうが、現在プレイしているゲームでは対人戦をそれほどしていない。

短いようで長いブランク。錆びついた勘。

キリトはこの仕事を依頼してきた胡散臭いメガネに悪態を吐いた。

「……どうしたの？」

「いえ、なんでも」

右肘を押された事でようやく自分が立ち止まっている事に気付いたキリトは一度深呼吸をして、前を向いた。

向いて……暗闇だった前が茶褐色である事に気付いた。ボロボロの外套を撫でるように視線を持ち上げれば目深に被ったフードで顔はよく見えない。

けれど、明らかに自分を見下し、そして獰猛に笑みを浮かべているのは理解出来た。

ゾクリと自身の中で警戒レベルが跳ね上がる。生死を賭けていたあの日々がリフレインし、咄嗟に右足を下げて、手を右肩へと向けた。「なんや、君……エエ反応するやん」

長身の男がキリトへと顔を合わせるように身体を折り曲げる。二タリと口元を歪めた細身の顔。

そんなキリトと長身の男の間に腕が割り込み、身体が滑り込んでくる。スカイブルーの髪が揺れて、山猫が男を睨む。

「ちよつと、ナッツ、初心者に何してるのよ」

「わお……初心者ニュービーなんか。それにしてもエエ反応やったなあ」

「ど、どうも……」

「どーも。で、その初心者さんにシノンシノンは粉かけて遅くなった訳やね」「言い方！」

「へいへい」

威嚇の如く怒りを露わにしている山猫——シノンをケラケラと笑いながら躲した長身の男——ナッツは改めてキリトへと視線を合わ

せる。

キリトを暫く見て、ふむ、と唸る。

「君、そのアバター……男？」

「は？ そんな訳ないで——」

「あ、その……はい」

「……………は？」

シノンの怒りの視線がナッツからキリトへとスライドする。冷や汗を流しながら両手を上げたキリトであるがシノンを窘めたのは神様でもなくナッツである。

「まあまあ、どーせ見た目で言及せえへんかったんやろ」

「そりやあ……というかこんな見た目で男とか思わないでしょ」

「せやろか？」

何かあるかわからんでえ、とケラケラ笑って追加したナッツにシノンは少し考えるようにして、一歩下がる。

「……………え？ 何、アナタも実は女とかそういうオチ？」

「んな訳あるかい」

ちやんと男しているアバターでソレを言われるのは遺憾である。と言いたげに口をへの字に曲げたナッツはもう一度キリトへと視線を向ける。

「……………M九〇〇〇番系なら総プレイ時間考えると——」

「わあああ！ その、ただ運がよかったんだ！」

「……………ま、そういう事にしとくわ。僕も似たようなもんやし」

「へ？」

「つと、そうそう。ナッツ言います。よろしゅうに」

「え、あ、キリトです」

「因みに、彼、本物よ」

「え？」

キリトの視線がナッツの足元から頭までを行き来する。シノンの言う通り、本物のナッツであるならば——SAOとは比べ物にならないアバターである事は確かだ。

そんなキリトの視線を受けてナッツが呆れたように溜め息を吐き

出す。

「本物、って言うんは悪名高い不死者である事やろ？」

「それ以外に何かあるのかしら？」

「……まあエエわ。シノンも準備せなアカンねんから、さっさと行つてきいさ」

「はいはい。彼は任しても——」

「任しいさ」

ナッツならば問題はないだろう。そう考えてシノンは控え室へと足を進める。

残ったナッツとキリトはシノンを見送ってから、小さく息を吐き出す。

「——で？ 黒の剣士様がなんでこないな銃しか無い所に居るんや」

「ゴツチの台詞だ。姿を消した落下星様がこんな所にいるなんて思わなかったぞ」

「エライ可愛いなってるんは彼女さんの趣味かなにかで？」

「そういうお前の身長はウィードさんに対抗してか？」

「アホ言いなや。アレは元の僕の身体が好みって公言してるんやで……」

「……なんか悪い」

「エエんやで……」

果たして二人の脳裏を見た目だけは素晴らしい女騎士が駆けた。

同時に吐き出された溜め息が空気に溶け込み、キリトを案内するべくナッツは動き始め、キリトもそれに従うように歩き出した。

第29話

腰のホルスターにファイブセブンを収めて、光剣のストラップを右腰のベルトへと引っ掛ける。

初心者にあるまじきコンソール操作の早さであったが、それを目にしていたナッツは大した驚きもなく少女のような印象を覚える兄貴分へ視線を下げた。

「ファイブセブンに光剣なあ。デイーグルとか装備すると思っただけど外したか」

「でいーぐるっ？」

「デザート・イーグル。メインが光剣ならわからんでもないか」

艶やかな黒髪の頭頂から足元までを品定めをするように見渡したナッツに思わずキリトは身震いしてしまう。

現実のナッツの姿はSAOを通じて知っているけれど、今の長身の男性アバターでされるのは随分と事情が違う。加えて、キリト自身のアバターが少女に見えるのも彼の中の問題点なのだろう。

少しばかり顔を顰めたキリトの表情を見て両手を上げて謝罪が口から出た。悪気の欠片もないが、キリトの感情は理解出来るつもりだ。

「お前は……相変わらずわからないな」

「外套あるしな。というか、見てもわからんやろ」

仕返しとばかりにキリトはナッツを値踏みしようとする先からフードを脱いだ顔を見上げる。相変わらず茶褐色のボロ外套で身を隠している長身男から得られる情報はさっぱり無い。

仕返しの失敗を告げるように指摘したナッツに歯噛みして悔しがる。

「それで？ 銃には詳しくないキリトちゃんなんでGGGコッチに？」

「あー……その、そう！ 銃に詳しくなろうと思っただけ！」

「ふーん。わざわざALOのアバターをコンバートしてまで？」

「ぐ……その、えっと」

「……ま、言いたくないならエエわ」

あつさりと質問から身を引いたナッツは扉を開きドーム内部へと足を進める。その後ろを忙しなく足を動かして追いついたキリトがナッツを見上げる。

見た目は天と地程差があるけれど、間違いなくこの男がナッツであるとキリトは確信している。それを証明しろ、と言われてもキリトには無理なのだが。

雰囲気であつたり、口調の抑揚であつたり、小さな仕草であつたり。そんな些細な事で確信している。この男は間違いなくSAOに存在していた落下星である、と。

その男の背中を見ていたキリトはふと気づき、口を開く。

「どうして俺がALOをプレイしてる事を知ってるんだ？」

「……エギルさんから聞いたんよ」

「エギルから？」

キリトの頭の中に悪役レスラー顔の気のいい黒人の巨漢が笑みを浮かべて登場する。斧を持ったエギルは緩やかに現実へと変換されて、今は真っ白いシャツの襟元に小さな蝶ネクタイをして喫茶店を経営している。

エギルことアンドリユー・ギルバート・ミズルに話を聞いたという事はSAOが終わってから、現実世界での出来事なのだろう。

「……じゃあ、アツチで何が起きてたかは——」

「知つとるよ。エギルさんから助けを求められもした……無理やったけどな」

「そうか……」

「出来れば手助けしたかったけど、現実^{リアル}で色々あつたんと、ウチの母親^母が厳しくてな」

バツの悪そうに言ったナッツにキリトは思わず苦笑してしまう。

確かに、ナッツの助けがあつたならばきつと状況は楽に進んだ事だろう。特にああいった事態に陥ると姿をヒョッコリ現すナッツが現れない事に心配もした。

現れない理由があるとは思った。当然、VRMMOにトラウマを持つている可能性もあつた。心配はしたけれど、ソレを咎める理由は

ない。何より、こうして会えたのだ。

「気にするなよ。それにしても、その姿で母親が厳しいって言われると違和感がすごいな」

「……ママが厳しくて」

「言い方の問題じゃねえよ」

ケラケラと笑いながらボックス席に座ったナッツの隣にキリトは腰掛ける。笑みを浮かべながら随分と懐かしい雰囲気にもまれる。

二年間続けた経験。一年ほど無かった会話。懐かしさを感じるには十分だろう。

「そういえばキリトは死銃関係でコッチに来たんやろ？」

「ああ……ああ」

自身の失態に即座に気付いたキリトが落ち込むように声を漏らした。どうせナッツの事だから確信を持っていつているのだろうけれど、それでも自分から言ってしまうのは問題だ。

「そういう所も相変わらずやなあ」

「お前もな……!」

歯を見せて意地悪く笑う長身男を睨む少女顔の男。

「随分と仲がイイわね」

そんな二人を冷たい瞳で見る山猫少女。首に巻かれたマフラーが二又の尾の様に動き、彼女の怒りを表すように異様な雰囲気醸し出していた。

お怒りでいらっしやる。と即座に判断したキリトは冷や汗を垂らしながらナッツへと目配せをした。そのナッツは相変わらず意地悪い笑みを浮かべている。

「前のゲームで仲良かったしなあ。兄弟分みたいなモンや」

「それは……面倒そうな兄貴分ね」

溜め息と一緒に出てきた言葉と呆れた視線を一身に受けたナッツがキョトンとする。少しだけ考えてニタリと笑みを浮かべる。

「ホンマに、頼れる弟分やったで」

「……ああ、そういう」

ケラケラと笑ってキリトの肩を持つ。キリトはその面倒そうな兄

貴分の言動を理解して納得する。

単なるイタズラの可能性もあるけれど、事実を伝えるのも面倒なのだろう。

そもそも現在のキリトとナッツのアバターを見れば勘違いは自然の思い込みであるし、シノンにしてみればナッツのオッサン臭さもその要因になっている。

肩を寄せた二人を見て少しばかり視線を強めたシノンが肩を竦めた。

「その弟分に言ってくれるかしら？　光剣なんて蜂の巣にされて予選落ちするって」

「それはないよ」

「へ？」

「この世界で、真正面からキリトと戦って勝てる存在なんて居らんよ」
「……ふうーん」

確信を含めた口調にシノンの視線が更に強くなる。その視線を受けたキリトは乾いた笑いを浮かべて口角を痙攣させている。

全幅の信頼をナッツから寄せられている。《前のゲームで兄弟分》であったという理由だけで、それが許されている。《頼れる弟分》だからという理由だけで、それが許容されている。

シノンはキリトを睨んだ視線を瞼を閉じる事で切り、小さく息を吐き出す。

心に燃える感情を理解する。信頼を寄せられた存在が女顔であることも原因なのだろう。

瞼を上げれば彼とその隣にいる女顔の男が笑いあっている。まるで自然に、違和感もなく。

全身の毛を逆撫でされたような不快感。ザワめく心。

その不快感を抑えるように深く息を吸い込んで、細く吐き出す。瞼を上げて一步踏み出す。

「ん？」

「なに？」

男二人の間に身を入れ込んで座ったシノンにナッツは訝しげな表

情をしたものの、彼女の問いには応える事もなく口のへの字にした。何かを察したようにキリトはシノンに穏やかな瞳で見てから、ナツツへと視線を向けて驚く。いいや、彼の年齢を考えればシノンの気持ちに察していかない事は正しい事なのか。

「ま、詳しい話は後々しよか」

「何の話だったのかしら？」

「ナンパの方法やな」

「……サイテー」

冷たい視線にケラケラと笑いながら惚けてみせたナツツを見てキリトは納得した。

ナツツはシノンを巻き込む気はない。或いは、彼が既に死銃の殺しのリストを予想して、その中に彼女が入っているのか。

「キリトも、こんなオッサンに影響されちゃダメよ」

「オッサン……」

実物を知っているからこそ、キリトは言葉に詰まってしまった。

彼の実物を見て『オッサン』と称するには無理のある話だし、今の見た目も精々『お兄さん』と言える年齢だ。

そんなキリトの沈黙に僅かに違和感を覚えたシノンは変わらずケラケラと笑っているナツツへと視線を向けた。

「……ホントに女性なの？」

「ドアホお。異性アバターになる要因はあらへんよ」

「そうよね……私もアナタが同性とは思いたくないわ」

「どういう意味やそれ」

「そういう意味よ」

果たしてシノンの言い回しがさっぱり理解出来なかったナツツは不満そうに口をへの字に曲げる。ニッコリと笑いながらソレを眺めるシノンに『鬼畜シヨタも形無し』と笑みを浮かべるキリト。

への字に曲げた口のままだ天井を仰いだナツツがゆるりと立ち上がる。

「そろそろ時間やね」

「……負けないでよ、ナツツ」

「負けるかいな。死ぬ訳にもいかんしな」

ハッキリと声に出したナッツは面倒くさそうで、けれども笑みを浮かべている。

不死者の称号に恥じぬ文言にシノン肩を竦めて立ち上がる。この男に追いつき、追い越す為に——自分がどれほど強くなったのかを確かめる為の戦い。

予選ブロックの違う彼と戦うのは本戦になるだろう。彼が負ける姿ほど想像出来ないものもない。

マフラーの下で苦笑を浮かべたシノンは隣に未だ座っていた黒髪の少女のような男へと視線を落とす。何かに驚いたように目を見開き、ナッツを見ている。

「——ナッツ、お前——」

小さすぎて聞こえない呟きはシノンの耳に届く事はなかった。



黄昏が色濃く空に映えた。

落ちていく太陽が千切れた雲を橙に焼き、風が小さい雲を流している。

ボロ外套のフードを両手で持ち目深に被る。空を収めるように瞼を閉じて、小さく息を吐く。

ゆっくりと瞼を上げて、思考を一気に切り替える。不必要なモノを全て切り捨てていく。

ただ純粋な命のやり取りにまで意識を落とし込み、感覚をいつかのように研ぎ澄ませていく。

対戦者の名前は見たこともない。何を使うかもわからない。どういう戦いをするのかも、わからない。

相手は死なない。ここはゲームの世界だから。夢幻の中に存在した鉄の城でもない。

自分は——死ぬ。いいや、それを死と表現すべきかナッツは判断

出来ないけれど、ナッツは容易く死ぬ。

死んでも後悔はない。後悔が出来るような生き方を——後悔が出来る程いい生かさね方はしていない。ナッツが死ぬことは確定されたもので、ナッツが死ぬのは義務でもあった。

死んでも死ぬだけ。ナッツとしての自分が消えてなくなるだけ。繰り返してきた生と死と同じように。

ただ、少しばかりナッツでいる時間が長かった。

「――」

肌を突き刺す殺意の塊。けれど今まで感じたどれよりも弱い。

「嗚呼」落胆する。所詮はその程度でしかない。そもそも自分と相手は同じ土俵にいない。

単なるスリルを求めているプレイヤー達と生死のやり取りを望む自分は決定的に違う。

そんな事は度重なる襲撃でわかっていた。ある程度情報を操作して自分を狙わせるようにしてみせたが、幾ら殺しても自分が求めるような結果とは巡り合わなかった。

だからこそ、名誉というこの世界の生を賭けたゼクシードには可能性を見出した。

だからこそ、ゼクシードを殺してみせた死銃に可能性を見出した。小さく、溜め息が吐き出された。

ボロ外套が内から捲られ、ナッツの右腕が姿を現す。握られた銃《ウィンチェスター M1895》が光を浴びた。

その銃を見た対戦者は思わず息を飲み込み、嘲笑う。

量産型不死者の象徴たるボロ外套。手には骨董品にも思えるレバーアクションライフル。当然、その能力値も思い出せる範囲の銃の中でも弱い部類だ。

予選二回戦までの駒は悠々と進むだろう。

自身の手に持った《C B J—MS》の方が優秀であることは明白であるし、量産型不死者程度に負ける力量ではない。敏捷値に割り振ったビルドで接近し、回避し、速射する。いつもと変わらない戦法であり、勝利に一番近い行動である。

遮蔽物から飛び出した対戦者がその敏捷値を誇示するように地を蹴り飛ばした。

飛び出してきた存在に迷うこと無く銃を構えたナッツであるが、その銃の先からは赤い《弾道予測線》が見えている。

放たれた弾丸は男ではなく地面へと当たり、ナッツはトリガーガードと一緒に立ったレバーを操作して排莖し、装填し、更に狙いをつける。

男は身体を左右に振ることでナッツの狙いをブレさせ、その度に元いた所に銃弾が当たる。

揺れる赤いラインと地面に吸い込まれる銃弾が捉えられていない事を意識させる。

瞳の中に映る量産型不死者と激しく拡縮を繰り返す《着弾予測円》。狙いなど定めなくていい。相手がその円の中にさえ入っていれば、あとはトリガーを引き絞るだけでいい。

身を屈めて更に加速する。ライフルにとって接近される事は愚策だ。ファイアレートを考えれば、短機関銃を持つ方が有利である。

だから、ナッツは後ろへ一步身を引いた。

けれど、それは遅い。既に射程圏内へとナッツは捉えられている。構えた釘打ち機にも似た銃。拡縮する円の中にボロ外套の男。

獲った。

そう思った男の視界がスローになる。

トリガーを引く指に力が入っていく。足が地を蹴り飛ばす。どれも認識出来るほどに身にへばり付くような時間。

拡縮する円。捉えたボロ外套の男。視界の下から砂と一緒に持ち上がってきたレモン型の物体。

外れたレバーが視界を過ぎり、咄嗟の判断で身を屈めて頭を守る。

耳を劈く音。甲高い耳鳴りが鼓膜を支配して、視界内に存在しているHPバーが減少していく。

白から緑へ、黄色から赤へと。

点滅して停止した赤いHPバーを見て、一先ずは安心した。何より、同じ程度の距離で爆発しただろう手榴弾の影響はボロ外套も受け

ている筈だ。

舞う砂埃と煙を払うように腕を薙いだ男の眉間に銃が突きつけられる。

骨董品にも見紛う銃。それを辿れば爆発により更に擦り切れたボロ外套。

フードの中からこちらを見下す瞳。

瞬間に理解した。これが不死者だ。イモータルこれが死そのものだ。

殺される。ゲームの中という事を理解していても、叩きつけられた意志がそう思わせる。

銃弾は男の眉間に吸い込まれた。

跳ね上がった銃身を腕だけで操作して、ポリゴンへと変化した男を見送る。

ハズレであった。けれど、イモータル不死者がいる喧伝にはなったであろう。

レバーを操作して、葉莢が宙に吐き出され、新しい弾薬を装填する。満足出来る訳がなかった。

相手が必死でなかった訳ではない。決意が足りなかった訳ではない。弱かった訳でもない。

ただ、ナッツが満足出来なかっただけ。それだけなのだ。

小さく息を吐き出したナッツが手を振るように武器をストレージへと戻し、ボロ外套を着直す。

空になった葉莢が甲高く音を鳴らし地面に落ちた。

第30話

鮮烈であった。

第三者として、あの不死者の戦いというモノを初めて見たプレイヤー達はそう感じた。

今までは不死者と相対する自分、或いはチームメイトと自分だった状況。その枠組から一步外に出て初めて彼の戦闘というモノを見た。

ただの一戦だけでは解らない情報量。フラググレネードの置き方、相手の視線誘導、照準を合わせるまでの時間、エトセトラエトセトラ。

正面に立てば化物にも等しい不死者。その巣窟である彼の狩り場。その狩り場からレイドボスが這い出てきた。獲物を探しに、舌舐めずりをして、狩りの為に。

当然、罵声は飛び交った。

死なない存在が公式の大会を荒らしに来ているのだ。勝てる訳がない。

そんな声は少数である。

過半数はナッツを殺す事が出来る好機であると判断した。

化物が絶対強者である巢から這い出てきた。その理由はわからない。あのゼクシードの挑発に乗った故か、それとも大会に興味が出たか、或いは単なる気まぐれか他の理由かもしれない。

けれど、不死者しか知らないであろう巢から出てきている。

この大会では単純な力量によって比べられる。あの化物を単なるプレイヤーという対等な位置にまで落とせる。

倒せばGGO内での自分の評価はどうなる？ それこそ上がるだろう。そしてナッツを殺した事で非公式の外部サイトにも書かれるであろう自身の名前。

これは絶望の大会などではない。好機なのだ。

あの不死者を殺せる、好機なのだ。

予選一回戦が終わり戻ってきたナッツは外套で隠れた口元を緩める。

好奇と落胆であった視線のほとんどが変化している。観察と敵意、ほんの少しの殺意を混ぜられた視線に満足した。

先程までよりもマシ程度の意識の変化であるが、GGO内であれば十分だろう。

この大会に参加した主目的とは逸脱した望みではあるけれど、GGOに入った理由を考えれば順当な望みである。

纏わり付く視線を感じながら、フードの中で笑みを浮かべたままナッツは振り返る。

自分から四歩程離れた位置に一人のプレイヤーが立っていた。

幽鬼のようにダークグレーのボロボロのマント。目深に被ったフードの奥では極めつけのように仄かに灯る赤い鬼火が二つ揺れる。

紛い物。類似品。偽物。ナッツ自身と酷似した存在達に充てがわれる名称。少なからずナッツ自身も出会った事がある。当然、彼らは本物にはなることは出来なかった。

第三者が見れば、不死者であると証明してみせたナッツとソレに似た存在。どちらが類似品であるかなど比べるまでもなかった。

けれど、ナッツは違う。背筋に走る緊張と明確に突きつけられた殺意。どれもGGO内では味わう事が出来なかったものであり、どの類似品にも無かったものだ。

「おまえ、本物か？」

金属で磨り潰したようにノイズのある声がナッツの鼓膜を揺らした。

「本物？ はて、どういう意味や？」

惚けたようにナッツは幽鬼に聞き返した。肩を竦めて少し大げさに反応しながら、ナッツは相手の全身を確認する。

当然のように見せびらかさない武器。灰色のボロマントにより隠された肉体。僅かな身じろぎ。

この時ばかりは生存本能の薄いGGOプレイヤーを見習ってほしいとまで思うほど、得られる情報は少ない。

幽鬼はユラリとマントを揺らしながら右腕を薄明るい光へと晒した。

細い腕の先に付けられた手。そこから伸びる五本の針金のような指。生気の乏しい指が宙空をなぞり、予選トーナメント表を浮かべる。その中の一角を叩き、目の前に居たナッツと僅かに顔を上下することで見比べる。

「この、名前。さっきの、反応。……おまえは、本物か？」

「だから、何がやねん。類似品かどうかなんて、自分で確かめたあエエやろ」

変わらぬノイズの混ざる金属音声の問いにナッツは大げさに両手を広げて見せて、一歩前に進んだ。そして——幽鬼が一歩後ろに下がる。

ああ。とナッツは納得した。少しばかり遠いから忘れていたけれど、確かに今の体躯で予想するならばその位置になるだろう。

足を止めて、ナッツは口元に嗤いを浮かべた。

自分と戦った事がある存在だ。そして自分が殺せなかったか、殺さなかったか、何にしろ生きて現実へと帰還した存在である事は間違いない。

GGOの世界でのナッツならばこの距離でも撃ち抜ける。けれど幽鬼は一歩下がった。

SAOの世界のナッツならばこの距離では戦えない。一歩か一歩半踏み込まなければ、もしくは相手が攻撃してくるまでは戦えない。

「ああ、そういうことか。くはっ、ひひ」

歪めた口から吐き出された嗤いを噛み締めて、ナッツは改めて目の前の存在を注視する。

SAO時代を考えれば自分に恨みを持っている存在は少なくない。こうして目の前に現れて殺意を突きつける存在には覚えがありすぎる。

或いは、自分と同じ亡霊のような物か。

何にしろ、思わぬ釣果であることは確かであった。

「ああ、そうや。僕が本物や」

「……そうか」

——必ず、殺す。

ザラついた金属声で宣言した男にナッツは更に笑みを深めてみせた。

踵を返した幽鬼はユラリとマントを揺らしながら歩き、そして文字通り幽鬼の如く忽然と消えてみせた。

残滓のようにナッツの六感にへばり付く感覚。居ないはずなのに、存在を感じてしまう。

今までなかった感覚にナッツは疑問を覚えたが、この世界に入ってからズレていた感覚の弊害だと判断してナッツも踵を返した。

ふらり、ふらりと亡霊のようにボロ外套を揺らして一回戦が始まる前に居たボックス席に向かい、ナッツは眉を寄せた。

女性型にも似たアバターの黒髪の少年が震えていた。そしてその少年に手を握られている水色髪の人形めいた少女。

震えを止めるように少女の手を握った男性アバター。祈るように彼女の手に額に付けて安心を得ようと足掻く友人。

大方、先程の幽鬼と会ったのだろう。という予想は簡単に出来た。震えている原因も、凡そ理解出来る。ある種の必然的な事である事も、分かった。

嫌な感覚が自分の奥底で蠢く。兄貴分に抱くには変とも言える悪感情が心に障る。

苛立つ。苦しい。不快。

単調な言葉で自分の状態を表そうとしてみたが、どれも当て嵌まる。けれどどれでもない。

「あ、ナッツ。あなたも勝ったのね」

「……………?」

「ナッツ?」

「あー、いや。ま、勝つんは当然やろ」

コチラに気付いたシノンが声を掛ければ、どういう訳か状況は一緒の筈なのに不快感が消えた。

さっぱり意味がわからない。消えた悪感情を首を傾げて考えてみたけれど答えはない。

シノンに悟られるのも癪なので、ナッツはいつものようにケラケラと笑みを浮かべて見せて戯ける。

そうしてようやくナッツの声に気付いたキリトが顔を上げて、蒼白の顔をナッツへと向けた。

向けて震える唇で何かを言おうとした瞬間に、キリトの体は淡い光に包まれて消えた。

それが予選への転送である事は容易に理解出来たナッツは眉を寄せて、小さく息を吐き出した。

「……大丈夫かしら」

「心配せんでもエエやろ」

「……知り合いなのに冷たいのね」

「この程度でアレが負けるとは思わんからなあ」

キリトに向けられる圧倒的な信頼にシノンは眉の間に皺を寄せた。

羨ましさと嫉妬を混ぜた感情が心中を駆け巡り、なるべく表に出さないように素っ気なく「ふーん」と呟いた。

作られた素っ気なさに気付いたナッツは、はて？ と小首を傾げてみせたがさっぱり理解出来ない。かと言って追及するのも野暮である。

「キリトに予選終わったら話あるって伝えといてえさ」

「……自分で言えばいいじゃない」

「ここから先、確実に会えるんはシノンやろ」

相手が決まれば即出場を余儀なくされる予選ではナッツとキリトの会えるタイミングというのは限られる。

それこそどちらかが負けてしまえば会うこともなく、総督府へと転送されてしまう。勝ったとしても入れ違いになる可能性も高い。

同じブロックだから、という理由であろう事を理解したシノンは唇を尖らせて不満気にナッツを睨む。

睨まれたナッツは口をへの字に折り曲げて予選トーナメント表を宙空に広げる。

「ほら。決勝でぶつかるやん」

シノンとキリトの名前から指で辿りながら山の頂点を叩く。

何の疑いもない、まるで確定事項を話すような口調。キリトは勿論の事、シノンが負けるとすら思っていない。

信頼されてない訳ではない。そんな嬉しさがじんわりと広がり、やはり隠すように素っ気なくしてみせる。

素っ気なくしたついでに気付いた事を口にする。

「でも、私が相手なら話す前に終わるわよ」

光剣とハンドガンを持つキリトと対物ライフルを装備するシノン。

剣士対狙撃手。会話出来る距離で交戦する事もなく、会話出来る距離ならば剣士がアツサリと狙撃手を斬るだろう。

そんな当然の疑問にナッツはキョトンとしてからクツクツと意地悪く笑ってみせる。

その笑いから彼が自分とキリトの戦いでどちらに軍配が上がるかを予想しているかがわかる。

「無理だと思ってるの?」

「……おっと、そろそろ僕の相手が決まりそうやな」

「ちよつとー」

「ほなよろしゅうにい」

シノンの睨みから逃げるように応える事もなく立ち去ったナッツ。シノンにしてみればそれが答えにも聞こえた。

溜め息を吐き出して、思考をトーナメント表へと向ける。

自分の対戦相手を考え、自身に出来る事は超遠距離からの狙撃である事を再認識する。

だからこそ、剣士と相対した時の事など考えなくてもいい。それこそ近距離——剣の届くような距離まで接近される前に撃ち抜けばいいのだ。

けれど、それでもナッツが信頼しているキリトという泥棒猫がその程度で終わるとは考えられない。お金を稼いだ時もそうだった。

あの反射神経で銃弾を避けられたらどうする? 次弾で当てればいい。避け続けられなくなるように、撃てばいい。

数回程、剣士を撃ち抜く思考演習をしてからシノンはやはり問題ない事に気付いた。

接近されたとしても、システム上必中距離で撃てば当たるし、なによりヘカートの破壊力を考えれば何処に当たろうが致命傷になるだろう。

ナッツには申し訳ないけれど、どうやら言伝は完遂出来そうにない。

肩を竦めて皮肉交じりに意地悪い笑みを浮かべたシノンは新しい的の準備された戦場へと転送される。

シノンの思考演習の中には必中距離で放たれた超音速の銃弾を斬るといふ人間離れた所行は当然含まれてない訳である。

第31話

黒の剣を振るう。心を擦り減らしながら剣を振るった。ただただ怖くて、死にたくなくて、誰かを守りたくて、剣を振るった。

赤いポリゴンが散り、目の前にいたプレイヤーのHPゲージが緑から黄色に、そして赤へと変化して——プレイヤーがポリゴンへと変換される。

直接的な死ではない。けれど、それが死へと繋がる事は理解していた。

けれど、幸せすぎる日常でその事すらも忘れていた。

殺した事を忘れたかった。いいや、忘れたかったとすら思えなかった。

斬った筈の二人が手を伸ばし、自らのいる所へと誘おうとしている。

大切な人を貶めようとした男が呪詛を吐き出して貶める。

恐ろしい物から逃げるように、それから逃れるように走る。

目の前には萌黄髪の少女染みた少年が立っていた。

いつものように茶褐色の外套を揺らし、相変わらず笑顔で立っていた。

その背後には強大な闇があった。怨嗟を吐き出し、少年を呪い殺さんばかりの腕が纏わりついていた。

叫ぼうとした。少年がその責任から逃れられるように。

自分の腕が引かれ、咄嗟に背後を見つめよう。

ぼんやりと揺れる赤い鬼火が二つ。死神にも似たポロポロのマントから伸びる包帯が巻かれた腕。

無機質な倍音が混ざった不快な声が鼓膜を通り超えて脳に響いた。

——いずれ、殺す。

引きずり込まれるように腕を引かれ、闇へ落ちていく。

咎めるように。殺す為に。同じ場所へと連れて行くように——。

「——ッ、ハア、ハア」

十二月だというのに寝間着が肌へばり付き、全力疾走をしたように息が荒い。

皮肉な事に肌に纏わり付く不快感が現実である事を理解させてくれる。

ようやく現実へと逃げ帰れた事に安堵しながら、キリト——桐ヶ谷キリガヤ和人は大きく息を吐き出した。

悪夢に魘された事は初めてではない。

けれど、それすらも忘れていた。

出来るならば、忘れていたかった。

願わくば、忘れたままでいたかった。

自分を落ち着けるように深呼吸を繰り返す。

和人は久しくなかつた悪夢との会合を必然だと感じた。

それは仮想世界内であったあの幽鬼染みた存在——恐らく死銃氏シツウシが関わっているのと言うまでもない事実であろう。



予選トーナメントを終え、話があるとナッツに連れ出されたのは場末の酒場であった。

まるで当然のようにアルコールを含むであろうメニューを注文し、魅惑の黄金色に輝く液体が机に置かれた。そしてジョッキを至極自然に持ち上げたナッツがケラケラと笑いながら迪々しくジョッキを上げたキリトへとぶつける。

「かんぱーい」

甲高いガラスの衝突音が響き、黄金色のしゅわしゅわがあつという間にナッツの喉を通り過ぎて、実におっさん臭い彼の「あーッ！」という声によつてようやくキリトが現実に戻ってきた。

「なんで呑んでんだよー！」

「なんで、言われても。アッチやと呑めんし？」

「そりゃあそうだろ……っーか、なんで俺の分まで？」

「一応、軽い祝勝会やし。あ、ちなみにバフは幸運値ラッキーバリューの微上昇でデバフ

は敏捷値^{A G I}の下降やで」

「……………ああ、ナッツだわ。絶対お前はナッツだ」

今更何を言ってるんだ、と言わんばかりに眉を寄せたナッツは軽々とジョッキの一つを空けて、さも美味そうに息を吐き出している。

そう考えれば、実は目の前の黄金色の液体はもしかすると美味しい物なのかもしれない。現実^{リアル}と仮想^{バーチャル}での差を考えれば、或いは。

生唾を一つ飲み込み、キリトは両手で持ったジョッキをそのまま口元へ運び、一口含んだ。

口内を蹂躪する苦味が炭酸により乱舞し、慌てて喉に通しても舌にはしっかりと苦味が我が物顔で残っている。

運営による味覚エンジンに対する並々ならぬ熱意とこんなものを美味そうに呑んでいるナッツをとんでもない者でも見るように見つけた。

そのナッツは兄貴分の涙目を見てケラケラと笑い、口直しと言わんばかりに甘めのジュースを机の上に取り出した。

「よく飲めるな……………」

「喉で楽しむらしいで。舌で味わうからアカンとか」

「こうやってみると完全にオッサンだな、お前」

「やめてえさ。これでも巷じゃお兄さんで通ってんねんから」

巷での呼び名はチーター、チュートリアル、レイドボスである。

キリトのジト目から逃げるように一口しか減っていないジョッキを受け取って飲み干す。

SAOでの容姿を考えれば、彼は未成年で間違いない筈なのだが。と考えたキリトであったが、仮想現実であることと、現在のナッツのアバターで酒を美味そうに飲み干している様はむしろ自然体に見える。

「それで、ホンマに死銃目的で来たんか？」

「……………ああ」

「ALOからわざわざ？　なんで、また」

「それは……………別にいいだろ」

「ふーん、なるほど。わかった、納得するわ」

政府関係だと言えばそれはそれで面倒になる事を理解しているキリトは言葉を濁し、その旨をおおよそ正しく受け取ったナッツは興味なさげに右手で出したメニュー表をスクロールしている。

「そういうお前こそ、なんでココにいるんだ？」

「サービス開始と僕の都合がよくなる時期が被つとつたからなあ。あとは世界観？」

「……お前、銃とか好きなのか」

「ああ、そつちやなくて。気軽に殺し合い出来ることやね」

拍子抜けやったけど、と付け加えたナッツにキリトは眉を寄せる。

殺し合いを楽しむような人物ではなかった事はキリトが一番よく知っている。だから、ナッツの言う『気軽に殺し合い出来る』という条件は彼が言うような言葉とは思えなかった。

新しくアルコールを頼んだナッツは氷の入った透明の液体を飲み込んだ。

「ま、そこはエエやろ。お互いに、重要な事でもなし」

「……そうだな」

キリトは目の前にあるジュースの入ったグラスに口を付ける。

舌に転がる果実の甘みと香りを楽しみながら、喉に通す。先程の黄金色のしゅわしゅわの苦味も相まって甘さを強く感じてしまう。

そんなキリトの表情を見てクツクツと笑いながらナッツは話を切り出す。

「それで、死銃の話やけど。犠牲者は今のところ、ゼクシードと薄塩たらこの二人でエエんかな？」

「……ああ。現実世界でも確認は出来てる」

「……………ふーん」

「ただ手段はまったくわからない。本当に仮想世界から殺人を犯してるか——」

「ないやろ」

アツサリとナッツはキリトの言葉を叩き切る。

ありえる訳がない。それこそ未だにナーヴギアが発売されていたならばそれは可能であろう。けれど、現在売られているアミュスフィ

アはS A O事件の影響で安全確認が十全にされている。

「可能性としてあるかも知れんけど、限りなく低いやろ、ソレ」

「……相手が亡霊みたいなモノで、呪い殺してる、とか」

「なんや、この世界はS Fやと思つてたらオカルトやったんか」

「そう……だよな」

「ま、現実世界での死に方とか知らんからあり得るかも知らんけどね」

「……心不全だ。死亡から時間が経ちすぎてるの発見だったから原因は不明らしい」

「……………ふむ」

キリトから与えられた情報を噛みしめるように一つ唸る。

口元に手を置いて、机を指でコツコツと叩く。

心臓を止める程の感覚を叩きつけられたか、否か。答えは否であろう。そんな事が出来るのならばもっと殺人は横行しているであろうし、それこそ仮想世界の命運が左右されてしまう。

ナッツとしてはそんな事は既に考え終わつた事なので気にする意味もない。

問題はキリトの情報だ。

現実世界やネットも含めた情報には流れていない情報を持っている。二人の死亡の確定や原因などを事実として言っている。

なら、その情報は何処から出てきた？ キリトがこの世界に入ってきた理由を言い渡つた事に繋がるのか？

偽善で自立的に動いた訳ではないだろう。そんな事をする性格ではないし、それならば被害者二人の死因を知る理由にはならない。

かと言つて、公式からの依頼だったならばそれこそG G Oプレイヤーや現実の調査隊に依頼する筈だ。それにG G O運営とキリトとの接点は無い筈。

逆に考えれば、被害者二人の死因を知る事が出来る立場にキリトがいることは確定している。

非公開情報を持っている。警察、政府、医療機関、記者。

記者は除外する。仮想世界から現実の殺人という話題を公表しない理由はない。

医療機関ならば、情報は得られる。けれどキリトが自立的に動く事になるので除外。

政府、或いは警察ならば。直接でないにしろ、依頼という形であるならば十分にあり得る範囲だろう。

警察か政府か、どちらかはわからないが、それらに依頼される立場にキリトはいる可能性がある。

「——— 電脳探偵とかめっちゃかっこいいな
「は？」」

「あ、いやコッチの話や。ホームズ君」

電脳探偵とかいう響きに目を輝かしたナッツであるが、現在のアバターで言うのと違和感がある。

どこか納得したようにケラケラと笑みを浮かべる。名探偵とどういふ訳か呼ばれたキリトはさっぱりわからないように疑問を顔に浮かべる。

「それで、亡霊やなくて現実味のある話」

「……悪かったな、現実味がなくて」

「仮想世界で言うのもアレやけどな。死銃氏が複数人存在する可能性」

「どういう事だ？」

ナッツがコンソールを叩き、机の上に白のポーンを二つ、黒のポーンを一つ出現させる。

「仮想世界で何をしようが、現実世界には影響されへん」

黒のポーンが白のポーンの一つを蹴り飛ばし、倒す。

生き残ったもう一つの白のポーンは変わらずに机の上に直立している。

「なら、現実世界側から作用したらエエだけの話や」

新しく取り出した黒のポーンで直立していた白のポーンを蹴り飛ばし、机の上には倒れた白のポーンが二つと立っている黒のポーンが二つ。

「確かに現実世界から———その、攻撃すれば理論は通るけど。どうやってそのプレイヤーの住所を割り出すんだ？」

「割り出す必要なんかあらへんよ。被害者本人が書いてくれるねんから」

「……B O Bの参加要項か」

「せや。二人共、B O Bに参加した事あるし可能性としては高い」

「どうやって見たんだ？ それこそ後ろから覗いたり、双眼鏡を使つたとか」

「それが問題なんよなあ。そんなんしたらマナー違反で吊し上げくらうやろし。……いつそ幽霊が後ろに憑いてたとか」

「……お前も現実味がねーじゃねえか」

キリトの意見に同調するようにオカルトの理由を取り出してケラケラと笑うナッツ。キリトも溜め息を吐き出してナッツの意見を考察していく。

「ま、問題は他にもあるんよ。自宅を割り出したとしても鍵掛かつとるやろし」

「鍵ぐらいピッキングでどうにかなるんじやないか？」

「電子化された鍵やで？ 無理やろ」

「最新の物は無理でも古い物なら」

「ん？ 古いロックとかまだあるん？」

「そりやああるだろ」

お互いに何を言ってるんだ？ という顔で見合わせて相手の考えを見切ろうとする。

十歳の頃に住基ネットで抹消された記録を見つけるキリトのピッキング能力は分かる訳もなく、ナッツの俗世離れた感覚が分かる訳もない。

お互いに疑問を残しながら追及することもなく口を潤し、疑問と一緒に飲み込んだ。

「ま、どうやって殺してるかはわからんから。そういう力持つとる、つて考える方が楽やろ」

「……そう……だな」

「どないしたん？」

歯切れの悪いキリトの返事と俯いた姿。何かを言おうとして、ソレ

を飲み込み、苦味の伴うソレをゆっくりと吐き出していく。

「お前も、あの、灰色のボロマントに会ったのか？」

「アツチでの僕らを事知つとる奴やろ。ボイスチェンジャー使った声の」

「ああ……アイツが死銃かもしれない」

「……………ふーん」

「怖く、ないのか？」

「ま、狙われるって決まった訳やないし」

「アイツは《笑う棺桶》の一員だった。俺たちを狙う理由なんて腐る程ある！」

立ち上がり叫んだキリトを冷たい瞳で見ながら座るように促す。

机の上に乗った手が小刻みに震えているのが目につく。

必ず殺す、と言われたナッツであったがようやく合点がいく。なるほど、確かにそうならば納得出来る。

殺す理由も、殺す動機も、衝動も。

「だから殺されるかもしれない？ そんなん、前は日常やったやろ」

「でもココは——」

「怖いなら逃げたらエエやん。都合のいい事に僕は死銃と戦えるし」

真っ直ぐにキリトを見るナッツの瞳は揺れ動くことはない。まるで当然の事を言っているように、動かない。

「そもそも恨まれるのなんて当然やろ。人殺してるんやで？」

「そう……………だけど」

「……………ま、逃げたかったら逃げたらエエよ。誰も責めんやろ」

煮え切らないキリトに眉を寄せたナッツは不愉快を酒で押し込んで、席を立つ。

「ナッツは……………なんで大丈夫なんだ？ 俺たちは確かに殺したんだぞ？」

「せやな。でも衝動的に殺した訳やない。理由があつて、殺したんや。責任もある。誰かに恨まれる可能性も当然ある。やから、僕らはソレを糧にせなあかん」

「糧？」

「ごつちの都合で殺したんは事実や。絶対に変化させへん事実なんや。

それは受け入れなアカン。恨みも、責任も全部覚えて、立たなアカン。糧にして前に進まなアカン。ソイツの死が無駄にならんように、証明せなアカン」

「証明……」

「死んだら死ぬだけ。でも殺した側はちやう。全部糧にして進まな、なんで殺したのかもわからんようになってまう」

そう言い切ったナツツは小さく息を吐き出して、未だに座っているキリトの頭を撫でて足を進める。

何かを言おうとしたキリトの言葉を聞かないようにヒラヒラと後ろ向きに手を振り背中を向けたままログアウトをした。



加藤夏樹は窓から外を見ながら小さく息を吐き出した。

輝く街灯とエンジンの振動、ようやく信号が青になったのか景色がゆっくりと流れ始める。

手元にある端末で時間を確認すれば、予定していた時間を大幅に過ぎていた。

「大丈夫ですか？ 夏樹くん。少し焦っているように見えますが」

「そう？」

「ええ」

運転席にいる女性は微笑んでバックミラーで夏樹の顔を確認した。

表に出てしまっていた苛立ちを小さく息を吐くことで内側へと隠した夏樹に女性は残念そうに声を漏らして、クスクスと笑みを浮かべた。

「別に隠さなくてもよろしいかと」

隠した事も指摘されて夏樹が唇を尖らせればそんな様子もクスクスと笑う。

「齋さん、僕はそんなにわかりやすいですか？」

「伊達と酔狂で一緒にいましたから。当然です」

喉を震わせるように笑った女性——薺に夏樹は眉を寄せる。

これでも、自分はまだ彼ではないのだけれど。そう考えれば心の奥から彼がケタケタと夏樹を笑った気がした。

「それで、間に合いそうですか？」

「当然です。私に任せてください夏樹くん。お姉さんが一緒のベッドで寝れるような場所にご案内しますからねッ」

「……………」

「ムッフッフ。そういう無言でジト目になるのもいいですね。ポイント高いです。もつと見てください」

上機嫌になる薺に引く夏樹。果たしてこんな人を自分の近くに置いておいていいものかと考えてしまいが、夏樹には選択肢がない。むしろ選択肢を持つているのは薺なのだ。

こんな人を自分の近くに置いていた彼の気持ちはさっぱりわからない。ただ優秀だったから置いていたのか、それとも別の理由でもあるのか。

夏樹は小さく溜め息を吐き出して、車の窓から街灯が流れる景色を見送った。



感覚が浮かび上がる。

触覚がボロ外套のザラついた裏地を感じ、厚いゴム靴が鉄板の地面を擦る。

ひとつ一つの感覚を確かめるように指を動かし、呼吸をし、瞳で景色を映しこむ。

未だに残る違和感。歯車がズレたまま動かされているような不快感。

慣れてしまった違和感であるし、コレを理由に負ける事など許される訳もない。

予選ではこのズレが解消される事もなかった。

キリトと出会った瞬間だけは、カチリと何かがハマった気もした。けれどそれは一瞬だ。

ズレたままでは終われない。

自分の役割は弁えている。それこそあの女の命令は耳にタコが出る程脳内に響いているのだから。

達成は容易い。けれどそれは完了ではない事はアレも知っている筈だ。

自分の現状を正しく、そして間違っていることを理解したナッツは小さく息を吐き出した。

「……死ねば死ぬだけ。それだけやねんけどなあ」

息と一緒に漏れ出した言葉を隠すようにフードを深く被る。

右手でメニュー画面を開き、装備の確認をしながら時計を確認し、眉を寄せた。第三回BOBの開始時間は午後八時。現在の時刻から考えれば余裕は殆んどない。

舌打ちを一つして、ナッツは仕方ないと頭を振る。

出ない訳にはいかない。死銃と思わしき存在が《笑う棺桶》なのだ。きつとアチラはナッツを殺すための準備を十全にしているだろう。

憎悪に塗れた記憶の中で何度も彼を殺しただろう。

憎悪に比例して、力量も上がっていることだろう。

ナッツの身体がゾクリと震える。

抑えきれない笑みが口元に浮かび上がり、それを誰にも見られないように早足で歩く。

《The Gleameyes》の時に感じた生の実感。死へ肉薄するような、身を焦がすようなりスク。

もしも、死銃が本当に仮想世界から現実世界へ作用する力を持つていたならば。

そして《笑う棺桶》の中でもナッツを殺せると吐ける力量の持ち主ならば。

「ああ、楽しいなりそうやな」

吐き出された言葉は誰にも聞かれる事はない。

ボロ外套がゆらゆらと総督府へと向かう。

餌を求める獣のように。

獲物を求める狩人のように。

死を告げる死神のように――。

第32話

硝煙と酸化鉄の匂いがむせ返る程濃密な空気。

緊張を集中へと切り替えるように沈黙した待機ドーム内は沈黙と僅かな囁きで満たされている。

プレイヤーたちの瞳は鋭くギラついて、参加者達の観察を怠らない。

誰が、どのように戦っていたか。そんな事は予選を見ることで分かっている。だからこそ、ソレを確かめるように、相手を威圧する。お前の行動はわかっている。お前の手札は知っている。そう言わんばかりに。

所詮は予選だった。全力で戦いはしたけれど、手札全てを露見させた訳ではない。それは自分でもあるし、そして誰もがでもある。

そんな中、水色の髪を両頬で束ねたシノン^{ニュービー}は首に巻いたマフラーに口元を埋めながら鉄柱に背中を預けている。

冷静沈着な狙撃手。予選で見せた対物ライフルでの見事な狙撃。露見した所で意味がないほど強い手札。

伏した瞳と組まれた両腕がより一層に彼女を強者たらしめた。

そんな彼女の心中は穏やかではない。

予選の途中では心の中で相棒^{バディ}とも呼べた存在に負ける事を断言され、そして予選最終戦ではGGO^{ニュービー}初心者に負けた。更に言うならば銃弾を両断された。

けれど、そんな事はここに至るまで置いてきた。現在の心をザワめかせる要因足り得ない。

予選で彼女から勝利を勝ち取ったプレイヤー——キリトがああゲームの生還者であることは先程知った。だからと言って『負けてやろう』などという訳の分からない思考になるほどシノンは甘くない。

けれど、そのキリトが兄貴分として頼っているナッツが——ナッツもあのゲームの生還者だったならば……。

卓越した戦闘技術。最低限の安全、死なない立ち回り。不死者^{イモータル}。その全てがその事実だけで理解出来る。

彼がどこか達観した様子であったのも、理解出来てしまう。どれもこれも、彼にとつては土俵が違うのだろう。

『死んでも死ぬだけ』という言葉は『所詮はゲーム内での死』という意味なのだろう。

シノンはその理解した。

だからこそシノンはこの大会開始前に一言だけ彼に伝えたかったのだ。

彼の土俵に上がる為に。導かれるように繋がれた手を自ら放す為に。ただ純然たる敵として認識してもらう為に。目標を越える為に。

宣戦布告にも似た言葉を伝えるだけ。それだけだった筈なのだ。

第三回バレット・オブ・バレッツ。開始十分前。

予選でその圧倒的な存在を魅せたプレイヤー……《不死者》ナッツ。その姿は未だに待機ドーム内に無い。

兵士の如く筋骨隆々なプレイヤー達よりも少しばかり高い頭とボロ外套は目立つ筈なのだが、まったく見えない。

宣戦布告してやろうと意気込んだ末にその相手が居らず、来た時に言っただけでやろうと構えて早数十分。

片手間にやっていた筈の装備の点検は早々に終わり、二度三度繰り返しした事で点検の精度は集中した時程に完璧だと言えた。彼は姿を見せない。

仮想で身体を馴染ませる為にウォーミングアップも終わってしまった。彼はやってこない。

心を落ち着かせようと精神集中の為に鉄柱に凭れかかり。腕を組み。時間が刻むように指が腕を叩き。苛立ちからの舌打ちを隠すようにマフラーへと口を埋め。視界の端にある時計が見えないように顔を伏せた。彼は姿を見せない。

彼が来ない。彼が来ない。彼が来ない。

不戦敗という言葉が頭にチラつき、彼に対して普段から言う以上の悪態をつけてやる。もしも本当に不戦敗だったならば心の底から罵った拳句、ヘカートの銃弾をゼロ距離の額に打ち込んでやろう。

その意気込みが無駄になるように、待機ドームの入り口がザワリと

色めく。

ようやく来たか、とシノン溜め息を吐き出して鉄柱から背を離し、伏せていた瞼を上げ、一步進もうとして、足が動かない事に気付く。手を見れば小刻みに震えている。

そして入り口を見て納得した。

ボロボロの外套が揺れている。フードの影から自分達を——獲物を見ている事が分かる。見えている口元がニヤリと嗤っている。

酒の飲みながらケラケラ笑っているような、軽い日常の姿で忘れていた。

GGOに君臨する絶対の上位者。不死者と呼ばれる男。徹底した敗北の為に用意された^{生き}チュートリアル^本。

たった一瞬で待機ドームの視線を独り占めにした男は歪んだ笑みを潜ませ、顔を僅かに上げる。

彼の視線の先には開始時間に迫り、数字を消費する時計。

絶対者は両手を広げ、不敵な笑みを浮かべる。参加する全てのプレイヤー達の挑戦を受け止めるように。

緊張が熱気に変わり、プレイヤー達を鼓舞する。

戦うべき敵。その敵は自分よりも上位者だ。けれど、勝たなくてはならない。勝ちたい。

兵士としての感情ではない。戦闘をする者として、上を目指す者としての欲求が湧き上がる。

けれど、それはまだ内に秘めなくてはならない。

全ては戦場に到着してから。あのいけ好かない上位者を倒すのは戦場だ。

視線の大半が自身にとって好ましい物へと変化したことを認識したナッツは喉を震わせてクツクツと笑う。

少し遠くの方に見える自身の兄貴分が呆れたような顔をしているのが見えてナッツは更に笑みを深める。

同じく呆れたように、けれども熱を持った表情のシノンを見て、ナッツはその足を進める。

「随分と派手なパフォーマンスね」

「やる気出るやる?」

「ええ。とつても」

鋭い瞳でナッツを見上げたシノンは数秒程で肩を竦めて息を吐き出す。先程まで全てを威圧するように君臨した上位者は既に居らず、相変わらず軽い笑いを浮かべる彼が存在している。

それが喜ばしい事なのか、それとも悲しい事なのか、シノンは判断出来なかった。どちらにしろ、彼は彼である事に違いはない。

「遅れてきたのもパフォーマンスなのかしら?」

「そつちは仕方なくやな。取材が長引いてもて」

「取材?」

「つと、僕も武器の調整せなな」

チラリと時間を再度確認したナッツは手頃なイスへと座り、少しばかり慌ててメニュー画面から骨董品とも言える銃を取り出した。

恐らく無意識下で吐き出されたであろう単語に思考を取られたシノンは数秒程考えて、大会が終わってから追及しようと思いを奥へと置いた。

「ねえナッツ」

「んう?」

シノンの問いかけにも手を止めず、骨董品を弄るナッツが言葉だけで反応する。

一つ、深呼吸をする。

「私があナタを倒すわ」

骨董品を弄っていた手がピタリと止まった。

シノンの方を向くわけでもなく、言葉を吟味するように視線を動かす事もない。

たった数秒だけ停止したナッツは止まっていた作業を再開させる。

お互いに無言。ナッツの手元で小さく音が鳴るだけの時間が経過し、その音が止まる。

銃をストレージへと戻し、ようやくナッツがシノンへと視線を向ける。

「——わかった」

短い了承の言葉。正しく宣戦布告が受けられた。

相棒に裏切られた。下位者が囁っている。安い挑発だと鼻で笑う。そんな事は一切ない。そんな感情すらナッツは湧くことはなかった。

「楽しみに待つとるよ」

「ええ」

短く言葉を交わし、ナッツは敵対者と別れる。

敵対者と成ることが出来たシノンは震えていた手を見る。熱いモノが胸の内から押し上げられ、それを確かめるように強く拳を握り込んだ。

壁際で集中するように凭れていた兄貴分へと近寄ったナッツはその隣で同じく壁に凭れて小さく息を吐き出した。

「……嬉しそうだな」

「せやろか？ これでも感情は出えへんようにしてるねんけど」

「わかるよ。どれだけ一緒に居たと思ってるんだ」

「せやな」

我慢しきれなかったのか、ナッツから喜色に染まった笑いが零れる。

考えもしなかった。いいや、考えたくなかっただけかもしれない。

冗談交じりで敵対者になることはあった。けれどこうして真正面から敵対者になる事を宣言された事はなかった。

それも、シノンの表情から読み取れた感情は本気である事もナッツは理解している。

だからこそ、嬉しく思う。

クツクツと笑っているナッツを横目に見ながら、キリトは「コホン」とわざとらしく咳を一つ入れる。

「それで死銃だけど」

「初参加者やるな。来る時に一覧で確認したよ」

「そうか」

「ま、僕は動くんに制限付くからなあ」

「あのパフォーマンスのせいだろ」

「ああせな誰も僕を狙わんやろ」

「……お前、GGOで何してるんだよ」

「まとめサイトに載るぐらいの事？」

小首を傾げた長身のフード野郎。SAOでのアバターならまだしもGGOでのアバターでそんな行動をされても違和感しかない。

疲れたように溜め息を吐き出したキリトをナッツはケラケラと笑った。

きつと、自分は全プレイヤーに狙われる。死銃よりも先にターゲットになるであろう存在を倒す。

そんな事は一切考えずに結果的にそうなっただけだが、ふと考えれば事態はナッツにとって好転しているらしい。

そんな風に思いながらナッツは口を開く。

「キリトは大丈夫なんか？」

「……ああ」

言い籠もつてはいたけれど、確かな意志を持って返された言葉にナッツは満足する。

「さよか。頼りにしてるで」

「任せろ」

「………ついでにシノンの事も頼んでエエ？」

「………いいのか？」

その問いに対してナッツは顔を逸らして「これ以上言うな」と言わんばかりに手で問いを払い除けた。

その不満そうな様子にキリトは苦笑を浮かべて、「任せてくれ」と頼りになる言葉を口にした。

「ほな、健闘を祈るわ」

「お互いに生き残ろう」

「当然やろ」

ナッツから差し出された拳に軽く拳を打ちつけて、お互いに不敵な笑みを浮かべた。

方や『好んで銃ではなく刃物を振り回すサイコキラー系女子』。

方や『特定の武器もなくドロップ率のクソ悪いファットンガイ』。そんな二人が拳を突き合わせる様はさぞかし他人から見たら不思議に見えた事は違いない。

そしてナッツの恨みが増える事も間違いない事だろう。



本戦の舞台となったISLラグナロクの北部の砂漠へとPOPしたナッツは周囲を軽く警戒してから遮蔽物へと身を隠した。

直径十キロの円形孤島。中央部にある都市廃墟。北部に砂漠地帯、東部に田園、南東部には森林、南西部に山岳、西部には草原部が配置されている。

幸いな事に初期位置の近くに敵も居らず、始まって早々の戦闘は免れた。

十五分毎に行われるサテライト・スキャンが始まれば潜んでいる場所がバレてしまう。

開始直前のパフォーマンズと不死者という肩書。二つを重ねればナッツを狙うことは想像に難くない。

狙われる事は予想している。そしてソレが一時的な共闘関係を結ぶであろう事も、予想出来る。

不死者と呼ばれる上位者を一対一で倒したならば、まさしく勇者と呼ぶべき存在だろう。

けれどそうはならない筈だ。あつたとしても、開始数分の興奮状態の時ぐらいいだ。

数分経てば、冷静になる。スキャンが始まり、場所が露呈すれば勝手に頭が判断する。

全員——とは言わないがナッツの近くにいるプレイヤーはナッツを狙うだろう。

それを利用する。

戦闘が始まれば、戦闘中ならば、戦闘が終われば。幾らでも有利は取れる。アドヴァンテージ

彼らは勇者ではない。

彼らは正々堂々を貫く騎士ではない。

彼らは兵士だ。

生き残る事と倒す事に特化した兵士なのだ。フェアではあるが、だからこそ持てる手段は全て使う。

そしてその手段の中にナッツという強者の要素も含まれている。

最後の一人になればいい。自分で倒す必要はない。ナッツを狙う存在を容易く狩ればいい。

そんな思考をナッツは理解している。故にわざわざ威嚇するように待機ドームへと入った。

自分の近くにいるプレイヤー達を容易く狩る為に。その思考を『ナッツへの奇襲』へと固定させた。当然、ナッツの望み部分も多分に含まれている事は間違いではない。

「……お誂え向きに最北端やなあ」

マップで確認した自分の位置に苦笑しながらナッツはストレージから武器を取り出す。

それは骨董品などではない。

機関部の状態を確認し、大型のマズルブレーキが付いた銃身を接続する。トルコの国産メーカーであるMKEKが開発したボルトアクション狙撃銃《JNG-90》がナッツに握られた。

ヘカートIIの半分ほどしかない重量のJNGを持ち上げ、ボルトハンドルを引き薬室内に何も入っていない事を確認して弾倉を装着し、ハンドルを銃身へと押し込める。

対狙撃手として持ってきた武器であるが、ナッツが想定していた以上に使う機会が巡ってくるであろう。なんせ、あのシノンと敵対しているのだから。

嬉しさを振り払うように頭を振って、ナッツはJNGをストレージへと戻す。

最初のスキャンまでは動かない事を決めていたナッツはマップを開いて、リスクの高い所をピックアップアップしていく。

山岳地帯と森林地帯を繋ぐ鉄橋は危険過ぎるだろう。特に繋がれた先が山岳地帯というのも問題だ。

中心部の都市廃墟では遭遇戦になりやすくなるだろうか。ここで《闇風》と接敵すれば負けるかもしれない。

ギリースーツもなく草原地帯に行く気にもなれない。開けた地形は敵を視認しやすいがソレは相手も同じだ。

現在いる砂漠地帯は——。そこそこに遮蔽物もあるし、洞窟もちらほらと点在している。

「衛星から隠れられるんは……撒き餌の意味無くなるな」

思い浮かんだ案を即座に否定して、ナッツはマップの詳細を頭の中へと叩き込んでいく。尤も、高低差も調べられない直上からのマップは遠距離戦も含んでいる今大会においてそれほど役には立たないだろう。

果たしてキリトとシノンは——と二人を想像してナッツは苦笑を浮かべた。

シノンはGGO屈指の狙撃手であるし、遭遇戦にならない慎重さも持ち合わせている。遭遇戦になったとしても彼女ならば即座に距離を取る事も出来る筈だ。

キリトはGGOでは初心者であるが、遭遇戦で彼に勝てる存在など居ないであろう。咄嗟の判断力、瞬発性、曲芸じみた銃弾の両断。それこそ、彼に勝つならば絶対防御を誇った聖騎士様でも連れて来なければならぬ。

必要無い心配をしたナッツは頭を切り替える。

開いたマップと時計を見比べて小さく息を吐き出す。

「死んでも死ぬだけ」

死を恐れる事はない。それはナッツの役目ではない。

生に執着する事はない。それはナッツの役目ではない。

空を見上げて黄昏色を瞳へと映す。

きっと、ナッツは死ぬ。その事を理解したナッツはボンヤリと呟く。

「もうちよい生きてたかったけどなあ」

ナッツらしくはない。けれども既に逸脱した役である事はアイツも了解している事だ。

出来ることならば、もう暫くはアイツを支えてやりたかったけれど、それは無理だ。

ヒステリックに叫ぶ女がナッツの死を望んでいる。そしてその理由も、ナッツ自身が理解してしまっている。

細く息を吐き出して、ナッツは予選で見せていた骨董品M1895を手に持ち、啜う。

「ま、楽しまな損やな」

最期の瞬間までナッツである為に。ナッツは不敵に笑いながら遮蔽物から飛び出した。

第33話

「えっと……」

「なにか？」

「なんでも、ないです」

隣でどういう訳か萎縮したキリトを横目で見ながら地面に伏せたシノンが舌打ちをした。

狙撃に集中している最中に接近されて、背後を取られていた挙句、攻撃もされなかった。生かされていた状態だ。

自分が悪い事は理解している。シノンに戦術や立ち回りなどを教えていたナッツが聞いたならば、ケラケラと笑いながらダメ出しをするに違いない事も理解した。

いいや、キリトが原因という事を考えれば彼は「仕方ない」とでも言うかもしれない。それはそれで苛立たしいけれど。

小さく吐いた溜め息が軽く砂粒が動き、苛立ちを隠しながらスコップを覗き見た。

ダインとペイルライダーの戦いは伏射姿勢のダインに軽業師が如く接近を果たしたペイルライダーの勝利であった。

ペイルライダーの持つ《アーマライト AR-17》の銃口から僅かな煙が立ち上り、ダインの背中には「Dead」の赤い立体四文字が出現した。

二人の戦闘を観察していたシノンは頭の中でペイルライダーとの戦いを想定、シミュレーションをして自身の勝ち筋を探す。結果的には遠距離からの射撃へと成り得るのだが、場面場面での想像は必要になる。

キリトは終わった戦闘を押し黙りながら考え、過去を思い出す。

「あいつが……マントの中身なのか？」

ぼそりと口から出た呟きにキリト自らが否定する。どれも一致しない。誰もペイルライダーではない。

キリトの呟きを聞いて、シノンは彼の経歴を予想し、思考を放棄する。他人の領域に土足で踏み入るほど無作法ではない。

切り替えるようにへカートIIの安全装置を解除して、呼吸を整える。

「撃つわよ」

短く、ハッキリと。

戦闘中に目的を短く伝える彼の癖がいつの間にか自分にも伝染っていた。主語が必要な時は主語も付け加えるが、凡そ、彼とのやり取りはハンドシグナルか、こうした短いやり取りである。

トリガーに指を掛け、息を吐き出していく。

深く、深く、深く――。

拡縮する着弾予測円が呼吸をする度にその大きさを小さくし、シノンの頭が冷徹な思考へと変化していく。

最初の一撃を確実に撃ち込む為に。隙を見逃す事の無いように。たった数秒でそう成れるように。

先手を素早く撃つ為のルーティン。勝つ為の行為。一定の間隔での深い呼吸。

必要な訳ではない。ただ冷徹な狙撃手に簡単になるための儀式。僅かな緊張と研ぎ澄まされていく感覚。まるでターゲットが手の届く範囲にあるような錯覚。

ペイルライダーの肩に着弾エフェクトが弾ける。

トリガーに触れていた指が咄嗟に離れる。獲物を奪われた事よりも、発砲音が聞こえなかった事の方がシノンにしてみれば恐怖であった。

シノンは咄嗟にスコープから顔を上げて周囲を見渡す。

鉄橋付近――違う。森林部――違う。山岳麓――違う。

「聞き逃した……?」

「いや、発砲音は聞こえなかった。どういうことだ?」

「なら、光学ライフルか、実弾でも減音器付きの超音速弾か……でも電磁スタン弾だと超音速弾は無い……なら減音器だけの狙撃? 聞こえないような範囲でアレを撃てる場所にはいなかった」

「さ、ヤッパ? ヤッパ?」

「サイレンサーって言った方がいいかしら。超音速弾は音速よりも遅

い弾の事よ」

思考を止める事もキリトを見る事もなく手短に説明したシノン。それ以上疑問は受け付けないように視線を周囲に向けて眉を顰める。誰も居ない。少なくとも自分の経験に基づく狙撃予想位置には居ない。

十分前の《サテライト・スキャン》から考えてもいる訳がない。

「——キリトもそういえば居なかったわね」

シノン自身がここで狙撃するに当たり、情報収集は出来る限りした。当然その中にはサテライトスキャンも含まれており、近辺にプレイヤーはいなかった筈だ。

だからこそ生えて出てきたようなキリトには驚いたのだ。

首を傾げて疑問を浮かべるキリトを見てシノンは溜め息を吐き出した。

「ほら、衛星スキャンよ」

「十分前……もしかしたら川を泳いでたからかもしれない。ずっと潜ってたから、それで衛星には見つからなかったのかな」

「……ああ、そっか。アナタ、ナッツの弟分だったわね」

「それで納得されるのか……」

果たしてこの時点で否定しておくべきなのか。実は自分が兄貴分でアイツが弟分である事を。加えて自分はアイツのようなゲームの楽しみ方はしていないと。

キリトはかぶりを振り、思考を一時放棄する。そんなことは現在重要な事ではない。

キリトとシノンが鉄橋に横たわるペイルライダーへと視線を向けた瞬間に——ソレは現れた。

橋を支える鉄柱の影からぬるりと姿を現した。

姿が奇妙に暈けているアバター。全身を覆う濃灰色のフードマントが風に揺れ、その輪郭を暈かす。

毛羽立ったそのマントが隠蔽効果を高めている事は即座にシノンは理解出来た。けれど、いつからあの場に存在していたかが一切分からない。

ボロマントの隙間から這い出た銃にシノンは息を飲み込んだ。《L115A3》。標準装備として減音器が装着された銃身。二千五百メートルの長距離狙撃を可能とする命中精度。

そして森林部の奥から狙撃したそのプレイヤースキル。

けれどシノンははたと気づく。その技量と銃を持って、どうして電磁スタン弾なのか。

心臓か頭を狙えば終わる。更に言えば姿を現すメリットもない。

真意すら不明瞭な気持ち悪さをシノンは強くグリップを握る事で紛らわせる。

ボロマントがL115を肩に背負うまでは。

取り出した何か。シノンの目で捉える事が出来たのは黒い拳銃である事——恐らく、自動拳銃^{オートマティック}。

なら、何故？ L115の方が攻撃力も高い。自動拳銃など比べる意味もない。

まるで神に捧げるようなゆるりとした動作で切られた十字。フードを被った額から胸元へ、左肩から右肩へと左手が動く。

スコープ越しにそれを見ていたシノンはその意味を理解する事が出来なかった。

敬虔な信徒なのかもしれない。敵を倒す為のルーティンなのかもしれない。

ボロマントと撃った電磁スタン弾により麻痺して伏しているペイルライダーを同時にスコープへと入れながら、思考し、更に違和感が生じた。

倒せるのに倒さない。煽りの一種である可能性もある。けれど、それは同時に確実に倒せる事を確信しているから生じる理由であり、現在のボロマントには適用されない。

「……シノン、撃て」

隣にいたキリトが震えた声で指示する。焦って聞こえる声にシノンは目を向ける事もなく、呼吸を深くする。

肺の中から空気を追い出し、止める。鼓動と一緒に拡張する円が小さくなり、ボロマントを捉えた。

トリガーに触れていた指に力が入り、抵抗と僅かな振動を感じる。轟音と共にヘカートの銃口から吐き出された約十三ミリメートルの弾丸が螺旋を軌跡に残しながら飛行する。

僅か三百メートルの距離をほぼほぼ一瞬で詰めた弾丸は幽鬼の如く揺れたボロマントのプレイヤーに当たる事もなく地面を穿った。

息を呑んだ。拡張する着弾予測円が動揺を自覚させる。

見られていた。あのボロマントがスコープ越しのシノンの瞳を確かに捉えた。それは過去に一度体験したことのある経験だ。

けれど、違う。ナッツの予測に基づいたソレではない。狙撃手の動揺を誘う行動ではない。

ボロマントは弾道予測線を避けた。既にコチラの場所がバレていた。

反射的に、自動的に、習慣として動いていた右手が次弾を装填する。けれど、撃つべきか迷ってしまう。負けに繋がるリスクと現状撃つメリットがシノンの天秤に掛けられる。

その迷いを見切ったように、ボロマントは再度体を戻し、誰かに見せつけるようにゆっくりと右手の銃をペイルライダーへと向けた。

親指でハンマーを持ち上げ、ペイルライダーを見下ろしながらそのトリガーは引かれた。

小さな閃光。小さな銃声。自動拳銃らしいソレと共に放たれた弾丸はペイルライダーの胸の中央へと吸い込まれた。

たったそれだけの動作。GGO内であれば痛手とも言わない、反撃される可能性しかない攻撃。

けれどシノンの横にいたキリトは息を呑んだ。唇が震え、最悪の可能性を幻視した。

そしてそれは幻などではなかった。

電磁スタン弾による麻痺の解けたペイルライダーが飛び起き、《A R17ショットガン》がボロマントの眉間へと突きつけられた。

至近距離からのショットガン。12ケージのショットシエルが放たれたならばボロマントはこの大会から姿を消した事だろう。

けれど、そうはならなかった。

《AR17ショットガン》がペイルライダーの手から滑り落ち地面にぶつかった。伸ばしていた腕が震え撃たれた胸元を握りしめる。力が抜けたように膝が折れ曲がり、ペイルライダーは地面に伏した。青白い迷彩服に包まれた全身が、ノイズのような不規則な光に巻き込まれ——消滅した。

彼が居た証明のように残る「DISCONNECTION」という文字が浮かび……それも、溶けるように消えた。

「……なに、あれ」

理解など出来よう訳がない。GGOのルールではあり得ない現実だ。

異常事態。頭の中に幾つかの予想が立てられ、そして否定される。

「強制的にサーバーから落とせるの……？」

「違う……そんな生温い力じゃない……」

「ぬるいって、十分にチート行為でしょ。運営はなにを——」

「アイツは……サーバーから落とした訳じゃない。殺したんだ。ペイルライダーは……ペイルライダーを操っていたプレイヤーは現実世界で死んだんだ」

キリトから放たれた言葉にシノンの感覚は冷えていく。

殺した。殺した？ そんな事が可能なのだろうか。いや、不可能だ。

けれど、キリトが嘘を言っているという感覚はない。けれど、けれど——。

「間違いない。……アイツが死銃、《デス・ガン》だ！」

死銃デス・ガンという名称でシノンの頭に情報が流れる。

放送中にログアウトしたゼクシード。スコードロンを鼓舞している最中に撃たれログアウトしたと噂される薄塩たらしこ。

キリトの言う事が本真ならば、この二人は——。そして今撃たれたペイルライダーは——。

忌まわしい記憶がシノンを苛む。

歯を食いしばり、発作が出ないようにスコープを覗けばボロマント

——死銃が動き出した。
陽炎のようにゆらりと横たわるダインの方へと歩き、その横を通過する。

キリトの話が本当であったならば、ダインは命拾いしたのだろう。震える感情を置き去りにして狙撃手として埋め込まれた冷徹な部分
がシノンにそう告げた。

死銃はそのまま姿を現した鉄柱の裏へと姿を隠す。

一段低くなった川岸に降りたであろう事は予想出来る。けれど、出現した時も同じルートだったならば——。

見落としの可能性もある。だからこそ警戒を怠る事などない。

キリトとシノンの緊張が張り詰め、橋桁に潜んでいるだろう死銃を見逃す訳にはいかない。

その緊張を破るように、シノンは左腕に小さな振動を感じる。視界下部に存在する時計へ視線を向ければ後十秒程で三回目の《サテライト・スキャン》が行われる。

「私はスキャンで確認するから、キリトは橋を監視してて」「わかった」

キリトの口から出た了承の言葉を聞きながらシノンは端末へと視線を向ける。心の中で数字をカウントし、スキャンが始まり、マップが更新される。

「いない——？」

鉄橋の近くにある反応はダインのみで、死銃らしき反応はない。詳細画面を開き、川岸の北から南を確認してもそれらしき反応もない。

キリトと同じように川底にいるとすれば——チャンスである。

装備をストレージに戻し、アンダーウェアだけで川底にいるならば、チャンスである。

けれど、シノンの思考に引っかけかりが生まれる。

「……逃げられたわ」

「川を泳いでるんだとすれば？」

「それはあるかもしれないけど。もしあのボロマントが本当に人を殺せるなら——リスクが高いわ」

L115を持てる筋力値^{S_TR}と体力値^{V_IT}があれば、ハンドガンの一つは押し切れるだろう。ナッツが気紛れで証明していた事だ。

もしもキリトの発言が本当の事で、死銃が人を殺せるのだとすれば、——例え殺せずともサーバーから落とされる可能性があるのならば、あの死銃の行為全てを警戒しなくてはいけない。

十字を切る動作。動き。L115の電磁スタン弾。自動拳銃による射撃。

どれかが、或いは全てが要因^{トリガー}なのだ。ならばハンドガンの一つですら、リスクが高すぎる。

「それでも——止めなくちゃならない」

「……………そうね。好んで……………本当の人殺しをするVRMMOプレイヤーがいるなんて、信じられないけど」

そんな悪意はあつてはいけない。仮想世界で成り立つVRMMOの中に本物の悪意があるのならば——それはシノンが目を背け続ける現実の闇と同じだ。

大きくなる鼓動に自分の意識が揺らいでいるのを感じる。まるで綱渡りをしているようにぐらぐらと体が揺れる錯覚。

一度、深く呼吸する。

「いるんだ。あのボロマントは……………昔、俺のいたVRMMOで多くの人を殺した。相手が本当に死ぬと知っていて剣を振り下ろした。さっきの、ペイルライダーの時と同じように。そして……………俺も……………アイツも……………」

深い痛みを堪えるようにキリトのから眩かれた言葉はそれ以上続くことはなかった。

キリトの言うアイツがナッツである事はすぐにわかった。そして同時にシノンの背後から暗闇が手を伸ばす。

自分の身体が背中に引つ張られる幻覚。視界の端から薄暗く隠れていく景色。胃の奥から何かが迫り上がってくる不快感。

暗闇の中から見つめられる。生気のない、虚ろな瞳がシノンを捉えて離さない。暗闇が泥のようにシノンの足元まで広がっていく。ズルリと暗闇の泥が足を這い上がり、暗闇の中へと墮とそうと誘う。

震える唇を噛んで、親指の爪で人差し指の皮膚を刺激する。
止まっていた呼吸を再開させて、荒くなつた呼吸をキリトに悟られないように深く、ゆっくりと呼吸する。

心配そうなキリトを見て、シノンは小さく息を吐き出した。

「大丈夫よ。ちよつと驚いただけ」

流れてもいない冷や汗を肩口で拭い、シノンは切り替えるように大きく息を吐き出す。

「シノン、ここで別れよう」

「……アナタは？」

「死銃を追う。あの拳銃でもう誰も撃たせる訳にはいかない」

「……なら私も着いていくわ」

「え……？」

「あんまし気は乗らないけど、そっちの方が確実でしょ？ アナタとの再戦も彼への挑戦も」

「危険だ。現実世界の君自身にも危害が」

「それは何処に居ても一緒よ。見失つてる今、狙撃手としての敵情予測は必要じゃない？」

危険は承知だ。けれどそれ以上に死銃——悪意をGGOの世界から追い出したい気持ち強い。

キリトは数秒程悩む素振りを見せて、肩を落として頷く。

「わかったよ。それにアイツに君のことを頼まれてんだ」

「……あら素敵ね。銃の世界で騎士^{ナイト}さまが守ってくれるなんて、まるで夢みたい」

強烈な皮肉に苦笑をしたキリトは、騎士呼ばわりされる所以である光剣を取り出し、シノンを庇うように二歩ほど前へと出た。

同時に響いたフルオートでの射撃音。百メートル先から放たれる二十にも及ぶ射撃予測線。意志を持たない無慈悲な鉄の嵐。

刹那——残像を残しながら、空気が焼け揺れるような音を鳴らしながら剣は振るわれる。

予測していたように射撃予測線を撫でる光剣。一度振る毎に何かがぶつかり焼き切れる。自身と後ろにいるシノンに当たりそうな銃

弾だけを無意識下で選別し、それら全てを斬る。

二十発の弾丸をフルオートで放った《ノンリコ・CQ》は銃口の熱を示すように白い息を吐き出し、同時に吐き出された銃弾を斬り落としたキリトが小さく息を吐き出した。

「まずはアイツから倒そうか、お姫様」

「お姫様なんて願ひ下げよ」

そんな称号、必要ない。自分は狙撃手であり、兵士であるべきなのだから。

伏射姿勢をとったシノンがスコープを覗き、とんでもないものを見たようにあんどりと口を開けている眼帯をした髭面のプレイヤーをクロスヘアに捉えた。

放たれた無慈悲な弾丸は光剣で斬り落とされる事はない。

第34話

廃ビルの影が長く伸びる。伸びた影の先に見える空は黄昏から暗闇へと綺麗にグラデーションに彩られている。

こんな仮想の空であっても、彼は好んで見ていた。何かに憧れるように空を眺め、どうしてか悲しそうに笑っていたのだ。

果たして草葉の陰から見守られているようであるが、件の彼は未だに生き延びている事だろう。

コンクリートで作られた短い階段上部で片膝を上げて座り込み、時間を数秒単位で刻んでいる時計を一瞥して、ヘカートを抱きしめる。

黒と青と赤の交じる不思議な空を見つめながらゆっくりと息を吸い込んで、細く、長く、架空の肺に溜まった空気を吐き出して、瞳に映り込む黄昏を静かに瞼の中へと閉じ込めていく。

「……凄いな」

「——何が？」

閉じた瞼を上げて数段下にいる少女顔へと視線を向ける。シノンの端的な物言いが不機嫌に聞こえたのか、ただ単純にキリトのコミュニケーションション不足が問題なのか、ありもしない言葉の牙を避けるように慌てて質問を言い換える。

「いや、その……戦いに慣れているというか、すぐに緊張が解けたから」

「ああ……」

なるほど、と口にする事もなくシノンは鼻で笑うように苦笑する。戦いに慣れている。すぐに緊張が解けた。そんな事を言うキリトが少しばかりおかしく見えたからだ。なんせあの鉄橋から都市廃墟までの道中を警戒しながらルート先導をしていた存在が戦いに慣れていると言い、自分のように条件付けした行動をしなくとも自分程度には緊張が解けている存在がすぐに緊張が解けたと言うのだ。

皮肉というには随分言い方に嫌味が足りないし、遠回しの自画自賛にしてもすんなりと言えていない。

この二日でキリトの性格をある程度把握しているシノンは当然そ

のどちらでも無い事を理解しているし、単なる贅辞として言われている事もわかってる。世辞を言えるようなコミュニケーション能力が無いことも知っている。

首に巻いたマフラーの中で笑みを隠してシノンはヘカートを抱え直す。

「彼に、教えてもらったの」

「ナッツに？」

キリトの確認を短く肯定しながら、シノンは空を改めて見上げる。

戦い方。緊張の解き方。世界の歩き方。どれほどこの世界が自由なのかを。この世界がどれほど美しいのかを。全てが全てとは言わないけれど、彼に教えて貰ったことは多い。

そんな彼を鉄橋から都市廃墟に至るまでの道中でキリトに重ねてしまったのは、きつと二人が似ているからだろう。

言葉や行動、歩き方、戦い方が似ている訳ではない。シノンにとって《とんでもない事》をしでかす事は一緒だが。

例えば、ルート取りであったり。例えば、索敵の精度であったり。例えば、敵からの隠れ方であったり。例えば、追撃や撤退の判断であったり。そういった細かい部分が似ているのだ。

当然、キリトのそれらを正しく見抜いた訳でもなく、経験した訳でもない。ナッツのように事細かに指示を出していた訳でもない。

兄としているナッツにキリトが似ているのだろう。シノンはそう納得した。

「そうか、ナッツに」

「……その、あっちではそうじゃなかったの？」

どこか神妙に頷いているキリトを見て、不躰であると分かっている質問をシノンは口にする。

あっち、という言葉をSAOである事を理解したキリトは苦笑しながら思い出すように顎に手を置いて、眉を顰める。

戦闘面においてキリトの方が優れていたものでキリトからナッツへと何かを言うことはあっても、その逆は少なかった。あるとしても情報交換や、レアドロップの情報、ヒット時の硬直時間、スキル硬直

時間、スキル硬直を軽減する方法の調査、狩りの効率上げの為に意見を交わした時ぐらいだろうか。

けれど人間関係という部分で大いにキリトはナッツに迷惑を掛けており、その事を言われる事は多かった。黒猫団然り、鍛冶屋然り、単純な人付き合い然り。その中には心に直撃するような言葉も幾つか含まれている。

それでもナッツという人物と付き合いがあったのは彼の言うことがキリトも自覚している正論であったからに他ならない。更に言えばキリトの心情を理解して言葉を選んでくれている事もわかるし、その大部分がキリト自身の為の忠告である事も理解していた。

尤も、正論を混じえた言いくるめであった場合もあったが、それを覆すだけの弁舌やコミュニケーション能力を持ち合わせていない事も同時に理解していたし、なによりキリト自身にとって不利益な事が無いことも漠然とであるが理解していた。ゴシップ誌に載ったアイドルのような扱いを受けた事は絶対に忘れないが。

「まさか、あつちでも呑んだくれてたの……？」

「ああ、いや。向こうでは酒なんて全然飲んでなかったよ」

「ホント？ 信じられないわ……」

シノンの苦々しい言葉にキリトは乾いた笑いを口から溢した。

キリトからしてみればGGOの世界のアドバイザーであろうとナッツが酒を飲んでる姿に違和感しか覚えない。シノンからしてみればその逆なのであろうが。

SAOのアドバイザーでこの世界に居たならば、きっと印象も変わっていただろう。尤も、その時は渾名の中に小さな悪魔か過去に彼が作り上げたギルド名が加わっていた事だろう。

どれだけ飲んでるんだよ、と心の中で今は居ない青年男性の中身にツッコミを入れるキリト。当然、BOB中のメッセージのやり取りは禁止されているから届く事も無い。

「なんていうか、ずっと戦いの中に居たというか」

「気が休まらなかったってこと？」

「いや、街ではちゃんと休めたよ。ただアイツはずっと外に居たんだ」

「……どうして？」

「……あー、その……向こうでは現実の姿だったんだよ」

「つまり……中年のオッサンが狙われるような世界だった訳？」

「ホントこの世界で何してんだよ、アイツ」

次は我慢出来ずに声にしてしまったキリトであるがシノンに至極真面目に——いや少しばかりの冗談を含めて言葉にしている。

頭を抱えたキリトは否定の言葉とその意味を口にしようとして、慌てて飲み込んだ。

傍目から見て——それこそ人間関係に疎いキリトから見ても、この少女は幾らかナツツに惹かれている事はわかる。軽快に喋るナツツとキリトに向けて不感情を叩きつけていたのだからその感情を汲取る事は出来た。尤も、キリトの判断は親愛や友愛というカテゴリーに入っているので正しくはない。

正しくはなくとも、友愛や親愛、或いは尊敬や憧憬であるのなら、ナツツという存在の正体——SAO内での姿、つまるところの現実世界の姿を言えばどうなるのか。

あのナツツが長身細身である姿は容易く想像出来るし、キリト自身は納得出来た。まるで最初からそうであったようにすっぽりと型に嵌った印象を抱いた。けれどシノンはその真逆になるのだ。

それこそシノンが抱く『呑んだくれでおっさん臭い、戦闘面では頼りになりすぎる、デバツカーもどきの青年』という印象像とは真逆の愛らしい少女染みた少年という姿なのだ。納得出来る訳がない。それこそ手前勝手に抱いているであろう期待や希望の姿ではない。

口を噤んだキリトを見て、少しだけ言葉を待ってからシノンは何かに気付いたように首を横に振った。

「いいわ。言わなくて。確かに現実の姿を知るなんてマナー違反だもの」

「……悪い」

「私が悪かったのよ、気にしないで」

キリトが口籠っていた内容を間違っ理解したシノンはすっぽりと問いの答えを諦める。

仮想世界で現実世界を求める事もマナー違反であるし、何より本人の居ない所でこういった話をする事もマナー的に問題であろう。

キリトの言う謝罪を正しく間違つて受け取り小さく息を吐き出してからゆつくりと戦闘方面へと意識を傾けている。諦めた答えはB。Bが終わつてから、彼本人に聞けばいい。それこそ勝つた報奨として聞けばいいのだ。

シノンが間違つた受け取り方をしていることを把握しながらもキリトはそれを訂正する事はなかった。キリト自身は謝る意味も無いことなのだけれど、きつと彼女はナッツの現実の姿を見て驚く事だろう。キリトも現実での彼を見たことはないけれど。

SAOでのナッツ。狂気の中に存在した子供。地獄を啜う冠を乗せた妖精。

下層プレイヤー達の援助と同等に彼は犯罪ギルドオレンジから恨みを買っていた。気に食わない、といった感情的な理由ではない。明確に、犯罪ギルドの敵であつたのだ。

彼が仕出かした事を正しく全てキリトは知っている訳ではない。風の――鼠の噂話を小耳に挟んだ程度だ。それこそ犯罪ギルドが自ら流したナッツの悪評の数々である。

そしてキリトの脳裏にあの瞬間が過ぎる。悪評の数々の幾つかが真実である事を明白にしたあの瞬間。

ナッツの曲剣が容易く横一文字を描き、人の首を落としたあの瞬間が。

背筋に冷たい物が駆け上がる。

自らを心配するが故に目を向けなかった事実。自己防衛の為に忘れてしまつていた証明。悪夢で見たナッツの背後に存在する黒々とした影。

「……ナッツが危険だ」

「え？」

「なんで忘れてたんだ。すぐに気づけた筈なのにッ！」

「ちよつと落ち着いて」

「死銃は俺よりもナッツを恨んでるなんて当然の事だつたんだ！」

仲間を殺されて恨まない存在などいない。抵抗すら出来なかった仲間を殺したナッツを恨むのは当然の事であったのに。

絶対の上位者であれば、チュートリアルと呼ばれた彼であっても、不意打ちからの電磁スタン弾を回避は出来ないだろう。ナッツの戦闘が情報の上に成り立っている事を知っているシノンであるならば尚更それを理解する事が出来てしまった。

そして死銃は——スキャン情報に映し出されていない。

狼狽えるキリトの肩を掴んで自身の方へと向けたシノンは真つ直ぐに視線を合わせる。ナッツが——憧れが危険であるという事実を確認する為に。

「アイツは——ナッツは前に死銃の仲間を殺してるんだ」

「——ッ」

息を飲み込んだ。

キリトの言う通り、SAOでの殺し合いが文字通りであったならば。そしてキリトの言葉が真実であったならば。

人伝に聞いてはいけない事実を聞いた罪悪感が込み上げ、同時にナッツが危険である事の意味を理解する。狙われる可能性が上昇する。

シノンの腰部に微振動が空気に伝わり、二人は急いでスキャナ端末を開く。

「前のスキャンでナッツはどこに居た!？」

「わかんないわよー」

知る余裕など無かった。前回のサテライト・スキャンではペイルライダーを殺した死銃を探す事で手一杯だった。

お互いに自身の詰め甘さに舌打ちをして、後悔と反省を後へと回す。今必要な事はそんな事ではない。

「シノンは右からッ」

「了解ッ」

地図に映し出される幾つもの光点。タップすれば詳細を確認出来ると同時に時間が取られてしまう。

死銃はきつと廃墟都市に存在している。それは追いかけてきた二

人だから分かる事だ。そしてその廃墟都市に二つの光点がある。

一つ——北部にある砂漠地帯を抜けて廃墟都市へと侵入を果たした光点。タップすれば詳細が開き、Nameの欄にはナッツ^{nuts}の名前。まだ生きている。絶対の上位者たる猛威を振るい存在している。

そしてもう一つ。名前を《銃士X》。

死銃が廃墟都市へと入ったのは確実であり、恐らく水底にいたヤツがサテライトスキャンに映し出されなかったのだとすれば。ナッツを狙っているのであれば。銃士Xは——。

シノンとキリトの行動は素早かった。

今にも接敵しそうな二つの光点を確認した瞬間に即時反応した。

「シノンはここに居ろ！」

「私も——」

「ヤツが出てきたら迷わず撃て」

それはつまり二人が負けてしまう可能性であった。銃の世界で剣を振り回す初心者とこの世界の上位に君臨する狂人の負けを意味する言葉である。

そして、死銃に負けるという意味は——死だ。

血の気が引いていく感覚を押さえ込むように、シノンは拳を握る。狙撃手であるから、或いは単純に力不足だから。

頭の冷静な部分が可能性の低さと、低くても可能性がある事を理解させる。そして低い方の可能性に傾けば——終わらせるのは自分である事も理解できた。

「……わかったわ」

血を吐くように言葉を返し、走るキリトをシノンは見送った。

大丈夫、と何度か唱えながらシノンは頭を切り替えていく。冷徹な狙撃手のソレへと思いを落とし込んで、地図を開く。

銃士Xと自身の位置関係。廃墟都市の凡その外観。瓦礫の位置。射線の予測。現在の位置からの移動距離。

数秒ほど吟味した結果を行動に移す。

大丈夫。そう何も問題はない。あの二人が——ナッツが負ける訳がない。

だから自分は狙撃位置へと移動して、出てきた二人を倒せばいい。そこに死銃は関係無い。そうだ。そうなのだ。

ヘカートを肩に掛けて、一步目を踏み出そうとして、ただ直感的にシノンには腰のホルスターから《グロック18C》を抜き後ろへと振り返りトリガーを引いた。

フルオートで吐き出される弾丸。横薙ぎになるように飛来する弾丸達は景色に吸い込まれるだけに終わる。

勘違い？ けれど今もまるで銃口を向けられている感覚はある。

漠然とした、システム上ありもしない直感がシノンを動かした。グロックの銃口から煙が昇り、シノンは視線を忙しなく動かす。

その視界に閃光を捉えた。同時に右上腕部に衝撃が襲う。

冷静な判断ではなく、単なる反射としてシノンはそれを銃撃だと判断出来た。だからこそ逃げるように一步を踏み出そうとして、身体が全く動かずに前のめりに倒れた。

何が、何が起きた？ 動転する脳を無理やり押さえ込んで視界から情報を必死に得る。

撃たれた。何に？ ダメージを見れば軽微。どうにか動く瞳で腕部を見れば銃弾ではなく青白い針が刺さっていた。甲高い振動を根本から鳴らし、糸のように細い稲妻が広がっている。

電磁スタン弾である事は理解出来た。ペイルライダーを襲った弾丸であることなどすぐに理解出来た。けれどシノンは否定する。あり得るわけがない。自分達が警戒しながら移動してきた方向からの攻撃など――。

そしてシノンの双眸はその存在を捉えた。約二十メートル先、皮肉にもシノンとキリトが警戒して走り抜けた方向からソレは現れる。

空間が歪んだように動き、何も無い空間から砂埃が舞う。景色が裂け人間の足が地面を踏みしめる。揺れる景色が電子的なノイズを浮かべ、景色の透過が出来なくなる。

ソレは確かにそこに存在していた。ぼんやりとした赤い鬼火を二つ瞳に浮かべて、倒れ伏すシノンへと歩み寄る。

メタマテリアル光歪曲迷彩。一部の超高レベルのボスモンスター

のみが持つことを許された究極の迷彩能力。光を歪曲させ意図的に不可視化する迷彩。

なぜソレを持っているか？ いつの間にソレが実装されたのか？ そんな疑問は彼方へと消え去った。

ナツツとは意匠の違うボロマントが揺れる。フードから覗き見える赤い鬼火が残光を残しながら迫る。

一步、一步。ゆっくりと絶望を突きつけるように。地面を鳴らしながら倒れるシノンへと歩み寄る。

——死銃。予想していた存在ではない。銃士Xなどではない。確かにここに存在し、誰にも感知されない亡霊。そして唯一死を与える事の出来る死神。

心の中でシノンは彼の名前を唱えた。システム上届く訳がない事を知りながらも、そう祈るしかなかった。

死銃の足が止まる。凡そ、二メートル程シノンから離れた位置で停止し、マシンノイズの混ざった息が吐き出された。

「これで、ハッキリする……ナツツ……」

途切れ途切れの抑揚のない言葉が死銃から吐き出される。その視線はシノンを見ておらず、ナツツがいるであろう場所へ向いている。

「お前の、仲間を……、女を殺せば、お前は、狂うしかない……、あの日のように、加減など、出来ない……、あの日の、ように……手の平の上では、ない……、撤退も、無い……、さあ、見せてみる、お前の、怒りを、殺意を、全てを……」

独白のように吐き出された台詞がシノンへと届く。明白に、殺意を持って届いてしまう。

指先の感覚からスタン状態の残り時間を割り出して、視界の情報を集めていく。どうすればこの狂人から逃げられるのか。不意打ちを狙えば倒せる可能性もある。

動け、動け——！

スタン状態を無理やり破るように指を動かし、グロツクへと触れる。

同時に死銃は重々しくボロマントから空の左手を取り出し、自身の額へと触れる。ゆつくりと落とされる指が縦の線を描く。

その動作にペイルライダーの結末がシノンの脳裏に過ぎり、憎々しく死銃を睨む。その後方上空には水色の三重円に赤文字で『●REC』と浮かべる中継カメラが漂っている。

無数の視聴者は仰々しく十字を切るパフォーマンスをしている死銃とその前で無様にも横たわるシノンを見て歓談している事であろう。彼らはこの動作の意味を理解していない。その映像が『殺し』であり『死刑』である事を理解など出来る訳がない。

死銃の左手が右肩から左肩へと移動し、右手がマントの中へと隠れる。

取り出されたのは黒い拳銃だ。

シノンの予想通りに自動拳銃であった。

シノンの予想とは裏腹にそれは『悪夢』であった。

《ノンリコ 五四式 黒星^{ヘイシン}》。

思考が止まる。真っ白になった思考に叩きつけるように赤が広がる。スタン弾がなければ泣き叫んでいたかもしれない。

なぜ——、なぜ——、どうして……。

フラッシュバックする悪夢が殺意と混ざる。

殺される——殺しにきた——。あの銃が——、私を——！

ボロマントの亡霊が銃を向ける。シノンを殺そうと銃を向けている。あの日殺された恨みを晴らすべく、亡霊はここに居るのだ。

シノンの視界からフードの中身が見える。それは骸骨にも似た赤い双眸のマスクではない。粘液のようにマスクが蠢き、人の顔を象る。

あの男であった。見間違える訳がない。血走った白目。小さな黒目。穴のようにも見える広がった瞳孔。

過去を断ち切る事など出来なかった。足搔いてきた事全てが無駄であった。

逃げることの出来ない運命だ。自身の意志よりもより強大な何か自分が押しつぶす。

諦めるしかなかった。自身の死を受け入れるしかなかった。

溢れてきた涙が顔を伝い地面を濡らしていく。

——死にたくない。足掻いてきたソレを無駄と呼びたくない。

——死にたくない。《強き》の意味を理解できそうなのに。

——生きていたい。戦う意味もようやく知れたのに。

——生きたい。彼の隣でもつと戦っていたかったのに。

——死にたくない。死にたくない。死にたくない。死にたくない。

死にたくない。死にたくない。死にたくない。死にたくない。死に

たくない。死にたくない。死にたくない。死にたくない。死にたく

ない。死にたくない。死にたくない。死にたくない。死にたくない。

死にたくない。死にたくない。死にたくない。死にたくない。死に

たくない。死にたくない。死にたくない。死にたくない。死にたく

生きたい。生きたい。生きたい。生きたい。生きたい。

生きたい。生きたい。生きたい。生きたい。生きたい。

生きたい。生きたい。生きたい。生きたい。

——助けて……。

咆哮の如き銃声が響いた。同時に金属同士が打つかる高い音の後
に何かが地面を転がるように滑る音。

シノンの視界に右手を庇うようにして彼方を睨むボロマント。そ
の右手に拳銃は握られていない。瞬間、ボロマントへと向かい幾つも
の銃弾が飛来する。

狙いすましたような物ではなく、乱雑な射撃であつたけれど、死銃
はボロマントを翻し地面に転がる拳銃を拾い上げて遮蔽物へと身を
隠した。

死銃が姿を隠したとほぼ同時にシノンと遮蔽物の間に円筒型の何
かが空から落ちてきた。

シノンはそれに見覚えがあつた。なんせ相棒とも呼べる男がよく
好んで持っていた物だからである。

吹き出す白煙を貫くように弾丸が飛翔し遮蔽物を穿ち、軌跡を隠す
ように煙が充満していく。

逃げる最後のチャンスであることは明白であった。震える身体を無理やり押さえ込んで、必死に移動しようとしても身体が言うことを聞かない。

そんなシノンの視界が揺れる。腕を掴まれ、何かに掛けられて力の無い身体が地面から離れた。

白磁のような肌に映える黒曜石が如く黒い髪が視界の端で揺れた。彼の名前を、シノンは呼ぶことが出来なかった。

少女と見紛う美貌が必死な表情を浮かべている。それは危機的状況に緊張している訳ではない。アバターの限界を越えた積載量を運ぶ為に神経系が焼ききれる程命令を下しているからだ。

STR先行型で、軽量装備であるキリトであってもヘカートとシノンを持って移動する事は楽に行える事ではない。

煙から脱して、先程の位置から距離を離してもキリトは走り続けた。荒い息を溢し、歯を食い縛り、シノンを抱えて走り続けた。

円形スタジアムの東側から回り込み、北側に抜けるメインストリート。直線に伸びるそこには瓦礫や廃バスが散見しているが、姿を隠しながら逃げるには厳しいだろう。

そんなシノンの意図を裏切るように鼓動のように音を響かせるエンジン音が鼓膜を揺らした。

視界にいたのはボロ外套の長身細身の男。起動している三輪バギーに腰掛け、その隣には見慣れぬ銃が掛けられている。

「無事で何よりや」

「ナッツ……」

自然と口から出た彼の名前。キリトの腕から離れ、倒れそうになりながらもシノンは前へと足を進めて、慌てたようにナッツがそれを支えた。彼の首に腕を巻いて、ようやくシノンは安心する事が出来た。震えるシノンを支えながら肩を竦めたナッツはキリトへと顔を向ける。

「追ってきかへる。」

「ああ、たぶん」

「ほなさっさと逃げよか」

シノンを支えたまま歩こうとしたナッツが眉間に皺を作り、小さく息を吐き出してから肩に掛けていたJNGを地面に落とす。ドロップするキリトへ向けて口をへの字に曲げて踵を返してバギーへと歩く。

エンジンの掛かる三輪バギーの奥には壊れたネオンサインに「Rent-a-Buggy&Horse」。無人営業のレンタル乗り物屋には壊れた三輪バギーが幾つかと嘶きを上げるロボット馬が並んでいる。

「ナッツ。馬はいいのか?」

「ああ、そう思っただけよ」

「準備?」

ニツと笑ったナッツが手を空へと上げて指を鳴らす。

瞬間、ロボット馬を爆炎が包み込み、熱風が三人の肌を撫でる。チリチリと火粉が舞い、炎が世界を焦がしていく。

ボロ外套が熱風ではためく。したり顔のナッツとは違い、目をパチクリとさせているシノンとキリト。

「これで懸念なし。さっさと逃げて仕切り直しや」

「……色々言いたいことあるけど、後でいいか」

「説教は勘弁やなあ」

バギーへとシノンに乗せたナッツは情けなく笑いながらキリトへと言葉を返した。

どこか慣れたような空気にシノンは安心してしまう。この二人ならば——何も問題がない、と。

そう、安堵した瞬間にナッツに抱き寄せられる。慌てて押しつけようとしたけれど、それよりも強く抱きしめられる。反抗の声を出そうとしたシノンはナッツの顔を見てその言葉を飲み込んだ。

「キリトツッ!」

焦り。驚き。先程の爆発を見た自分たちよりも驚きを露わにしている表情が一瞬にして悲痛に染まる。

叫んだ彼の目の前には倒れる黒髪の美少女。肩に刺さった青白い

銀針が細く稲妻を走らせている。更に視線の先にはボロマントを着た存在。

距離は離れている。けれどもすぐに詰められるだろう。

「——ッ」

だからこそナッツは選択をした。

M1895を虚空から取り出し、片手のまま構える。その銃口の向きは死銃——ではない。

自身の目の前で倒れている兄弟分へと向けた。

「……すまんな、キリト」

キリトはどうか動く視線だけをナッツへと向けて歯を見せるように痺れる身体で笑う。

泣きそうだった、悲痛な表情を一瞬で冷めた表情で塗りつぶしたナッツは引き金を絞る。

銃弾はキリトの眉間へと吸い込まれ、キリトのHPバーがクリティカル補正されたダメージにより減少していく。緑から橙へ、橙から赤へ。そして、暗転する。

殺した余韻に浸れる訳もなく、ナッツは煙を吐き出す銃をそのままに腰に吊り下げている円筒型のグレネードを捨てるように後ろ手で投げてバギーに乗る。

弾けたグレネードは倒れて「Dead」の文字を浮かべるキリトを包み込むように焼夷剤を撒き散らし燃え上がる。

「ナッツ……」

「逃げるで」

心配そうに声を掛けてくるシノンを無視するようにナッツは振り向く事もなく短くそう言う。

排気音を煩く鳴らしたバギーが廃墟を走り去る。その後ろでは轟々と炎が舞い、貸し乗り物屋とプレイヤー一人を隠すように燃え盛っていた。

第35話

砂漠地帯にエンジン音が鳴る。砂埃を盛大に巻き上げて走るバギーに乗るナッツとシノンに会話はない。

時折マップを確認しているナッツを後ろから確認しているシノンはどうか目的地があることが理解出来ているけれど、それだけだ。

小高い岩山とその全容を隠す砂に囲まれた世界。罪人である自分が逃げるにはお似合いの世界だ、と自嘲してしまう。

スタン弾による痺れは既に取れている。その筈なのだ。震える手を握りしめてシノンはそう鼓舞する。

ただ純粋な恐怖に叩き潰された。死を理解し、自身の力以外を求めてしまった。弱い自分がそこには居たのだ。

シノンの仮面が外れ、朝田詩乃という少女が顔を見せてしまった。怖かった。殺されるかと思った。同時にそれが正しいとすら諦めた。そして諦めきれなかった。

だから、シノンは彼から答えを求めるようにボロ外套を握ってしまふ。まるで幼子が母を求めるようにボロ外套を掴み、顔を伏せる。

僅かな布ズレにチラリと背後を確認したナッツは顔を伏せているシノンを一目見てから、前方へと顔を戻した。

「ん、到着」

ナッツがバギーを停めたのは洞窟の入り口である。

シノンは顔を上げて、プレイヤーらしい観点の思考が過ぎる。そして同時にその思考は兵士としての思考ではない。

「……………こならスキャンも回避出来て、隠れられるわね」
「せやな。ここなら安全や」

バギーから降りたシノンに小さく息を吐き出して、ナッツはバギーを回頭させる。鼓動の様に響くエンジン音が強くなった事でシノンは振り返り、驚きで思考を止める事もなくナッツの身体を掴んだ。

「ど、どこに行くの？」

「そら、アレを殺す為の仕込みやけど」

「ダメー！ そんな事、アナタが倒される！」

倒されるなんて、思ってはいいない。あのナッツが倒される所なんて想像も出来ない。けれど、それは自分の想像でしかないのだ。もしかして、万一、偶然、運悪く。

ただ一発の弾丸がナッツを死に至らしめるかもしれない。

そんな事、シノンが受け入れられる訳がなかった。

ナッツは困ったように頬を掻いて、シノンの手を優しく握る。

「シノンは——無理せんでエエよ」

「——ッ！」

「あとはボクがやるし、ちよつと休んどき」

ゆつくりとシノンの指を解いていく。その顔は慈しみをもった優しい表情である。が、シノンはその表情の意味を知っていた。そして言葉の裏にある意味も理解した。だから解かれていく手でそのままナッツの胸ぐらを掴んでしまう。

「ふざけないでッ！」

唾が飛びそうなほど強く放たれた言葉に対してもナッツはその表情を崩さない。だからこそ余計に苛立たしい。ナッツにとつて自分が一瞬で『相棒』で無くなった事が悔しい。

「戦力にならないから!?! 撃てなくなつたから!?! 怖さに負けたから!?! 私は——私は！ アナタやキリトみたいに強くないの！ 強くなりたいのに……! どうして……!」

今にも泣きそうになっているシノンにナッツは困ったように頭に手を当てて小さく息を吐き出した。

「——もうええ？」

「え？」

「弱音は吐き終わった？ ならさっさと手エ放してくれん？」

ただ冷淡にナッツはそう言葉にした。シノンは思い出した、ナッツという男はこういう男であると。自身の為に生き、自身の為に死ぬような男であると。

だから、こうして容易く人を捨てる。

解けた手を放されて、シノンは呆然とした。怒りなど通り越してし

まった。

「……はは、そう、よね。ナッツはそういう人だもんね」

「……」

「——私じゃなくキリトならよかったのにね。キリトなら、アナタの手助けも出来たのに」

「……そうかもなあ」

「ツー」

しみじみに呟いたナッツにシノンは無言で平手打ちを放った。それを頬で受け止めたナッツのフードが外れ、慈しみも軽薄な印象すらない、残酷なまでに冷淡な表情が露わになった。

「氣い済んだ？　なら早く洞窟入って休んどき」

「……」

叩かれたというのに反応すらせずにナッツはシノンにそう指示を飛ばす。観念した、というよりは諦めや絶望がごちゃ混ぜになった感情がシノンに支配し、歯を食いしばってそれを堪える。

踵を返したシノンが歩き出すのを確認してからナッツはやはり困ったように息を吐き出して空を見上げて、エンジンを噴かせた。

洞窟の中、少し奥で壁に持たれたまま力尽きたように座り込むシノン。

強くない自分。強いナッツ。弱い自分。弱くないナッツ。純然たる拒絶と落胆。身勝手だけれど、確かに利己的だった。

嗚咽が溢れる。自分の弱さが悔しかった。ナッツの強さが羨ましかった。キリトの方がよかったと言われた事も苦しかった。

人殺しの手は誰にも取られないとわかっていた筈なのに、少しだけ期待していた自分が居た。シノンとしての仮面に罅が入り、ボロボロと崩れていく。

もつとあの人の頼りに成りたかった。

もつとあの人と一緒に戦いたかった。

あの人の隣にいられるだけでよかった。

あの人の相棒でいたかった。
ナツツに手を取ってほしかった。

視界が滲み、ボロボロと水滴が地面へと染み込んでいく。それでも目を抑える事も出来ずにシノンには嗚咽を溢れさせた。

死んでもよかった。五年前の自分よりも弱くなってしまった自分など生きていく価値もなかった。

このまま逃げ続けて生きる事など、死ぬように生きる事なんて無意味な事だ。

けれど、それでも、身体は動かない。きつと弱い自分が死ぬのを怖がっているのだ。

死んでも、死ぬだけ。

そう、死んでも死ぬだけなのに、それが堪らなく怖い。

疲れた。何もかも、疲れてしまった。

泣いている事も、怖がっている事も、落胆される事も。

疲れてしまった。

シノンの耳に砂を踏むような音が響いた。僅かに上げた顔で視界を確認すれば、ボロボロのマントが洞窟の入り口で揺れていた。

戦う？ いや、勝てない戦いだ。

諦める？ もう諦めていた結果だ。

戦って死ぬ？ 前のめりにすら、もう成れない。

死ぬ？ そう、私は死ぬ。疲れたのだ。

自嘲気味に笑って、シノンは瞼を落とした。死ぬのは怖い。けれどこれ以上生きている事も、恐怖から逃げ続けることの方がもっと怖い。

だから、死んでもよかった。

ナツツは——きつと自分が死んでも悲しみもしないだろう。

一歩ずつ、砂を踏みしめながら近寄ってくるのがわかる。

わざわざ自身の向かいに立っている存在は、ドサリと腰を下ろした。瞼を上げて視線を向ければ、しっかりとダメージが入っていたのか頬に紅葉を咲かせた男が珍しく仏頂面で座っていた。

「……………」

「……………」

ナッツを見たまま停止するシノン。対してナッツは中年よろしく「あー」と言いながら一仕事終えたように肩に手を当てて回していた。

「……………なんで居るのよ」

「そら、バギーその辺に走らせて車輪跡消して来たからやけど……………」

「……………そう」

つまり、ナッツはそもそも戻ってくるつもりだったのか？ それを早とちりした？

シノンの頭の中で先程の記憶がループする。会話ログが遺っていないVRMMOの機能を呪いなくなった。思い出した結果、彼は確かに一人で行くなんて言っていない。いや、そもそもどこかに行こうとした時も『仕込み』と言つてなかったか？

何度か瞬きをして、シノンは自身の行動を思い出して顔を赤くしていく。

「その……………ごめんなさい」

「何が？ 叩かれた事？ ああ。好き勝手ボクに言うた事？」

怒っていらっしやった。

ニコニコしてコチラを威圧するその姿は上位者らしい姿であった。シノンはここから逃げ出したくなかった。逃げ続ける人生もいいのではないだろうか、と考え始めた。

非常に楽しそうに笑っていたナッツであるが雰囲気を弛緩させるように大きく溜め息を吐き出した。

「ま、勘違いさせたみたいやし、ボクも悪かったわ」

「そ、そうよね、うん」

「頬叩かれた事は絶対忘れへんけどな」

「……………」

激怒していらっしやった。

やはり笑顔であったけれど、凄みがヤバイ事はシノンも理解出来た。どう威圧すれば怯えるか知ってるような、説教を知り尽くした威圧の仕方であった。

引き攣った笑顔を浮かべていたシノンを見てナッツは意地悪そうに口を歪めて笑ってみせた。クツクツと人の感情を楽しむように、まるでいつかの様に笑ってみせた。

「ま、冗談はこのへんにして——キリトやなくてシノンの意味やっただけ？」

「え、ええ」

「キリトは殺しても死なんから……ああ、ちやうな。シノンは殺されたら死ぬからや」

吐き出された言葉はシノンの鼓膜を揺すり、脳髓に響く。

固まるシノンを見つ直ぐに見つめながら、ナッツは少しだけ迷って、口を開く。

「死銃がああ銃——黒星でプレイヤー^{ヘイン}を撃つから人が死ぬ、っていうんはたぶん間違った認識なんよ」

「どういう——」

「あのゲームでもない限り、こっちから人は殺されん」

食い気味にナッツはシノンにそう告げた。それは純然たる事実だ。シノンだって、その事は理解していた。

仮想現実での殺人が現実に影響を及ぼすなどあり得ない事だ。けれど、あの亡霊はやつてのける。死を与える事が出来るのだ。

「シノン。変な事聞けど、ログインしてるんは自宅？」

「……………自宅だけど」

「そんな目えせんといえや。ボクも不本意なんやで？　こういうプレイベートな事聞くんわ。それで、鍵はちゃんと施錠しとる？」

「ちよ、ちよと待って！　それじゃあ——」

それではまるで現実世界の肉体が狙われている様ではないか。

怖気が走る。吐き気と同時に意識が浮上していく。自宅の六畳間、清掃の行き届いたフローリング風のフロアタイル、黒のライディングデスクと同色のパイプベッド。まるで俯瞰しているように脳裏に過ぎた全体像と、ベッドに横たわる自身の身体。フルダイブにより身動きも取れない、無抵抗な肉体。

思考にボロマントが——死銃が過ぎり、自分を見下ろすように立つ

ている。その手にはあの銃が握られ――。

「シノン」

向かいにいた筈の男の声が遠くに聞こえた。喉の奥が塞がる感覚と共に、上手く呼吸が出来ず彼の名前すら呼べない。空気を求めるように喘いでも、何も感じない。

まるで突き落とされるように、背中の奥からどこかに引つ張られ、耳鳴りが響き、世界が崩れていく。

落ちていく自分を支えるように、誰かが手首を握った。強く、ここに存在している事を自覚させるように。

トクリ、トクリと音が鼓膜を揺らした。一定のテンポで刻まれる音だけが世界に響いていた。

何かが髪に触れる。自分が落ちないように、揺れる自分を抑えるようにキツイ拘束感。

「シノン」

彼の青年らしい低い声が頭の上から聞こえた。いつの間にか閉じてしまっていた瞼はようやく開く。

開けた視界で彼を見ようと声の方向へ顔を向ける。向けて、ゆっくりと顔を下げた。

「? どないしたん?」

「……なんでもないわ」

ナッツの視界から隠れるように顔を埋めてナッツのボロ外套を引つ張るシノン。今の顔は見せれたものではない。特にナッツには見せる訳にはいかない。

どうやら強制ログアウトから戻ってきたらしいシノンに安心したナッツであったけれど、そのシノンが自分の懐から顔を見せてくれなくなってしまった。どうしたモノかと考えながら、シノンと位置を変わるようにして壁へと凭れて腰を下ろす。その間もボロ外套にすっぽりと顔を埋めたシノンの表情は見えていない。

「――死銃が二人いるって言うの?」

「少なくとも。予想でしかないけど、可能性としては高いと思うよ」

「……そう」

ナッツの身体に回された腕の力が少し強くなる。そんな彼女を安心させるように、ボロ外套の上から頭を優しく叩く。

可能性としては、高い。あの瞬間、シノンをいつでも撃てた筈なのに誰かに見せつけるように十字を切り、ゆっくりと構えた。それがサインであるのか、はたまた別の何かなのかは判別が付かない。

《黒星》の銃弾で人を殺せるなら《L115》は必要ない。

ただ、徹底した理詰めであつても可能性として捨てきれぬ事は出来なかつた。

だからこそ、あの瞬間——キリトを殺した時に死体からの作用を考えて焼夷手榴弾をキリトへと投げたのだ。何かしらの依頼であろうキリトなら安全な場所からログインしているだろうけれど、捨てきれぬ訳もない。

もしも、自身の予想が外れて、仮想現実から本当に人を殺せるのであつたとしても。それはシノンへ伝える意味は薄い。警戒は必要であるが、シノンにあの凶弾が届く事などもうないのだ。

「……ん？」

「どうしたの？」

「ああ、いや、なんでもあらへんよ」

もぞりと蠢いたボロ外套に苦笑しながらナッツは言葉を濁す。

ナッツらしくない思考である、と自分でも思つてしまう。けれどもそれが自身であると言えてもしまう。

クツクツと笑うナッツの声を聞きながら、シノンは少しだけ訝しげに思いながらも、迷いながら口を開く。

「ナッツは——ナッツも人を殺した事あるの？」

「……キリトが言うたんやな」

「ごめんなさい」

「別にエエよ。せやな。両手では数えられへんぐらいには殺してるなあ」

誇るようでもなく、罪を告白するようでもなく、自嘲するようでもなく、瞼を閉じて思い出すように言葉を吐き出してナッツは薄く瞼を

上げた。

「今も全員覚えとるよ。顔も、言葉も、名前は——後から照合したから不安やけど、皆覚えとる」

「どうして……」

「殺したから……言うんは、卑怯やな。殺した者の責任みたいなもんや。進まれへんようだったヤツを糧にしても進んでるんよ。無理やり、足引きずっても、生きてるから進まなアカン」

「……やっぱり、ナッツは強いね」

そうシノンが呟くと、ナッツは困ったように頬を搔いて、小さく息を吐き出した。

「強かったら、ナッツになんか、頼らんでもエエねんけどね」

「え？」

「……現実の僕は弱いって話」

「ナッツは強いじゃない」

「そうやねんけど、そうやないんよ」

「……どういう事？」

「秘密。現実に居る僕に聞くんやね」

「……ああ、そうやって女の子に会ってるのね」

「ちゃうちゃう。死銃Bの事もあるし出来れば行きたいって話やねんけど」

「なに？　そこからナンパだった訳？」

「そうなら喜劇で終わってんけどなあ」

ハツハツハツと笑ってから溜め息を吐き出したナッツと同時に溜め息を吐き出したシノン。

強い彼に救いを求めた訳ではない。それは理解している。彼は私を救えないし、救わない。ただ話を聞いてくれる、隣に居てくれる、抱きしめてくれる。それだけだ。

「私は——現実世界で、ほんとうに、人を殺したの。五年前、東北の小さな街で起きた郵便局で起きた強盗事件で……」

ぽつりぽつりと吐き出された言葉をナッツはただ無言で聞いていた。いつかの様に突き放すでもなく、シノンは悪くないと慰める訳で

もなく、ただ無言で彼女の手を握っていた。

そして、納得した。シノンはまだ知らないのだ。巻き込まれて殺したにしても、事故であったとしても、シノンのソレは誇るべきものだという事を。殺した事実ではない、その結果をシノンはまだ知らないのだ。

自分ほど堕ちていない少女はまだ救われるのだ。

銃を見ると震える事。ピストルの真似事をされても意識してしまいう事。シノンが——朝田詩乃が戦ってきた全てがシノンの口から吐き出される。

抱きしめられている腕が震え、精一杯を振り絞って言葉を吐き出し続ける彼女をナッツは止める事も慰める事もしなかった。

「……この世界なら大丈夫だった。幾つかの銃も好きになれた。この世界で一番強くなれたら、きつと現実でも大丈夫だって、そう思えたのに」

「死銃に会って、それが崩れた」

「……うん。私が《シノン》じゃなくなっちゃう。だから——私は戦わなくちゃいけないの」

「……さいで」

「キリトやナッツみたいに強くないし。アナタみたいに死ぬのが怖くない訳じゃない。でもソレ以上に怯えたまま生きていくのが堪らなく怖いのに」

強く抱きつかれながら吐き出された言葉にナッツは納得して、少しだけ申し訳なさそうに口を開いた。

「死ぬのが怖くない訳やないよ。ボクも死ぬんは怖い」

「え?」

「なんやその反応は……。ま、死ぬのが惜しくなったんは最近やねんけど」

誰かのせい、とは口に出すことはない。それにナッツが死ぬ事は決定している事も自覚もしている。

それに死ぬのが怖くない、というのも嘘ではない。死んでも自分がどうなるかは何度か体験している事だ。何も無い虚空に入り、ゆつく

りと分解されていき、彼の糧になる。それが当然だと思っていたし、怖くもなかった。

だから、死ぬのを怖がっている自分は既に彼から逸脱しているのかも知れない。けれども自分が彼であり、彼が自分である事も理解している。そして自分が偽りの存在である事も。

「シノンとこうやって話せる人も最期かもなあ」

「不吉な事言わないでよ」

「おっと、そうやった」

ケラケラと笑ってみせて、ナッツは微笑む。

シノンが殺されなかったとしても、死銃に負ける事がなかったとしても。

たぶん自分は——ナッツはここで終わってしまうだろう。

惜しくは思う。生きたいとも思う。けれど同時に消えてしまう事に納得もしている。

だからこそ、自分は最期までナッツであり続けるのだ。消えてしまいうその瞬間まで噛つていよう。

死んでも死ぬだけなのだから。

第36話

空を見上げる。ボロボロの暗幕のように幾つかの光が漏れて輝いていた。暗幕が降りきつていない地平には赤い色が滲んでいるのだろう。

だだっ広い砂漠でぽつんと一人。誰にも縛られず、誰にも触れられず、誰にも囚われない。ナッツの理想——加藤夏樹が理想としたものだ。

窓枠の外に見えていた空。美しい絵画のような世界。怖くて仕方ない自由という地獄。

いつかのようになッツは瞼を閉じて世界を瞳に収める。吐き出した息は僅かに白く染まり、空へと消えていく。

孤独ではない。こうしている間にも自分という餌に目掛けて現存しているプレイヤー——『闇風』と『死銃』が接近している事だろう。こうして無防備を晒しているのだから、視界に入れば更にその速度を上げるか、あるいは警戒して速度を落とすか。

後者である可能性は高いだろう。様々な二つ名を頂くナッツが何も無く無防備である訳がない。事実、その通りであり、そして現実として、ナッツは無防備であった。

後方に控える狙撃手を信頼していた。

出発前、彼女自身が「闇風を撃つ」と言った。ナッツからすればそれだけでよかった。不安そうにしているシノンに対して二つ返事で応えてみせれば、溜め息を吐き出されたのも記憶に新しい。

もつとあるだろう、と不満気に吐き出したシノンに対して「シノンなら出来るやろ」と軽い口調で言い残して、ここまで来たナッツはむず痒く顔を赤くしたシノンの事など知らない訳である。

シノンとの記憶を辿る。どれもナッツにとっては大切なモノだ。噛みしめるように、忘れないように、しっかりと反芻し、一つひとつを脳裏へと焼き付けていく。

瞼の裏にしつかりと焼き付けた記録であるが、どこまで彼へと遺す事が出来るだろうか。

薄く脛を上げて、ナッツは細く息を吐き出す。

「死にたあないなあ……」

誰にも聞こえない願いを口にして、やはりらしくないと自嘲する。それはナッツの弱さであった。

それはナッツには不要であった。

そしてナッツにとって手放せないモノになった。

端の擦り切れたフードの上から頭を搔き、さて、と前を向く。

吹いた風が砂を巻き上げる。その砂塵の中、風景の一部分にノイズが走り、ノイズが姿を形どる。鬼灯のように赤い瞳が二つ。ボロボロのマントが風で揺れるようにソレはナッツへと近寄ってくる。

変わらず無防備であるナッツの前方十メートル程で亡霊は停止した。

「さっきの銃声でL115は潰れたんかな？」

亡霊は語らない。ナッツも答えを求めていた訳ではない。

鼓膜を揺らした二発の銃声の一つを予想し、そしてシノンだからやってみせたのだろう、と答えを出した。この亡霊が自身を撃たずここまで来たことも、その証明であった。

答えず、語らない亡霊に対してナッツが思うことはない。

「ラフィン・コフィン笑う棺桶の残党、いや亡霊言うた方がエエんかな？ 相変わらずけつたいな事してるやん」

「——やはり、ナッツ、か」

「そのマシンボイスも雰囲気作り？ 随分と作り込んでるやん。殺す為のサイン、ボロマント、透明化、マシンボイス、辿々しい言葉。次は何やる？ お仲間さんみたいに首が取れるとか、魅力的やない？」

口を歪めて唾うナッツの手に拳銃が握られる。《シグアームズ G SR》、飾り気のない角張ったスライド、アクセサリールには鈍く光を反射する厚みのある銃剣が装着されていた。

「随分、短い、剣だ」

「銃剣やしな。でもその首を搔っ切るには十分やろ？」

「どう、かな」

死銃のボロマントから姿を現したのは、細い鉄の棒であった。銃の

整備に用いるロッドのように細い棒。けれどその先端は鋭く尖り、何かを貫く為のモノだと主張している。

ナッツは——いいや、あの世界で剣士であった存在であるならばソレが何かなど、すぐに理解出来る。なんせ有名な閃光様も使っていた武器の分類だ。

ナッツは目を細めて、エストックを見つめ、苦笑する。

「ああ、違う違う思ってたけど、確定したら安堵するもんやな」

「何を、言っている?」

「同類や無くて安心した、言うてるんよ」

尤も、目の前の存在がP O Hではない事など理解していた事だ。あの男ではない保証はなかったけれど、それでもナッツは目の前の死銃がP O Hではない事はハッキリと言えた。それは同類としての感覚でしかないけれど、わかっていた事だ。

こうして目の前にしてみればハッキリと理解出来た。この存在はP O Hではない。

身に纏う雰囲気。立ち振舞が。その全てが違うと断定出来た。

その事に安堵する。けれど同時に落胆もした。

小さく息を吐き出し、改めて目の前の存在を見つめる。

誰かも分からぬ亡霊。P O Hではない存在。けれど死を与える存在である事は間違いない。

その手段のタネが割れていたとしても、それはナッツの予想ではない。ただ可能性の高いモノでしかない。低い可能性が事実だとすれば——。

ナッツの中に存在している歯車の一つが嵌まる。

「どないしたん? 来おへんの?」

だからこそ、ナッツは不敵に嗤う。感情に身を任せ、口から挑発を吐き出す。

死銃は腰を深く落とし、細剣を真っ直ぐに構える。構えるだけで、その足を動かさそうとはしない。力を溜めている事など当然のように理解している。

けれど、それが全てではない。相手がナッツだからこそ、不用意に

死銃は仕掛ける事が出来ない。

S A Oでのナッツ——落下星という称号を持つていた存在。その得意な戦法など頭の中に焼き付いている。

まるで機械染みた判断能力と反射リフレクトとも言える反撃カウンター。その一瞬の剣の煌めきこそが落下星の由来であり、彼の戦法で間違いなかった。

だからこそ、踏み込む事など出来ない。自身が絶対に倒せる位置に来るまで、力を溜めなければ勝負は一瞬で決まるだろう。無作為に飛び込んで、細剣が彼を貫く事などない。腕一本貫けたとしてもナッツが止まらない事など、既に経験している事なのだから。

そんな死銃を見て、ナッツは口をへの字に曲げる。

この男はどこまでもあの世界に囚われているのだろう。ナッツから見れば、いいや、この世界にいるプレイヤーから見れば死銃の姿はどこまでも滑稽に映っただろう。

けれど、その滑稽さをナッツは愚かだとは言わない。

なんせ、自分もあの世界S A Oに囚われているのだから。

への字に曲げた口を逆さに歪ませてナッツは前に進む。

駆ける訳ではない。散歩にでも行くように、濃くなる殺意の中へと足を進める。

縮まる距離。たった数メートル。砂が爆ぜた。

愚直に、最短距離を、最速で。ボロマントを巻き込みながら細剣は真っ直ぐナッツの顔へと迫る。

風切り音すら置き去りにする一閃であったが、愚直すぎたその細剣は容易く厚みのある銃剣により進路をズラされた。同時に機械染みたナッツの反撃が始まる。

銃剣が寝かされ、細剣の刃に腹を這わせる。一撃にて相手を倒す為の、効率だけを考えた行為。無慈悲の一閃。

——そこまでが、死銃のシミュレーション予測通りであった。

無慈悲である一撃。その一閃を見切るまでにどれだけの予測をしたか。どれだけの恐怖を、落胆を、絶望を踏み潰したか。

一閃と共に腕を引き絞る。弦が如く絞り、矢を再装填する。

引き戻すのは最低限。銃剣が細剣の身から離れた瞬間。そのたつ

た一瞬だけが重要であった。僅かに引き戻された鍔鋒がナッツの喉元を捉える。

既に銃剣が視界の端に映っている。そんな事どうでもいい。

機械染みた化け物を殺す為の方法。自身の名を刻む為の唯一の方法。

更なる一步の為の方法。

ナッツの感覚が、無意識が、赤くギラつく二つの鬼火に魅入られた。死に至るソレではない、未だに殺す為の瞳。それは切欠にすぎない。

キリトのように反応出来た訳ではない、ただ違和感が直感として機械的な反射が働いただけである。

攻撃の手を引き戻しながら首を狙う細剣を左手でズラし、首を逸らした。

首の端を掠るように貫いた細剣はすぐに引かれ、更なる連撃へと準備される。

バランスを崩し、整える為に一步後ろに下がったナッツ。それを許すほど死銃も甘くはない。

同時に一步を踏み出し、距離を空けないように、ナッツが再び反撃の準備が取れないように追い込んでいく。

舌打ちを一つ溢しながらその連撃を防いでいくナッツ。その顔は次第に険しくなり、細剣の攻撃とナッツ自身の動きの荒さからフードが剥がれる。

左手に押さえられた首元。左手の隙間から溢れていく赤いポリゴン片。

死銃はソレを視界に収めながら、けれども慢心などすることもなく、連撃を続ける。追い込んでいる、それは確かに実感できた。

ナッツの歪んだ表情も、勝勢の証明であった。

けれど、言い知れぬ不安が、歪な違和感が死銃の心を支配していく。連撃による幾つかの攻撃はナッツの腕や身体を掠り、確かにHPを削っている。それは事実である。

防いでいた攻撃が防げなくなったのか、細剣の鋒で防いでいた銃剣が腹を抑えるだけに変化している。だからナッツは傷ついている。

ゾクリと死銃の感覚が恐怖に落とされる。

決してナツツに攻撃を受けた訳ではない。正しく追い込んでいるのは自分で間違いない。けれど、自分の何かがソレを否定する。

ナツツの怯えたような表情が勝勢を肯定する。自分の連撃が正しい判断であると――。

息を飲み込んで咄嗟に死銃は後ろへと飛び跳ねた。着地した砂地を更に蹴り飛ばし、後ろへと下がる。

キョトンとしたナツツの顔を二つの鬼灯で睨めつける。

「いつ、からだ……？」

「は？ こっちは助かって大助かりやけど、その質問は意味わからんわ」

「いつ、から……いつから、見て、いた？」

「――ハハハ、ハハハハハハハ!! そつかそつか。なんや気付かれとったんか。いやあ、もうちよいやったのに。演技力が足らんかったんかなあ？」

ナツツは思わず笑ってしまった。

ようやくこの世界ゴ。レ。に来て初めて命の危機を感じた。所詮はゲームだと割り切っていた自分が殺す気で迫る死銃に剥がされていった。

ズレていた歯車が修正され、ゆっくりと回転し始めていた。この身にあつた違和感が全て取り払われた。正しく自身の身体であると言える。

自身はナツツである。そう、あの世界で生きていた狂nつた者uに違tいなsかった。

そこからは簡単だった。防いでいた細剣の連撃を、繰り返し行われる攻撃を僅かばかりの隙で誘導し、流すに至った。あと数撃もあれば反撃出来た事だろう。

あれだけ攻撃を見れば、ナツツには十分だった。機械的な相手でないしろ、発生の瞬間さえわかれば経験則でどうにでもなる。

「ハハハ、なんやコレだけの事やったのに……」

「何が、おかしい」

「ハハ、いや、アンタには関係ない事やで。えっと、誰やったっけ？」

「アンタの名前は相変わらず覚えてないわ」

それは安い挑発であった。

それはいつかを思い出させる挑発であった。

死銃にとつて、細剣使いにとつて、——にとつて、それは特別な挑発でもあった。

恨みの根源。叶わない強敵を羨み、妬み、恨んだ男が自身の名前を刻み込ませる為の行為をナッツが覚えていたに相違ない挑発であった。

「ああ、でも。覚えてるわ。ここで死ぬんや。しつかり覚えてる」
糧にする為に。殺す者の義務として。ナッツ——夏樹の生き方である。

S.A.Oが始まる前から何人もその生き方に費やした。沢山の糧が夏樹の基礎となっている。

その一つにするだけ。そしてその一つになるだけ。既に後悔は消えた。死んでも死ぬだけだと唱えるだけの生き方ではなくなった。

ナッツがナッツとして完了した。噛み合った歯車がソレを理解させる。

煩かった女の声が聞こえなくなった。

ナッツが嗤う。

「ほな、殺し合おうか——ザザ」

歪められた口元から吐き出された名はこの世界にいるどのプレイヤーの名でも無い。けれど、それは確かに目の前のプレイヤーの名前であった。

ノイズ混じりの笑いが漏れ、細剣が構えられる。

構えられた細剣を見て、ナッツは更に笑みを浮かべる。つい先程まで前の世界に引き摺られていたというのに、今は思った以上に視界が広い。その視界が目の前の亡霊を否定する。存在ではない、単なる戦いを否定してしまう。

息が抜けるように喉が引きつるように吐き出された嗤いと共にナッツが動き出す。

その右手に掴んでいた銃剣付きの拳銃をポリゴン片へと変化させ、

慣れたように空中にあるコンソールを操作する。

前方に構えたと同時に彼が握ったのは骨董品^{M1895}である。

放棄した。剣士である戦いを放棄したのである。

S A Oの残滓であったソレを否定するように、目の前の亡霊を否定するように、片手で構えたM1895が咆哮を上げる。

死銃にしてみれば、それは失望であった。驚きであった。

避けた銃弾を見送る事もせずにナッツを視界に入れ続けければ片手で器用に銃を前に倒して次弾を装填している姿が見える。

確かに、先程までのナッツは剣の世界のナッツに相違なかった。何の違和感もない、存在であった。

けれど、今はどうだ。銃と剣の射程距離の違いを使い、一方的な攻撃をしている。

この距離を守っていれば、という慢心が見え透いている。

曲がりなりにも、悪であったとしても、死銃^{ザザ}はあの世界を生きていた剣士である。

そして死銃はこの世界でも生き抜いた存在でもある。

心の中で数えた銃弾の数が骨董品の装填数を満たし、死銃は砂地を蹴り飛ばす。

あの時よりも鋭く、素早く。あの骨董品の取り回しを考えれば攻撃を流されたとしても反撃も不可能。

一撃目。M1895で防がれる。それを巻き上げ、上へと弾き飛ばす。

これで、終わる。宿敵を倒す事が出来る。呆気ない幕引き。

けれど、何故目の前の男は変わらさず嗤っている。

二撃目が自身の手から放たれる。けれど、ナッツは嗤っている。

喉元を貫こうとした細剣がナッツの左手に防がれ、ズラされる。左手の真ん中を貫いた細剣を気にする事もなくナッツは左腕を伸ばし細剣を確りと掴む。

振り下ろされる右手。その右手に握られているモノは銃弾の籠っていない骨董品ではない。飾り気もない角張ったフォルムが出現に伴うポリゴンをまき散らせながら、握られていた。

「——捕まえた」

「ッ」

銃弾が放たれる瞬間に死銃は細剣を手放し、疾走した。放たれた弾丸は砂地へと吸い込まれ、その勢いと止めた。

地面に転がるように回避した死銃は姿勢を低くしたまま、ナッツを睨めつけた。

左手に深々と刺さった細剣。継続ダメージを与えているのか、絶え間なく赤色のポリゴンが吐き出されている。

そして右手には先程まで握られていなかった筈の銃剣付きのGS R。

あの一瞬で取り替えた？ 戦闘中に？ 今にも死ぬかもしれない瞬間に？

ここがゲームの世界である事を前提にすればソレは可笑しな事ではない。死ぬといっても架空の死である。所詮はHPが無くなりアバターが倒れるだけ。

けれど、死銃は理解している。この男が死ぬ気であった事など、S AOに引き摺られている事など、わかっている。

だからこそ、理解など到底出来ない。

左手に刺さる細剣を引き抜き、コチラへと投げる狂人の事など理解出来る訳がない。

「ほら、剣持って。全部試しいや。全部無意味にして、殺したる」

クイツクチェンジ 高速切替。機械染みた反撃。死も厭わぬ感情。殺しの忌避もない

化け物。

死銃へとゆらりと歩み寄るかつて英雄と呼ばれかけた存在は嗤う。

「なんや、いつかみたい腕一本ぐらいのハンデがいるんか？」

その言葉の答えが吐き出される前に砂地に何かが落ちた。乱暴に切られたナニかが砂と共に蹴られ死銃の前に転がる。

腕であった。今しがた貫いた痕が残る、左手の付いた腕であった。転がったソレを見て、視線を上げれば左手の肘から赤いポリゴンが吐き出されているナッツの姿がある。

その目はどこか楽しそうで、その顔は殺しを愉しむ同僚の顔にも似

て、その行動は誰にも似つかない化け物だった。

だから死銃は剣を握った。化け物に立ち向かう為に。死なない為に。それだけの為に握った。

「……………はあ」

その姿に溜め息が吐き出された。喜悦に染まっていた表情は落胆に満ち、死銃を見下している。

ナッツの中で満ちていた何かが急激に失われていく。

震える細剣がそうさせているのか、それとも単なる気紛れなのか。

化け物は空を見上げ、ゆっくりと視線を下げてザザを見る。

その落胆がザザにも伝わった。

いつだったか、自身達のトップを見ていただけで自分達を見なかった時のように。視界にすら入っていないような感覚。

憤りを覚えた。絶望を僅かにひっくり返すだけの感情の炎が灯った。

細剣を強く握り、腕を引く。

その構えにナッツは小さく息を溢した。

真っ直ぐに伸びてくる矢をナッツは無感情に見る。

そして、ただ一言、言葉を零す。

「名前は覚えてるで、《赤眼のザザ》」

上部へと弾かれた細剣を見ることがせず、ナッツはいつかのように首を真っ直ぐに一閃した。

殺した死銃を見下しながらナッツは息を吐き出して空を見上げた。

暗天に強く光る明星を睨に閉じ込める。

HPで言えば満身創痍であるが、その半分程が自傷であるとは笑えない事だろう。そんな行為ですらも納得出来た。

自身の行為なのだから、当然なのだけけれど。

噛み合った歯車。GGOでは決して味わう事など出来なかっただろう純粹な殺し合い。それが達成された。

自身でも感じる。ナッツが完了した。完成し、逸脱していたナッツが完了した。

先程までの、殺意だけの殺し合いに気持ち少しだけ落ち着ける。薄ぼんやりと瞼を上げて、後ろにいる存在へと向く。

「無事で何より」

「そっちは無事じゃないみたいだけど？」

「このぐらいのハンデある方が燃えるやろ？」

肘から先の無くなった左腕を上げて笑えば、空色の髪をした山猫は苦笑した。

装備重量の都合で弾薬をあまり持ってきていないナッツ。現在の残弾はゼロ。投げ物も無し。銃剣だけ。

どこかの誰かのように剣で銃弾を両断出来る自信もないナッツは、シノンに殺されるならばいいか、と諦めていた。

銃剣だけでも勝とうと思えば、勝てる。けれどHPが足りない。八方塞がりである。

「とりあえず、これでGGOでの危険は去ったのよね？」

「せやね……。あー、出来れば警察機関とかに保護してほしいけど、説明は無理か」

「そうね。なんならアナタが保護してくれる？」

「残念ながら、シノンの住所とかは知らんよ」

「……教えるわ」

その言葉に驚きながら、頭を掻いて溜め息を吐き出したナッツがシノンへと近寄る。僅かばかり膝を折り曲げて、シノンの口から小さく吐き出された住所と本名を頭に収めていく。

「なるほど、時間掛かるかもなあ」

「……大丈夫よ。近くに信頼出来る友達が住んでるから……その人、お医者さんちの子だから」

「……あー、うーん。わかった。なるべく急ぐわ。だからそないな顔しなや」

困ったように笑って、ナッツはシノンの頬に手を当てる。

頭の中でしっかりと彼女の自宅へなるべく急ぐ事を刻み込みながら、少しだけ深く呼吸をして今更になる自己紹介をする。

「ボクは——僕は加藤夏樹。今は新宿区のホテルでログインしとるよ。実家は関西方面にあるけど」

「旅行中だったの?」

「仕事の都合」

「……ああ、取材とか言ってたわね」

「え、ボクそんなん言うた?」

「言ってたわよ」

「……ま、会うしえつか。そんで? これでも負けるつもりはないけど、決闘でもする?」

肩を竦めて言葉を吐き出せば、シノンはナッツの状態を見て呆れたように息を吐き出した。

なんせ、ボロボロなのだ。沢山の傷にも加えて目立つのは左手の消失だろう。

そんな彼に勝った所で、何の価値もない。それに、彼を倒すという気持ちはもう失せていたりする。

「——そうね。次の機会に取っておくわ」

「あー……それはなんというか」

「何よ」

「もうこのゲーム出来ひんようになる、と言いますか……」

「はあ!?!」

「ま、まあ、その辺りはリアルで会ってから話すわ」

どうどう、と片手でシノンを抑えたナッツは面倒な事を現実にいる彼へと投げる。

上手く、とは言わないけれど、彼ならば大丈夫だろう。たぶん。少しだけ不安は残るけれど、それも少しだけ楽しみだ。

「で、決着つかんと終わられへんけど?」

「二人一緒に優勝とか」

「お土産グレ? ボクはもうグレないで」

「私が持つてるわよ」

ポーチから出した黒い物体にナッツは納得してソレをシノンから奪い、片手で器用に時間を設定する。

「ちよつとー」

「まあまあ」

唇を尖らせるシノンを宥めながらナッツはニヤリと口を歪ませる。

このぐらいは、自分でしておきたいのだ。

空へと軽くグレネードを投げ上げる。

「シノン」

「え？ きやつ」

シノンの腕を引いて自身の胸へと抱き、驚きと批難の為に顔を上げたシノンへと顔を寄せる。

唇に当たる柔らかい感触と目を見開くシノン。青い瞳が大きく映り、顔に赤みが差す。けれど押し退けられる事もなく、瞼が閉じていく。

二人は繋がりながら強烈な閃光の中へと消えた。



目を開いて、自分が泣いている事に気付いた。

自身の中で糧になった彼の存在を感じる。けれど、同時に何かを喪つたように胸に穴が空いたような感覚もある。

そのどれもが初めての感覚だった。

過去に役柄達を殺した時はまったくなかった感覚。彼だけは特別であったという証明でもある。

細く息を吐き出して、アミユスフィアを頭から外す。彼よりも短い

足で地面に立ち、違和感なく歩く。

ゆつくりと溶けて、彼が消えていく。けれど、それは確かに自分の中に遺っている。

溢れ出る涙を拭って、扉を開く。

眩しい扉の先にはおそらく観戦をしていたらう齋がノートPCとタブレットを操作している姿。

齋がこちらに気付いたようで、顔を上げ、目を見開いた。

そして騎士のように胸に手を当てて頭を下げる。

「おかえりなさいませ、我が君」

「違う。僕は夏樹です」

「ええ、そうですね。ですが、今は我が君でもありません」

「……そんなに違います?」

「私が気付く程度です。むしろ私しか気付かない筈です。つまり、私だけがオンリーワン!」

拳を握ってガッツポーズをする齋を見て思うのは、やはり彼の気持ちさがさっぱりわからないという事だった。

ああ、と思い出すように従者へと声を掛ける。

「助けに行きます」

「はい。準備は整っていますので急ぎましょう、我が君」

けれども、相変わらず優秀である事は彼でなくてもわかったことでもある。

第37話

浮上していく意識。指を僅かに動かしてラフなショートパンツに触れる。発汗性の高いザラツイた生地が指先を刺激して現実に戻ってきた事をシノン——朝田詩乃は認識した。

意識の帰宅に伴いエアコンの起動音が響き、緩やかに風が部屋を循環していく。

細く、小さく、呼吸を意識する。

「——っくっ」

小さく溢れたたくしやみ。一拍、二拍。薄く開いた瞼で辺りを確認すれば見覚えのある部屋が視界に映る。

眼球に動かせる範囲を確認し、次第に首を動かして部屋全体を見渡す。

黒のライディングデスク。フローリング風のフロアタイル。そのどれもに自分以外の誰かが触れたような形跡はない。

詩乃は小さく深呼吸をして警戒心を最大にする。ゲームのように何処に誰がいるかなどは分からない。けれども、ゲームの中で培った経験で警戒する。

耳を澄ます。エアコンから吐き出される呼気と耳鳴りにも似た空気の流れ。音は、ない。

注意深く自身とベッドのシート、小物を見る。動いた形跡は、ない。数時間前にフルダイブした時のまま、のように思える。

慎重に、音を鳴らさずにベッドから降りる。嫌に冷たいフロアタイルがつま先を冷やし現実を突き付けてくる。

踵を浮かして静かに移動し、人が隠れる事が可能であろう場所を確認する。ベッドの下、確認。クローゼット、確認。ベランダとカーテン、確認。脱衣所と浴室、確認。玄関にも誰かが入ったような跡は、ない。

詩乃はようやくやく安堵したように息を吐き出して胸を撫で下ろす。

取り越し苦労。という単語が頭に過ぎった。ついでにおそらくやってくるであろう現実のナツツに嫌味の一つでも言ってやろうと

考える。

もしかしたら、ナッツが現実で会う手口だったのかもしれない。冗談めかして考えるように顎に手を置いてみせた詩乃は自分の唇へと触れて、ハツとする。

仮想空間で奪われた、感触が残る唇。瞳に映像として残るあの男の顔。そして受け入れた自分。

いやいやいや。仮想世界だから。バーチャルだから。

沸騰しそうになった頭をどうにか誤魔化して詩乃はどうしてか部屋が暑くなつたのでエアコンの温度を二度下げた。

リモコンをデスクへと置いて、ベッドに座る。自身の唇を指先で確認し、ふにりと押ししてみる。

変な恥ずかしさが心を侵略し、ベッドへと顔を埋める。埋めて、数秒し、詩乃は気がついたように顔を上げる。

決して物音がした訳ではない。この部屋に誰もいない事は確認出来ているのだ。

けれども、詩乃は忙しなく部屋を見渡す。

この部屋に——ナッツが来る？

それは確かに嬉しい事であるが同時に女の子として、人間として確認しなくてはならない事がある。

埃は、ない。掃除は、この前の休みにした。大丈夫、何も問題は無い筈だ。

小奇麗と自分で思える程度には整頓はしている。大丈夫、何も問題はない。

いや、待て。こんな部屋着でいいのだろうか。

曲りなりにも相手は働いている社会人である。シノンのリアルが学生という事は知らないであろうけど、おそらく年下である事はわかっていて筈だ。それをふまえても今の自分の格好はマズい。ダボツとしたトレーナーとショートパンツである。加えて死銃の事もあり、僅かに汗を吸い込んでいるだろう。

頭の中で彼が来るかもしれない時間を予想し、計算する。希望的観測など不要。シャワーを浴びる程度の時間はある……筈。たぶん。

悲観するような時間など無い。着替えを準備しながら更に計算を詰めていく。伊達や酔狂で狙撃手のポジションについてはいいない。

服は、服はどうする？ 気合が入り過ぎてるとそれはそれでナッツの性格を思い浮かべれば笑われる事だろう。しかし、この格好はダメだ。ナッツがよくても自分では許せない。外行きでもなく、それなりの服――。

自身の所持する衣服をリスト化して頭に流しながら詩乃は行動を止める事はない。件の彼が何を用いてこの場所にやってくるかは分からない。少なからず徒歩ではない事は確かであるし、自分の理想からもかけ離れすぎている。タクシーというのが一番可能性として高く、そして彼がいるかもしれない場所からここまでタクシーで来るにしても時間は限られている。

そんな時間の無い詩乃の動きがピタリと停止した。銃を突きつけられた訳ではない。背中に銃口を当てられた訳でもないし、撃鉄の上げる音を聞いた訳でもない。

彼女の眼前には変哲もない自身の下着がある。綺麗に畳まれた色とりどりの下着達。見えない部分のオシヤレというのは必要である。確かに必要であるのだが、彼女が止まる理由はナッツの軟派な態度であつたり軽さである。

もしかしてのもしかして、があるかもしれない。もしもそうなった場合殴って逃げる気持ちではいる。けれども、しかし――。

極めて低い希望的可能性を思考に巡らせて、清潔で無難で地味でも派手でもない下着を選ぶ。その選択が正しいのか詩乃にもわかりはしない。

それでも自身の正しさに導かれた結果である。後悔などない。

シャワーを浴びた訳でもないのに茹だった思考のまま清潔な着替えとバスタオルを持って浴室へと向かう。

そこに誰も居ないことは既に確認している。けれど詩乃の手はユニットバスへの扉で停止した。

「……何してるのかしら」

我に返った。浮かれていた気持ちが全て沈下し、冷徹な思考へと

戻った。

バスタオルと着替えを手に持った自分の滑稽な姿に溜め息と苦笑を漏らして、思考を冷たいものへと変化していく。

死銃。ナッツ。キス。殺しの告白。キス。自分にとって衝撃の多すぎる数時間であった事は間違いない。何より半ば無理やり唇を奪われたのだ。

頭を振って妄想を振り払って、視線を下げる。バスタオルと清潔な衣服が腕に抱かれている。

少しだけ、ほんの三秒程思考して、詩乃は着替える事を決める。そこにやましい想像や妄想はない。僅かばかり汗の匂いがしているかもしれない衣服を清潔に保つ為である。

ユニットバスの扉の前、キッチンで衣服を脱ぎながら冷蔵庫の上に置かれた時計機能付きのキッチンタイマーを確認すれば、デジタル文字で時間を正確に刻んでいる。

体感時間よりも短い時間しか経過していない。そう感じてしまう程に長く、濃く、重い時間であった。普段の狩り以上に、以前の大会よりも、ずっと激しい戦いであった。

と、ブラジヤーのホックを摘みながら停止。自身の戦績と立ち回りを思い出して深い溜め息を吐き出す。

序盤の潜伏は仕方ない。狙撃手という立場上の弊害だ。どこかのチュートリアルのように狙撃銃を片手に敵に突貫し的にするなど自分には出来ない。

中盤。キリトとタッグを組み死銃を搜索した。これも、結果をみれば仕方ない事である。間違いなく、あの時間がなければ自分は死銃にアツサリと殺されていた事だろう。

中盤の終わり。キリトが倒され、タッグ相手がナッツへと変わった。そこから先は終盤までナッツと共にいたし、結果として二人同時優勝になった。

……経験も実力もあの二人に比べれば劣るであろう。けれども実力不足ではない。あのナッツを倒すつもりで参加したのだ。意気込みもあった。

けれど、まあ、客観的に見れば『姫プレイ』のようだ。チュートリアルと黒髪美少女を侍らせる狙撃手。次のログインが億劫である。

改めて深い深い溜め息を吐き出して着替え作業を再開する。

そう、ナッツを倒すつもりでいた。結果として同時優勝という選択肢を選んだ。

序盤。大会が始まるまでのナッツであったならば、倒せる。倒せたとと思う。確実に倒す方法も幾つか考えられる。

けれども、あの最終盤のナッツ。戦闘が終わり、満身創痍であったあの男。傷だらけで腕一本を欠損させた存在。その戦い全てを見ていた観客たちと自分。

印象が変わった。いいや、少し違う。きつとあれが普通なのだろう。

あの時、最後にナッツを目の前にした時。勝てないと意識が判断した。

目標が、憧れが更に高くなった。悲しくも、嬉しい変な感情が詩乃を染める。

負の感情ではない。目標が高ければ高いほど燃えるような人間でもないが、悲観をする訳でもない。

ただ彼の隣に違和感なく立てる為の理由であった。庇護下ではなく、相棒として、半身として、居続ける為の目標であった。だから諦める事もない。

ショットパンツを脱ぎ捨てショットへと指を引っ掛けて、古めかしいインターホンの音で停止する。

咄嗟の行動で壁に背中を押し付けて、息を潜める。玄関まで続く通路を確認するために最低限露出を控える。

ナッツにしては早過ぎる。他にこの時間に自宅を尋ねるような人間はいない筈である。

澄ました耳に鍵の開ける音は聞こえない。ドアが勝手に開く事もなければ、ロックが回転する事もない。

嫌に鼓膜を揺らす鼓動。生唾を飲み込む。

耳を澄ましたまま、視線を部屋へと向ける。逃げ道の確保——は絶

望的。立ち向かえる自信もない。

チェーンさえすれば――。そうドアにチェーンを掛ければ侵入は防げる。

足音を鳴らさずに、教わってもいないすり足でドアへと向かい、左手を伸ばす。

再びインターホンが鳴らされる。鼓動が煩い。ビクリと手が停止する。

「朝田さん、居る？ 僕だよ、朝田さん！」

少し高めの少年の声。ドアの向こう、インターホン機能付きの電子ロックから聞き慣れた声が聞こえる。

応える事もなく、レンズを覗けば、魚眼効果で歪んだ廊下に立っている同じく歪んだ知り合いである。

「新川、くん？」

「あの……どうしても優勝のお祝いを言いたくて……。これ、コンビニで悪いけど、買ってきたんだ」

ようやくインターホン越しに詩乃は少年の名前を呼んだ。自身をGGOへと誘った元クラスメイトの新川恭二。自身の安全の為に呼ぼうと思っていた、少年がそこには立っていた。

詩乃の声にすぐさま反応した恭二の手には近くにあるコンビニの袋。うつすらと見える形はケーキの入っている小箱だろう。

「は……早いね、ずいぶん」

咄嗟に、意図せずに出してしまった言葉。優勝してからの待機時間と自身が舞い上がっていた時間を足しても、新川家からコンビニに寄って、ここまで来る時間は足りない。

自宅ではなく近所の公園などで中継を見ていて、優勝すると同時にコンビニ経由で来たのかもしれない。AGI型のシユピーゲルを操る新川恭二ならば有り得そうだと、思考を打ち捨てる。

それに連絡する手間が省けたのは確かである。ホツと息を吐きながら、ドアノブへと手を伸ばして腕を止める。

「あー……ごめんなさい。少しだけ待ってくれる？」

「え？」

「その別に何でもないんだけど、少しだけ待ってくれない？」

「う、うん。わ、わかったよ……」

そう応えた恭二の声に息を吐き出して、慌てて部屋の奥へと戻る。危なかった。危うく、何も考えずにドアを開く所であった。自分の格好が上着を着て下がショーツだけなのもそうであるし、脱いだ服や下着が部屋に転がっているのもマズい。

気がついた自分をよくやったと褒めながら、頂いた少しばかりの時間で手早く着替えを済ませ、脱いだ衣服を洗濯用の籠へと放り込んで置かなくてはならない。

彼女に残されている時間は短い。

「どこでも、そのへんに座って。あ、何か飲む？」

「う、ううん。お構いなく」

「疲れてるから、そんな事言うとはほんとに何も出ないよ」

冗談めかしたやり取り。先に六畳間へと戻った詩乃は外気の寒さに身を震わせてリモコンを手取る。どういう訳か普段よりも二度程下がっていた設定温度を数度上げる。

その詩乃の背中を見ながら恭二は机の上にコンビニ袋を置き、ケーキの入った小箱を取り出し傍らのクッションの上へと遠慮がちに腰を下ろした。

「ごめんね朝田さん……急に押しかけて。でも、さっきも言ったけど少しでも早くお祝いを言いたくて」

「優勝って言っても一位タイだけどね」

「ううん。それでも凄いよ朝田さん。B O B 優勝、おめでとう朝田さん——シノン。G G O 最強のガンナーになっちゃったね。でも、僕は……わかってたよ。朝田さんには、誰にも持ってない、本当の強さがあるんだって」

「……ありがとう」

手放しでの賛辞に詩乃はくすぐったさを覚えて、心から上がってくる嬉しさを噛みながら、首を振る。

「でも、GGO最強のガンナーじゃないよ。最強はナッツ」

「違うよッ！ 最後のあの時、アイツと戦えば朝田さんが勝ってたに違いない」

「……………そうかもね」

食い気味に否定した恭二の言葉を詩乃は否定はしなかった。苦笑しながら曖昧に肯定し、瞼を閉じて最後のあの瞬間を思い出す。

手負いのナッツ。隻腕で傷のエフェクトもあつた彼。自然体でありながらも、隔絶された存在。

カメラ越しで見えていた恭二は感じなかったのだろう。ただ圧倒的な力を持つている存在にしか見えなかったのだろう。

それは自分とは全く違った印象だ。あの瞬間、シノンの装備に不備がなかったとしても殺されていただろう。直感的に、詩乃はそう感じたのだ。敗北の二文字ではない、死銃を殺したように歯向かえば死を与えられると感じた。

かと言って、そんな超常的な感覚を説明する訳にもいかず、詩乃は改めて苦笑を浮かべる。

「それに、もしかしたら大会自体が無効扱いになるかもしれないし」「え？」

自分の中の答えを口して、恭二の疑念の声に暫し考える。

彼は死銃の事を知らない。それに説明する意味も、薄いだろう。変な事に巻き込まれる、という意味では自分だけで十分だ。

「いいえ、なんでもない。ただ変なプレイヤーが居っただけ。それにしても、うちに来るの随分早かったね。まだ大会が終わって五分ぐらいなのに」

「あ、その……実は近くまで来て、携帯で中継を見てたんだ。すぐにお祝いを言いたくて」

慌て気味に言っている恭二に微笑んだ詩乃はやや呆れを含んだ声で「風邪、引いちやうよ」と零した。

何か温かいモノでも淹れるべきか、と立ち上がった詩乃の動きを恭

二の切羽詰まった声が止める。

「あの……朝田さん」

「な、なに？」

「中継で……砂漠の洞窟が映ってたんだけど……」

切羽詰まった表情にパチクリと瞼を動かした詩乃に向けられた言葉。その言葉の意図を読み取った詩乃はその時の状況を思い出して顔が熱くなるのを感じる。

「あ、あれは、その……違うくて」

発作と落胆、信頼と恐怖がごちゃ混ぜになつてあんなただけである。

自分の迂闊さを呪いたくなる。確かにあの場を思い出せばカメラがあつたかもしれない。いやそんな事が思い至らないぐらいに疲弊していたのも事実であるけれど。

まごまごと言葉を淀ませて、顔を俯かせる。顔が熱い。

「——あれは、あいつに脅されてたんだよね？ 何か、弱みを握られて、仕方なくあんなことをしたんだよね？」

「……は？」

熱かった顔が冷水でも掛けられたように冷えていく。

俯かせていた顔を上げて、恭二の顔を見る。冗談にしてはたちが悪い。

けれど、彼の顔は冗談を言うような顔ではない。奇妙な光を双眸に浮かべ、唇が不規則に震えている。その口からは次々と言葉が決壊したダムのように溢れてくる。

「脅迫されて、アイツの仲間と組まされて……。そうだ、普段だって、あのシンロンがアイツなんかと組んでるのがおかしかつたんだ」

「あ、新川くん？」

「無理やりキスマスまでされて、それでも、グレネードに巻き込んで倒したよね。だけど、それだけじゃ足りないよ、朝田さん。前にも言ったけど、もっとちゃんと思ひ知らせてやらなくちゃ……」

まるでそうである事を願うように吐き出された言葉。呪詛にも似たそれを全て聞いた詩乃は果たしてどこから否定すべきか、少し悩ん

で口を開く。

「その……ううん。脅迫とか、そういうんじゃないの。洞窟の時は、その、あんな事をしたのは不謹慎だと思うけど、発作が起きちゃって……」

「……」

「あ、っと……その、えっと。キスは、その……」

瞳を見開き、無言で視線を向ける恭二から逃げるように顔を逸らす。あの瞬間を思い出せば、顔が熱くなるから、あまり思い出させないでほしい。

「……朝田さん。でも、それは、発作で仕方なく、だよな？ あいつの事なんて、なんとも思っていないんだよな？」

「……新川くん？」

「だって、朝田さん言ったじゃないか。『待ってて』って。言ったよね。待ってれば、いつか僕のモノになってくれるって言ったよね。……だから、だから——」

恭二から吐き出される呪詛が古めかしいインターホンの音に止められる。

未だに危険性を含まれている死銃が思考に過ぎり詩乃の身体が硬直する。けれど、同時に助かったとも思えた。

「すみませーん、となりのかとうです」

部屋に響いたのは舌足らずな少女の声であった。

聞こえた声に詩乃は慌てて立ち上がり、ドアへと足早に移動した。少し、恭二が変になってしまった。けれど、間をあければ、きっと大丈夫だろう。

最大限に背後に警戒を向けながら、詩乃はロックを外し、ドアノブを捻った。

かとう。かとう……。加藤。隣。隣人の加藤……。隣人……。隣は、誰もいない筈だ。

ゾクリと背筋が凍る。けれど既に遅い。僅かに開かれたドアからは外気が入り込み、緩やかに開いていく。詩乃が止めるよりも早く、ドアは開き、隣人ではない存在が詩乃の視界に入った。

萌黄色の髪に寒さでやられたのか紅潮する頬。長い睫毛で彩られた大きな瞳。小さな唇。精巧に作られたブーツを更に選別したように整った顔立ち。純白のコート。緩やかにウエーブする髪が首元にあしらわれたファーに乗っている。足には黒のブーツが地面を踏んでいる。

思わず、息を飲み込んだ。まるで絵本から出てきた美少女であった。

その美少女が詩乃の顔を数秒見て、微笑む。可愛かった。鏡で見る自分よりも数倍可愛かった。

「その、えっと、おとうさんが困ったら、しのおねえちゃんをたよれ、って」

大きな瞳を潤ませて上目遣いで詩乃へと攻撃する美少女。不安そうな顔も素晴らしかった。

けれど、今この子を入れる訳にもいかない。謎の美少女である。なにより自分には死銃の事もあり、巻き込みたくはない。

「……朝田さん？」

「新川くん。えっと——」

何事かと、後ろから顔を覗かせた恭二にどう説明したものかと詩乃は迷う。

美少女は相変わらず不安そうな顔——いや、その顔は感情の一切を浮かべない人形のような表情に変化していた。

「……やっぱり」

「え？」

「死銃。ステルベン……シユピーゲル」

淡々と少女の口から吐き出される単語。その単語に息を飲み込んだ詩乃。

何故この少女が知っている？ 何故この少女が死銃の事を知っている？ まるで関わりがあるようにシユピーゲルの名前を——新川恭二の名前を連ねた？

「は、ハハっ、兄さんが言ってた事はホントだったんだ」

「な、何を言ってるの？」

「選択肢をあげます。無抵抗に投降するか、抵抗して捕まるか。前者なら、ある程度の便宜も図ります」

少女らしい声は変わらず、けれどもその声に感情の起伏はない。

まるで幻を見つけたように、恭二は顔を驚かせ、少女の言葉を聞いて笑う。笑ってしまふ。

「今の君に何が出来る？　ここはあの世界でも、GGOでもない！　だから、僕の邪魔をするなッ!!」

パーカーのポケットの中に手を入れて恭二が取り出したのはクリーム色の奇妙なモノであった。

詩乃が確認出来たのはそれだけで、手に隠れたソレを奇妙に思う前に恭二が一步目を踏み出した。頭の中で沢山の無意味な思考が過ぎる。

同時に、詩乃の腕が掴まれる。詩乃の前に自分よりも幾分も身長の低い純白が現れる。

一閃。

風切り音の直後に恭二の短い呻き声。手を抑える恭二を冷たく見る少女の手にはビニール傘が握られている。

カラカラと音を鳴らして転がるクリーム色のナニかを恭二は視線だけで追い、手首を抑えながら憎々しげに少女を睨む。

「どうして、どうして、おまえがっ。おまえなんか！」

「……抵抗は無駄です」

「は、ハハハ！　お前なんか、お前なんか!!」

拳を握った恭二が再度踏み込む。体格差。性別差。そのどれもが恭二にとって有利であった。それは、事実である。

傘による殴打など、先程の痛みから耐えられる事はわかる。少女を倒せば、詩乃もコチラに向いてくれる。恭二はそう考えた。

なんせ、相手は——不死者なのだ。

少女は殴りかかろうとしている恭二に目を細め、片手をコートのポケットへと入れて、一步を踏み出す。傘を腕に置いて拳を流し、コートから手を抜き、恭二の腹部へと押し当てる。バチリと激しい音が一瞬響き、恭二の身体がビクンと跳ねた。

力が抜けたように少女へと倒れる恭二を少女は支えようと踏ん張る。

「あの、し——朝田詩乃さん。助けて、助けてください」

「え、あ、ええ」

ようやく意識が戻ったように、目の前で困っている美少女から恭二を退けて、床に寝かす。

目の前で起こった事に未だに思考が追いついていない。突然来た謎の美少女に新川恭二が突然殴り掛かり、謎の美少女がソレを撃退した。まだ恭二が化け物に豹変して美少女が魔法少女になるほうが理解出来る状況であった。

美少女は土足のまま廊下を歩き、転がっていたクリーム色のモノをハンカチ越しに掴む。

「無針高圧注射器。なるほど、痕が残らない訳です」

「えっと、その」

「ああ、シユピーゲルは高圧スタンガンで攻撃しただけですよ？」

「いや、そうじゃなくて……」

詩乃は頭の中で一つひとつ問題を提示して、そもそもの問題へと行き着く。

小首を傾げる美少女に疑問を口にする。

「……誰？」

「……え？」

詩乃の直接的な問いに対して美少女はパチクリと瞼を動かして、少しだけ考えるような仕草をしてから頬を指で搔く。

あー、と声を漏らして、コホンと一つ咳をする。

「一応、約束したから来たんやけど？」

「……………は？」

「だから。B O B終わる時に約束したやろ。なるべく早く向かうって」

「——はあああああああ!?!」

少女を指差して絶叫する詩乃。その絶叫に美少女——ナッツであ

る加藤夏樹は片耳を指で塞ぎながら楽しそうに笑った。

第38話

十二月も半ばだというのに空は高かった。

放課直後の生徒達の喧騒も届かない校舎裏。

黒い土が剥き出しになる殺風景な花壇端に座ってぼんやりと宇宙にまで届きそうな空を見上げながら、朝田詩乃は白い息を溶かし込んだ。

こうして空を見上げる事が多くなつたのは彼の——ナッツのお陰なのではあるのだけれど、そのナッツが現在の詩乃の悩みのタネになっっている。

二日前の夜を思い出せばハッキリとその姿が記憶に映る。

緩やかに巻かれた萌黄色の髪。寒さで赤らんだ頬。まるで精巧に作られた人形。絵本から叩き出された天使。

その天使をあのおツサン臭い不死者とイコールで繋げる事は詩乃にはサツパリ出来なかつた。

それに加えたあの夜は沢山の事が起きすぎた。ナッツの事もそうであるし、その後によつてきたあの女の事もそうである。コチラも美人と言える人であつたのだが……。

改めて溜め息を吐き出して、詩乃は思考を止める。詳細は後日伝える、と自分を警察機関へと安全の為に受け渡したあの美女の言葉を全て信じるのであれば、もう暫くは時間が掛かるかもしれない。

果たしてあの警察機関とやらが正規のモノかどうかは詩乃にはわからない。ただ案内されたホテルが自分が思っていた数倍豪華であつた事は確かである。

つまるところ、詩乃にとって死銃事件と自身の中で便宜上つけられた事件の全容はある程度解けているけれど、それらの接点であるナッツかもしれない美少女と謎の美女は謎でしかない。あの少女らしい容姿の男性アバターのキリトと出会った時の方が衝撃は少なかつた。

美女。美少女。ナッツという男の存在。その他散らばったパズルのピース達。あのゲームの対象年齢。キリトの兄貴分。上手くピースを嵌めるために仮説を重ねる。

ナッツという存在は演技だと、役だと聞いた。ならば、あの美少女が役柄としてのナッツを演じて私の元に来た？ それならばGGOでのナッツと美少女がイコールで繋がれる事はない。けれど、ならばどうしてナッツは私の元にあの美少女を送った？ 新川恭二……死銃に襲われると思わなかったから？ それに役柄だとしてナッツを演じたあの美少女の正体は？ あの場で警察機関などに連絡をしたであろう美女が居たのは？

疑問に疑問を重ねながら慎重にピースを嵌めていく。

詩乃の中で有力であるのは『GGOでのナッツ』と『美少女』は別人で『謎の美女』の上に『GGONナッツ』が存在し、『GGONナッツ』がそれなりの資産家である。美女は秘書さんか何かだろうか？ 明らかに豪華すぎたホテルなどを考えればそれなりの資産があるのだろう。それこそネットで知り合った小娘を助ける程度には。

なら何故『GGONナッツ』は『美少女』を私の元へと送ったのだろうか。勘違いして愉しむ為、とか言われてもナッツだから有り得そうだと思えるのも詩乃の頭を悩ませる原因である。

授業中にもした考察内容が未だに納得いかず、「いや」「けれども」「しかし」と云々膝に置いた通学鞆を抱きしめる。

そんな詩乃の鼓膜が甲高い笑い声と共に近づいてくる足音を捉え、詩乃は考察の空から視線と意識を現実へと下ろした。

校舎の角と焼却炉の間にある通路から出てきた少女三人。詩乃を呼び出した存在であり、詩乃の頭を悩ませるもう一つのタネでもある。

地面を少し鳴らして立ち上がれば三人の少女は詩乃へと顔を向けて嗜虐的な笑みを浮かべる。

「呼び出しておいて待たせないで」

「朝田さあー、最近マジ調子のとってない？」

「ほんとー、友達に向かってそれはないんじゃないの？」

詩乃の言葉に少女の一人が笑みを消して苛立たしげに言葉を吐き出す。それに追従するようにもう一人が言葉を付け足す。

世間一般的にこの関係を友達と言えない事は詩乃もそして目の前

の三人も知ってる。加虐者と被虐者の関係でしかない。そして詩乃自身は被虐者であり、抵抗する者でもある。

自身の発作の事を知っている三人。そしてその原因となる事件も知っている三人。詩乃の発作を——弱さを脅している三人。

詩乃から二メートル程離れた場所に立ち止まり、威圧的に視線を送る六つの瞳を視界に入れながら、詩乃はその視線を真ん中にいる一人の少女へと集中させた。

その少女はにいつと笑みを作り上げ、威嚇していた左右の二人を抑えるように口を開く。

「別にいいよ。トモダチなんだから何言っても。そんなかしきあ、アタシらが困ってたら助けてくれるよな。っーか、今超困ってんだけど」
威圧的な態度はそのままに、トモダチは困っているらしい。心の中で反吐を吐き出す詩乃の事など考えずに更に言葉は詩乃に突き刺さる。

「とりあえず、二万でいいや。貸して」

まるで消しゴムを借りるような気軽さで放たれた言葉に詩乃は驚きもしなかった。慣れたこと、予想していた、どちらにせよ彼女らがそう言う事はわかっていたのだ。

感覚的な防護壁であるメガネを外して、詩乃はありつただけの力を込めて少女達を睨む。

「前にも、言っただけど。あなたに、お金を。貸す気は、ない」

「はあ？ ゴメンな朝田。もっかい言ってくれるか？」

わざとらしく、詩乃に再度言葉を求める少女。聞こえなかった訳ではない。更に威圧を込めている事がその証明だ。

震える手を隠すようにメガネと共にポケットに押し込んだ詩乃は一度瞼を閉じて、改めて少女を睨んで口を開く。

「人語も理解出来ない猿に貸すお金はない、って言ったの。おわかり？」

高圧的に。絶対の上位者らしく、詩乃は誰かのようにユーモアを含めて吐き出した。

詩乃自身、どうしてこんな言葉を放ったのかわからない。けれど心

の中にいる彼が背中を押ししてくれる。そう思えた。

どうやら人語は理解出来たらしい人間の少女は目をキュツと細めて更に詩乃を威圧する為に一段低い声を放つ。

「……マジでちょーしノんなよ？ 言つとくけどな。今日はマジで兄貴からアレ借りてきてんだからなマジで。泣かすぞ朝田」
「好きにすれば？」

やや言語能力が欠落しているのか、地頭が問題なのか、それとも詩乃に反撃されたことが思った以上に腹を立てているのか、何にしろ詩乃にとつてはどうでもいい事であった。

詩乃の短い挑発に乗ったのか、少女は口の両端を上げてジャラジャラとストラップが付く女子高生らしい通学鞆から黒い自動拳銃を取り出した。

覚束ない手つきで大型のモデルガンを詩乃へと向けて少女は歪んだ笑みを浮かべる。

なんせ朝田詩乃は手で銃の形を象つただけで吐くような発作がある。

事実、詩乃は少女らに幾度も追い込まれ、そして現在もその心を凍らせている。

少女が朗々と、脅すように性能を言葉にしている事などまったく聞こえない。ただ詩乃の視線は黒い銃口へと注がれ続けた。

心臓が跳ね上がる。ゾワリと逆撫でされたように不快感が全身を犯す。何もかもが遠く聞こえ、冷え切った血が全身の熱を奪っていく。

銃に視線が集中し、持つ腕を伝い、少女の顔を視認する。暴力に酔っているような少し血走った瞳。

歯を食い縛る。耐える。僅かな痛みが現実にいる事を証明してくれている。

黒い銃口へと視線が吸い込まれる。変哲もない鉄の塊。無慈悲な武器。恐怖。赤。死。

直近の記憶がフラッシュバックする。強くソレを感じた記憶が掘り起こされる。忘れすら出来ない、身動きも出来ずに殺されそうに

なつたあの瞬間。

視界が揺れる。血の気が引いていく。倒れそうになる。呼吸すらも覚束ずに喉が詰まる。

トクリと鼓膜を何かが揺らした。誰もいない筈の背中から温かい感覚が広がる。優しく、力強く、自分の背中を押してくれる。

「クソっ！　なんだよこれ！」

二度、三度撃とうとしても弾の出ない銃に苛立つ少女。銃から出て来るのはプラスチックの小さな軋みだけだ。

詰まっていた呼吸を深く息を吸い込むことで再開する。お腹に力を含めて、銃を持つ少女から目を離してどこまでも高い空を見上げて、大きく息を吐き出す。

持っていた鞆を地面に落とし、手を伸ばす。片手で少女の手首を掴み、もう片方で銃自体を掴んで、銃口を反転させる。容易く少女の手から離れた銃は詩乃の手に収まった。

銃口を下に向けながら、リリースボタンを押し込んでマガジンを取り出す。地面に落とすことなくマガジンを掴む。

少女へと視線を向ければ怯えた視線が詩乃へと向いていた。

詩乃はそれらに興味を見せないようにして、ただ無感情に銃を見つめる。

「1911ガバメントか。お兄さん、渋い趣味ね。私は好きじゃないけれど」

慣れた作業のように、マガジンに弾が詰まっている事を確認して銃へと収め、自然と手が二箇所セイフテイの安全装置を外す。

親指でハンマーを上げた所で焼却炉の傍らに並ぶポリバケツの上に置かれた空き缶へと視線と銃口を向ける。

左手をグリップに添えて照準を合わせる。右眼と照門、照星が作る直線に空き缶を捉えて、少しだけ上へと修正する。小さく、細く息を吐き出して、息を止めて引き金を絞る。

ぱす、と気の抜けた音と共に放たれた四・五ミリの球体が銃口から飛び出して空き缶へと命中した。手にはコイルショックが残り、ちやんとブローバックした事に感心する。

目算で六メートル程離れているが、初めての銃でも当たるものだと驚きながら軽い音を鳴らして落ちた空き缶から少女らへと視線を戻す。

少女らの瞳には恐怖が宿り、詩乃を捉えている。

復讐する？ 今の自分には武器もある。今までの事も含めて仕返しをしても罰などないだろう。

詩乃は銃を下げて、息を吐き出した。それは、意味のない事だ。無意味な事なのだ。

怯える少女らを見て、詩乃は視線を緩めてハンマーをデコックし、二つのセーフティを戻す。

「確かに、人には向けないほうがいいわ、これ」

銃を片手で反転させてグリップを少女に向けて返す。恐る恐るというふうにグリップへと手を伸ばし、受け取った事を確認して、詩乃は銃から手を離して鞆を拾い直す。

歩き出せば、三人が自分に道を譲り、詩乃もそれに従い彼女らの間を通り抜ける。

角を曲がった所で校舎に背中を預けてズリズリと座り込む。

足が震える。力が入らない。ごうごうと耳鳴りが酷く、手が震える。冷えた血が全身を駆け巡り、冷や汗が流れる。

ゆっくりと息を吸い込んで、細く吐き出していく。瞳に空を映して苦笑する。

二度目は出来ないだろう。震える手が、感覚がソレを証明する。けれど、これが一步目だ。

彼のように全部、とは言えないけれど、抱えて、背負って進むための、一步目だ。

強く拳を握って、大きく息を吸い込んで、ゆっくりと吐き出している。強く拳を握って、大きく息を吸い込んで、ゆっくりと吐き出している。

足に力を入れて、立ち上がり、スカートに付いた埃を払う。

空を瞳に閉じ込めるように瞼を閉じて、前を向く。

朝田詩乃は足を前に進めた。

改めてメガネを装着した詩乃は帰路に着こうとして、足を止めた。学校の敷地を囲む高い塀の内側に幾つかの生徒達の集団が足を止めて、校門へと視線をチラチラ向けながら顔を寄せて何事かを話している。

首を傾げながら、詩乃は集団の内の一つが同じクラスのそこそこ仲がよい二人である事に気付いて足をそちらへと向ける。

疑問を頭に浮かべていれば詩乃に気付いたのか、にこつと笑顔を浮かべて手を上げる。

「朝田さん、今帰り？」

「うん。……何、してるの？」

聞けばもう一人の女生徒が肩を竦めて、首を横に振りながら応える。

「なんか、凄い美人のOLさんが黒塗りの車でニコニコしてるのよ。ウチの学校にお嬢様でもいるのか、って感じ。悪趣味だけど気になるじゃない？」

血の気が引いた。極々最近に身に覚えがあった。

いや、けれども先日の美女は身体のラインがくつきりと分かるライダースーツを着用していたし、バイクに乗っていた筈だ。だから、今噂されている凄い美人のOLさんとは別の人であるに違いない。

おそろおそろる塀へと身を寄せて、校門の向こう側を見れば、レディスーツを着用した美女が路駐した車の近くに立っている。編み込まれた黒く長い髪が風に揺れ、長い足を惜しげもなくタイトスカートから伸ばしている。

そのOL風の凄い美人さんはニッコリと笑みを浮かべて、愛想を振りまいているのか、顔を覗かせる詩乃に気付いたのか手を軽く振っている。詩乃は頭を抱えた。

「ええつと、朝田さんの知り合い？」

「え、ええ……そう、みたい」

「そ、そう……」

物理的な距離ではなく、精神的な距離が一步程離れた気がした。自分がお嬢様でない事など既に知れている事だし、それを含めればあの黒塗りの車は完璧なまでに恐怖の対象になるだろう。

きつと同級生達の脳内には『一人暮らし』『黒塗りの車』の二点から『借金』という言葉が出てきて、あとはお察し状態になっている事だろう。或いは脳の代わりにお花畑でも広がっていたならば少女漫画よろしく富豪でイケメンな同級生から求婚されたヒロインか。反応を見れば後者を思われている事はないだろう。ここは現実である。

「えつと……そういう事、だから」

「朝田さん。頑張ってるね」

一体何を頑張れというのだろうか。詩乃は言葉を返すことなくそう思った。明日の登校が少しだけ怖くなった。

校門を潜って車へと近寄れば、男子生徒の視線を集めている女性がニツコリと詩乃に微笑む。

「二日ぶりです。朝田詩乃さん」

「……その、迎えとかなら自宅でもよかったですんじやないですか？」

「コチラの方が噂になつて後々楽しいと思ひまして」

ああ、この人美人だけどダメな大人だ。詩乃は直感した。先日の警察機関への連絡などを即座に熟していた美女と同一人物とは思えなかった。

いい笑顔で詩乃を陥れた美女は車の後部座席の扉を開き詩乃を促す。案内に従うように、後部座席へと乗ろうとした詩乃は先に乗っている存在を目にして、止まる。

少し長めの黒い髪と対照的に色素の薄い肌。びっくりするほど細い身体に童顔が乗せられている少年。

「……ど、ども」

「……えつと、どうも」

短い挨拶をして、詩乃は思考を巡らせる。

目の前の男の事である。あらゆる可能性、そして今ココにいない先日の美少女。これが——ナッツ？ 思考を否定する。ナッツであるならば先程のような挨拶はおそらくしない。変な理想であるけれど、

違う。ナッツよりも近似なイメージが頭を過ぎる。

「……その、もしかして、キリト……?」

「あ、ああ。シノン——でいいんだよな?」

「ええ……」

「お互いに挨拶も済んだようですし、移動しましょうか。流石に居座りすぎました」

「あんたがそれを言うのかよ……」

運転席へと座った美女の言葉にキリトが反応した。それは詩乃の代弁でもある。

明らかに年下であるキリトの言い草にも笑いながら美女——ナナクサ七草ナズナ齊は車を走らせた。

車の中でキリト——桐ヶ谷和人による自己紹介と今回の事件の全容を聞いた詩乃は凡そ自分の予想通りであったのですんなりと事実を受け入れる事が出来た。

人間の感情などはさっぱり考察に入れていなかったし、あの時の死銃がシュピーゲル——新川恭二の兄という事も初めて聞いたけれど、納得はした。

果たして全てを理解したか、と聞かれれば答えは否なのであるが。それでもなんとなくは理解出来た。

和人と詩乃の自己紹介の時に同じく自身の自己紹介もした齊は四苦八苦している和人に時折助け舟を出しながら目的地へと向かって運転をし続ける。助け舟が大漁旗よろしくデコレーションされていて和人は余計に困ったが。

車が止められ目的地へと到着した。

齊に案内されながら少しだけ歩いて到着したのは、いかにも高そうな喫茶店であった。詩乃は緊張を表に出しながら、和人はそれなりに慣れているのかウエイターと話さない事に安堵しながら、齊に至っては緊張を露わにしている詩乃を感じてニマニマと笑いながら歩いて

いる。

白シャツに黒蝶ネクタイのウェイターが深々と頭を下げている事に狼狽している詩乃を楽しみながら薺は慣れたように待ち合わせであることを伝え、店内をぐるりと見渡す。

見渡している最中にガタリと音を立てて立ち上がった男に店内の利用客と三人の視線が集中する。買い物途中のご婦人方の視線すらも独り占めに行っている男にニツコリと笑みを浮かべた薺は「アレです」とまるで物品のように待ち合わせ相手をウェイターに告げて店内を歩く。

ダークブルーの高級そうなスーツにレジメンタルタイ、黒縁眼鏡の背の高い男がかなり緊張した面持ちで背筋をしっかりと伸ばして立っていた。

「ご苦労様です」

「いえっ申し訳ありません」

「好きでした事なので構いませんよ」

自然体である薺に対して緊張しすぎている男に和人は我慢出来ずに吹き出してしまふ。詩乃からしてみれば何がなんだかわからないけれど、長身の男が薺が美人だから緊張している訳ではない事はなんとなくわかった。

吹き出した和人に眉を曲げて情けない表情を作った男は少しだけ納得いかないように口を開く。

「僕からすると、この人に普通に接してる君の方が異常なんだけど」

「俺はこの人に慣れてるし、許可も貰ってる」

「SAOでの話だろう？ 上司から怒号のように言われる僕の身にもなってくれ」

「……その、えっと」

「ああ、すまないね。とりあえず座ろうか。七草様の椅子は——」

「結構です。そこまで老いてませんよ」

薺の椅子を引こうとした長身の男の顔が蒼白に染まる。数秒程固まった末にようやく再起動を果たした男が一番最後に座り、ウェイターが何も見なかったかのように即座に湯気の立つお絞りと革張りを歩く。

のメニューを三人に渡してそそくさと姿を消していく。

「なんでも注文していいですよ」

この場の決定権を既に握っている齋がそう言えば和人が遠慮もせずメニューを開き、詩乃も倣ってメニューを開く。並んでいる英語表記の何かの名前とカタカナのルビ。そして四桁の数字が並んでいる事に詩乃は凍りついた。

「安心してください。私が払いますので」

「え、いや！ その、ここはコチラが」

「まあ！ アナタの給料でお支払いただけのですね。まさか市民の血税を交遊費に充てるなどしませんよね？」

「——ハイ」

男の顔が真っ白に変わった。ここまで来ると少しばかり気の毒にも思えてしまう。和人は自業自得と思っているが。

男を陥れた事で上機嫌になっている鬼のような美女はその顔に満面の笑みを浮かべてエスプレッソを頼む。甘味は隣に座る男の反応と蒼白の顔である事は間違いないだろう。

遠慮と良心の都合でアールグレイだけを頼もうとした詩乃にレアチーズケーキを勧めて注文に含めておく。隣にいる男は顔が凍りついているが口から魂か何かが出ているような気がした。気のせいだろう。

詩乃の隣にいる和人は大して男の様子を気にした様子もなく好きなモノを注文する。恨みがましい視線が和人を突き刺したがコホンと齋がわざとらしく咳をするとその目は白くなった。

果たして男——総務省総合通信基盤局に所属する菊岡氏が顔を青くしながら今回の事件の謝罪、そして詳細の説明をしていく。

始まり、新川兄弟——昌一と恭二の事。SAOで兄である昌一が虜囚となったこと。昌一の人物像。どのように犯行が行われたのか。そして今後このような事がありえるのか。

政府としての菊岡の言葉に質問を交えながら続けられる会談。

信じていた新川恭二であるが——いや、だからこそ詩乃は全てを知っておかなくてはいけない。

「それで……、今回の協力者であるナッツなのだけれど——」

「あの方には私から伝えておきます」

「では、感謝と謝罪を、申し訳ありませんがお願いします」

「——感謝？」

「キリト君伝いだけれど、彼の協力も大いに役に立っているんだよ。それに彼が大会で大立ち回りしてくれたお陰で参加者の何人かは死銃の餌食にならなかった」

GGO内での彼の評価を知っている詩乃からしてみれば大立ち回り、というよりも必然的な出来事だと思ってしまう。けれど、同時にナッツならば、という印象も受けてしまうのも事実である。

「それで……そのナッツはどこに？」

「我が君はお仕事中です」

「……あいつ仕事してるのか？ その、大丈夫なのか？ 色々」と

「ええ、問題ありません。……いえ、素敵過ぎて問題はありますが」

「いや、そうじゃない」

陶酔しきつている薺の言葉に頭痛を感じる和人。

詩乃にしてみれば、ナッツという存在が未だに不明瞭なのだ。あの美少女な訳がない。そもそもナッツは男性アバターであるから、女性ではない。

「……ホントに君たちはこの人を知らないんだねえ」

「私はメディアに露出してませんから」

「それは、そうなんですが……」

「えつと……薺——さんって何かあるのか？」

「ウィードで構いませんよ。和人さん。私は——そうですね。いい所のお嬢様なんですよ」

「………お、おう。なんでソレがコイツが謙遜する理由になるんだ？」

「いいかい和人くん。日本政府に対して強く出れるほどいい所なんだよ」

数秒、詩乃と和人の時間が停止する。目の前にはニコニコと笑みを浮かべている薺と顔を青くし続ける菊岡氏。

状況を理解した和人が冷や汗をダラダラと流し、S A Oを含めて現実世界での物言いがフラツシユバックした。

「ま、今はとある会社の取締役ですよ」

「その会社も大企業なんですが……」

「——菊岡さん？」

「ナンデモアリマセンモウシワケアリマセン」

「それに会社に関しては夫の会社を仕方なく継いだけですので、今の私は単なる美人なお姉さんですよ」

単なる美人なお姉さんは政府の人間を顔面蒼白にはしない。詩乃はそう思った。当然口には出すことはない。

和人に至っては夫という単語で何かを思い出しかけて、思考がそれを放棄した。急いでその記憶に鍵が掛けられて深い所に押し込められた。

菊岡に至っては抑揚のない声で機械のようにモウシワケアリマセンと呟いている。

そんな中一人、美人なお姉さんだけはそんな三人をととも楽しそうに鑑賞していた。

第39話

静かに鼓膜を揺らすエンジンの振動。隣に走る車の音。

詩乃の顔がアーモンド色の瞳に映り、薄めのルージュに彩られた唇が動く。

「――私は貴女の事が大嫌いですよ。朝田詩乃さん」

甘く蕩けるような声色。口角が歪んで上がる笑い顔。けれどその瞳からは敵意だけが感じ取れる。

まるで仮想世界で味わうような濃密な敵意。息が詰まる程緊張しているのにも関わらず、身体だけは咄嗟に自分の後ろ腰に触れた。そこに在るはずの銃を探して。

現実世界にはない銃を取れる訳もなく、容易く空に触れて、革のシートを引つ掻いた。

「つと、そろそろ時間ですね。行きましようか、朝田詩乃さん」

内側に止められた腕時計を確認した薺が鞆を持って立ち上がる。急かすように詩乃に向かって笑んでいるが、微笑まれた側はさっぱり内容を理解していない。内容を言っていないのだから当然ではあるのだけれど。

首を傾げる詩乃を見て、薺も首を傾げ、納得したように手を打つ。

「我が君を迎えに行くんですよ」

「……ナッツを？」

「ええ。来たくありませんか？」

「行き、たいです」

それは詩乃にとつての本心であった。

未だに不明瞭極まりないナッツの姿。どのような男なのか、『我が君』と薺に言われている存在。元華族の大企業の実業家にそう言われている存在だ。詩乃としては石油王が出てきても驚きはしない。

そんな詩乃の隣で座っていた和人の身体が動く。

「どうしました？ 和人さん。お手洗いはアチラですが……」

「俺も行くよ。ナッツと色々話したいし」

「ああ、なるほど、なるほど。けれど和人さんはお断りです」

「……なんでだよ」

「私や詩乃さんが居たら話せない内容もあるでしょう？ ね、菊岡さん」

齊がチラリと確認すれば見通された事が気まずそうに頬を搔いて苦笑する菊岡。和人個人に話す内容である報酬や他の依頼であったり、或いはまた別の事情か。

どちらにしろ菊岡の様子に内容を察した和人は隠そうともしない嫌そうな顔をして腰を下ろした。

「では、行きましようか。朝田詩乃さん」

「は、はい」

年上の女性。元華族であり、大企業の代表取締役。先程まではなかった緊張が詩乃をじわじわと追い詰めていき、やや固まりかけている詩乃を見てドコか楽しそうに齊は笑った。

行きとは違い、車内は静かなエンジン音に包まれていた。

暗色に染められた流れる窓の外を眺めながら詩乃は思考に浸る。ナッツ本人に会う。きっとそれは自分に必要な事だろう。

ようやく、いいや、やっと乗り越える為に足を進めた自分。きっとそんな自分を彼は褒めてくれるだろう。いや、適当に流してしまうかもしれない。後者の方が可能性が高いのは、余所に置いておこう。それに聞かなくてはいけない事もある。最後のあの時、彼の言った言葉。

言葉。

——もうGGOは出来ないかもしれない。

リアルで詳しい事情を話す、と言いなながらも今日に至るまで姿すら見せなかった男。会う人間がどのような格好であろうと、ナッツであることは変わらない。だから詩乃は会ったらずは詰め寄ってやろうと考えた。

あの言葉はどういう意味なのか。どうしてあの少女を自分の所に

向かわせたのか。そして薺との関係は？ 彼に聞かなくてはいけない事も沢山ある。

けれど、その前に確かめておかなければならない事もある。

「あの、七草、さん」

「はい。どうしましたか？」

「その……どうして私だけ、なんですか？」

「……和人は菊岡さんとの用事ですので、仕方なくですよ」

「……ホント、ですか？」

運転席に座る薺に対して詩乃は恐る恐るといった風に確かめる。

和人と菊岡が個人的に話す内容があった。それはきつと本当の事なのかもしれない。その真偽を確かめる術はない。けれど、詩乃を連れ出すのは今日でないとダメだったのだ。

それがナッツ個人の事情か、それとも別の事情かは詩乃には分からない。けれども薺が詩乃だけを連れ出したのは何か理由があるのだろう。

考え過ぎかもしれない、けれどおそらくこの考え方は正しい。

「嘘ですよ」

運転席から聞こえたのはアツサリとした自白であった。そして同時にどこか楽しそうな上品なクスクスとした静かな笑い。

「察しのいい子は嫌いじゃありません」

「どうして……私だけ？」

「一つは我が君からのお願いです」

流れていた景色が緩やかに速度を落とし、立ち並ぶ雑居ビルが窓にはめ込まれた。

サイドブレーキが引かれ、身を振って薺は後部座席に——朝田詩乃に笑みを貼り付けた顔を向ける。

「一つは私の個人的な理由です」

息が詰まりそうになるほど明確な敵意がその瞳には宿っていた。

自然と動いた手が後ろ腰にある筈の仮想世界の銃へと向く。手が空を握る。

「私は貴女の事が大嫌いですよ。朝田詩乃さん」

きっぱりと宣言された言葉に詩乃は息を飲み込む。歪んだ笑みを浮かべる薺は更に言葉を続ける。

「だって、貴女は我が君を殺したんです。私の——私達の王を、ナッツを殺したんですから」

「それは——」

鈍器で頭を殴られたような感覚が詩乃を襲う。否定する。自分はナッツを殺せてなどいない。

それこそ現実世界に影響して殺していた死銃ではないのだ。殺した、死んだ、と表現した所で、それは所詮ゲームの中での話でしかない。そうであるはずなのに。

否定する。否定しなくてはならない。事実ではないのだから、否定すべきだ。そんなことは分かっている。けれど薺の言葉が、薺の瞳がそれが真実であると告げている。

「B o Bの参加はあの方が決めたことです。けれど、それこそあなたの為だった。アナタさえ居なければ彼はまだ生きていた」

瞬きすらしない、ドロドロとした感情が渦巻いた瞳。悲しみ、恨み、嫉妬、怒り、負の感情を一緒くたにした感情が顔から溢れ出ないように笑顔で蓋をされている。それでも詩乃がそう感じてしまうのは、少しばかり漏れ出しているからか、それともそう意識させているからか。

「ああ、許せない——許せない。あの方を殺したアナタが許せる訳がない。殺してやりたい程憎らしい。彼を殺してあげたアナタが許せない……」

溢れそうになった液体を瞼を閉じて抑え込んだ薺は小さく息を吐き出して運転席へと戻る。ハンドバックの中に収めていたハンカチで目を軽く押さえて零れそうな涙を吸い取らせる。

知っていた。彼がどのような人物で、どういう存在であるかなんて、薺は知っていたのだ。だからこそ薺は詩乃が許せる訳がなかった。主を殺した仇敵——ではない。主に死を与えてくれた彼女を許せる訳がない。

醜い嫉妬である事はわかっている。羨ましきで詩乃に八つ当たり

したのも自覚している。けれど、これは口に出さなければいけない感情だ。

「……私は——」

「朝田詩乃さん。今なら、まだ間に合いますよ。単なる好奇心で彼に会うのはお止めなさい。傷付くのはアナタです」

ガチャリ、と後部座席のロックが外れる。

詩乃の頭の中で渦巻く考察。その考察の全てが薺の言った事が本当であると告げてくる。

ゲームの中で死んだナッツという存在。そして死んでしまったナッツ。詩乃が殺したナッツ。そのどれもが同一で、真実で、事実であつたならば——。

ナッツを殺した。殺したのは、自分だとすれば。達成感など無い。ポツカリと虚無感が支配し、緩やかに身体を支配していく。

いいや、きつと薺の言った事は真実ではない。そう思うのはきつと簡単な事だ。けれど、それでも、心のどこかでソレが真実であると思つてしまう。

逃げ出したなら、この虚無感に支配される事なく、あらゆる可能性を投げ捨てて薺の言葉を嘘と断言出来る。ナッツは死んでない。私は殺してない。現実世界のナッツが死ぬ訳がない。

けれど、それが本当だつたら？

頭の中に存在しているナッツが。ボロ外套の長身の男が。憧れの存在が、砕けて消える。

きつとソレはこの夢の終わりだ。あの日よりもつと強い何かが自分を支配するだろう。赤の他人を殺した訳ではない。もつと自分に親しい存在を自分の手で殺したのだ。

血が冷えていく。指先が凍りついたように動かない。まともに肺が機能しないのか喉で呼吸が詰まる。胸が苦しい。視界が白んでいく。乱暴に自分の胸元を掴んで無理やり意識を保つ。

逃げ出したい。この女の言葉を全部否定して、逃げ出したい。そうすれば、きつと私はこの苦しみから逃れる事が出来る。もう、考えなくともいい。なんせ、全部否定しているのだから。

「……私は、逃げません」

それでも口から吐き出した応えは肯定であった。

前に進むと決めたから。殺した人の全部を背負い込むと決めたから。この罪も、この罰も、この責任も、この苦しみも、全部含めて私なのだから。目を逸してはいけない。きっとそれは精算しなくてはならない事なのだ。

逃げ出したい。けれど逃げてはいけない。きっと、彼ならば逃げる事も肯定するだろう。それでも、私は私を愛してあげなければいけない。この汚れた両手を自覚し続けなければならない。

バックミラーで詩乃を見つめ続けていた薺はつまらなさそうに息を吐き出した。

逃げ出さなかった。逃げ出すように仕向けたのに、逃げ出さなかった。出来ることならば詩乃と主をこれ以上一緒にしていたくはない、という嫉妬心もあったけれどどうやら無駄に終わったらしい。

諸事情で彼女の事を調べ上げ、彼女の事情も心境も把握していると思っただけれど、どうやら見通しが甘かったらしい。少しばかり詩乃自身の事も考えた進言ではあったのだけれど、彼女は逃げない選択をした。

きっと逃げる方が楽であつたらうに。

「そうですね」

短く返した薺は自分が笑っている事に気がついた。嫉妬もするし、恨みもしているけれど、それらを省けば彼女には好感が持てる。言わないけれど。

少しだけ自分の中にある朝田詩乃の評価を上方修正し、手首の内側に留めた時計を確認する。時間通りならば、そろそろだろう。

無遠慮に、後部座席の扉が開いた。

キャップを目深に被って、灰色無地のパーカーに細めのジーンズ、萌黄色の髪をキャップの穴から一つに束ねて出している少年……のような少女が車の中へと入り込む。

少女は同じく後部座席にいた詩乃をチラリと見て、微笑む。詩乃はそこでようやく彼があの日によつてきた少女である事に気付いた。

「お疲れ様です。我が君」

「はい。齊もありがとうございます」

「いえ、好きでしている事なので」

簡単なやり取りのあと、車はゆっくりと走り出す。

少年のような少女と齊のやり取りで詩乃の肩が震える。ああ、やっぱり。と頭の中のどこかで納得をする。否定していた事を否定されるように、けれど、それでも詩乃は納得をってしまった。

「……ホントに、ナッツなの？」

恐る恐る、きつとドコかで信じたくない気持ちがあつて、それでも目で見ている事実を否定する事もなく。詩乃は口を開いて彼女に聞く。

少女はどこか困つたような顔をして、一度口を開いて、閉じる。自身の胸元に拳を置いて、一つ深呼吸をした。

「はい。けど、僕は正しくナッツじゃありません」

肯定と否定の入り混じつた応えが少女から吐き出された。

キヤップを外して、纏められていた髪を解いて二度ほど首を振れば萌黄色の髪がふわりと広がった。

きつと、詩乃を騙す事は容易い事だろう。と少女は思う。けれど、それは自分の為にも彼女の為にも、そして彼の為にもならないだろう。

「改めて、はじめまして。朝田詩乃さん。僕は加藤夏樹。GGOでナッツを操作しました」

「……はじめまして」

「………ちなみに、男、です」

「はあ!？」

詩乃の大きな声で驚いたのか目を閉じて身体を縮こまらせた夏樹が片目を薄く開いて詩乃を確かめる。怒っている、訳ではない。単純に驚いただけだろう。

詩乃は頭を抱えながら目の前にいる少女——にしか見えない少年

を見る。肩よりも長い萌黄色の髪も、肌のきめ細やかさも、手や指の細さも、大きな瞳も、長い睫毛も、どこを見ても彼女にしか見えない。それでも夏樹がナッツであるならば、夏樹は男であると言える。

——けれど。彼が最初に言っていた言葉が引つかかる。

「ナッツじゃない、ってどういう事？」

詩乃の疑問に夏樹は少しだけ目を伏せて、小さく息を吐き出して、事実を伝える。

「……彼は——ナッツは死にました」

「——え？」

事前に聞かされていた事実であった。けれどもやはり息を飲むには十分過ぎる事実であった。

驚きを露わにした詩乃を見て、夏樹は慌てるように手をわたわたと動かして、口を動かす。

「その、死んだというのは僕の間接であって、えっと、その、本当は消えたと言いますか、あの」

「……ああ、我が君は可愛いなあ」

「薺は黙っててください！」

運転席から聞こえた言葉に夏樹は声をあげる。けれどもそれすらも嬉しかったのかクスクスと笑われる。

唇を尖らせて不満そうにしている夏樹が小さく息を吐き出して混乱にいらるであろう詩乃を見る。その瞳は真っ直ぐに夏樹を貫いて、答えを求めていた。

夏樹は瞼を動かして、納得した。きっとそんな彼女だからこそ、彼を変えてくれたのだろう。

だからこそ、答えなくてはならない。それが、きっと彼の望んだ事なのだから。

「ナッツは……彼は僕のもう一つの人格なんです」

第40話

別の人格。二重人格。多重人格。解離性同一性障害。

文字数も何もかもが違う同じ意味の言葉達が詩乃の頭を駆け巡る。それこそサブカルチャーとしての知識でしかそれらを知らない詩乃であるが、その言葉達が意味する事は漠然とであるが理解する事は出来た。

自分ではない自分。他人ではない他人。ジキルとハイド。頭のどこかで創作上のモノだと思っていた事象が目の前にある。それは、嘘だと言いたくなるような事実を孕んで、目の前に在るのだ。

声を飲み込んだ。

否定の言葉を、喉の奥へと無理やり押し込んで、歯を食い縛る。きつと嘘だと否定することは他愛のない事だ。フィクションだと鼻で笑ってみせる事はきつと簡単な事だ。なんなら別の人格を見せてみる、と恫喝する事も容易いだろう。

そんな訳がない。たつた一言吐き出せば目の前の存在など吹き飛んでしまっただろう。それは自分の中の常識が峻している。そしてその常識が同時に耳元で囁くのだ。「お前はどうか？」と。

それこそ詩乃に付随された箇条書きの経歴はテレビの中やフィクションの中では有り触れている物だ。目の前のカノジョ——彼と同じように。

だからこそ、頭ごなしに否定することなど出来る訳がなかった。自分は既にソレを受けて入れ前に進むと決心したのに、目を逸らしそうになる。

開いた口からは声ではなく、音すらもない空気が吐き出された。

真つ直ぐに詩乃を見ていた夏樹はその瞳と詩乃から外す事もせず、ただただ混乱している詩乃が落ち着くのを待つ。瞳の揺らぎ、呼吸、身体はどこに力が入っているか、喉の動き。僅かな動きすら見逃す事なく、夏樹は詩乃を待つ。

真実を濁せばよかった。とは考えない。それは彼も夏樹も望む所ではない。そして詩乃も恐らく望んではいないだろう。そう直感し

たのは、溶けてしまった彼のお陰だろうか。

沢山ある情報が詩乃の頭で纏まっていく。否定していた事実を単なる情報として処理していく。

“ナッツ”という成人男性を粉々に砕いて箒で掃き捨てる。既にそれは必要ない物だ。

そして目の前の美少女——のような少年らしき存在が“ナッツ”である、という仮定を定めておく。頭の中にいるボロ外套の男が皮肉つたらしい笑みを浮かべて両手のピースを軽く曲げて重要であると告げる。頭の中に愛銃が無い事がコレほどまでに腹立たしいと感じる事は以前以後も含めて無いだろう。

二重人格者。という情報が嘘であったならば、目の前の存在がナッツであったならば内心でほくそ笑んでいる事だろう。けれど、彼がそんな人の心を弄ぶような行為をしない事は分かっている。したとしても、二重人格者なんて三流小説家だつてしないような設定はしないだろう。精々“妹”などと言うぐらいか。

仮定を並べ、一つひとつを噛み砕き、繋ぎ合わせ、推察をしていく。本人から答えを聞けば話は早い。それこそ二三言で終わってしまうような事なのかもしれない。けれど、その事実を真実かどうか判断するのは他ならぬ自分なのだ。だからこそ、目一杯頭の中で推察を並べる。

そして、一番考えたくもない推察を最後に立てる。

目の前の天使……少年の言葉が、少年がここに来るまでに言っていた七草薺の言葉が全て真実であったならば——。

言いようのない喪失が身体を凍らせる。ナッツが死んでしまった事も、その選択を自分が迫った事も、自分は彼を生かす事も出来たかもしれないのに……！

強く拳を握り込んで、少女から目を離して窓から早送りされているような景色を見送る。流れる景色を瞳の中に閉じ込めるように瞼を下ろして、大きく息を吸い込んで、細く、長く、ゆつくりと、吐き出していく。胸に溜まったモヤモヤや、煩い鼓動を抑えつける。

真実であったならば——真実でなかったとしても。カノジョの言葉は聞いておかなくてはならない。もしも真実であったならば、それこそ殺した相手を背負う為に、殺した相手を想う為にも聞かなくてはならない。

もう逃げ出さないと、目を逸らさないと、前に進むと決めたのだから。

信号が変わったのか、静かに走り出した景色から目を離して詩乃は改めて夏樹に向き直る。詩乃の瞳を見て、安堵したように夏樹は小さく息を吐き出した。

「多重人格についての説明は——」

「大丈夫。なんとなく、わかるわ」

「そう、ですか。なら——」

「その前にちゃんと一つ聞いてもいい？」

「はい。僕に答えられる事なら、なんでも」

了解を得た所で詩乃は息を吐き出して、少しばかり難しい顔をする。

これからの話で、きっと前提として確実に決定しておかなくてはならない事があった。それは目の前の存在がナッツであるかどうかよりも、詩乃にとつてもっと必要極まりない事であった。

夏樹を凝視して、口元に手を置きながら、言葉を選んで、詩乃は疑問を口にする。

「その、本当に男の子なのよね？」

「…………ふえ？」

「クツフツフツフフヒヒヒ、アハハハハハハハ！」

詩乃が真剣な顔で告げた疑問にキョトンとして変な声が出た夏樹。運転席からは耐えた様子もなく笑い声が吐き出される。

パチクリと瞼を動かした夏樹がその質問を理解したのか笑いが聞こえてくる運転席を睨む。運転席から聞こえた笑いに混じる謝罪の声に眉を寄せて唇を尖らせながら夏樹は詩乃に向き直る。

「ちゃんと男です。証明になるような物は…………えっと、その、触ります？」

「え？」

「あ、えっと、胸ですよ？ ほら、膨らみもないので」

「我が君の年齢ですと膨らんでいない子もいると思いますよ」

「そうなんですか？ なら、えっとじゃあ、その——」

「ちよつと待って。待ってください」

「あ、はい」

迷った末の結末がなんとなく理解出来てしまった詩乃はほんのりと顔を赤らめた夏樹を止める。たとえ詩乃の予想とは外れていたとしても、恐らく詩乃にとつて良い方向には転がらないことだろう。

頭を抱えながら溜め息を吐き出してどうにか改善策を考えていれば、運転席から我慢したような笑いではなく雑誌が一冊が飛び出てきた。

「これは？」

「そこに我が君が載ってますよ」

「——は？」

受け取った雑誌をパラパラと捲り、目立つ萌黄色の髪の色を見つけて。白のコートとふわりと巻かれた萌黄色の髪。詩乃の記憶に残るあの日の天使がそのまま紙面に映っていた。

その雑誌から視線を外し、目の前にいる本人に顔を向ける。確かに、間違いなく、目の前の存在がこの紙面に雑誌に映っている本人である事は分かる。夏樹はと言えば困ったように眉をハの字に曲げて曖昧に笑っている。

コラムには写真に写る天使の詳細が書かれているのであるが、確かに性別の所にはしつかりと、誤字という訳ではなく男性と書かれている。書かれていた。

「アナタ、モデルだったの？」

「えっと、モデルさんではなくて、舞台役者をしていて、その雑誌は子役でドラマに出させてもらうのでインタビューを受けただけです」

「……………あー、なるほど、うん？」

二度目になる混乱の海へと突き落とされた詩乃はどうか崖際を掴んで思考放棄しないように留まった。

現実には小説よりも奇なり。という言葉がこれほどまでに当て嵌まる事もそうそう無いであろう。自分もその奇の一端である事を棚に上げながら詩乃は息を吐き出してナッツであった時の言動を思い出す。

「そういえば取材って言ってたわね」

「……彼、そんな事まで言ってたんですか」

「知らなかったのね」

「彼が起きてる時、僕らは、なんと言うか、寝てると言いますか。彼の行動全てを知れる訳じゃないので……」

「ふーん……」

怪しんでいる訳ではない。疑っている訳でもない。けれども全てが真実だとも思えない。

それこそ“二重人格者という設定”であつたならばという可能性を詩乃が捨てきれしていない証明でもあり、言葉の矛盾を思考のどこかで探している事でもある。

「ナッツであつた時の記憶は無いのね？」

「全部、という訳じゃありません。彼が、その……溶ける時に彼の経験も、えっと、統合されるので」

「……自分の事なのに随分曖昧ね」

「僕らの感覚での話なので。すみません」

「……いえ、いいわ。ごめんなさい」

かと言って攻めすぎれば、全てが真実だつた時が問題になつてしまふ。いいや、それこそ目の前にいる彼と架空世界に居た彼がある種の別人であるのなら断ち切れればいいだけである事など、詩乃は理解している。

自身に疑問を抱く。未練なのだろうか、それともこの少女にも見紛う少年の中に彼を見てしまったからだろうか。答えは、無い。

少しだけ感情を落ち着けるように細く息を吐き出して、詩乃は夏樹へと向く。

「それじゃあ、説明して」

「——はい」

彼が最期に言ったように、現実で、彼の事を聞かなくてはならない。GGOが出来なくなる理由も、その真実も。

「彼は……ナッツは死んだ、と言いましたが、正確には加藤夏樹に溶けている、と思ってもらおう方が正しいと思います」

「……さつきも言っただわね。溶けるって」

「はい。死んでしまっても加藤夏樹の糧になります。それは何度も繰り返してきた事なので僕も彼もわかっていました事です」

「何度も？」

「何度も、です。僕らにとって“死”とはそういう事なんです。死んでも、溶けるだけ。この役が終わるだけ。死んでも死ぬだけ、です」

夏樹の口から吐き出された、まるで言い慣れたような言葉は詩乃にとっても聞き慣れた言葉であった。

彼が言っていた言葉。ゲーム内だから、と思っっていた言葉。その言葉の意味が変化していく。息が詰まり、呼吸が浅くなる。

「僕らにとって、死とはその程度の物でした」

「ちよつと待って。つまり、アナタは……その感覚で人を殺していたの？」

「いえ、人殺しに対して僕らはそれなりの倫理観は持っています。ただ、生きている人を殺す事だけであって、その後殺した人間が行く世界……所謂天国とか、地獄とか、そういうモノは僕らと同じ感覚です」
「じゃあ彼は？ ゲームの世界がリアルだと思っただけなら、ナッツはあの世界、GGOで人を容易く殺してた事になるわ」

「彼はGGOの世界をちゃんとゲームである事を割り切っています。ただ、そこに存在している“ナッツ”という人格は生死を賭けていました。それは僕らのルールです」

一つの役を殺す。この延長で他人を殺していたならば、詩乃にとって全てが裏切られる事になっていた。それこそ、車を無理にでも止めて逃げ出したい気持ちになっていたかもしれない。

“それなりの倫理観”がどれほどのモノかは、それこそナッツの言葉を思い出せばわかる事だ。

死を厭わないが、慈しむ事もなく、無関心。死銃に対して憤りをそ

こそこ持っていた事を考えれば、その程度の倫理観なのだろう。

「……いいわ。続けて」

「ナッツがゲームに対して生死を懸けていたのは加藤夏樹の為でもあります」

「アナタの？」

「……はい。ナッツが居れば加藤夏樹に害を及ぼすのは目に見えていたのだから」

「……どうしてか聞いても？」

「ナッツという人格が出来たのは……役柄以外の人格が出来たのは初めてだったんです」

「え？」

「それまでは“役柄”という枠組みから出ず、その役を全うし、死んでいました。ナッツにもその枠組みはあったんですが……」

「ナッツは出てしまった」

「はい。本当はS A Oが終わればナッツは死んでいた筈でした」

「でも彼は生きていた」

「正確には死ねなかつた、です。変な話に聞こえると思いますが、彼自身、自分は死ぬべきと思っていました。無茶な戦闘もいくつかあった筈です」

ナッツの戦闘を思い出せばその大半が一般人において『無茶な戦闘』にカテゴライズされるだろう。高レベル帯の狩場に店売りそのままのハンドガン片手で闊歩して笑っている彼が普通になってしまった詩乃にとつても『無茶な戦闘』は沢山思い出せる。

痛みそうになる頭を抱えて詩乃は溜め息を吐き出す。理解は出来た。彼の行動を納得も出来た。けれど噛み砕くには随分と時間が掛かるだろう。それに、詩乃にとつて根本的な事が未だに解決していない。

「……アナタが多重人格者である事は信じるわ」

詩乃の一言に夏樹は眉尻を下げる。決して自身の在り方を肯定された事を悲観している訳ではない。続く言葉が詩乃の表情から読み取れて、その言葉を否定して証明出来る証拠がどこにも在りはしない

のだ。

「けれど、ナッツが死んだ証明は出来てない。アナタの奥底にいるかもしれない」

「……はい。そうです。その証明を僕は出来ない」

「あの夜、確かに私の前にはアナタが居て、そしてあれはナッツだった」

「……僕が彼を演じきる事は、可能です。ただ違和感を覚えるのは詩乃さんだと思います」

それは——、と詩乃の言葉が口から出なくなる。姿形という意味でない事など漠然と理解出来た。立ち振る舞いであったり、言動であったり、それは小さな違和感なのだろう。そしてきつと自分はソレに氣付いてしまう。氣付く自信もある。

だからこそ、夏樹はナッツの演技をしない。容易く丸め込める方法を取らずに自身を曝け出している。

それならどうしてあの夜にナッツの演技で自分に会った？ そんなものは自分を落ち着かせる為、それこそ言いくるめる為だ。

自分で答えが出てしまう。どの疑問を抱いても、覆す事が出来ない。目の前の少年がナッツでない、と否定しても、それはS A O時代——現実の姿を知っている和人が証明出来てしまう。

肯定などしたくない。ナッツが死んでいるなどと、肯定出来るものか。

詩乃の感情を読み取って、夏樹は全てを否定しなかった。ナッツが死んだ事を証明出来ないという事もあったけれど、それ以上に詩乃の否定はしたくなかった。

小さく息を吐き出して、夏樹は話題を切り替える。

「詩乃さん。悩んでいる所すみませんが、そろそろこの車に乗せた本題を伝えます」

「……何？ 次は、アナタは六つ子とか言い出すのかしら？」

「いえ、僕に兄弟はいません。……詩乃さんには自分がしたことの結果をちゃんと見てもらいます」

「結果？」

「はい。殺した者として、アナタは全てを知る権利と義務があります」
詩乃の背がゾクリと震える。

視界がぐらつき、僅かなエンジンの振動で身体が揺れそうになる。
歯を食い縛る。

目の前にいる愛らしい断罪者が笑う。身体が冷えていく、心臓の音が激しくなる。

現実にいる事を理解したくて、拳を強く握りしめる。

その拳に小さな熱が置かれた。じわりと広がるそれが拳の間に滑り込んで、拳を解いていく。握られた手を辿れば変わらず愛らしく微笑む彼がいた。

「我が君、着きました」

そこは住宅街であった。日も半分程沈んで世界を赤く染め上げている。

路肩に止められた車から出ることもなく、詩乃は興味深げに辺りを見渡す。見渡せば見渡すほどに、実に普通の住宅街であった。どこにでもあるような、そんな日常が広がっていた。

「詩乃さん、向こうにいる親子が見えますか？」

「……ええ」

夏樹が指差す先に居たセミロングヘアの女性と、その女性と手を繋いでいる女の子。母であろう女性の空いた手には買い物帰りなのか何か詰まったポリ袋を持っている。

そんな親子がコチラに向かって歩いてくる。この車に何か用がある訳ではなく、ただ帰路がそうなのであろう事は談笑しているであろう二人を見ればよくわかる。

「——大澤祥恵。隣にいるのは瑞江ちゃん四歳です」

「はあ……」

運転席から聞こえる親子のプロフィールに詩乃はさっぱり分からず、生返事を返す。

「……町三丁目郵便局に元々勤めていました」

「——ッ」

続けられた言葉に詩乃は息を呑んだ。フラッシュバックする記憶と目の前の日常に存在する女性が交差する。あの瞬間。強盗から銃を奪う直前。カウンターの奥にいた女性職員二人の中に確かにあの女性は居た。

四年前のあの日。そう、四年前だ。

詩乃の喉の奥から細かい声が溢れる。

「信用ならない様でしたら呼び止めて確認しましょうか？　なんでしたら、今まで朝田詩乃さんに一言も無かった事も謝罪するでしょうし」

「薺」

「我が君は激甘ですねぇ。少しはその甘さコツチに分けてくなくても、いや、でも」

「少しだけ黙っててください」

夏樹の冷淡な言葉が薺の二の句を止めた。自分を抱き止めて何かを堪える薺に冷たい視線すら送らずに夏樹は詩乃の手を優しく包み込む。

「これが、私のした事……？」

「はい。詩乃さんがした事の結果です」

「本当に？」

「はい。悩むな、忘れろ、とは言いません。僕らは全部抱えて前に進まなくちやいけません。それでも、詩乃さんが助けた者もいます。その結果も詩乃さんが抱えるべきものです」

ポロポロと瞼から溢れる熱い水を拭う事なく、詩乃は車の横を通り過ぎていく母子を見送った。詩乃が背負った結果がそこには在った。知ることなかった日常が、そこには在った。

夏樹はただ自然に、そうすべきだと思つて、役柄としてではなく、詩乃に腕を回して抱きしめる。幼子にそうするように、そして誰かがそうしたように背を軽く叩きながら、手を強く握りしめた。

その誰かよりも頼りなく抱かれながら、詩乃は理解してしまう。確かに彼はココに存在している。存在しているのだ。

けれど、同時に彼が死んでしまった事がわかってしまう。死んでしまったからこそ、ここにいます。

一番否定したかった事を自分で肯定してしまった。

この少年は彼だ。彼なのは間違いない。そして夏樹はナッツではない。けれどもナッツは夏樹なのだ。

理解した。理解出来てしまった。否定などもう出来ない。彼はもういない。けれど彼はここで生きています。

頼りなり身体を強く抱きしめて、詩乃は溢れる感情を夏樹の服に染み込ませた。

第41話

心地よい倦怠感があった。

湯船から顔だけを出して身体を沈めた詩乃はぼんやりと明かりを見つめていた。湯気に包まれた世界。時折響く水滴の落ちる音。

湯気を吸い込んで、ゆっくりと吐き出す。

自分の行動は間違っていないかった。

いいや、それこそ“人殺し”という点では間違っているのかもしれない。けれど、そんな間違った行動であっても、それは肯定されたのだ。他ならぬ、同類の言葉によって。

殺した事を忘れる事はない。それは殺した者の宿命で、背負うべきモノだ。

救った事を忘れてはいけない。それは助けた者が救われる為のモノだ。

人として間違ってしまった自分の行動。人として間違っていないかった自分の行動。

片方だけを認めた訳ではなく、両方を肯定してくれた。

それは詩乃にとって初めての事であった。それこそ救った命の事なんて知らなかったのだから、当然と言えば当然である。

正義の味方、なんてむず痒い存在になれたつもりはなかったけれど、重かった足取りが少しばかり軽くなった気もする。

肯定してくれた相手に対して涙を見せてしまった。年甲斐もなく、という程の年齢は重ねていないけれど相手と比べるとそれこそ“年甲斐もなく”だろうか。

子供の前で泣いてしまった、という感覚は詩乃には芽生えなかった。自分よりも明らかに年下であろう彼の前で泣いてしまった事、そして慰められた事に恥ずかしさを覚える事も不思議となかった。

死んだ彼が——消えてしまった彼もまた、自分が泣いていると同じように慰めてくれた。発作の時も、慣れたように安心させてくれた。その名残が、あの少女……ではなかった、少年には確かにあった。

狂気的な部分を削ぎ落として、演技としてのナッツではない。本質

としての彼。それが確かにあったように思える。

湯船から出て、鏡を見れば随分とニヤけた顔が鏡に映る。それを我慢する事はない。無理に表情を弄る必要はない。

ふと、あの少年——夏樹の笑顔が思考に過る。綺麗な笑顔だった。それこそ雑誌に載るような彼と比べるなんて意味のない事なのだろうけど。

少しだけ息を吐き出して鏡に向かって笑ってみる。

見なかったことにしよう。

シャツの上に余裕のあるフリース生地の特レーナーのジツパーを上げる。まだ濡れた髪にタオルを乗せてベッドに倒れる。

疲労感はある。今日もアミューズファイアを起動する気にはならない。その原因にナツツとのアレもあるのだが。

言葉にもならない声で喉を震わせながら、口元が緩むのを感じる。自然と自分が笑っていた。

彼から肯定された事が嬉しかった。所詮はそれだけの理由だった。だからと言って、GGOに入って何かをやる元気も無ければ、新しいゲームを探す気力もない。肯定された事以外が自分の中で衝撃過ぎたのだ。

自分が人を救ったという事実。全てを背負う事。新川恭二の事。キリト——桐ヶ谷和人の事。七草薺の脅し。そしてナツツ——加藤夏樹の事。沢山の事実が自分に叩きつけられた。

多重人格者——二重人格者という事は驚いた。それこそ、嘘だとも思っていた。今も一割程は嘘かもしれない、と怪しんでもいる。

けれど、確かに彼の中にナツツという存在を感じてしまった。それはとても些細な事なのだ。僅かな行動で、理解してしまった。理解させようとした行動ではなく、本当に僅かな動きや仕草が原因だった。

だから、詩乃が夏樹の事を知ろうと思う事はそれほど特別な事ではなかった。例えばそれは粗探であったり、彼の言葉が信用に足るモノだという証明をする為だ。

何気なく、携帯端末を開いて検索エンジンを起動する。入力ボックスの中に『二重人格』という四文字を入れて、虫眼鏡のアイコンをタッチした。

ベッドの上に片膝を立てて座った詩乃は髪を乾かす事も忘れて画面に注視していた。

学術的なモノではなく、一般的な解説として載せられた情報達。例えば“始まり”であったり、例えば“呼び名”であったり。

それらを鵜呑みにして、彼に当てはめる事はないけれど、それでも詩乃はそれを読み解いて、意味を理解して、彼の行動に結びつけていき、納得する。

例えば詩乃自身——シノンが発作を起こした時に慣れたように行動した事。例えば両親ではなくて、七草薺であった事。例えば何度も人格が死んだ事や死生観。

慣れていて、当然なのだ。パニックになる発作をきつとナッツは見慣れていたのだ。或いは、何度も体験をしていたのだろう。

乗り越えていた？ いや、違う。彼はソレを乗り越えてなどいなかった。だからあの時困ったような顔をしていたのだろう。ナッツだから、という言葉にも納得がいく。ナッツという人格はそういう役割も担っていたのだろう。

ならば、彼が消えてしまった今は？ そもそも人格としての役割があったナッツが死ななければならぬ理由は？

夏樹はきつとソレを困った顔で「必然」と「仕方のない事」と終わらせてしまおうだろう。夏樹にとっても、彼にとっても、それはそう在るべきだったのだから。

「……………ふう」

息を吐き出して頭を切り替える。同時にまだ湿っている髪に気付いて詩乃は苦笑を浮かべてドライヤーを手に取った。

温風に髪を靡かせながら更に検索エンジンに入力する。舞台役者、と言っていた彼の名前を入れる。

出てきたのは簡単なプロフィール。劇団に入ってるらしく中々に

ちやんとした物であり、言っていた通り、少し先で放映するドラマに出るらしい事も書いています。

それは、まあ、よかったです。

「……なにこれ？」

それは非公式であろうSNSであった。そこには確かに今日あった彼が映っている。撮影現場であったり、黙々と台本らしき物を見ている時であったり、何かを食べてる時であったり、車の後部座席に横たわって眠ってる姿だったり、その顔であったり。

いや、ともあれ、恐らく彼が関知していないであろう瞬間が撮影されていた。確かにコレは加藤夏樹で間違いない。こんな可愛い存在が二人といてたまるか。

幾つかの画像を保存しながら詩乃はこの下手人のアイコンと名前を見る。

ぺんぺん草であった。名前が『非公式マネージャー』。

詩乃は察した。今日会った、あの美人の顔が思い浮かんだ。きっと間違いないだろう。

「何やってるの、あの人……」

おそらく誰しもが抱くであろう言葉を詩乃は当然のように吐き出した。

いや、投稿内容としては彼のマネージャーらしく宣伝なども行っているのだが、無言で挙げられる写真が盗撮めいている。というか、盗撮なのだろう。詩乃は察した。

幾つかは彼も関知している物もある。それこそメイク後の彼が上目遣いしている写真がそれにあたる。

そのまま検索に引っかけたサイトに飛びながら見ていけば加藤夏樹という存在が『演技力の凄い子供』、『地上に降り立った天使』、『俺をホモにした原因』などと色々な呼ばれ方をしている。そしてソレに追従するように『ストーリーカーのヤベー奴』、『非公式マネージャー公式ストーリーカー』、『何故か捕まらないシヨタコン』、『写真を投稿してくれる神様』と不名誉極まりない呼ばれ方をしている人もいるらしい。

ドライヤーを停止させて、携帯端末を閉じる。色々知りたかった

内容と混同して知らなくてもいい事実が更に頭の中に入ってきて頭が重い。

今日はこれ以上何もないので、ゆっくりと思案しながら布団に入ろう。

厚い布団がボフツと音を鳴らして詩乃を受け止める。ドライヤーのコンセントを抜く事も億劫で、ベッドの下に放置された。

布団の中に入り込みながら近くにあるリモコンで明かりを消す。

エアコンの音と空気の流れる音。ゆっくりと呼吸をしながら、瞼を下ろしていく。

下ろしていた瞼を上げて、詩乃は溜め息を吐き出した。

チカチカとメールの受信を知らせる携帯端末に眉を寄せながら今しがた来たメールを開く。差出人の登録はされていないが、それが誰かなどすぐにわかった。

A l f h e i m O n l i n e の短い文字と公式サイト。そして添付された写真のタイトルが「my lord」であった。写真を開けば、そこには萌黄色の髪の少女が立っていた。剣を握り、薄い羽を背中から生やし、茶褐色のボロ外套を纏っていた。

詩乃がアミクスフィアを取ったのは言うまでもない事であろう。

第42話※閑話

自分の生まれが恵まれていたか？ という問いかけに対して私はイエスと答える。普通の家庭ではあつただろうけれど、それでも自分は俗に言うお嬢様である事は間違いなかった。

自分には才能があつた。もつともその大半は実家にあつた蔵書と今は亡きお爺様の教えであつた。そんな努力の結晶を人は才能と言う。生まれた家系がそうであつたから、と思えば確かにコレは私の努力で積み上げた物であるけれど、親族の教えがあつてこそそのモノだ。人が生まれ持った物、という意味では、これもまた才能であるのだろう。

自分の容姿は優れていた。少なくとも他人からそう称される程度には優れているのだろう。それこそ女生徒しかない学園内で恋人が出来る程度には優れていた。

それこそ人らしく恋もした。けれど何か足りなかつた。相手に満足していなかつた訳ではない。

自分という人生は——例えるならばトロツコであつた。

線路の上を走るしかない、トロツコだ。かと言って、それに満足していなかつた訳ではない。自分の人生が順風満帆である事もわかつていたし、それこそ恵まれていたのだから、幸せとも言えた。

結婚相手を決められた事に対しても反感は無かつた。

好き嫌い、という事で言うのなら、結婚相手の事は好きだった。凡百の一人という訳でもなく、それなりに恵まれた環境で、恵まれた人生を送つてきて、才能に恵まれた人であつた。姉には悪いけれど、許嫁に土下座までして婚約を破棄された姉のお陰で自分は結婚出来た、とも言える。姉は姉で元許嫁を理由に独身を謳歌しているし、私は私で恋愛で結婚が出来ないと割り切っていたのだから、そう言うべきなのだろう。

姉が結婚していたならば……私は恋愛という物をする必要があるのだから。

結婚相手の事を愛しているか？ と聞かれれば、愛していると答え

る。それこそお爺様の教育であり、夫を立てた生活も悪くはなかった。

私は彼の妻である。何かを求めるような熱もなく、けれど熱を偽り、欺く事は出来る。私というトロツコにとって、それは必然で、自然で、必要であった。

七草薺という私の人生は、その程度の物だった。
夫に殺されそうになるまでは。

「どういう、事ですか？」

夫に誘われてやってきた森の中で私はそう夫に問いただした。

夜の風が私を異様に凍らせて、口が、手が震える。

自分の震えた声は始めて聞いたかもしれない。目の前にいる夫――茶毛を短く刈り上げたコンラットはしっかりと私を見据えながら、背後に光も通さない森林を背負って口を開く。

「君は、現実とは違い過ぎる。だから、怖くなったんだ」

「それは！　だって、アナタがここでは自由だって言ってくれたから――」

「そう。自由でいい。だから、これは俺が君の変化が怖くて……いや、君が何を考えているか分からなくなったんだ。未知な物は怖いのは人間の宿命だろう？」

コンラットは目を伏せてそう呟いた。

私を剣の世界に――ソードアート・オンラインに誘った人が、鉄の城――アインクラッドでは自由だと言った男が、君の柵を取り除けるかもしれないと言ってくれた夫が。それを未知だと言う。それを恐怖という。

否定の声が出なかったのは見えたコンラットの瞳に恐怖と不安以外の感情が見えてしまったからだ。その瞳は、表情はありありと悦を浮かべていた。

「だから、君には死んでもらうよ。俺の為だ。普段の君であればきつ

と受け入れてくれるだろう」

自分の中にあつた何かが崩れていく。積み上がっていた、彼の印象が壊れていく。

喉に何かが詰まったように声が出ない。否定も、肯定も、何もかもが自分には許されてないように、線路から外れる行為を咎めるように。

コンラットの背後から姿を現したのは、二人の男であつた。顔を隠すように似た仮面をした男が二人、歪に開いた口元から下卑た笑みを浮かべて森の中から現れた。

緑色である筈のカーソルはオレンジ色に染まり、彼らがどういう人物であるかを私に突き付けられる。

「コンラットさん。本当に殺しても?」

「現実世界でも妻なんだろう?」

最終確認、という訳ではない。それは確かに悦を含んだ、誰かを絶望へと突き落とす為の言葉であつた。

男達と入れ替わるように、森の中へと踵を返した夫が——男の声が鼓膜を揺らす。

「——ああ、殺せ」

そして、それは確かに私を絶望へと突き落とした。

変わらず下卑た嗤いを口から鳴らしながら、草を踏み潰して歩く男達。その手には直剣と斧が握られている。

震える手が動く。コンソールを辿々しく触りながら、私の剣が握られた。変哲もない、両刃の両手剣。普段は頼れる重さが今はただ重いだけを感じてしまう。

男達は私が剣を握ったのを見て、お互いに顔を見合わせて嗤う。

「へえー。抵抗するの!?」

「それはそれは。実に素晴らしい」

男は一足飛びに私の前へと躍り出て、斧を振り上げる。その動作は見えた。だから、私は剣を盾にするようにして寝かして掲げた。同時に、男の嗤いが見える。

「どらあッー」

男の怒鳴り声と共に振り下ろされた斧。剣と打つかる感触が腕を痺れさせ、私の視界一杯に銀色の破片が飛び散った。その破片はまるで架空の物である事を思い出させるようにポリゴンへと変換されて、容易く私の前から消え去った。

尻もちをついて、私は先程まで剣を握っていた手を見る。そこには何も無い。在ったものは既に消えてしまった。

「さあ、お次はどうしますか？ どうやって僕らを楽しませてくれます？」

直剣を握る男が口を歪ませる。

何を、どうする？ どうして？ 何を？

「チツ！ お、らァー！ 死んじまうぞー！ 逃げろ逃げろ！」

乱暴に鼓膜を刺激する男の声が私を我に返らせて、私は背後に身体を向けて、無理やり身体を立たせて走り出す。

死んでしまふ。生きていたい。逃げなくてはいけない。

どこに逃げればいい？

鬱蒼とする森を走りながら、鋭く尖る枝に身を削られながら、思考する。

どこに逃げればいい？ 夫は——コンラットの所になど行けない。裏切った者の所になど行ける訳がない。

なら、私はどう生きればいい？

私は、どうすればいい？

私は、どう死ねばいい？

足が纏れて草の上に滑る。震える腕が身体を持ち上げようとして、失敗する。

何度も失敗しながら、無理やり上半身を起こしても足がもう動かない。

後ろから聞こえる草を掻き分ける音に、逃げなくては、と生きようとする。

後ろから聞こえる音に、もう無理だ、と諦めてしまふ。

涙が溢れる。逃げてても、生きていても、それは自分にとって無意味になってしまった。線路から外れてしまった。だから、もう、何も意

味がない。

自分が生きている事も、生きていく事も、総じて意味の無い物になっちゃった。

逃げる場所もない。生きる意味もなくなった。死に方すらわからなくなった。

「おや、もうお終いですか」

「ケツ、つまんネエな！」

「いつもよりはマシでしょう」

男たちの声が聞こえる。そんな事すらどうでもよかった。

何も考えられない。ただ死ぬ事だけが頭を支配していた。そう、死んでしまうのだ。

「おい誰だ、テメエ!!」

男の怒鳴り声に顔を上げる。けれど、やはり私の視界には男二人しか居ない。男達の視線は変わらず私へと——いいや、私の背後へと向けられていた。

ソレはいつの間にか在った。音も無く、気配らしい気配も無く、それは立っていた。

まるで私達に聞かせるように草が踏まれて鳴く。歩く度に揺れる裾が擦り切れたロングマント。フードに隠れた顔はハッキリと見え、けれども身長は小さい。

「——ケルンとツキノワグルマ。この名前に聞き覚えある？」

「あ？ おい、知ってっか？」

「はて……人違いではありませんか？」

関西方面の訛りで吐き出された幼さも感じさせる声。その問いに對して男二人は顔を見合わせて肩を竦める。

その態度に対して茶褐色の存在は小さく溜め息を吐き出して外套の中から緩やかに反った曲剣を抜く。

「二人とも君らに殺された人の名前や」

「ハッ、なんだ？ 復讐ってやつかい？ テメエ見てえなチビが！」

「そうですよ。君のような子供が死ぬのは忍びない」

「復讐やない。ボクも二人の事は知らんし」

「じゃあなんだってんだよ」

「単なる確認や」

「そうかい！　じゃあさっさと消えな！」

「せやな。目障りやし、さっさと消すわ」

茶褐色の存在はゆるりと足を動かして、男たちへと歩き出す。その行動を見ていた男たちは一拍おいて笑いだし、まるで遊びのように斧を肩に背負う。

いけない。このままでは死んでしまう。この小さな存在も、目の前で――。

斧を背負った男が茶褐色の存在と距離を詰め、斧を振りかぶる。薪を割るかのように縦に落とされた斧は地面にその刃を落とした。

「――あ？」

ポリゴン片を吐き出す先のない腕を見つめて、男の口からは唾然が溢れた。

そんな男の声を切り取るように、滑らかに曲剣は閃いた。容易く、冷徹に、男の命を刈り取った。

剣先が滑った首元を信じられないように男は触れて、パクパクと口を動かす。声帯が切られた声が出ない訳ではない。ただ、唐突に自身を襲った絶望に頭が対応出来ていないのだ。

赤い血液の代わりに男を彩った赤いポリゴンの華が散っていく。そんな散華を見る訳でもなく茶褐色の死神は直剣を持つ男へとフードの入り口を向けた。

「っ、あああ、あああああああ!!」

仲間が死んだ事で半狂乱になりながらも男は直剣を振るった。二度三度、まるで踊るようにその剣先を回避した小さな死神の曲剣が動く。

まるで反射的に、そう決めつけられたように、迷いもなく、月を照り返した。

激しく響く鉄同士が打つかる音。

鉄が擦りあった音がほぼ同時に響き、死神は曲剣を振り抜いていた。

首に赤い傷を走らせた男は剣を手放し、何かに縋るように死神へと腕を伸ばす。

死神はソレを一瞥し、剣を振り上げた。伸ばした腕はそのままに、肘から先は求めた何かではなく地面を力なく触れた。

何も掴めなかった男がポリゴンへと散っていく。

風がそれを運ぶように吹き、死神のフードがめくれ上がる。

溢れたのは新芽のような萌黄色であった。振り返ったその顔は、妖精の如く愛らしい。その妖精という称号を否定するように背後の赤い華が空へと舞い上がった。

月光を嫌うように妖精はフードを目深に被って草を鳴らす。

腰を抜かした私が少しだけ見上げれば顔が見えてしまうぐらい小さな身長。フードの奥に見える澄みきった瞳。先程殺人をしたというのに、まるで何も感じていないような表情。

「あ、ありがとうございます、ごさいました」

「は？」

「助けて、頂いて」

「ああ、状況がそうなたただけや」

死神はその視界に映っているであろうコンソールを叩いて何かをしている。

訝しげに死神を覗いていれば、溜め息が吐き出された。

「何？」

「その、私は……どうしたら、いいんでしょうか」

「はあ？ 知らんがな、そんなん」

それは、尤もな言葉であった。けれど、それでも私はこの死神から視線を外せない。

この死神から与えられるソレを待ち望んでいる。

死神はそんな私を見て、数秒固まる。

「……なんや、アンタも死にたがりかい」

呆れたような口調ではない。事実を確かめるように私に向けられた言葉に私は反応出来なかった。

面倒そうにフードの上から頭を搔いた死神はスルリと後ろ腰から

曲剣を抜き、その剣先が私へと向けられる。

「死にたいなら殺したる。死んでも死ぬだけや」

そう、まるで当然の事を口にした死神。その口調が私に告げてくる。

それは断罪ではない。

これは救済ではない。

死にたい人間をただ殺すだけの、それだけの事なのだ。

向けられた切っ先に抵抗など出来る訳がなかった。目の前の人は私が失った死に方を与えてくれるのだから。

「——はあ。もうちよつとだけ生きるとき」

焦らされるようにソレは取り上げられた。死神は身体を反転させて森の奥を見つめる。

森の中から現れたのは熊のようなM o bであった。興奮したように息を荒げて、口元から唾液を垂れ流した、真紅の熊。尖った爪が自身を通った道を示すように幹を傷つける。

「戦え、とは言わんけど、邪魔なら勝手に殺されとき」

死神の小さな手を掴んで、思ったよりも強い力で立ち上げられる。

ふらつく足をどうにか地面に立たせて、前を向く。威嚇をするように喉を震わす熊に名前とHPゲージが出現する。

「ボクはナッツ。ちよつとの間やけど、よろしゅうに」

「……ウィードです」

そう、ほんの少しの間だけ。私の命を死神が——ナッツが奪う刹那までの共闘。ナッツが拾った命をナッツが捨てるまでの、戦闘。

「因みに武器は？」

「あ、その」

「……普段使ってる種類は？」

「その、両手剣を」

「両手剣か……ん」

視界にトレード画面とパーティ申請が浮かび、それを咄嗟にタツチする。

アイテム欄に入り込んだ両手剣は自分の持っていたどれよりも優

れた性能で、けれども誰かに鍛えられた訳でもない物であった。

取り出したそれは片刃の剣であった。鏢もなく、まるで何かの牙をそのまま削り出したように荒い剣。布がしっかりと巻かれた柄を両手で握りしめ、前を向く。

「ほな、進もか」

「はい」

妖精の声に被せるように熊の雄叫びが響き渡り、私が死ぬまでの戦いが始まった。

熊の豪腕が唸りを上げて振られる。けれどもナッツは恐怖が無いのか容易く、自然に剣を振り、その腕を器用に流してみせた。

「スイツチ」

短く吐き出された言葉に反応して、私は両手剣を振るう。一撃、二撃、とダメージを与えて熊の崩れた体勢が戻りそうになった所で身を引く。それに入れ替わるように茶褐色が隣を過ぎ、私を守るように豪腕を容易く流してみせた。

「——MPK、にしては杜撰やけど」

「と、言いますと?」

「ボクらを殺す為にコイツけしかけたんやろ。調査済みやけど、な! っと」

調査済み、という言葉を証明するようにナッツは熊の攻撃を弾き飛ばし、砕けた曲剣を見送る事もなく別の曲剣を瞬時に出して熊の喉を貫いた。

ポリゴン片を一身に纏ったナッツは曲剣を振って、後ろ腰へと収める。

「犯罪ギルドよりも杜撰なんが気がかりやなあ」

「……あ」

「何か心当たりでもあるん?」

「——はい」

「……ま、君の命や。生きてる間は勝手にし」

心当たりはあった。そしてそれは当たっていると確信している部分もある。

空っぽであった自分に何か注がれていく。煮える何か、溢れていく。きつと、コレに従う事は——正しい事だ。

死ぬ命なのだ。既に死んだ命なのだ。この命は目の前の小さな死神の物である。

けれど、それでも、この感情だけは私の物であるべきなのだ。

七草薺という人物の事を私は好んではいなかった。

雑草と皮肉った名前もその一端であったのかもしれない。

何かの柵に常に繋がり。自由でありながらも自由ではない。かと言って自らそれを破る訳でもない。

「先程ぶりです、コンラット」

「——、ああ、生きていたのか」

「ええ、死ぬために生きています」

生きる意味すら無かったウィードにソレが与えられた。目標としては歪で、けれども当然の帰着。

私は与えられた片刃の両手剣を握り、振りかぶる。

「待て、待ってくれ。やりなお——」

「ああ、あなたの怯える顔をようやく見る事が出来ました。なるほど、確かに、その表情はとっても素敵です」

「——ッ」

投げられたチャクラムを一振りで弾き飛ばし、彼の懐へと踏み込む。

怯えた表情。瞳に映る私の笑顔。飲み込んだ息の音。

私は躊躇もせずに両手剣を振り抜いた。

「さようなら、愛しかった人。」

……フッフ、ああ、アハハハ、ヒヒヒヒ、フふあアハハハはははハハハ!!」

噛いが止まらなかった。ずっと引つかかっていた何かが千切れたように、せき止められていた何かが外れたように、止める事など出来なかった。

目の前では赤いポリゴンが散り、私の頭上にあるカーソルがオレンジ色の染まっていく。

「終わった？」

「——はい。お時間をいただきました」

「さよか」

「ええ、それで、私の命をアナタの為に使ってくださいませんか？ 私はこんな死ぬに都合のいい日に死ねません」

「……どういう事？」

「アナタの下に居たいんです」

「……部下もギルドもいらんねんけど」

「ええ、ですから、必要なくなれば殺して下さい」

私の提案にナッツはフードの下で口をへの字に曲げて私を見つめる。澄み切った水晶のような瞳が私を捉えて放さない。

夫と同じ日に死ぬる訳がない。そんな事許される訳がない。

だから、私は全てを目の前の死神に渡そう。生も、死も、全ての権利を死神に託そう。

ゾクリと身体が震える。死ぬ事への恐怖とは別に甘美な疼きが身体を這い回る。

「……ま、ええか。ちゃんと殺したるから、それまでは生きとき」

「——ッ！ はい、我が君」

「なんや、それ？」

「気に入りませんか？ 殺しますか？」

「……ま、ええわ」

この死神はきつと私を有効利用してくれる。全てを使い切つて私を殺してくれる。

だから、私はこの小さな死神に殺されるまで、妖精のような主に仕えよう。

私を殺してくれるまで。

43. 人形の妖精

剣が引き抜かれた。緩く反った刃が太陽の光を反射して鋭く輝く。それを持つてるのは人間の子供程度の大きさの妖精であった。春に芽吹く森を思わせる萌黄色を揺らし、額を彩る赤色の宝石が萌黄の中から目の前にいる存在へ向いている。

それは犬型獣であった。二足で歩行し、直剣を持つ獣。服の代わりに汚れた灰色の荒々しい毛を生やし、局部を守るように革製の武具が装着されている。

武装した獣は人間の子供程度の身長しかない妖精に比べれば大きく、出っ張った口からは舌をダラリと出し、荒く呼吸を繰り返している。

その後ろには巨木の枝を折り、削っただけの杖を持つ同種の獣もいる。コチラはさらに知性があるのか口は閉じられ、毛並みを隠すように闇色のマントを羽織っている。

妖精は小さく息を吐き出した。何かを計るようにつま先を僅かに上下させる。

剣を持つ獣と妖精が動いたのは同時であった。相手に迫るように動き、自身の攻撃範囲へと相手を入れた。

鏡合わせのように獣と妖精が動きを合わせる。獣が剣を振り下ろそうとする軌道を僅かにズレた軌道を曲剣が撫でる。攻撃ではない。防御でもない。反射でもない。ただ流れを僅かにズラすだけ。

曲剣は翻され、獣の腹部を刃で撫でる。妖精は更に足を動かし、前へと進む。仲間の元へとは行かせない、と獣は肉球の潰れた腕を伸ばすが、靡く萌黄色すらその手が触れる事はない。

仲間の死すら厭わず——仲間の死を食い縛りながらも魔道士風の獣は杖を構えていた。足元には獣を中心にした円が広がり、獣の目線に大量の文字群が流れる。

言葉にならない声が獣の口から鳴り、文字が光を灯して停止する。獣の足元にある草が蠢き、急激に成長した蔓が意志を持ち『妖精を

捕まえろ』という命令に従う。

伸びた蔓に対して妖精は大きな反応も見せず、停止する訳でも、怯える訳でもない。蔓が肌を撫でようとするその瞬間にようやく妖精は地面を強く蹴り飛ばした。

人には出来ない程高い跳躍。獣が妖精を追うように顔を向ければ、空に足を向けた妖精と目があった。

地面を蹴り飛ばしたように、妖精は空を蹴り、曲剣を構える。

獣は昼中でありながら、欠けた月を視界に収めてその生命を停止させた。

後ろ腰に曲剣を収めながら外套のズレを正す。小さく息を吸い込みながら空を見上げて、瞼へと閉じ込める。堪能するように視界に収まった晴天を咀嚼して、空へと吐息を零した。

鉄の城では感じる事もなかった流れる風の感触。外套の上から生えた薄羽を動かす感覚。現実世界にいる自分と似た体躯。誰かの言葉を借りるならば“噛み合った”と言うべきだった。

妖精はフードを深く被り直し細く息を吐き出した。

剣の世界で行っていた動作。銃の世界で培った経験。自身の中に溶け込んだそれが身体に馴染む。咄嗟の判断も、僅かな動きですらも、自身が彼であり、彼が自身であったと理解させられる。

「…………このぐらい、かな？」

ようやく自分が納得出来る基準値まで到達した。それは能力値であり、動作感覚であり、意識であった。

自分が笑んでいるのを自覚して妖精は口角に指を押し当てる。彼ならもつと劣悪な嗤いを浮かべていた筈だ。見えない自分の顔と口元をムニムニと数十秒ほど動かして諦める。

彼には成れない。それはわかりきっていた事であるし、そして彼に成るべきではない事もわかっていた。

妖精は溜め息を吐き出しながら、コンソールを開いてドロップアイテムを確認する。情報では自分達好みの耐久値の高い武器を落とす

筈である。

そこそこにレア度の高いらしいその武器を妖精は見たことがない。レア度が高いと言っても、統計的に言うのであれば彼は既に二桁程その武器を所有しているもいい筈である。

アイテム欄を確認しながら、手元に回復POTを呼び出して口に含む。溜め息を吐き出したい気持ちになりながらコンソールを閉じて頭を振る。

「こんな所だけ似なくていいのに……」

減っていたHPの回復を見ながら腕を空へと伸ばす。もう暫くは潜っていても問題ないだろう。

視界の端に映る時計を見ながら妖精——ナッツは緩く微笑む。

「……もう一狩りしよう」

草を踏まないようにふわりと身体が浮く。改めてナッツは深くフードを被り直し意識を集中させていく。

何かに隠れるように。何かから逃れるように。慣れ親しんだ隠密スキルを起動しながら森の中へと姿を消した。



空と同じ色の髪。その頭からは尖った耳が生え、歩く度にゆらゆらと山猫のような尻尾が揺れる。

普段は冷たさを思わせる美貌もどこか綻んでおり、鼻歌でも奏でそうな程に足取りも軽かった。

頭の中で戦闘に必要な物をピックアップしていき、更にNPCショップ、或いはPCショップの並びを思い出しながらルートを選択していく。

予定されていくルートは寄り道らしい寄り道もなく、悪く言えば女らしくないルートである。

そのことを自覚しながらもシノンはやはり楽しそうに街を歩く。

多忙である彼から珍しくお誘いが来たのだから、嬉しさもある。

それこそ彼とこの世界で戦闘を共にするのは初めてではない。けれど二人きりというのは初めてだ。普段はいる筈の保護者が今回は居ないらしい。よくよく思い返せば保護者である彼女が隙を見ながらであれ、時間を作れていたのも奇跡的な話なのかもしれない。

必要最低限よりも少し多めに回復POTを購入する。相棒である彼は変わらぬ悪癖が発覚して、所持欄の中はNPC販売の武器ばかりだ。呆れを通り越して感服する。出来る事ならばその悪癖は無くなつてほしかった、というのが願いであつたけれど。

果たして彼が“彼”に似た事に喜べばいいのだろうか。それとも彼が“彼”に似てしまったと嘆けばいいのか。

どちらにせよ彼の悪癖が直る訳でもなく、更に言えば「なんや大変そうやなあ」と他人事のように言われた過去と反して次はやや丁寧な言葉使いで謝られるのがオチであろう。悪癖が直ることはない。

「シノンじゃないか」

溜め息を吐いていれば聞き覚えの声に顔が動く。そこには黒が在った。上から下まで黒の闇妖精。

顔見知り、と言えない関係であるし、自分の無茶なレベリングにも付き合ってくれた人でもある。

「ハアイ、キリト。奇遇ね」

「ちよつと噂を聞いてな」
「噂？」

「そ。キリトくんだったらこの層で見つかったらしい巨大骸骨を倒すつて息巻いちやつて」

「へえ……」

自分の後ろから現れた青色の水妖精に会釈で挨拶を交わしながらキリトを見てやれば、拳を握って珍しく闘志を燃やしている。彼の頭の中にはレアドロップというロマンが溢れているのだろう。シノンは知らないが巨大骸骨という点でも彼は少しだけロマンを抱いている。

そんなロマンに向けて目を輝かせているゲーム内での夫に苦笑す

るアスナはシノンの手元に視線を落としてその笑みを深くする。

「もしかして、シノンも？」

「私は……そうね。たぶん、そう」

「お互い苦勞するね」

「ええ、ホント」

シノンが吐き出した溜め息に似た物を感じたのか、アスナは笑みを綻ばせて旦那の手を取る。今度紹介してね、という言葉を残して人混みに消えていく二人を見送りながらシノンは今回来たメッセージを読み返す。

何度か読んだ文章であるが、もしかしたらどこか読み飛ばしたかもしれない。なんせメッセージの中には巨大骸骨の文言などありはしないのだから。

二回程、上から下までしつかり読み直したシノンは溜め息を吐き出して、チラリと視線を横にズラす。

隣を見ればいつの間にか湧いて出た様にそこに在る茶褐色の外套を被せられた存在。目深に被ったフードの出口からチラリと赤い宝石がシノンを覗いた。

「巨大骸骨なんて一切書かれてないんだけど？」

「必要ないと思いました」

「ふーん……」

淡々と言い零した茶褐色の塊は額の赤い宝石をシノンから隠すようにそっぽ向いてシノンの視線から逃れる。

被ったフードの端を掴み引つ張りながら、小さく呟きを漏らす。

「……検証やし」

「……そういう所ばかり彼に似てるのね」

「ほ、ほら、シノンならわかってくれてるって知ってるし」

「だからって言わない理由にはならないわよね？」

逃げるように言葉を口にした茶褐色の塊に対して追い詰めるように言葉を置いたシノン。あああうと言葉を選んでいる相手の頭をフード越しに撫でる。

何にしろ自分は既にココにいる訳であるし、彼の言っている通りに

言う必要は確かになかった。

撫でていた手は数秒程で弾かれるように退けられ、フードの中身からは恨めしくシノンを睨む瞳。

「……なんで撫でてるんさ」

「可愛い物を愛でるのは女の子の特権でしょ？」

「……シノンのそういうところ嫌いや」

「あらそう、残念ね」

拗ねたように唇を尖らせた存在にくすぐすと笑みを零したシノンは自身の装備と消耗品を改めて確認してウインドウを閉じる。

嫌い、とは言いつつもシノンの隣でテトテトと歩く存在にシノンは笑みを深めてひよろりと尻尾を外套越しに巻く。尻尾の先へと視線を落として、隣を歩くシノンへ視線を上げれば素知らぬ顔をされてしまう。

「どうかした？」

「……なんもあらへんよ」

不貞腐れた様子もなく、尻尾を退ける訳でもなく、ただ緩やかに二人は人混みへと消えていった。

「それで、検証って言ってたけど」

「噂の巨大骸骨の出現条件がちよつと特殊みたいで」

「……ちよつと待って、その言い草だとある程度試したの？」

「え、はい」

さも当然だと言わんばかりに言った茶褐色の塊。何か変な事を言っただろうかと言わんばかりに小首を傾げている辺り彼らしいと言えそうであるが。

行き掛けに聞いている話の内容として、件の巨大骸骨なるレアMobの出現条件が“特定エリア内で出現する敵Mobを一定時間内に不定数狩る”というモノである。

一人で狩れる量にも限界があるだろう。ある筈である。

「試した……って事は不確定情報で流れてる、明らかに一人では狩れないだろう数を狩ったの？」

「はい。出現条件でしたし」

「……一人で？」

「同行してくれる知り合いはいませんか」

「………っはあー」

「なんで溜め息吐くんですか……」

自分は悪くない、と言いたいのかジトリとシノンを睨むけれど残念ながら彼が悪いのである。

「キリトとか居たでしょう」

「……その、未だ会う決心が」

「……私も居たんですけどー？」

「シノンはGGOにも顔を出して居るじゃないですか」

「そりゃあ……でも一人は無いでしょ、一人は」

行動を批難しながらシノンは小さく息を吐き出す。

数十分程前に出会った黒の妖精と目の前にいる茶褐色の妖精は元々同じ世界に存在し、肩を並べて戦っていた存在なのは間違いない。それはシノンも知っている。

けれど、この世界——アルヴ Heim・オンラインの中で二人は未だに出会っていない。それこそシノンが出会った事のあるキリトとそれに連なる繋がりと目の前の存在は隔絶されている。

他人ではない。彼にとつてはそうである。間違いなく、知人——友人、戦友などと称してもいい存在達だ。

けれど、それは正しくて、大きく違う。決定的に、明確に、正しく、彼らは戦友、友人——知人ですらない。

「……ま、気にしないと思うけどね」

「……キリト達が気にせんくても僕が気にするし」

「はいはい」

気難しい存在の頭をフード越しに撫でれば次は静かに享受する。

数秒程撫でられ続け、満足したのか、それとも近くに姿を現した二足歩行の獣に反応したのか、フードの出口は静かにそちらへと向く。

撫でていた手を離し、左手に弓を現して肩を竦める。

「それじゃあ、移動しながら狩りましょうか」

「うん」

硝煙と荒野の世界と比べれば幾らも幻想的な世界。銃も無ければ、自律兵器も存在しない。

けれどそこには魔法があった。弓があった。剣があった。そして彼もそこに在るのだ。

小さく息を吐き出したシノンは毛を僅かに逆立てて弦を絞りこんだ。

44. 人は其れを運命と名付ける

曲剣が翻される。弾いた直剣を構えられる前に茶褐色が小さな体軀を滑り込ませる。

毛むくじやらの腹部を刃が撫でる。赤いエフェクトが散り、斬られた事をようやく認識した毛むくじやらが一時の間を置いて自身の背後にいる茶褐色へギロリと目を向けた。

同時に毛むくじやらの喉元に白羽が突き立てられる。獣型のMObはやはり外套を被り続ける存在へと目を向けながら消滅していく。茶褐色のフードの中から小さく息が吐き出された。

数分程で両手で数えられなくなる程にはこの獣型を狩った。けれどもやはり目的の存在が出てくる様子はない。変わらずどこから湧いてくるのか毛むくじやらが更に姿を現した。

曲剣を構えながら違和感を覚える。処理速度を上回る速さで獣型MObがリスポンしている。自分一人で狩っていた時はそれこそ獣型を探して狩りをしていたのに。

処理速度が自分一人の時よりも劣っている？ それは否である。二人だから、という事ならばそれこそもつと噂になっていい筈だ。なら――、

フードを真つ二つにしようと剣が振り下ろされる。直剣の腹を曲剣が叩き、毛むくじやらの首元に反った刃が置かれる。毛皮に阻まれながらも刃と共に身を引き他の獣型達から離れる。

一步、二歩とたたらを踏み意識を耳に集中させる。

鼓膜を揺らしたのは僅かな異音であった。風の音でもなく、空気を裂く矢でもなく、喉を震わす威嚇でもない。何かを折りながら進む音。障害物など意に介さない。

靴を超えて僅かに感じる震動。次第に大きくなる揺れと予感。動いたのは無意識であった。ただ自身の中にある何かが反応したと言っても良かった。

たたらを踏んだ足を無理矢理返し、後ろ腰に曲剣を収めながら敵達に背中を向けて踏み出した。そんなたった数秒の動作で驚きを顔に

するシノンを視界に捉え、手に染み付いた行動として見ることもなくウインドウをタップする。

虚空から柄を掴み、左手でシノンを押し飛ばして更に駆ける。掴まれた柄は引き抜かれると同時に分厚い大直剣が姿を現し、目の前に迫るであろう脅威から主人を守るように盾となった。

太い枝を引き千切りながら現れたのは白であった。大人を縦に二人並べた程度の高さ。木々をへし折ったであろう二本の腕には折れてなお巨大な直剣と刃毀れが目立つ両刃の斧。腰に巻かれているのは先程まで狩られていた獣の皮が巻きつけられ、そこからは人型ではなく、まるで百足のように太い胴体と足が生えていた。

髑髏の瞳には何も灯らず、カタカタと外れた顎骨を鳴らしながら、停止せよと直進する。目の前にいる小さな存在を蹂躪するように、前進しながら直剣が叩きつけられる。

地面と鉄ではなく、鉄と鉄がぶつかり火花を散らしながら音を森の中へと染み込ませた。

フードの中から怯えもせず骸骨を睨めつけ、受け止め、流した直剣に構うことなく、茶褐色の妖精はその羽を広げ地面から足を離れた。

目の前を横切る巨大な骨の化物とソレに押し連れ去られる相棒の姿。押し出され膝を地面につけてしまっていたシノンは一拍遅れて反応してしまう。

「まっ——」

追いかけることがなければ、追いつかなければいけない。それこそ相棒の力量は知っている。こんなバカげた数のMobを前衛一人で耐えられる程の力量はある。見た目で判断する事はないけれど、彼ならば大丈夫であろう、というよくわからない確信はある。

けれど、それでも彼にもしもがあつたならば——所詮はゲームでの死である。リスポーン地点に戻れば彼は確かにそこに居るだろう。それはこの世界のルールである。

「ッ、二回目なんて許さないわよ！」

だからシノンは立ち上がり羽を広げて地を蹴った。自身に出せる

最高速で、相棒を追おうとした。薙ぎ倒された枝や押しつぶされた草が道標になってくれるだろう。追えていれば。

彼との間を割くように空へと緑色の幕が降ろされる。伸びる鳶には幾つもの棘が生え、触れただけでもHPを削られてしまう事は判断できた。

伸ばした手を引っ込めてシノン は地面に立っている畜生共を見下ろした。邪魔をする敵を見下した。

舌打ちを一つ、上から降り注いだ鳶の波を回避して矢をつがえる。幾度も行った予備動作と着弾予想。弦から放たれた矢が正確に杖を持つ畜生の眉間へと吸い込まれる。けれども鳶は消えずにシノンを追いかけてくる。

上下左右前後、どの方向からも伸びてくる鳶の槍。回避行動に専念すれば当たる事はないだろうが、それでは敵を減らす事はできない。攻撃の方向を減らせば、攻撃もできる。

経験則と自身の力量からの判断であり、シノンはそれに従い地面へと下りて短く息を吐き出した。

両手で足りない数の敵M o b。撃破時間の割り出しはできるけれどそれでは遅すぎる。強行突破——は自分の力量では無理ではないが、いざ追いついた時に戦闘ができるかはわからない。

止まらない冷静な思考がシノンを自覚させる。それでもシノンに撤退の二文字は無い。だからこそ自身の行動に迷いを交ぜない。

迫る敵を一瞬だけ確認して、脛を下ろして大きく息を吸い込み、止める。早い鼓動を無理矢理抑えつけて、研ぎ澄ませていく。薄っすらと開いた脛の間から細くなった瞳孔が敵を捉えた。振り下ろされた直剣を後ろにステップする事で回避して矢を放つ。同時に放たれた三本の矢が狂いもなく喉元へと吸い込まれ、獣型がポリゴンに散ると同時にシノンは地面を駆けた。

止まらず、迫る攻撃を回避し続け、同時に杖を持つ敵を各個撃破していく。

狙いを定めさせず、相手の隙を逃すこと無く、ただ作業敵に矢を放つ。

剣など当たらない。蔦の槍には捉えられない。

あと三体。

シノンの冷めた頭が状況を判断する。直剣を持つ獣は相変わらず両手で数えられないけれど、杖を持った獣は残り僅か。杖持ちさえ倒せば蔦はなくなり、突破できる。

あと三体。迫る剣を避け、足に体重を乗せて振り返ろうとした。矢をつがえ、危険であると判断した敵を射るだけであった。

「——え？」

踏み込んだ足が何かに引つかかった。そのまま勢いに地面に手を伸ばす。足に纏わりつく何か。視界の端に映るHPバーが継続的に微かに減っていく。

足には黒色のブーツに絡まる幾重もの緑色。散っていく僅かな赤いポリゴン片。

混乱した頭が一気に冷え、状況が断片的に脳に理解させていく。蔦、棘、杖持ち、地面の下。転倒した理由は即座に理解できた。そして同時に息を飲み込んだ。

獣型Mobが直剣を振り上げ、シノンを見下している。ようやく捉えた獲物を逃さないようにしつかりと視界に入れ込んでいた。

十分に理解させられた。脱出できる余裕はない。せめてもの抵抗で腕を上げ弓で防御を試みる。盛大に減るであろうHPと数の暴力を予想し、瞼を閉じる。

一秒。

二秒。

攻撃はこない。弓で防いだ衝撃もない。瞼を上げてやはり獣型は目の前にいる。

けれどもそれは胸から黒色の剣を生やしていた。

「シノン！ 無事か!？」

「キリト!？」

獣型から引き抜かれた黒い剣を持っていたのは剣と同色の剣士であった。

驚きを隠す事もできず自身の背後を見れば慌てたように近付いてくる水色の髪のアサギと金髪ポニーテールのアサギと赤毛の野武士妖精。

「おう、無事かシノン」

「え、ええ……どうして——」

「グリム……巨大なムカデ足の骸骨がこつちに来ただろ？ それを追いかけてきたんだ」

恐らく先程の骸骨の名前を言いかけたキリトの言葉を聞きながらシノンは状況を把握していく。

モンスターの出現頻度の理由、同時に狩っていたキリト達の凡その速度、そして巨大骸骨の出現。恐らく先に彼らが条件を満たしたのであろう事はすぐに理解した。同時に彼らが巨大骸骨を追いかけた理由を予想する。

「出現と同時に移動した？」

「いや、途中で逃げ出した」

予想していた悪い方である。「ある程度攻撃を加え、HPが減少した敵が予測していない攻撃動作をする。」というのは可能性として大きい、その予測していない動作を初期の動きも知らない彼が対応しきれぬのか……。

シノンは大きく息を吸い込んで、細く息を吐き出す。

「キリト、お願いがあるの。あの骸骨に——私の相棒が連れて行かれたから、先に行って助けてほしい」

「……わかった。アスナ」

「うん。できるだけ私達も早く追いつくから」

「それから、彼にごめんなさい、って伝えてほしいの」

「？ ああ」

シノンの言伝に僅かに疑問を浮かべたキリトは前に見える二足歩行の獣達を見やる。幅広の直剣を強く握り込み、仲間たちに視線を向ける。

一歩。地面を蹴り飛ばし姿勢を剣を脇に構える。

一歩。更に力を込め、獣達への距離を詰める。

一閃。倒れはしないであろうが、ある程度だけでも体勢が崩れる。

キリトにとってはそれだけでいい。

隙間を抜けるように更に一步踏み込めば先に向かわせないように獣達が犇めく。

「はあああー!」

「てりやあー!」

水色の髪が揺れ、金髪の尾が靡く。

キリトを守るように、突破させる為に辺りの敵を散らした二人に視線を向ける事もなくキリトは駆けた。向ける必要などどこにあるか。

「頼むよ、キリトくん!」

金髪の声が林に響き、黒の装束が彼の意味を示すようにヒラリと振られた。

「パパ! こっちはです」

木々の合間を高速で駆け抜けている事もあり服の胸元に入っていたナビゲーシヨンピクシー《ユイ》の道案内を頼りにキリトは駆ける。案内、と言つてもキリトの眼前には薙ぎ倒された木々と押しつぶされた草が通った道を物語つてはいるのであるが、娘の頑張りに口を挟むほど野暮でもない。

数分程駆けた所でキリトの耳に鉄を打ち合わせた音が響いた。普通の戦闘、という割には多すぎる音に目標の位置に当たりをつける。

「……………え?」

「ユイ、どうした?」

初めに疑問を口にしたのはユイであった。

過去である——以前のシステムを結果として一部継承しているユイだからこそその存在に気づき、そして疑問があった。

確かに間違いではない。何も間違いではないのである。

けれど、それはユイにとって違うのである。

けれど、それは正しく間違いなどではない。

「——パパ、もうすぐです」

「？ ああ」

システム的に間違っている行動であったとユイ自身は感じていた。人工知能として間違った判断であった。けれどそれは恐らく正しい判断であるとユイは自身を結論付けた。

導き出した結果を言葉をするとしても“今”ではない。そして自身の間違ひである可能性の方が大きい。

ユイが何かを言い淀んだ事はキリトもわかっていたが、それが何であるかまでは予想できなかった。追及し、聞くにしても“今”ではない。

疑問を振り払うようにキリトは更に足に力を込め、木々の切れ目——林に囲まれた広い空間に出た。

骸骨百足により振り下ろされた巨大な折れた直剣が茶褐色の小さな塊を持つ曲剣に防がれ、地面に流された。土煙に紛れながら僅かにできた隙に曲剣が閃く。

一瞬の間が空いて斧が振り下ろされる。外套がはためきながら曲剣の刃が骨を滑る。

たったそれだけの動作であった。

機械仕掛けのように、流麗に踊るように、相手の行動を見切った動き。攻撃の防ぎ方。攻撃の太刀筋。曲剣の使い方。足運び。

キリトは目を惹かれた——いいや、そうではない。記憶にある戦友の像が被った。

その茶褐色の外套が。

その曲剣の使い方。

その小さな体躯が。

そして僅かな違和感がキリトの判断を遅くさせた。

直剣を流した直後に持っていた曲剣がポリゴン片へと変化した。振り上げられた斧が向かう位置はすでに決められている。

「危ないッー」

咄嗟に声を出したのはキリトの本能的な叫びであった。そして外

套を纏った妖精は僅かであるがソレに意識を取られてしまった。

重量と勢いに任せて振り下ろされた斧は盛大に土埃を立ち上らせ、その中から茶褐色の塊が吐き出される。

空中で体を地面に手を付いて跳ねる。外套を巻き込むように回転したソレはポリゴンを纏う。

キリトの耳が何か風を斬り裂いて、地面に突き刺さる音を捉えた。そしてキリトの隣には片刃の両手剣が地面から斜めに生え、その柄に誰かの足が置かれた。

ガリガリと地面を削り、勢いも削れたのか、地面に生えた両手剣の柄の上に茶褐色の妖精が悠然と立ち、フードの奥からキリトを見下していた。

何かを語る訳でもなく、ふわりと外套を翻しながら両手剣から降りた存在は後ろ足に剣の腹を蹴って霧散させた。

キリトも何も語らずに、ただその存在を見つめる。

そんなキリトの存在など認識できないかのように、歩きながら後ろ腰に手を当てる。引き抜かれたのは長く僅かに反った曲剣。

「——合わせるよ」

まるで元々そうであったようにキリトはそう口にして、茶褐色の外套がピクリと揺れる。剣を握っていない左手がヒラヒラと揺れ、キリトに意思を示した。二人にとってはそれだけでよかった。

ああ、とキリトは一人で納得して口元に笑みを浮かべた。純粹に喜びを感じたのだ。

繰り返した戦闘の数などもはや覚えていない。風変わりな立ち回りの苦言も覚えていない。人付き合いに苦言を漏らされた事も覚えていない。絶対に週刊誌アイドル扱いされた事は忘れなかった。

けれど、それすらどうでもいい。いつかの戦闘を——この敵で行える。運命を感じずにはいられなかった。

曲剣が翻り、同時にキリトが駆ける。

「スイッチー！」

言葉が口から吐き出される瞬間。まるで知っていたように茶褐色のフードが翻り萌黄色が溢れた。

45. それは誰かの名前。

土埃を切り裂くように斧が振り下ろされる。武器の持たない左腕を上げ、僅かばかり刃に掠らせながら腹を殴打する。

斧が地面を抉った事などお構いなしに折れた直剣が地面と水平に空気を裂いていく。視線は決して逸らさずに中身のない眼窩を見やる。迫る折れた巨剣を曲剣で叩きつけ、刃毀れだらけの斧を足場に空へと跳ぶ。

鬮髑が鳴りながら動く。自身を飛び越える程の跳躍を見せた小さな妖精をただ眺めて、骨腕を動かした。小さな羽での機動制御では間に合わない、確実に仕留める為の動き。

萌黄色の髪をした妖精の口が小さく音を紡ぐ。呪文ではない。魔法の類ではない。

ただ一言、これほどまでに視線を向けている骸骨を見ながら、骸骨を無視して。

戦闘は恙無く終了した。それこそ後を追ってきたシノンを含めた四人が合流する前に終わってしまった。

耐久力の無くなった外套がポリゴンへと散り、萌黄色の髪をした妖精がその姿を露わにする。腰に巻かれたベルトに装着された反りのある鞆に刃を隠し、妖精は一息吐き出した。

「ナッツ」

その名前を呼んだのは共闘を果たしたキリトである。握った剣を戻すのも忘れて、この世界に居た友人——戦友に声を掛ける。どうしてこの世界にいるのか。居たのならどうして声を掛けてくれなかったのか。キリトの中に自分勝手な疑問が溢れ、口を噤ませる。

呼ばれた妖精は一瞬だけその名前に反応して、少女にも見える貌をキリト達へと向けた。困ったように眉尻が下がり、何かを言うべきかと口が少し開いたが何も言えず、代わりに誤魔化すように笑みが浮かべられた。

「ナッツ!? 本物かよ!」

「久しぶり!」

近寄ってきた赤髪の武者や青髪の騎士にもその困ったような笑みが向けられ、何かを語るべき唇が噛まれる。

笑顔で再会を喜ぶべきであった。適当な関西弁に毒の効いた言葉でも吐き出せばよかっただろうか。それとも真実を告げるべきだったのだろうか。

笑いながら話しかけてくる言葉の半分も頭の中には入ってこない。自分は上手く相槌を打っているだろうか。自分は上手く笑っているだろうか。自分は上手く成れているだろうか。

「はいはい。ごめんなさいね」

そんな彼を保有するように後ろから拘束された。話題の存在を独り占めするように胸元に抱き寄せてニッコリとシノン^Aは笑みを浮かべた。

「おい、シノンも人が悪いぜ。ナッツを知ってたのなら教えてくれよ」「お生憎様。私はこの子と貴方が知り合いだなんて知らなかったの」

この言葉は嘘ではないが、真実でもない。

実際にクラインとナッツが知り合いである事なんて知らなかった。正確には確証がなかった。あのゲームからの帰還者であるキリトと仲間であるからなんとなしに予想はしていたけれど、それだけだ。

その証明ができるのは前のゲームと一緒に戦ったキリトだけであるが、どういう訳かそれは追及されない。

「……ところでシノン。もしかして付き合ってるって」

「? ええ」

「……つまりシノンさんってロリコン?」

「ロツ、違うわよ!」

女性陣二人からの口撃に尻尾を逆立てて否定しながら僅かに引っかかりを覚えた。抱きしめている彼は確かに美少女のような顔をしているがちゃんと男性である。雑誌にだってそう書いてあるし、間違いない。言われるのであればロリコンではなくシヨタコンであるのだが、それは訂正されていない。

SAOでは確か現実の容姿が反映されたらしい事も鑑みれば……、と考えた所でシノンには抱きしめているナッツを見下ろす。果たしてその視線に気付いたのかスツと視線を地面へと下ろしたナッツ。顔を上げて四人を見渡せばキリトだけが視線を逸らした。察した。

「それにしてもナッツ、教えてくれてもよかつたじゃねえか」

「……」

「ナッツ?」

「ごつちも色々あつたんよ。事情もちゃんと話したいし現実^{リアル}で会われへん?」

「オフ会か」

「リズ達も誘おうよ。きつと喜ぶよ」

「ちよつとお、私だけついていけないんですケド」

頬を膨らませて蚊帳の外である事に不満を漏らす金髪の妖精にキリトは苦笑する。

「えつと、リーファも一緒にいい、かな?」

「構へんよ。別に重っ苦しい話する訳やないし」

「あー、ごめんなさい。詳しい事は後でメッセージ送るから、いいかしら?」

ニツと笑みを浮かべたナッツを強く抱きしめてシノンが急ぐように言葉を繋ぐ。「デート中なの」と加えれば賑わい出す女性陣とどうしてか「尊い」と呟いて空を見上げるクライン、そのクラインを【可哀想なもの】として視線を送るキリト。

一言謝罪を入れて、ナッツの手を握りしめながら足早にシノンは歩き出し、ナッツもつられて足を進める。

状況を整理しながら、ナッツの手を離すことなくシノンは足を進める。今はなるべく四人から離れるべきだと判断した。

思っていた関係とは違った? いや、それは無い。GGOで出会ったキリトとナッツの関係は良好であった。互いを信頼し、自分が嫉妬までした程である。

仲間に苦手意識があつた? それも、恐らく違う。キリトの性格か

ら考えてもそういつた事は嫌うであろう。

あの四人が善人である事は体感している。だからあの四人が原因という訳ではない。

チラリと背後を確認して、ナッツの後ろに誰もいない事を確認する。少なくとも視界範囲にはいないし、聞こえる範囲でも足音などはない。

足取りをゆっくりと遅くして、繋いでいた手を引き寄せる。優しく頭を抱いて髪を撫でる。手に僅かな震えを感じながら、その追及はしない。

彼が落ち着くまで、何度も頭を撫でて鼻を髪に埋める。

「……大丈夫なの？」

彼の震えが弱まった所でようやくシノンが口を開いた。先程の状況を鑑みても、現実で会うのは彼にとってデメリットであろう。ナッツとして過ごしてきた日々。そしてナッツでありながらナッツではない彼。

「大丈夫……」

「……そう」

先程のやり取りを見ている限りは大丈夫そうではない、という言葉でシノンは飲み込んだ。自分にとってのトラウマのように、彼にも全てを抱えて進むべき事がある。だからこそシノンは——詩乃はそれを止めることはない。

ナッツを守るように隠す事はシノンにもできる事だ。ナッツ自身に「会うべきではない」と伝える事も容易い。けれどそれを彼は望む事はないだろう。自分がそうである様に。

何もできない。すべきではない事を理解しながら、それを歯痒くも感じる。

自分も、彼も、進む事を選んだ。

だからこそシノンが直接的に何かをする事はない。それは彼の意思を踏みにじる結果になるだろう事は予想できた。

自分の腰に回された腕の力が僅かに強くなるのを感じる。

震える体を落ち着けるように深呼吸が続けられ、大きく息が吐き出

されてナッツがシノンから離れる。

「もう大丈夫なの？」

「はい。落ち着きました」

「それは残念ね」

そう^{からか}揶揄うように言えばナッツは困ったように眉を下げて微笑む。

きっと現実で彼らと会ってもナッツは真実を言うことはないだろう。それこそ彼が先程言った通り「重い話」なのだから。

離れてしまったナッツの名残を感じる腰にバレないように手を当てて、大きく息を吐き出す。

強い彼ではない、弱いこの子を支えるぐらいはいいだろう。

お互いに支え合う関係、と言えば聞こえはいいが半ば共依存のような関係である事を思考で皮肉りながら落ち着いた様子で外套を取り出して羽織る彼に引つかかっていた疑問を投げかける。

「そういえば、S A O^{ムコウ}では女の子として振る舞ってたのかしら？」

ニンマリと意地悪く笑って言ってみせれば、妙に背筋を伸ばしたナッツがその少女らしい顔でぎこちなく笑顔を浮かべながら可愛らしく小首を傾げてみせた。

46. 『加藤夏樹』

耳に触れる程度のジャズが優しく鼓膜を揺らす。サクスのスケールを辿るように幾つもおクターブの低い鼻歌が響き、ハイハットの音に追いつくようにつま先で床板を叩く。

慌ただしい時間も終わり、閑散としたDicey Cafeにアンドリユー・ギルバート・ミルズは洗い終わったカップを拭き、コトりと棚へと戻して満足気に息を吐き出す。

一段落して、店内の見渡してから時間を確認する。予定している時刻よりも少しばかり早い、もうそろそろ来るかもしれない。最終確認として頭の中で準備すべき物を羅列していき、一つ一つにチェックを入れていく。下拵えにそれなりに準備の掛からない物であるならば、最悪どうにでもなるがコレも職業病みたいな物だろう。

ジャズも終わりを迎え、外には路地裏には似つかわしくない姦しいとも思える喋り声が響き聞こえ、アンドリユーは思考顔を笑み変えて扉が開くのを待つ。

「いらっ……なんだ、お前か」

「一応、今日は客だぞ」

ダークブラウンの扉が軋みを上げながら開いて現れた黒髪の少年の姿にアンドリユーはその笑みと挨拶を途中でやめて溜め息を吐き出してみせた。溜め息を吐かれた方はといえはその対応にムツと顔を顰めてみせるが、お互いに慣れてしまった挨拶である。いつかの仮想世界でのやり取りであるし、現実世界においては常に客であった少年であるがこの対応を楽しんでいる節もある。

「こんにちは、エギルさん」

「ああ、いらっしやい」

「やつほー、エギル」

「おう、元気そうだな」

少年——桐ヶ谷和人の後ろから店内へと入ってくる少女達一人ひとりに挨拶を交わしながらアンドリユーはその悪役レスラー顔に笑みを浮かべる。当然、それは疚しい気持ちなど一切なく商売人とし

て、友人としての感情である。

杜撰に挨拶をされた和人が拗ねたようにカウンターに肘をつくまでが彼らの挨拶になっている。

「それで、本当にナッツが来るの？」

「このオフ会を企画したのもナッツだからな」

行き渡ったソフトドリンクで喉を潤してから口火を切ったのはリズベット——篠崎里香であった。PCとデバイスの準備をカウンターの上でしながら応えたのは和人である。

ナッツが来る、という事に不満はない。あるのならばこの場にはいなかっただろう。けれど、あのいけ好かない存在がやってくるというのも里香にしてみれば信じられない事であった。現実世界で会ったならば一言言ってやろうと、ALOで会ったならば一発殴ってやろうと、SAOが攻略されて影も形も無かった事に、どれだけ心配させるのだと、文句でも言ってやろうと。

仮想空間という繋がり希薄な場所であったけれど、こうして和人達とは出会えたのに、その繋がりの一部でもあったナッツとは出会うことはなかった事もその一因だろう。

「ナッツさんも、あのゲームのプレイヤーだったんですよね？　どんな人だったんですか？」

「わたしも、噂だけしか聞いた事ないですよね」

オレンジジュースを飲み込んでから黒い髪をバツサリと切った少女——桐ヶ谷直葉が疑問を口にする。その疑問を追うようにシリカ

——綾野珪子が件の人物に関しての噂を思い出す。

その噂という物も随分と曖昧な物で、最前線にいる小さな落下星という称号と下層攻略支援ギルド「クラウン・ブラウニー」のギルド長をしていた事、茶褐色の外套とフードを被ってその顔を見せない事など。身体的特徴など小さいという事ぐらいしか知りはない。

「なんというか……凄いやツだった」

「うーん……心配になる妹？」

「商人達の元締めだったな……」

「変人」

和人から始まり、結城明日奈が繋いで、アンドリユーが何かを思い出したのかドコか遠い所を見ながら眩き、バツサリと里香が切り捨てた。散々な評価であるが、至極真つ当な評価でもあった。それが全く知らない直葉と瑠子に通じるかどうかは別として。

直葉自身はALLOでその存在に出会っているが会話らしい会話もなく、その小さな存在も架空のキャラクターである事とSAOでの評価が散々な事から今から来る人物に対して少しばかり緊張してしまう。どんな人が来るのだろうか。SAOの対象年齢も加味して予想しているが故に決して答えには辿り着かないだろうが。

件の人物を思い出していた和人がふと思い出す。

「そういえばエギルは現実こっちであいつに会ってるんだよな」

「ああ。最初はナッツだなんてわからなかったし、あいつも俺を見て止まっちゃうし」

思い出してみれば随分と滑稽な再会であったとアンドリユーは感じる。連絡を取り合った訳でもなく、ただふらりと、偶然立ち入ったその存在が数秒ほどアンドリユーを見て停止した後、いつものようにカウンター席へと座って「ジャーキーはある？」と訛りの効かせた言葉を吐き出した所でアンドリユーも驚いてその人物の名を言い当てたのだ。

「エギルさんも言ってくればいいのに」

「その、あいつにも事情ってもんがあったぞ……」

明日奈のぶうたれた声に悪役レスラーも困ったように首に手を置く。美人に弱くなつてしまうのは男としての本能であるし、事情に關してもアンドリユーの口から言うつもりもなかった。今日来れば彼自身が言うだろう、とアンドリユーもわかっている事であるが。

「ママ、ダメですよ。エギルさんを困らせたら」

「ユイちゃん!?!」

「はえー、凄いわね」

「まだ試験段階だけど、ナッツが来るなら会いたいだろうしな」

「最近徹夜してると思ったらお兄ちゃんそんな事してたんだ」

「かなり限定的だけど、見る、聞く、喋るはできる……答」

「はずってあんた……」

「まだ試験運用だから……バグチェックとかは大雑把に終わらせただけで、今回のログデータ次第でまた組み直す予定」

予定されている作業量を思い浮かべながらから笑いを浮かべた和人であるが、これも我が子の為である。尤も、その我が子があの鬼畜シヨタに会いたいと言ったのも親心的には複雑ではあったが。

娘の参戦もあってか姦しく喋る女性陣と眠気の解消のためにブラックコーヒーを喉に押し込む和人の耳に扉の軋みが入り、一斉に視線がそちらへと向く。

「……何？」

向けられた少女はキョトンとした顔を浮かべて足を止めてしまう。メガネの奥の瞳は店内を見渡し、知っている顔を見つけて少しだけ安堵した息を吐き出す。

見つけられた顔の持ち主である和人は言葉に迷いながらもいつかもした彼女の紹介をする。

「えー、こちらGGOでの三代目王者チャンピオンである——」

「その紹介、やめてって言ったわよね？」

ジロリと睨んだ詩乃から悪気は無いとばかりに両手を上げて降参を示した和人。同時にそのやり取りでこの少女がシノンを操っている存在である事はすぐにわかった。二度も同じ紹介をされてしまった訳であるし、こうして詩乃が和人に釘を刺すのも姿形は違えど二度目である。

和人の紹介を仕切り直すように大きく溜め息を吐き出す。

「はじめまして。ALOでシノンを使っている朝田詩乃です」

「敬語なんていいよ。今更だしね」

「そう？ ならお言葉に甘えるわ」

美少女とは彼女の事を言うのだろうか。と頭のどこかで思いながら目の前にいた美少女の言葉を甘んじて受ける。

現在いる人達の名前とアバターを合致させながら詩乃は和人をジロリと見る。

「な、なんだよ」

「別に」

いつか刺されるわよ。と忠告してもよかつたが、その一石が原因になつてしまうかもしれない事を考えて詩乃はその言葉を飲み込んだ。案外上手く回っているかもしれない。その渦中に入りたいとは思えないが。

「大会の優勝って言ってもナッツと同着だし」

「え？ ナッツもあの大会に出たの？」

だから別に誇るような事でもない。それにあの手負いのナッツを相手に戦つたとしても詩乃自身が負けてしまふと感じてしまつていたのだ。だから、優勝者という称号に対して忌避感も少なからずある。

と、溜め息混じりに思ったのだが明日奈の疑問に詩乃も疑問を浮かべてしまう。触れてほしくない話題であつたが、件の人物と会うのだから一応言っておこうと口にしたのだけれど……。

明日奈がこのいつか刺されるかもしれない色男だけを見ていただけであっても、この色男を倒した人物こそがナッツである。だからその存在を見ていないという事はないとは――。という所で詩乃は合点がいく。自分もした勘違いである。自分とは逆の勘違いであるけれど。

「ああ……なるほど」

「そういう事だ」

「仕方ない事だな」

「ちよつと、三人とも何か知ってるでしょ」

「あいつが来ればわかる」

詰め寄られた和人がその視線から逃げ出した。その全ての責任のあの鬼畜へと向けたのだ。

詩乃からしてみればある意味当然の勘違いであつた。確かにあんな物わかる訳がない。自分とて初めて見た時は天使かと……いやこれは違う感想だ。

そんなナッツがこの場に来たとして、恐らく勘違いしているであろう事が判明するかと言われれば……無理かもしれない。詩乃は途端

に不安になった。いや、あの子自身が口にするだろう。たぶん。

「シノンさんもナッツに会った事あるんですよね？」

「この中じゃ一番詳しいと思うわよ」

「どんな人なんです？ お兄ちゃん達に聞いてもまったく掴めなくて」

「そうね」と呟いてから彼の事を考える。ナッツ、という存在であるならばGGOでの彼が最も近い存在だろう。そんなナッツの事を思い出し、すぐに言葉を飲み込む。チュートリアルだとか、レイドボスだとか、不死者だとか、変人だとか、奇人だとか色々言える事はあつたけれど、口を嚙む。

その存在は――。

「シノンさん？」

「――そうね。愛おしい人よ」

さして意識するでもなくあつさり吐き出せた言葉と柔らかい笑みを浮かべて、目の前に置かれた珈琲に口をつける。詩乃自身、意識した笑みではないが頬が緩んだ事を察知して隠すように、けれども実に自然とカップで隠せた。詩乃は知りはないが自宅の鏡に映った引きつった笑みではない。

女が三人集まれば姦しいと言い、この場に更に一人多く、もつと言えば恋の話題というなんとも尽きない話題を提供できる詩乃がいるのだ。和人を目的とした話題もまた恋の話になるのだが、それはなんとも複雑であり、他人である詩乃からして見ても触れたくない話題である。藪を突付いて龍など出したくはない。

と言っても、詩乃が彼の事に関して語れる事は少ない。GGOのナッツと加藤夏樹はよく似た別人である。だからこそ、GGOでの事は詩乃の胸の中で蓋をされてしまう。

話の内容も多少はぐらかしながらであるし、SAOでの彼の事を聞く事のほうが詩乃にとっては嬉しい出来事であった。抱いた印象の大凡は「ああ、ナッツだもんね」であったが。

アンドリユーによる軽食――出されたアップルパイがカロリーとして軽いかは別として――に舌鼓をうてば、扉の軋む音が静かに鳴

り、冷たい空気が足元に走る。

姿を見せたのはキャスケット帽をした少女であった。走ってきたのかその呼吸は荒く、頬も少しばかり赤く染まっている。茶褐色のコートの上から胸を抑えてゆっくり深呼吸をして顔を上げる。赤い縁の眼鏡の奥に大きな瞳をぱちりと開けて全員を見渡す。見渡して、口をキュツと絞り、小さく息を吐き出した。

「……ナツツ？」

「——はい。はじめまして」

「はじめまして、って言っても向こうじゃ結構顔を合わせてたけどね」
「そう、ですね」

どこか歯切れの悪い言葉を吐き出したナツツは思い出したように眼鏡を外してキャスケット帽を外す。帽子から溢れ出た萌黄色の髪を頭を振って、手櫛で簡単に整え明日奈をチラリと見てから全体へと視線を戻してナツツは口を開く。

「改めて、はじめまして。SAOあちらでナツツだったユ——」

「もしかして、加藤夏樹？ え？」

その名前を呼んだのは桐ヶ谷直葉であった。ナツツ——加藤夏樹を見る。僅かに開いた口が震え、記憶の中にある姿が目の前の姿と合致する事を確かめ、信じられないように思考を再起動させる。

呼ばれた側である夏樹は驚いたように目を見開いて、瞼を下ろしてから一拍置いて緩やかに開いて微笑む。

「ああ、知ってくれている人が居て嬉しいです」

「え？ ホント？ 本物？」

「直スグ、知り合いだったのか？」

「はあ!? お兄ちゃん知らないの!？」

信じられない物を見たように直葉は手持ちのタブレット端末を操作して和人に押し付けるように渡した。タブレットを受け取った和人の隣から明日奈達は顔を寄せて画面を覗き見れば、そこには何かの雑誌の取材だろうか、和人にしてみれば目の滑る文章がツラツラと書かれ、目の前の存在によく似た——それこそナツツにも似た存在が画像に映っている。

画像を見る。目の前を確認する。画像を見る。改めて文章を見る。

「は？ はあああああああ!?!」

「ほ、本当にナッツ!?!」

「マジ……?」

ナッツの事をよく知る三人に似たような反応をされ、困ったように頬を指で掻きながら「えーつと」と小さく零す。

「改めまして。SAOでナッツだった、えつと、今は役者をさせていた
だいてます。加藤夏樹です」

47. 悪戯妖精の皮を被った天使

萌黄色の髪をした少女に見紛う少年はキャスケット帽をカウntaxターへと置いてグラスに入れられた水で軽く舌を湿らせてから呼吸を整えた。

時間に遅れそうだから走ってきた身体は緩やかに冷めていき、荒かった呼吸はすぐに整えられていく。

その様子を見ながら、桐ヶ谷直葉は恐る恐る、確認するように、口を開く。

「ホントに、本物？」

「はい。僕以外に加藤夏樹が居なければ、の話になりますけど。僕は加藤夏樹で、その手に持っている雑誌の取材も受けさせてもらいましたよ」

「本物だ……すごい、夢？」

「なあ直^{スグ}、そんなに有名なのか？」

「はあ!? お兄ちゃんが世間様の事に興味ないのは知ってたけど、そこまでとは思わなかった……」

「そこまで言うか」

「えつと、そこまで有名じゃないと思うんですけど……」

ね? 困ったように眉尻を下げた加藤夏樹は同意を求めるように自分の事を知っている悪役レスラー顔へと向けば肩を竦められ、同じく知っている朝田詩乃へと向けば溜息でも吐き出されそうな呆れた顔で見られている。誰からも助力は求められないようだ。

「雑誌読んで! ああ、もう! 知ってたら色紙とか準備してたのに!」

「えつと、僕としてもあんまり教えたくなかった、と言いますか……。知ってる事に驚いてるんですけど」

「夏樹さんの舞台をネットで見て、そこから全部見ました!」

「……ああ、そう言えば齋が布教する為とかで色々交渉してましたね……」

著作権や肖像権に関して色々と頭の中に浮かんだ夏樹であったけ

れど、やや熱っぽい息をしながらと自分を盗撮している言動以外は全て完璧な女性が思い浮かんだそれらを全て塗りつぶしていく。訴えられるべきは何も知らぬ民なのか、知りながら行動している美女なのか。

抱えた頭を冷やす為に水を一口飲み込ん――

「ダメよ、直葉ちゃん。この子は私のなの」

「ッ、んつく。けほ、詩乃さん!？」

吹き出しそうになった水をどうにか留めて飲み込んだ。声の主の方を見ればしたり顔で笑っているし、どういう訳か頬も熱くなってしまう。もにももによと言葉を吐き出そうとしても何も出ず、夏樹は諦めたようにグラスの中身を飲み干した。

直葉にしてみれば推しの役者に恋人がいるという衝撃的な事実であるが、元々シンノンに恋人が居て、それがナッツであっただけであるし、更に言えばそのナッツが役者である加藤夏樹であっただけの話である。理解が追いついていないだけなので、自宅に帰ってから枕を抱えて唸る事だろう。

グラスで冷えた両手を頬に押し当てて熱を冷ましていけばようやく雑誌を読み終えた、というべきか現実を受け止める事ができた面々が顔を上げる。

「ナッツ……夏樹くん。ここに性別、男性って書いてるんだけど」

恐る恐る、それはもう信じられない物を確認するように、今も嘘だと言ってほしいと思っているし、何より自分の尊厳だとか、その他女の子としての注意をナッツにしていた明日奈が口を開く。

きつとこの情報は嘘に違いない。今にも彼女の口からは「役作りの為に」だなんて言ってくれる筈である。

「？ はい。僕は男ですけど」

現実は無慈悲である。彼は、彼である。

雑誌で化粧をされた彼の写真を見ても、現実世界の彼の姿を見ても、S A O時代の姿を見ても、ナッツが女性である事を疑わなかった明日奈にしてみれば衝撃的すぎる事実である。

思い出されるナッツとの日常。沢山心配事を増やした少女。自身

の危険を顧みず動く妖精。キリトという存在を巡る恋愛相談。ナツツもキリトの事を狙っているのでは？ などと勘ぐってしまった日々。その事を回りくどく聞けばゲラゲラと笑われた挙げ句に「絶対に無い」と言われたあの日。嗚呼！ あの言葉の意味はそうであったのか！

そして何より1階層ボス前日である。確かにあの日、自身が入浴していた所に入ってきたナツツ。その容姿から女性だと勘違いしていた、勘違いしていたのだ！

何を思い出されているのかは夏樹にはさっぱりわからないけれど、確かに目の前にいる明日奈が怒っている事はわかる。それは自身の性別に関してである事も判明している。逃げ道など無い。逃げ道など無い故に、夏樹はチラリと眉尻を下げて仕方ないよなあ、とでも言いたげな和人へと視線を向ける。

「キリトさんも知ってましたよ」

「え、おい！ ナツツ!？」

「そつかあ……和人くんも知ってたんだあ……ふうーん、へえーそうなんだあ」

「おい、ナツツ。何かしたのか?」

「……ナツツのする事ですよ？ 数えきれないぐらいに」

「……確かに」

ナツツの仕出かした事を比較的身近で知っている和人からすれば明日奈がナツツに怒る事など腐る程ある。けれど性別を偽っていた事となればその数も……いや、きつと多いな。と和人は予想を諦める。

尤も、その中にあの日、アルゴにアスナの存在を知られないように立ち回ったナツツの事情などすっかりと抜けている訳であるが。それを覚えているというのも和人に酷であろう。

「和人くんも納得しないで！ ああ、もう……なんで言ってくれなかったの……」

「……たぶん聞かれなかったからだと思いますよ」

「そうだけど、なんで他人事みたいに話すかなあ……」

「えっと、まあ、その……それに、ユイは僕の事をわかってたみたいですよ」

「はい！ わたしはナッツくんの事を知ってましたよ」

「え？ ユイ、いるんですか？」

見渡してみても電子の存在である筈の少女は見つかるわけもなく、和人がカウンターに置いたデバイスを指さした事でようやく夏樹はその中にいるであろう存在に気がついた。

「お久しぶりです！ ナッツくん！」

「……うん。久しぶりやね。ユイ」

映像はまったくくれないけれど、それでも少女が笑顔を浮かべながら言っているのはよくわかる。少しだけ詰まってしまった言葉をどうにか吐き出した夏樹は力が抜けたように笑みを浮かべる。

「他に知ってた人とか」

「えっと、ギルバートさんはこっちに来てから知った筈ですよ……齋は……そういえばあのゲームの時から知ってたみたいですね」

「なぜな？」

「あ、ウィードです。今は僕のマネージャーというか、なんとというか……まあ、そんな感じですよ」

瑠子と里香、直葉を除く面々にウィードの美貌が映る。同時にそのネジの外れ具合を思い出してしまふ。和人と詩乃に言わせればあの国家機関の一人を震え上がらせる美女であるし、夏樹への傾倒具合も……いいや、それはSAO時代からさほど変化はない。

ウィードの美貌はわからないも、直葉の中ではマネージャーと聞いて思い当たる人がいる。正確にはSNSのアカウントを知っているだけであるが、おそらく件の人物である事は間違いない。神様である。

「あの人、マネージャーにして大丈夫なのか？」

「？ はい。問題とかはありませんよ？」

国家機関を震え上がらせる姿とナッツ狂いな部分の両面を知る和人が心配そうに夏樹に尋ねてみたけれど、夏樹自身は彼女の事を問題として捉えてはいない。確かにやや行き過ぎている部分もあるけれど

ど、ソレを否定できる存在ではない事は加藤夏樹は理解している。

問題がない、という言葉に安堵の息をこつそり吐き出したのは直葉である。あのアカウントが停止すれば名も知らぬ同士が泣いていただろう。そこに自分も含まれるのも厄介であるが。

果たして現実を受け入れきれていない里香と明日奈。登場した人物がSAO世界でも現実世界でも雲の上の存在であった瑛子。

そんな三人を見ながら言葉では決して言わないけれど「わかる」と心の中で理解を示す詩乃。伊達に一番最初に現実を突きつけられただけはある。

「明日奈さん、仕方ないですよ。夏樹さんは女の子の役もしてますし」

「呼び捨てで大丈夫ですよ。リーファさん？　でいいんですよね？」

「ほんとう？　直葉で大丈夫だよ、それじゃ、夏樹くんで」

「はい。……少女役は少ない筈なんですけど本当に全部見たんですね……」

「勿論！」

グツとガッツポーズをした直葉にむず痒い感情を覚える夏樹であるが服を僅かに引っ張られてそちらを見れば素知らぬ顔で視線すら合わせずにグラスを傾けている詩乃がいた。

その感情全てを押し量る事は出来はしなかったけれど、笑みを深めてみせる。

「しっかし、あのナッツが役者とはねえ……」

「そんなに凄いのか？」

「ネットでも噂になってるよ？　演技力の塊とか、神童とか！」

別の界限では不死者であったり、チュートリアル生きた教本であったり、最強のリア充などと最近増えた渾名もある。更に別の界限、尤もこちらは現状電子の海にすらない世界では落下屋などとも言われている。

「そういうえば、あのゲームでも急に女神様みたいになってたな」

「ああ、俺が勇者認定された時か」

思い出すように和人とギルバートが納得する。確かにあの瞬間、ナッツという悪戯妖精の姿はなく儚さと神々しさを纏った巫女の如き存在であった。

「えっと、女性の方が喋りやすいんでしたら、成りませうか？」
「成る？」

「えっと、僕の演技はどちらかと言えば憑依型というか、そういうのなので」

言葉を濁しながら言う夏樹に詩乃は心配そうに視線を送る。果たしてその視線に気付いたのか、それとも別の要因があったのか、夏樹は近くに居た詩乃の手を誰かに見せないように背中に隠しながら握って、一呼吸して離れた。

水を一口飲んで、コホン、と一つ咳払い。瞼を閉じる。息を深く吸い込んで、緩やかに、細く、細く吐き出していく。

緩るく開いた瞼が瞳を覗かせて辺りを見渡す。

「はじめまして、でいいかしら？」

吐き出された言葉も声も女性の物で。確かに目の前にいるのは少女のように思える少年であるのに、ある筈の違和感がそこには無い。まるで最初からそうであったように思える程自然に女性が存在した。

笑い方も、僅かな挙動も、視線の向け方さえも、先ほどとは一切別の存在がそこには出現した。

「おお……」

「本当に女の人みたい……」

「いいえ、それは違うわ」

明日奈の言葉を女性は否定する。それは否定しなければならぬ言葉であった。

「私は今この時は女なの。意識も、感覚も、全てね」

「ここまでとは思わなかったな」

「ふふ。何にだって成れるわ。当然でしょう？　だって私の夢だもの」

艶のある笑みを浮かべた女性に思わず和人は生唾を飲み込んでしまう。妖艶な笑みが、その視線が和人の中にある何かを攪る。

頭の中が囁いている。目の前にいる女が男である。見た目も、仕草もその在り方も女であるというのにただ単純に肉体が男というだけである。

何か別の扉を開けそうになっている和人を見て、妖艶に笑んでいた女が我慢できなくなったのか顔を背けて肩を揺らす。どうしようもなくソレは可笑しかった。なんせ自身を男である事を最初から知っている筈の兄貴分の視線が変化してしまったのだ。これが笑わずにいられるか。

瞬間、そこにいた筈の女性は消えてしまい残っているのは耐えきれずに笑っている夏樹だけになる。まるで悪戯が成功したように、けれどそれを隠すように笑いを漏らす。

「和人くん？」

「明日奈ちよつと待って、俺は悪くないんだ」

「あとでちよつとお話があります」

「はい……」

「くふ、ふひ、ヒヒ」

底冷えするような、けれど笑顔で和人へと迫った明日奈で本当に耐えきれなくなった夏樹は呼吸も辛くなるほど笑ってしまう。その笑いもどうにか抑えようとしているけれど、すでに漏れてしまっている。

いつかを思い出すそんなやり取りに和人は明日奈に怒られながら安堵してしまう。

ようやく、ようやくあの時のように笑えるようになったのだ。いつもの人たちで、あの変哲もない、仮想空間での日常が戻ってきた錯覚を覚える。

「ホント凄いわねえ」

「えつと……リズベットさんですね」

「……ごめん、呼び捨てにしてもらっていい？ ナッツの姿で敬語で敬称つけられると違和感が凄い」

「えつと、……よろしくお願いしますね、リズベット」

「うう……頭の中に居たあのナッツが可愛くなっていく……」

嫌味と皮肉ばかりである頭のオカシイ武器を持った悪戯妖精が小悪魔へと変化していく。更に言うならばおそらく無意識でその容姿を十全に用いた愛想を振りまいてくるし、嫌味成分なんて一切排され

ている。つまり、天使である。

「あのゲームでも現実と同じ姿だったんでしょ？　なら元々可愛かったでしょ」

「そうだけど……そうなんだけどー」

詩乃の言葉に同意を示した里香であつたけれど、悪戯妖精が天使へと昇華した落差に混乱をしてしまう。現実としてナッツが夏樹である事は理解しているが、あの鬼畜ロリが天使なシヨタへと成っているのは納得できない。その優しさを少しでもS A O時代に欲しかった。できるならば、本当に。

なんとなく、いいや、詩乃自身もG G Oでのナッツと現実の夏樹の姿形から何まで全て違う現実を突きつけられた身である。あの性格でこの容姿であつたならば、と考えて納得する。

「そうね、私が悪かったわ」

「詩乃さん？」

ジロリと睨んでみても詩乃はどこ吹く風と肩を竦めるだけである。あの不死者にされたのならば腰にあるハンドガンでも突きつけていただろうが今はあの^G世界^Oでもないし、何より不死者は天使である。むしろ可愛くみえてしまう。

このまま抱きついてもいいだろうか？　いいや、それは自身の羞恥心が許さないだろう。A L Oに入ったら存分に抱きしめてやろう。

こっそりと、そう心に決めた詩乃はニマリと笑ってグラスを傾けた。

48. 同類であつた存在

肌を伝う冷たい水滴。足裏を押す丸い石の水底。流れる川のせせらぎ、草木を揺らす風の音色。

生まれた時から閉じられていた視界に世界の形を作り上げる。

吸い込んだ空気の色を自身の世界へと還元して少女を思わせる少年は小さく息を吐き出した。

「何か御用ですか？」

少年だけしか居ないはずの小川のほとり。常人であれば雑音で聞き取れない程度の些細な音。少年にしてみれば自身の世界に浮き上がる波紋でしかない。

草木から姿を出し、砂利を踏んだ男。血走った瞳で少年を睨み、腰にある刀を抑えるように握っている。

少年は男へと視線を向けない。向ける必要性がない、というべきであらうか少年には視覚が無い。生まれた時から暗闇であり、それが少年の感覚であり、そして少年の世界であつた。

「テメエか、アイツを殺したのは？」

「……」

誰、とは少年は聞かなかつた。聞く必要など無い。こういう手合は幾度も会つた。

スツと、戻っていた熱が冷めていく。濡れた麻の衣服が原因か、それとも足元に流れる川が原因か、はたまた別の理由であるか。

殺した理由は幾つかあるだろう。その理由のどれかはわからない。けれども少年はその手を染めてから一度足りとも自身の矜持を裏切つた事はない。

小さく、鞘滑りの音がした。雑音に紛れて消える程微かな音と同時に少年は川底から石を蹴り上げる。飛沫に紛れて飛ぶ赤子の拳程の石に驚きを露わにしながらも、男は石を避け、先程まで少年がいた方向へと視線を向ける。

そこに少年は居らず、まるで霧のように消えてしまった。けれどそ

の鼓膜が捉えたのは川砂利が擦れる音。自身の近くにいた刀を持つ少年。

身を引き絞り縮こまった少年の身体が解き放たれたように回転する。一瞬の閃き、月に照り返された刀身がすぐにその姿を鞘へと隠される。

少年は吹き出る生暖かい液体を一身に受け倒れただろう男すら見つめない。その視界は常に暗闇に映しているのだから。

「はあ……やっぱいい。尊い……」

「わかります」

やや恍惚気味に呟いた金髪の風妖精リーファはスタッフロールを余韻の如く流していく。

流れていた舞台映像を提供したウィードもどういう理由か鼻を抑えながら画面を注視していて、アスナやシリカ、リズベットは「ほう……」と感心したように息を吐き出し、アスナの隣に座っていたユイも目を輝かせてみていた。

こうして映像作品として彼を見るのが初めてであったシノンもまた感嘆の吐息を吐き出して抱きしめる力を強くし、キリトとエギルそしてクラインも興味深そうに、そしてやや気まずそうに横目でシノンを見る。

「やっぱり我が君はエロいです」

「わかります！　こう、一々所作が色っぽいですよね！」

「リーファさんわかってますね。秘蔵になってる映像とか受け渡しましょうか？」

「本当ですか!?　是非お願いしますウイードさん！」

果たして同士である事が判明した二人の仲は急速に仲良くなっていき和気藹々とした空間の中で一人ムスツとしている人物がいる。

「あの……本人がいるんですけど」

シノンの膝の上に乗せられ腕を回される事で逃げ場を失ったナツ

ツが疲れたように言葉を漏らした。

あまり自身の評価に頓着していないナッツであるが、こうして目の前で「エロい」だの「色気がある」だのと言われるのは反応に困る。上映会の事なんて知らなかったし、知った瞬間にスツと消えようとしたけれどソレは現在自分を抱えているシノンに封じられ、それが失敗した時の保険なのかウィードが素早い動きで出口の前に陣取ったのでナッツは全てを諦めた。諦めたかった。

「はあ、しかし驚いたぜ。この画面に映ってる役者がナッツだなんてな」

「その、すみません」

「いいっていいって。オレが勝手に驚いてるだけなんだから」

言わなかったことの謝罪に関してクラインはあつさりとした態度で流した。

こうして見れば懐の広い兄貴分のように思えるがこの上映会が始まる数分前まで「ナッツが男……いやいや、そんな筈ねーだろ」と現実逃避をしていた男である。

その後ようやく現実を直視したクラインであったが「キリトも女とかじゃねーよな？」という発言をした辺り現実はまだ直視できていない。

「それに別に敬語じゃなかったっていいんだぜ？ オレ達の仲じゃねえか」

「そう、ですね」

歯切れ悪く応えたナッツはお腹を支えているシノンの手をキュツと握る。僅かに震えていた手をシノンは何も言わずにそつと握り返す。

ナッツは一度だけ小さく息を吸い込んで、静かに吐き出す。

「なら、そうさせてもらおうわ」

「おう」

ようやく自身の中にあるムズ痒さを解消したクラインはニツと笑う。彼は気付いていないがリズムベツトは心の中でよくやった、とクラインを称賛した。彼女も毒と嫌味が抜けきったナッツの対応に手応

えを感じていなかった一人である。

あつさりと、ちゃんと口にできた関西弁にナッツはバレないように安堵の息を吐き出す。吐き出し、ふとユイと視線が交差する。何かを咎めているような視線ではない、けれどまるで見通すような瞳がナッツを映す。

何かを言う事はない。何かを語る事もない。ただジツと視線が向けられるだけ。

「ナッツ?」

「……あ、うん。ちよつと用事思い出したわ」

そんな数秒にも満たない視線のやり取りはシノンの声によって終了した。

握られていた手も回されていた腕もあつさりと解いて膝から下りたナッツは慣れたようにいつもの茶褐色の外套を羽織ってフードを目深に被る。

「用事?」

「そう。ソロ限定のクエストがあつてやね」

「私知らないんですけど」

「俺も知らないぞ」

「そりゃあ教えてないもん」

あつけらかんと言つてのけたナッツに自分を頼らない事への不満を漏らしたシノンと単純に攻略情報がほしいキリトが声を上げるがナッツはどこ吹く風。

足早にキリト達の自宅を出て、扉をしっかりと閉めてから眉を寄せ

る。

「ソロやって言うたんやけど?」

「ナッツくんとお話がしたくて」

「……さいで」

先程まで似通った体躯であった筈のユイが小さくなり案内妖精としての姿でナッツの肩に座っている。

その様子はニコニコと笑っていて、横目で見たナッツが深く、重い溜め息を吐き出してから羽を出現させてふわりと宙へと浮く。

空の翔ぶのに妖精の粉はいらない筈なのに。

「改めて、久しぶりです！」

「現実世界でも会ったやろうに」

「それでもこうして顔を合わせるのは久しぶりですよ？」

「……せやね」

顔を合わせて言う事に不満を感じてはいない。むしろナッツ自身、ユイに久しく会った事を嬉しくも思っている。ただユイだからこそ、今のナッツにしてみればあまり一緒に居たくはない。

「大丈夫です。言いませんよ」

「……浮気みたいに言いなや」

「もう！ わたしはあなたを心配してるんですからね！」

「はいはい」

適当に戯けてみせたナッツに「もうっ」と頬を膨らませたユイ。

彼女が言わない事など最初からわかっていた事である。きつと、という予想がただ予想でなくなっただけの話。ナッツにしてみればそれだけの話であるが、だからこそ怖かった。

「言わない、と口にしてくれた同類にナッツは安堵する。」

「それで——ナッツくんと呼んでもいいんですよね？」

「……構わへんよ。というか、他にどう呼ぶつもりやったん？」

「うーん、そうですね。ナツちゃんとか？」

「ナッツでええから」

やや食い気味に愛称を否定したナッツにユイは楽しそうに笑う。

今の自分の状況をきつと自分より理解しているだろう同類は自分の言葉を否定する事もなくちゃんと受け入れてくれた。ナッツにしてみればそれだけで十分なのである。

「それで、ナッツくん。ソロクエストはどんなのなんですか？」

「別に正規で出てる訳やないよ。ただ武器を取りに行くだけ」

「武器ですか？」

「そ。あっちでのナッツが持ってた武器のイベント。やから、実際に

イベントがあるかどうかはわからんで」

あの時は折れてしまった『フォレストキール』がフラグになっていたイベント。そしてあの世界で最後に握っていた曲剣を手に入れたイベントである。

現在の武器内容であっても特に困る事はない。今すぐに必要という訳ではない。必要という訳ではないが、せつかくなのだから欲してしまう。

そう考えれば、名もなき店売りの曲剣だった物に執着しすぎなのかもしれない。けれど、だからこそナッツはソレを手に入れたい。

「まあ、イベント内容が一緒やったら荒っぽくなるから危なくなったら逃げるんやで」

「守る、って言ってくれないんですね」

「あの時とは違うやろ？ お互いに」

それに、今の自分に守れる程の力があるかもわからない。だからソロでこのイベントに挑むのだから。

49. いつか見た彼を追って

森の中、廃屋の立ち並ぶ村へと降り立ったナッツは左右を見渡して眉を寄せた。

「……ないかも知らんなあ」

「ここで貰ったんですか？」

「イベントの開始がここやってんけど……前は普通の村やった筈や」

NPCも居^おつたしな、と続けて呟いたナッツは黒く染まった木片を拾い上げて、少しだけ力を加える。思うよりも簡単に潰れて粉々になった黒い木片だった物と手に付着した黒い煤を指で擦り大きく溜め息を吐き出す。

自身の行動に後悔は一切ない。死を冒流するつもりもないし、殺しを正当化することもない。ただ瞼を閉じて、生きてもいなかった存在達へと黙禱を捧げる。

「……まあ、行ってみよか」

記憶の中、溶けてしまったそれを手繰り寄せながらナッツは足を進める。その足は何かを迷う事もなく、真っ直ぐに目的地へと向かう。

景色の変わらない森もまるで道が見えているように進み、容易く崖から身を放り投げてふわりと地面へと着地する。ずっと続くような崖壁に手を着けながら歩き、停止する。

停止した崖壁は他と変わりない。それでもナッツはそこで停止して崖肌を撫でた。

確信があつた。ここでなければ、イベント自体が潰れていると直感できる事だろう。何か確証がある訳ではない。ただそうであると告げられるだけである。

壁を正面に捉えて後ろにステップする。右手を素早く動かして柄を両手でしっかりと握りしめて、踏み込む。ズルリと虚空から吐き出されていく粒子が片刃の両手直剣を作り上げて、上段から壁へと向かって振り下ろされた。

巻き起こる土煙と轟音。散っていく石礫も物ともせずナッツは役目を果たした両手直剣を容易く捨てた。

目の前には先程までなかった洞窟。暗闇に染まった洞窟の奥から時折生暖かい空気が吐き出されナッツの髪を揺らす。

「ナッツくん……」

「ん？」

「こういう事やるなら一言ぐらい言っておしかったです！」

「あーすまんすまん。ソロやと思っとったから」

「もう！ そういう所だけはナッツくんそっくりですね！」

「褒め言葉として受け取っとくわ」

ケラケラといつかのように嗤いながらナッツは洞窟の中へと足を進める。そのナッツに追いつくようにふわりと飛翔したユイはナッツの肩へと座った。

「それでここは何の洞窟なんです？」

「元々はあの村の御神体を祀った洞窟やな」

「御神体、ですか？」

「森の竜骨フォレスト・キールは何が材料やったか知らんけど、少なくとも関係はあったんやろな。それで御神体を殺して逆鱗インベリアルラスを手に入れたし」

「……ママに言いつけます」

「SAOでの話やで？ 今の僕には関係あらへんよ」

「じゃあシノンさんに言いますからね！」

「それはホンマに怒られるからやめてほしいんやけどなあ」

話の流れから今からその御神体とやらを倒す事を理解したユイはプンスカと怒りながらナッツを糾弾する。ナッツはナッツでその御神体について思い出せる範囲で記憶を辿り、前提条件として設定していく。

生暖かい空気。炭の如く残った廃屋達。いなくなったNPC。確かに倒しきった筈の御神体。記憶の底に沈んだ誰かの記録。

ナッツは眉を寄せる。鼻を突く刺激臭が強くなった。何かを延々と放置したような香り。鼓膜を僅かに揺らす羽音。洞穴の壁に付着するヌメる粘液。溜め息を吐き出して、吐き気を催すような空気を肺に詰め込む。久しく吸い込んでいなかった空気だ。

長く続いていた洞穴が終わり、広い空間がナッツとユイの目の前に

広がった。ドーム型の空間。天井にはポツカリと空が見える穴が開き、その主を日で照らしている。

それは樹木であった。巨大な樹木が聳え立っていた。そう、ナッツはいつかの日を思い出し、幻視した。今二人の目の前に存在しているのは黒ずみ、腕の太さ以上もある枝が折れ曲がり、蓄えていた葉は全て抜け落ちた巨木だった物だ。無残に腐り、実りを授ける姿すらもはや無い。

「……………これが、御神体……………」

「樹の事言うてるなら、正確にはちやうよ」

景色が揺れる。腐り落ちた樹木が傾き、地面を盛り上げてその根を晒す。肩にいるユイに礫が当たらないように手で壁を作ったナッツであるが、その好奇心を抑える事はできずにユイは壁から顔をひよっこりと出して震える世界を視界に入れた。

据えた匂いが強くなる。普通の人間であるならば眉を寄せて吐き気を催すであろう空気が辺りを支配する。溶け落ちた肉が巨大な前足を覆い隠し、湯気を昇らせた肉体は所々腐り落ち、ソレを縫うように根が張り巡らされている。所々に崩れた緑色だった鱗が御神体が身を震わせる度にパラパラと落ちていく。

爬虫類を思わせる顔には多数の切り傷が刻まれ、既に治り体表色が薄く赤と混じる物、深く斬られた傷は赤が黒く濁り蛆が空気を求めて蠢いている。

双眸にあった筈の玉は無い。ただ伽藍堂の如き眼窩が残っているだけ。

「ヒュ……………」

「あれが、御神体……………元でも冠に付けた方がええかもな」

怯えながらナッツの手を両手で掴んだユイを見ることもなく、ナッツはただ真っ直ぐにソレを見つめていた。死して尚その姿を遺しているソレに、僅かながらの羨ましさを感じる。

自身がナッツであった頃。この場に立った時。コレは緑衣の竜であった。それこそ背負った大樹を支えていた、紛れもなく御神体としての姿がそこには在った。

その姿を瞼の裏に映してから、ナッツは改めて目の前の存在へと視線を向ける。ソレを墮ちたとは表現しない。その存在を憐れむ事すらない。その姿に畏敬すら抱く。

何もない眼窩が、確かにその瞳をナッツへと向ける。何も伝える事もできない瞳。思考すら既に消えているのかもしれない。その瞳にナッツが感じる事はない。いいや、ナッツであったならば何かを感じたのかも知れない。

「……」

これは証明だ。

コレは確信だ

それは決意だ。

それこそが確証なのだ。

彼を求めて止まないのは誰かではない。誰かであつていい筈もない。

最も執着し、最も頼り、最も尽くされたからこそ彼はここに立っている。

震える手は目の前の驚異に恐怖している訳もない。それは彼が許されなかった事だ。

生にしがみついて逃げ出す事もない。それは彼がしなかった事だ。だからこそ、ナッツは今この場に立っていて、身体が自然と動いている。

視線も向けずに宙を右手がタップした。握った柄を引き抜いて、ナッツは自身の震えが止まっている事に気付いた。そして同時に口角が上がっている事にも。

沢山のソレを感じた。沢山のソレを熟した。そして彼のソレを追想して、今ここに立っている。

御神体であつた腐り落ちた竜が咆哮する。空気を揺らし、腐臭すらも消し飛ばす程の叫びが空間を支配する。

そんな中であろうが、ナッツは笑みを浮かべ続ける。何もかもが嬉しかった。自身の証明が今ここでは確かにある。ユイを外套の首元へと入れながら、ナッツは囁く。『e x | W o o d S a g e』、定冠

詞が消えてしまい『元』を冠にした森の賢者がその名を示してHPバーを並べる。

変哲もない、ただの片手直剣を翻しナッツは一步目を踏み出した。

吐き出された腐臭の息吹を地を蹴り飛ばして空へと回避する。身を捻りながらも顔だけはしっかりと敵へと向けながら何も無い中空を踏み込んで敵へと突貫する。嫌な感触を手に伝えながら腐った肉へと身を沈める剣を手放して埋まっていない柄を足場に空へと逃げて距離を取る。先程まで居た足場は身動きで動かされ倒されていれば隙きを見せていたことだろう。

地面に足を着けたと同時に新たな剣を抜きながら足を動かす。

止まらない。停止すればすぐに死ぬだろう。あつさりと、デバフすら解除できずに、踏み潰されて死ぬ。

「ハッ、ハハハ」

喉の奥から歓喜が漏れ出した。

確かに識っていた事であるのに、確かに理解していた筈なのに、確かに会得していた筈なのに！

横薙ぎにされた太い尾を両手剣で防御してポリゴンへと散らす。

抜き出した新しい曲剣で振り下ろされた前足をズラして肉を斬る。

吐き出されそうな息吹は開いた口に剣を投げ込んで範囲から脱出する。

心臓の音が煩い。自身の身体が熱い。極度の運動疲労であるかもしれない。そんなものは何もかもが錯覚だ。

「ああ！ 凄い、凄い凄いい凄いい!! こんな事誰も教えてくれなかった！ 誰も遺していなかった！ ただ識っているだけじゃダメなんだ！ くくふふふうつはははははははははははははははは!!」

嬉々とした産声をナッツは張り上げた。ようやく、誰でもない自身が自分である場所がそこには在った。誰との繋がりもなく、誰も関係なく、誰かの鎖すらない。

在るのは自身だけ。自身という確固たる存在だけが今この場に在っている。

それだけだ。それだけでよかった。それこそが求めていた物に違
いはない。

「な、ナッツくん？」

「うん、大丈夫。なんだ、ハハ、こんなに簡単な事だったのに」

嗤いからか、僅かに濡れた頬を外套の袖で拭い、ナッツは前を見る。

大きくイキを吸い込んで、空気を吐き出す。手に持った短剣を何度
か手で弄び、しっかりと握りしめる。

「もう——全部見たから」

ナッツの双眸が漆黒の眼窩を睨めつける。

その全てではないにしろ、ある程度の事は把握できた。残った行動
が何であれ、予測する事はできる。既に武器は短剣一本であるが、そ
れでも何も問題はない。一つを残して全ての武器を壊して速度に慣
れた。攻撃の予測に徹した。予測不能の攻撃が来た時は——。

「戻るだけ」

そう、だから気負う事はない。もうあれからは開放されたのだか
ら。

だから、だからこそ、今は楽しむだけなのだ。全てを。何もかもを
踏み台にした自身が自身で在る為に。

ナッツは——前へと踏み出した。